茨城県笠間市

行者遺跡

県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書

2011

笠間市教育委員会

(有) 毛野考古学研究所

茨城県笠間市

行者遺跡

県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書

2011

笠間市教育委員会
(有) 毛野考古学研究所

行者遺跡全景（東から）

調査区全景（写真左下が南）

序

笠間市は、茨城県のほぼ中央に位置し、北西部には八溝山系が、南西部には吾国山・難台山・愛宕山が連なり、中央を北西部から東部にかけて涸沼川が大地を潤す自然豊かな地域です。また、河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから、原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

今回の調査は県営畑地帯総合整備事業に伴う行者遺跡の発掘調査であります。この調査の結果、径20～17mの円墳５基からなる墓域と弥生時代後期～奈良・平安時代の集落跡や中世後半代と考えられる堀跡が確認されました。また１・２号墳周溝からは円筒埴輪、馬形の形象埴輪片が出土し、地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。この報告書を通して郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育･文化向上の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに関係者に対しまして心より感謝申し上げます。

平成23年３月

笠間市教育委員会

教育長　飯　島　　勇

例　　言

1．本書は、茨城県笠間市小原地区に所在する行者遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は、県営畑地帯総合整備事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査による記録保存を目的として実施された。
3．調査及び報告書作成は、笠間市教育委員会の指導･委託を受けて、(有)毛野考古学研究所が実施した。
4．遺跡の所在地、調査期間、調査面積は以下の通りである。
　所 在 地　笠間市小原2299番地外
　調査面積　4,683㎡
　調査期間　平成21年11月30日～平成22年３月25日
　整理期間　平成22年７月27日～平成23年３月15日
5．調査・整理担当者、執筆分担は以下の通りである。
　土生　朗治　（調査、執筆：第Ⅰ章第２節、第Ⅱ～Ⅲ章、Ⅳ章第１節、第３～５節、第Ⅴ章）
　賀来　孝代　（整理、執筆：第Ⅳ章第２節　１・２号墳・埴輪）
　宮田　和男　（調査、執筆：第Ⅳ章第１節　６・７号住居）
　小出　琢磨　（調査・図面）　　以上（(有)毛野考古学研究所）
6．調査で得られた資料は笠間市教育委員会で保管している。
7．調査及び報告書作成に際し、下記の諸氏・機関からご指導・ご協力を賜りました。記して感謝を申し上げます。
　能島清光　川崎純徳　枝川永男　斎藤弘道　井 博幸　秋元陽光　鈴木素行　太田博之　樫村宣行
　内山敏行　田中　裕　佐々木義則　稲田健一　茨城県教育委員会　茨城県県央農林事務所
　小原地区土地改良組合　芳野工業株式会社　JT空撮
8．本書の作成にあたっては、加藤陽子、仙波菜津美、高橋真弓、鬼山由子、根本正子、門脇美知子の協力を得た。
9．発掘調査参加者は以下の通りである。
　飯田博美、飯田昭、石浦千景、岩田時彦、枝川幸光、小坂部克己、鬼沢　勲、小山義則、川又誠二、
　北村　昶、佐藤武志、佐藤としえ、佐藤利男、塩畑勝利、仙波由美子、髙岡真士、高田幸江、
　瀧江　稔、豊島英則、仲田仙、中林理智、中村伊重、根矢　稔、長谷川とめ子、土生悠里、吹野昇、
　松本修児、　武藤瑞良、山口致辰、横田忠利、吉田　豊

凡　　例

1．出土遺物の注記で使用した遺構の略号は以下の通りである。
　ＳＩ・・竪穴住居跡　Ｍ・・古墳　ＳＫ・・土坑　ＳＤ・・溝　Ｐ・・ピット　Ｋ・・撹乱
2．実測図で使用した縮尺は以下の通りである。
　竪穴住居跡・・１／60、1/80　古墳・・１／80、１／100　土坑・井戸・地下式坑・・１／60
　溝・・１/60、１／100
3．遺構図中のスクリーントーンは以下の通りである。
　粘土の範囲　　焼土の範囲

目　　次

序
例言・凡例
目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査の経過…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の経過…… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境…… 2
　第１節　地理的環境…… 2
　第２節　歴史的環境…… 3
第Ⅲ章　調査の方法と基本層序…… 7
　第１節　調査の方法…… 7
　第２節　基本層序…… 7
第Ⅳ章　遺構と遺物…… 8
　第１節　竪穴住居跡…… 8
　第２節　古墳……34
　第３節　土坑・井戸・地下式坑……82
　第４節　堀跡・溝跡・盛土遺構……84
　第５節　遺構外遺物……95
第Ⅴ章　総括……98

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡分布図……2
第２図　調査地区の位置図……3
第３図　遺構全体図…… 5・6
第４図　基本土層図……7
第５図　１号住居跡……8
第６図　２号住居跡（１）…… 10
第７図　２号住居跡（２）…… 11
第８図　３号住居跡（１）…… 12
第９図　３号住居跡（２）…… 13
第10図　４号住居跡…… 14
第11図　５号住居跡（１）…… 16
第12図　５号住居跡（２）…… 17
第13図　６号住居跡…… 18
第14図　７号住居跡（１）…… 20
第15図　７号住居跡（２）…… 21
第16図　８号住居跡…… 22
第17図　９号住居跡…… 24
第18図　10号住居跡（１）…… 25
第19図　10号住居跡（２）…… 26
第20図　11号住居跡（１）…… 28
第21図　11号住居跡出土遺物（２）…… 29
第22図　11号住居跡出土遺物（３）…… 30
第23図　11号住居跡出土遺物（４）…… 31
第24図　11号住居跡出土遺物（５）…… 33
第25図　１号墳　墳丘実測図（１）…… 35・36
第26図　１号墳　墳丘実測図（２）…… 37
第27図　１号墳　遺物出土状況図（１）…… 38
第28図　１号墳　遺物出土状況図（２）…… 39
第29図　１号墳　遺物出土状況図（３）…… 40
第30図　１号墳　遺物出土状況図（４）…… 41
第31図　１号墳出土土器写真…… 42
第32図　１号墳出土遺物実測図（１）…… 43
第33図　１号墳出土遺物実測図（２）…… 44
第34図　１号墳出土遺物実測図（３）…… 45
第35図　１号墳出土遺物実測図（４）…… 46
第36図　１号墳出土遺物実測図（５）…… 47
第37図　１号墳出土遺物実測図（６）…… 48
第38図　１号墳出土遺物実測図（７）…… 49
第39図　１号墳出土遺物実測図（８）…… 52
第40図　１号墳出土遺物実測図（９）…… 53
第41図　２号墳　遺物出土状況図（１）…… 56
第42図　２号墳　墳丘実測図（１）…… 57・58
第43図　２号墳　墳丘実測図（２）…… 59・60
第44図　２号墳　遺物出土状況図（２）…… 61
第45図　２号墳　遺物出土状況図（３）…… 62
第46図　２号墳　遺物出土状況図（４）…… 63
第47図　２号墳出土遺物実測図（１）…… 64
第48図　２号墳出土遺物実測図（２）…… 65
第49図　２号墳出土遺物実測図（３）…… 66
第50図　２号墳出土遺物実測図（４）…… 67
第51図　２号墳出土遺物実測図（５）…… 68
第52図　２号墳出土遺物実測図（６）…… 69
第53図　１号墳　埴輪配置図…… 72
第54図　２号墳　埴輪配置図…… 73
第55図　１号土坑出土遺物実測図…… 74
第56図　３号墳出土遺物…… 75
第57図　３号墳…… 77・78
第58図　４号墳…… 79
第59図　５号墳…… 80
第60図　土坑…… 81
第61図　井戸…… 82
第62図　１号地下式坑…… 83
第63図　１号堀（１）・３号溝 …… 85
第64図　１号堀（２）・３号溝 …… 86
第65図　１号堀（３）…… 87
第66図　１号堀出土遺物…… 88
第67図　２・６号溝…… 90
第68図　４号溝…… 91
第69図　４号溝出土遺物…… 92
第70図　５号溝…… 93
第71図　盛り土遺構…… 94
第72図　遺構外出土遺物（１）…… 95
第73図　遺構外出土遺物（２）…… 96

表目次

表１　１号住居跡出土遺物観察表……9
表２　２号住居跡出土遺物観察表……9・11
表３　３号住居跡出土遺物観察表…… 13
表４　４号住居跡出土遺物観察表…… 14
表５　５号住居跡出土遺物観察表…… 15
表６　６号住居跡出土遺物観察表…… 19
表７　７号住居跡出土遺物観察表…… 19・21
表８　８号住居跡出土遺物観察表…… 23
表９　10号住居跡出土遺物観察表…… 26・27
表10　11号住居跡出土遺物観察表…… 27・32・33
表11　１号墳出土遺物観察表（１）…… 42
表12　１号墳出土遺物観察表（２）…… 42
表13　１号墳出土遺物観察表（３）…… 50
表14　１号墳出土遺物観察表（４）…… 51
表15　１号墳出土遺物観察表（５）…… 54
表16　２号墳出土遺物観察表（１）…… 56
表17　２号墳出土遺物観察表（２）…… 56
表18　２号墳出土遺物観察表（３）…… 63
表19　２号墳出土遺物観察表（４）…… 70
表20　２号墳出土遺物観察表（５）…… 71
表21　１号土坑出土遺物観察表…… 74
表22　３号墳出土遺物観察表…… 76
表23　４号墳出土遺物観察表…… 76
表24　５号墳出土遺物観察表…… 79
表25　土坑一覧表…… 82
表26　井戸一覧表…… 84
表27　溝一覧表…… 84
表28　１号堀出土遺物観察表…… 88・89
表29　１号堀斜面部ピット一覧表…… 89
表30　２号溝出土遺物観察表…… 92
表31　４号溝出土遺物観察表…… 92
表32　盛り土遺構出土遺物観察表…… 95
表33　遺構外出土遺物観察表…… 97

写真図版目次

PL.１　全景、１・２・３号住居跡
PL.２　３・４・５・６・７号住居跡
PL.３　８・10・11号住居跡
PL.４　11号住居跡、１号墳
PL.５　１号墳
PL.６　２号墳
PL.７　３・５号墳、１・４号土坑、１～３号井戸
PL.８　１号地下式坑、１号堀、盛り土遺構
PL.９　２～５号住居跡出土遺物
PL.10　５～10号住居跡出土遺物
PL.11　11号住居跡出土遺物
PL.12　１号墳埴輪
PL.13　１号墳埴輪
PL.14　１号墳埴輪
PL.15　１号墳埴輪
PL.16　１号墳埴輪
PL.17　１号墳埴輪
PL.18　１号墳埴輪
PL.19　１号墳埴輪
PL.20　１号墳埴輪、１号土坑埴輪、２号墳埴輪
PL.21　２号墳埴輪
PL.22　２号墳埴輪
PL.23　２号墳埴輪
PL.24　２号墳埴輪
PL.25　２号墳埴輪
PL.26　２号墳埴輪
PL.27　２号墳埴輪
PL.28　３号墳出土遺物、１号堀出土遺物、遺構外遺物、炭化種子、金属製品、石器

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

畑地帯総合整備事業は、農業に伴う道路･灌漑施設･農地などの生産基盤を総合的に整備することによって、作物品質の向上、生産作物の拡大、反収の増加、輸送費の削減、荷傷みの防止など、より高い生産性と品質のさらなる向上を目指している。

笠間市では基本施策を総合計画で目標を定め、農林業の振興を図ることを目的とした産業振興プロジェクトが重点的に進められている。また、農業生産基盤の整備の一環として、平成13年に小原地区土地改良組合が設立され、茨城県の指導の下、効率的な畑作農業地域を作るための整備事業が実施されている。

この整備事業の計画地は常磐線をはさんで南北に分かれている。この地区には市内最大級の山王塚古墳を有する一本松古墳群があり、重要な遺跡の包蔵地である。このことから整備事業計画の中で平成15年に三本松遺跡の発掘調査、平成16・17年に小原遺跡の発掘調査、さらに平成20年に塙谷遺跡・長峰東遺跡・長峰西遺跡の発掘調査が行われ、多大な成果が得られている。

今回の整備事業計画地は行者遺跡の範囲内であることから、笠間市教育委員会は平成21年度に笠間市文化財保護審議会委員の能島清光氏に試掘調査を依頼した。その結果トレンチから古墳や住居跡が確認され、出土遺物などから古墳時代を主体とした集落があることが推定された。

工事主体者である県央農林事務所は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条第１項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と判断し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受けて、笠間市教育委員会は入札により有限会社毛野考古学研究所と委託契約を締結して調査を依頼した。笠間市教育委員会・県央農林事務所・有限会社毛野考古学研究所は三者協議を行い、試掘調査の結果に基づき、文化財保護法第92条第１項の規定による発掘調査届出を茨城県教育委員会教育長へ提出、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏、笠間市文化財保護審議会委員の能島清光氏を指導委員として平成21年11月30日から平成22年３月25日まで、発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査の経過

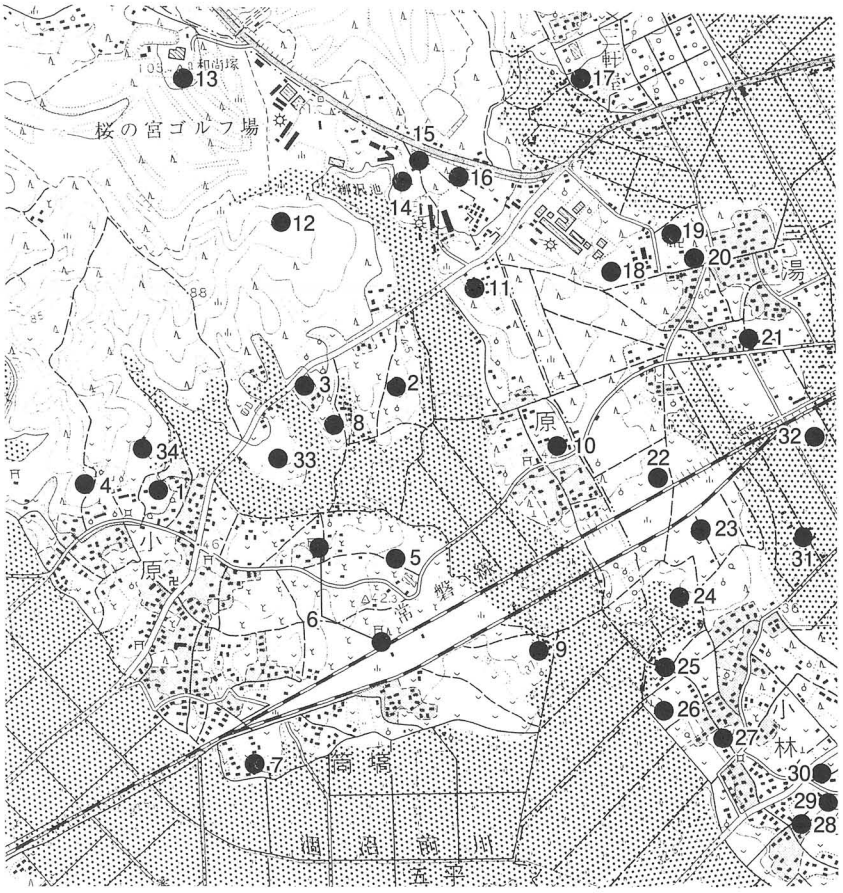
平成21年12月10日から重機による表土除去作業を開始する。17日から人力による遺構確認作業を実施し、１・２号古墳の周濠を確認する。遺構確認作業と並行して古墳の周濠やマウンドにトレンチによる掘り込みを行う。その他に、古墳周濠を３か所、住居跡11か所、堀１条と溝跡6条を確認する。重機による表土除去作業は平成22年１月８日に終了し、13日には方眼杭打ちを行う。25日には竪穴住居跡の掘り込み作業を開始する。１月末には、１・２号墳以外の古墳周濠の掘り込みを終了し、２月からは、竪穴住居跡とともに土坑や溝、井戸の調査を開始する。１号堀は17日に掘り込みを開始し、24日にはほぼ完掘する。その後竪穴住居跡の調査に力を注ぎ、３月８日に調査はほぼ終了する。15日に空撮を行う。17日から各遺構の掘り方調査を行い、24日には現地におけるすべての調査を終了する。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

笠間市小原地区は、笠間市域東部の旧友部地区にある。北部には八溝山系から続く標高100m前後の丘陵地帯を背負い、南部には涸沼前川の形成した低地帯が広がっている。涸沼前川は、上流に遡れば、笠間市上市原付近、下流に下ると涸沼を通じて、大洗町で太平洋と繋がっている。地形的には東西の交通ルートの結節点となっており、現在は国道50号が北側山間部を通り、南側低地部には常磐線が通っている。

小原地区北部の丘陵は全体に南に向かって低くなっている。行者遺跡はその丘陵の末端の傾斜が緩やかになった台地上にある。台地は北側を小支谷によって開析されて、東方向に舌状に張り出している。行者遺跡の東側には谷津が入り、谷津は北方向に向かって深く入り込んでいる。行者遺跡は小原集落の中心にある小原神社からは北北西方向にあたり、宅地と畑・山林の境界域付近で、現況は畑地と竹林が密生して茂る荒蕪地となっている。



1．行者遺跡　2．塙谷遺跡
3．喜平塚古墳　4．高寺古墳群
5．小原遺跡　6．一本松古墳群
7．塚崎古墳　8．長峰東遺跡
9．三本松遺跡　10．原坪古墳群
11．原古墳　12．大日山古墳群
13．和尚塚古墳　14．柳沢古墳群
15．三軒屋塚群　16．三軒屋古墳群
17．杉崎遺跡　18．訳山遺跡
19．宮前遺跡　20．三湯舘跡
21．舞台遺跡　22．舞台西遺跡
23．向山遺跡　24．新道池北遺跡
25．新道池南遺跡　26．達中前遺跡
27．中の内遺跡　28．大塚古墳群
29．六部塚　30．小林遺跡
31．竜開遺跡　32．西川遺跡
33．長峰西遺跡　34．寺上遺跡

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（1：25,000）

第２節　歴史的環境

小原地区は、これまで高寺古墳群や一本松古墳群、中世小原城跡の存在が知られている。近年小原地区で行われている発掘調査は、三本松遺跡から始まり、小原遺跡、塙谷遺跡、長峰東遺跡、長峰西遺跡と広範囲大規模に行われ、弥生時代から、古墳時代前期・中期・後期、奈良・平安時代の各集落遺跡を主体にして、古墳時代の方形周溝墓や古墳、平安期の骨蔵容器、中世の堀や地下式坑等各時代の多くの遺構・遺物が発見されている。それらの成果から、小原地区の丘陵や台地上には、旧石器時代以来の人々の生活の跡が残り、貴重な歴史的文化財が残っていることが分かってきた。

旧石器時代では、長峰西遺跡から珪質頁岩製のナイフ形石器が出土している。塙谷遺跡では数十点の石刃と石核１点、不定形剥片が集中するユニットが確認されている。

縄文時代では、小原地区の遺跡においては、遺構・遺物がたいへん少ない。長峰東遺跡で、前期の関山式土器が、長峰西遺跡で、早期の無文土器・前期中葉・中期後半・後期前半～中葉の時期の遺物が出土している。塙谷遺跡で、前期の住居跡が１軒確認されている。

弥生時代では、後期後半の時期に竪穴住居跡の数が非常に多くなる点が注目される。三本松遺跡で15軒、小原遺跡で２軒、平成19年度の塙谷遺跡Ｃ地点で10軒、塙谷遺跡Ａ・Ｂ地点では約60軒、長峰東遺跡で９

第２図　調査地区の位置図（1：2,500）

軒、長峰西遺跡で７軒である。本遺跡を含めて弥生時代後期後半の住居軒数は県内でも有数と見られ、弥生時代後期後半から終末期にいたる生活の詳しいようすが窺える。

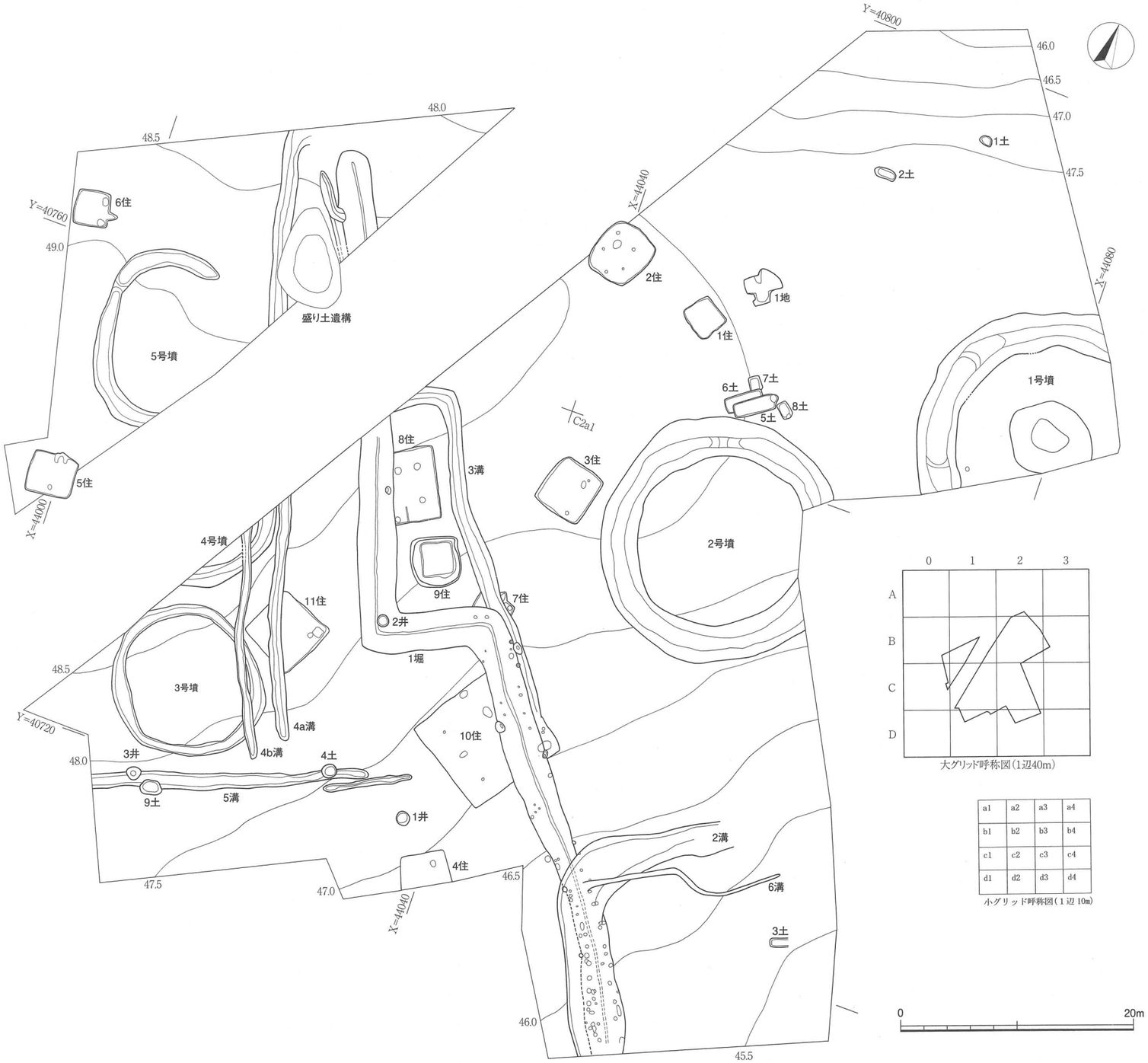
古墳時代では、長峰東遺跡で弥生時代終末期の土器との関わりが窺えるような遺物や竪穴住居跡が見られる。古墳時代前期の時期は塙谷遺跡に住居数が多く、方形周溝墓も造られている。古墳時代後期には三本松遺跡や小原遺跡、長峰西遺跡等に広がりが見られる。この時期は後期古墳の造成が盛んな時期に対応しているものと思われる。

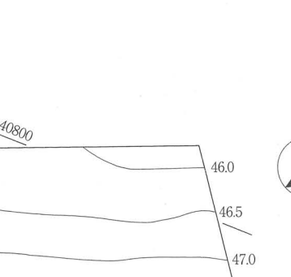
古墳群は、一本松古墳群、高寺古墳群があげられる。一本松古墳群には、直径約53mの大型墳の山王塚古墳がある。埴輪を持つ時期の古墳は、高寺古墳群で、台地上からの丘陵斜面地にかけて８～９基確認されている。そのうち高寺２号墳は、周溝内径推定25mの円墳と見られる。既調査墳で、花崗岩の割石積の横穴式石室を持ち、墳丘南東部から武人埴輪が３体分その他に靭形、２条３段の円筒埴輪が少量出土している。石室内からは、玉類、刀や鏃などの鉄製品が出土している。

奈良・平安時代の竪穴住居跡は、発掘調査が行われた近隣遺跡すべてにおいて確認されており、いずれも奈良時代後半頃から急激に竪穴住居跡の数を増し、９世紀～10世紀にかけて集落が継続しているようすが窺える。

中世のこの地区は、戦国期の城跡と伝えられる小原城が本遺跡の南南西約１kmの位置にある。小原城は16世紀の初め頃、里見氏の居城として造られ戦国末期には激しい攻防の後、佐竹氏に滅ぼされている。

参考文献
井　博幸　1980『杉崎コロニー古墳群』日本窯業史研究所
井　博幸　2007「牛伏古墳群の検討―出土・採集埴輪の観察を中心にして―」
井　博幸　2009「行方市兜塚古墳の研究」『婆良岐考古』第31号、婆良岐考古同人会
井上義安　1995『茨城町東山稲荷古墳』茨城町史編さん委員会
井上義安　1995『水戸北屋敷古墳』
江幡良夫　1995『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書　原出口遺跡Ⅲ』茨城県教育財団文化財調査報告第94集、財団法人茨城県教育財団
大賀　健　2010『長峰西遺跡』笠間市教育委員会
川西宏幸　1978『円筒埴輪総論』「考古学雑誌」64-2 日本考古学会
瓦吹　堅　1976『高寺２号墳』西茨城郡友部町教育委員会
白石真理　1989「埴輪」『小幡北山遺跡埴輪製作遺跡』茨城町教育委員会
早川　泉　2003『三本松遺跡』友部町三本松遺跡発掘調査会
広瀬和雄　1992「前方後円墳の畿内編年」「前方後円墳集成　畿内編」山川出版社
吉田　寿　2005『小原遺跡』友部町小原遺跡発掘調査会





大グリッド呼称図(1辺40m)

a1	a2	a3	a4
b1	b2	b3	b4
c1	c2	c3	c4
d1	d2	d3	d4

小グリッド呼称図(1辺10m)

第3図　遺構全体図

第Ⅲ章　調査の方法と基本層序

第１節　調査の方法

調査は、県営畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として行われた。畑地帯整備事業にかかる行者遺跡の調査範囲は、試掘調査によって標高45～48mの台地上の4,683㎡の面積の範囲にある。行者遺跡の遺構の測量は、世界測地系第Ⅸ系上の公共座標に基づいて行なった。公共座標上で、調査範囲外側の北西角のX軸43960、Y軸40840を起点として、南方向と東方向に40mおきにグリッドラインを設定し、交差したマス目に第３図にあるようにA0からD2までグリッド名をふり、さらにその中を10mごとに分けた小グリッドとしてa1～d4までの呼称で遺構の位置を示した。

調査は表土掘削、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、写真撮影、測量の手順で行った。

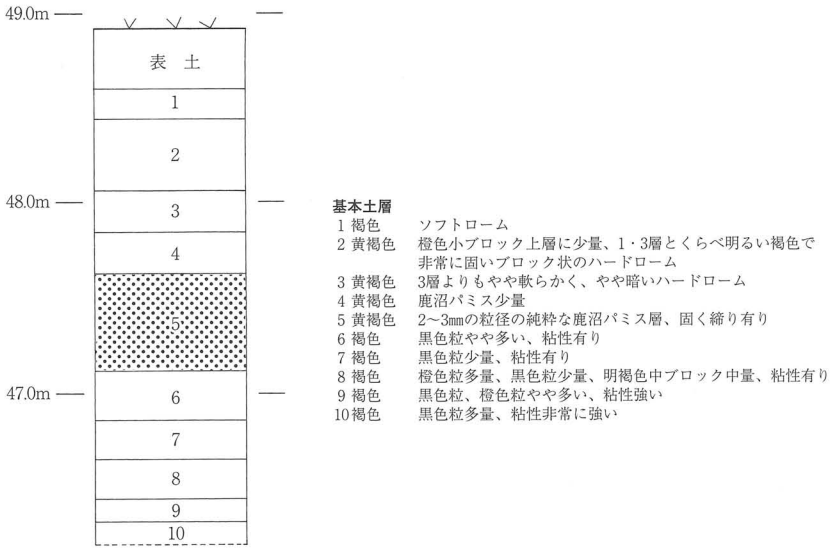
遺構の記録は１／20縮尺を基本として平面・断面図を作成し、遺構・遺物の規模や性格により、１／10、１／20、１／40縮尺を使用した。遺跡全測図は１／200で作成した。

写真撮影は、白黒35㎜判、リバーサル35㎜判、デジタルカメラを使用し、調査の各段階に随時行った。

第２節　基本層序

調査区の中央部標高48.9m地点で、中世の堀跡の断面を利用して記録した。表土は黒褐色の耕作土層で、表土直下の１層はソフトロームの褐色土層で、遺構の確認面は１層上面である。２層以下４層までは黄褐色のハードローム層である。

５層は２～３㎜径の鹿沼パミス純層で、６～８層は再び褐色ローム層で粘性がある。９～10層にかけてはさらに粘性が強い褐色粘質土層である。



第４図　基本土層図

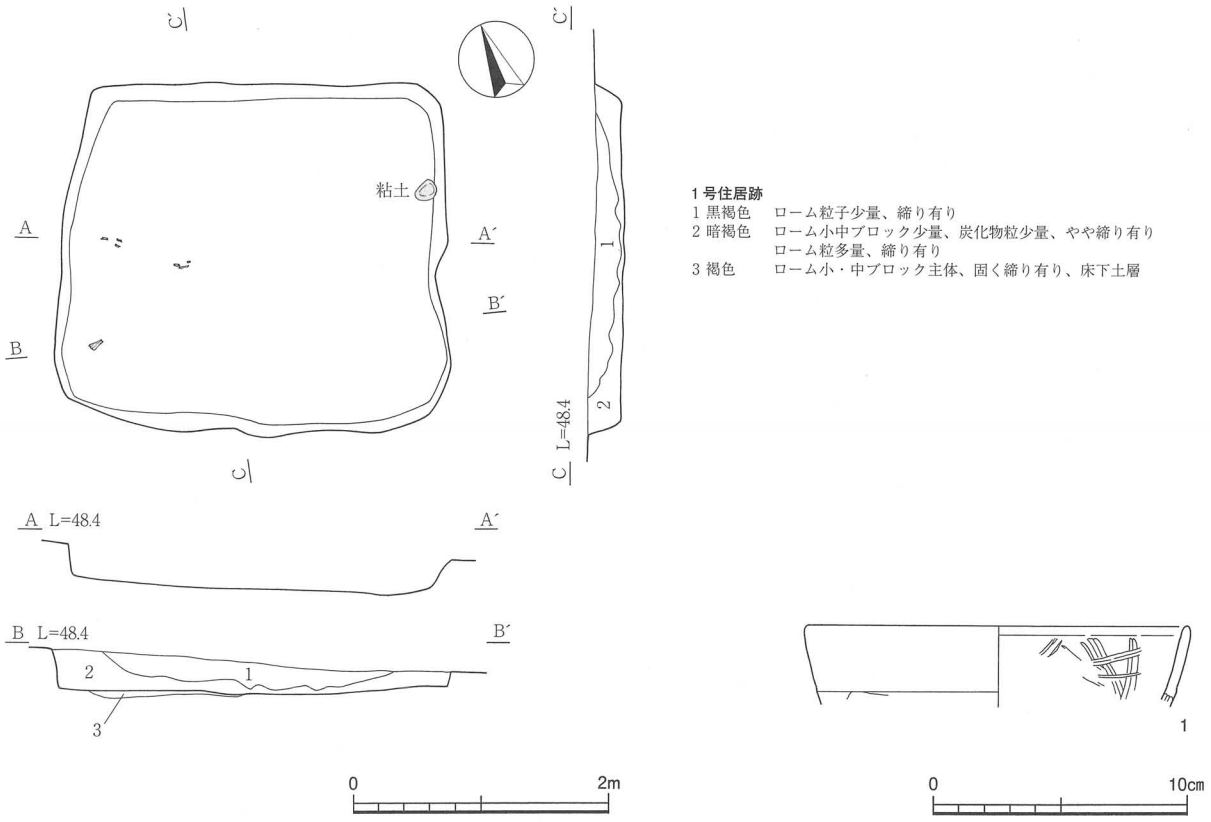
第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居跡

竪穴住居跡は、調査区内から11軒確認されている。それぞれ時期は、弥生時代１軒、古墳時代前期～中期５軒、奈良・平安時代３軒、不明２軒である。

１号住居跡　（第５図）

位置　調査区の東部B2c1～2、B2d1～2グリッドにある。　**規模と平面形**　2.77m×3.11mの長方形。**主軸方向**　N－63°－W　**壁**　壁高は約30cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　床面は中央部が木根の小斑状の撹乱により壊されている。残存している部分の床は、ほぼ平坦で全体に強い硬化は見られない。　**ピット**　―　**炉**　―　**覆土**　大きく２層に分かれる。上層は黒褐色土で、下層はロームブロックや炭化物を含んだ層で、いずれも締りがある。　**遺物**　住居跡西部の覆土下層から炭化材片が、東壁際北寄りで15cm大の粘土塊が出土している。土器は、覆土中から小片で、古墳時代の土師器坏の口縁部が出土している。**所見**　出土遺物が少なく時期の特定が難しい。１点小片で出土した土師器と周囲にある古墳時代の集落や古墳との関連、床面からの炭化材片の出土を併せて考えれば古墳時代の小型の竪穴遺構の可能性が考えられ、小型の竪穴で遺物がほとんど出土していないことと、地下式坑が隣接してあること等から中世の方形竪穴の可能性も考えられる。



第５図　１号住居跡

表１　１号住居跡出土遺物観察表

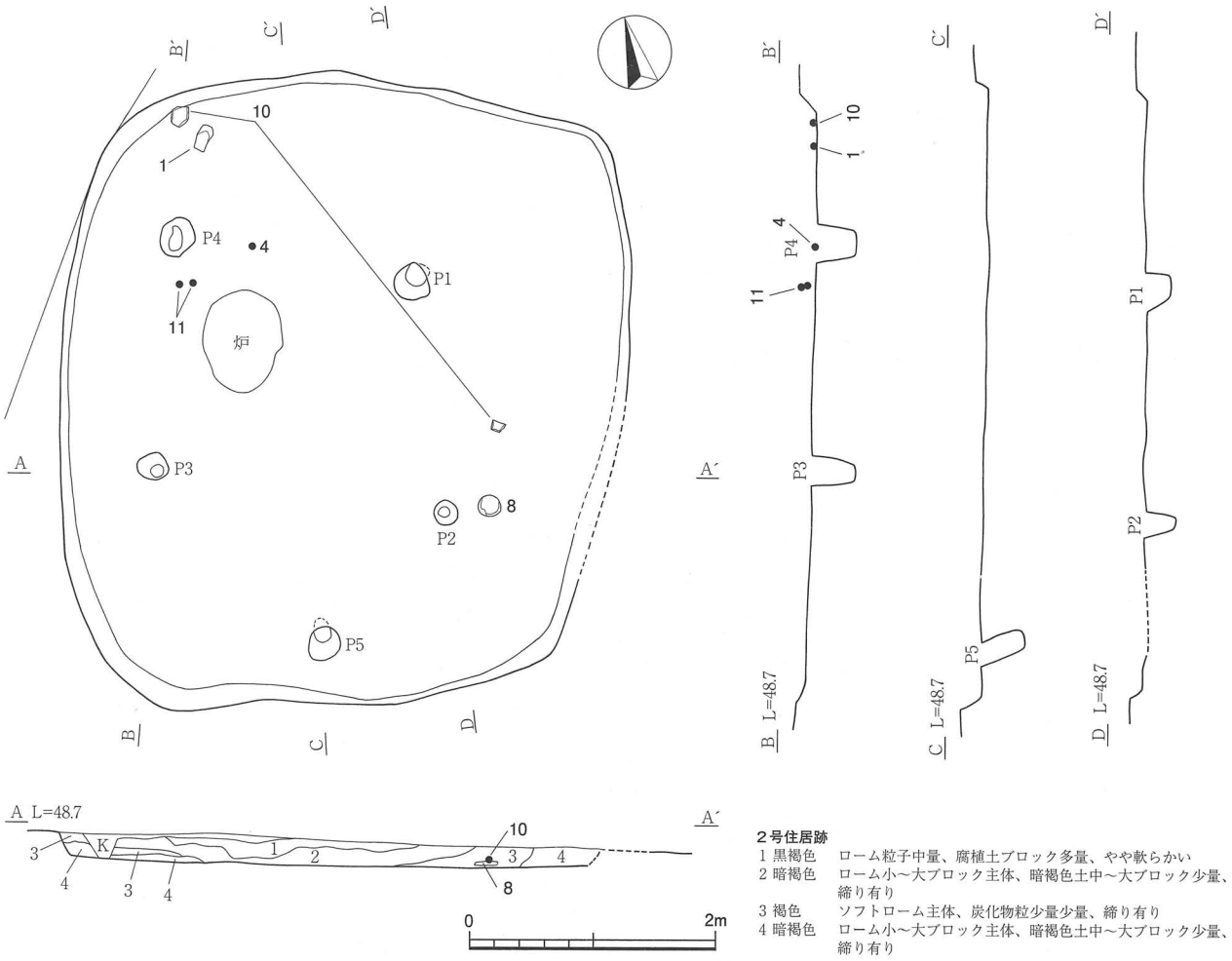
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(15.0) － －	口縁部破片。内面雑なミガキ、口縁端部ヨコナデ。	長石、石英微粒	良好	灰褐色	

２号住居跡　（第６・７図）

位置　調査区の北部B1c1～2、B1d1～d2グリッドにある。　**規模と平面形**　5.13m×4.59mの長方形。　**主軸方向**　N－20°－E　**壁**　壁高は約22cm、外傾して立ち上がる。　**床**　明瞭な硬化面を持たない。　**ピット**　５か所、Ｐ１～４は主柱穴。Ｐ５は出入り口ピットと考えられる。ピットの覆土は地山に近いローム。　**炉**　住居跡中央部やや西寄りの位置にあり、ほぼ平坦で火床部の焼土化が弱い。規模は長径0.81m、短径0.65mでほぼ平坦。　**覆土**　壁際の下層堆積は地山ロームの色に近い褐色土で締りがある。中層はロームブロックを主体とした堆積、住居跡中央部の上層堆積は黒色土ブロックを含んだ堆積土である。　**遺物**　住居跡北半部では床面から覆土下層に、小型壺や壺の胴部片、南東部床面には大型壺の底部が出土している。住居西側の覆土下層からは炭化したドングリ状の種実遺体が散在して複数出土している。土師器鉢の口縁部片は覆土から出土しているが、覆土を掘り込む撹乱中に入り込んだ可能性がある。　**所見**　出土遺物から弥生時代後期十王台式期の住居跡と考えられる。

表２　２号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	弥生土器 小型壺	(11.8) 15.9 5.9	口唇部にキザミ、口縁部５本１単位の櫛歯による波縄文を３段。胴上半部の文様帯は３単位。胴部付加条１種縄文。	石英、チャート	やや不良	にぶい橙色	60%
2	弥生土器 壺	－ － －	口縁部破片。口縁端部に撚糸原体の押圧、外面撚糸文。	微砂粒	普通	にぶい褐色	
3	弥生土器 小型壺	－ － －	口縁部破片。口縁端部にキザミ、外面単節ＬＲを施文。	石英	普通	にぶい褐色	
4	弥生土器 壺	－ － －	頸部片。撚糸文。	石英、チャート	良好	褐灰色	
5	弥生土器 壺	－ － －	口縁部片。縦の区画文間に６本１単位の波状文を充填する。	石英	良好	黒色（外）、橙色（内）	
6	弥生土器 小型壺	－ － －	縦の区画文は7本1条の櫛描文を3本、区画内には波状文を充填、胴部は付加条２種縄文。RのS巻きとLのZ巻き原体で羽状構成。	石英粒、微砂粒	良好	灰褐色	
7	弥生土器 壺	－ － －	胴下半部片。胴上半部文様帯の下端部は櫛描き沈線と無文、胴下半部には無節の斜縄文。	石英、海綿骨針	良好	灰褐色	
8	弥生土器 大型壺	－ － 18.0	底部片。胴部付加条２種縄文。	石英、角閃石、チャート、金雲母	良好	橙色	
9	弥生土器 壺	－ － －	底部小片。底部布目痕。胴部付加条２種縄文。	石英	良好	にぶい橙色	
10	弥生土器 大型壺	－ － (10.7)	胴部～底部片。単節ＲＬと付加条２種縄文を交互多段に施文。	石英、角閃石、海綿骨針	普通	褐色	

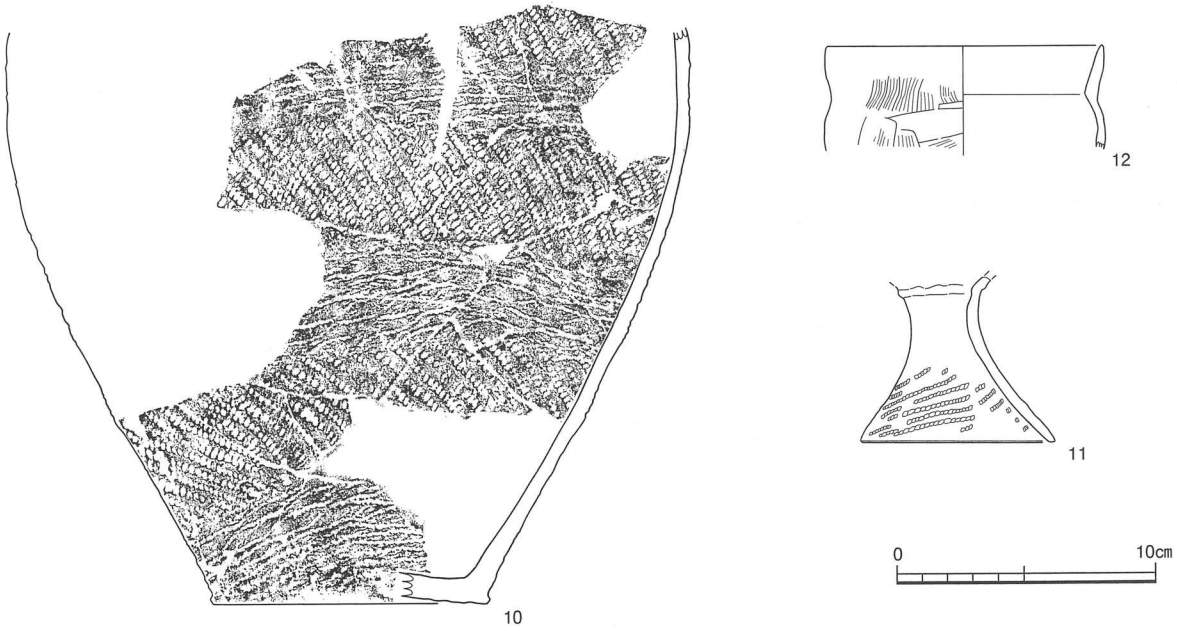


２号住居跡

1 黒褐色　ローム粒子中量、腐植土ブロック多量、やや軟らかい
2 暗褐色　ローム小～大ブロック主体、暗褐色土中～大ブロック少量、締り有り
3 褐色　ソフトローム主体、炭化物粒少量少量、締り有り
4 暗褐色　ローム小～大ブロック主体、暗褐色土中～大ブロック少量、締り有り

第６図　２号住居跡（１）

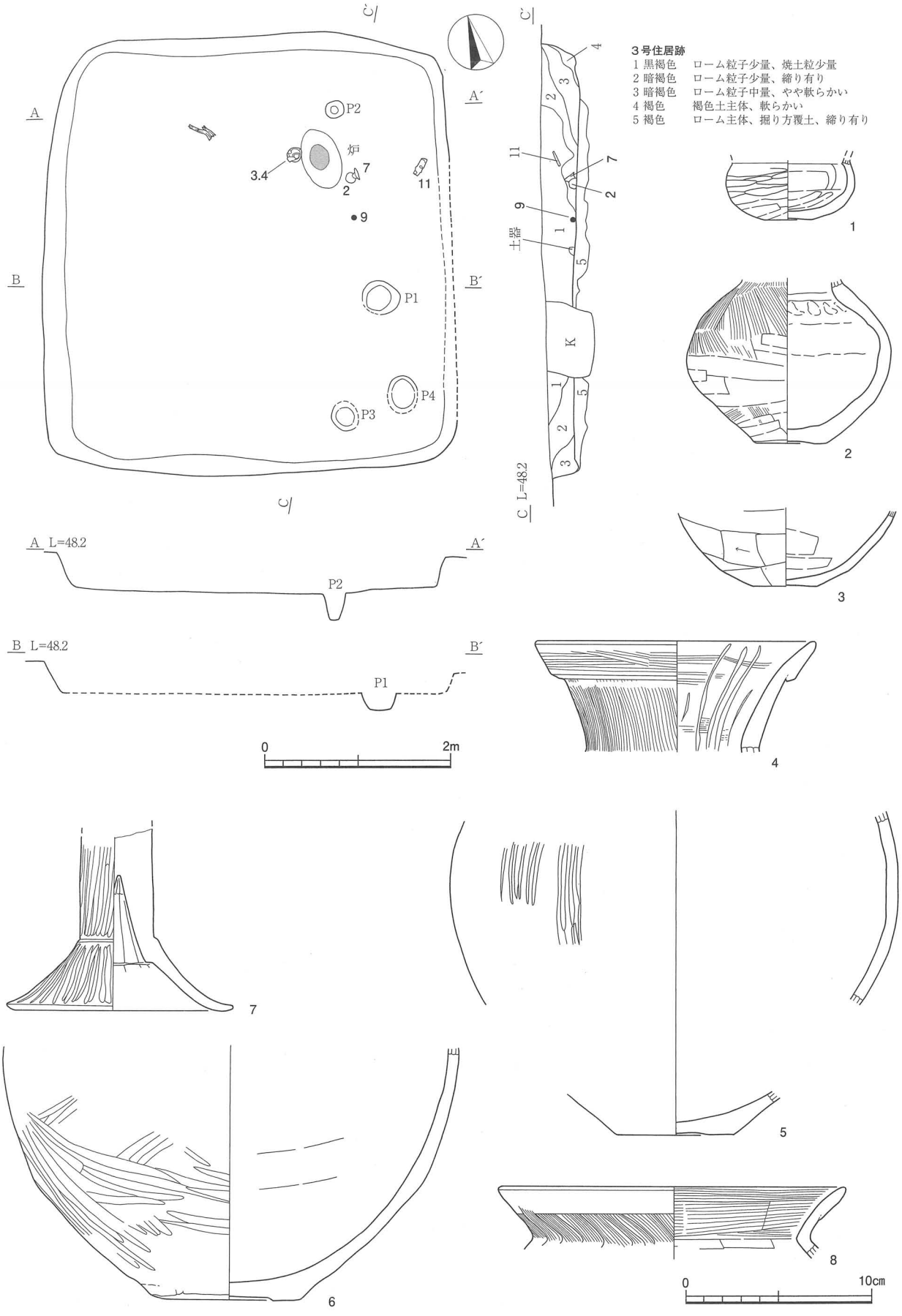
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
11	弥生土器 高坏	－ － 7.4	軸縄不明のRのS巻き原体による付加条縄文か、単節ＬＲ縄文。	石英、角閃石、海綿骨針、金雲母	良好	にぶい橙色	
12	土師器 鉢	(11.0) － －	口縁部片。外面ハケメ。	石英	良好	にぶい黄褐色	



第７図　２号住居跡（２）

３号住居跡　（第８・９図）

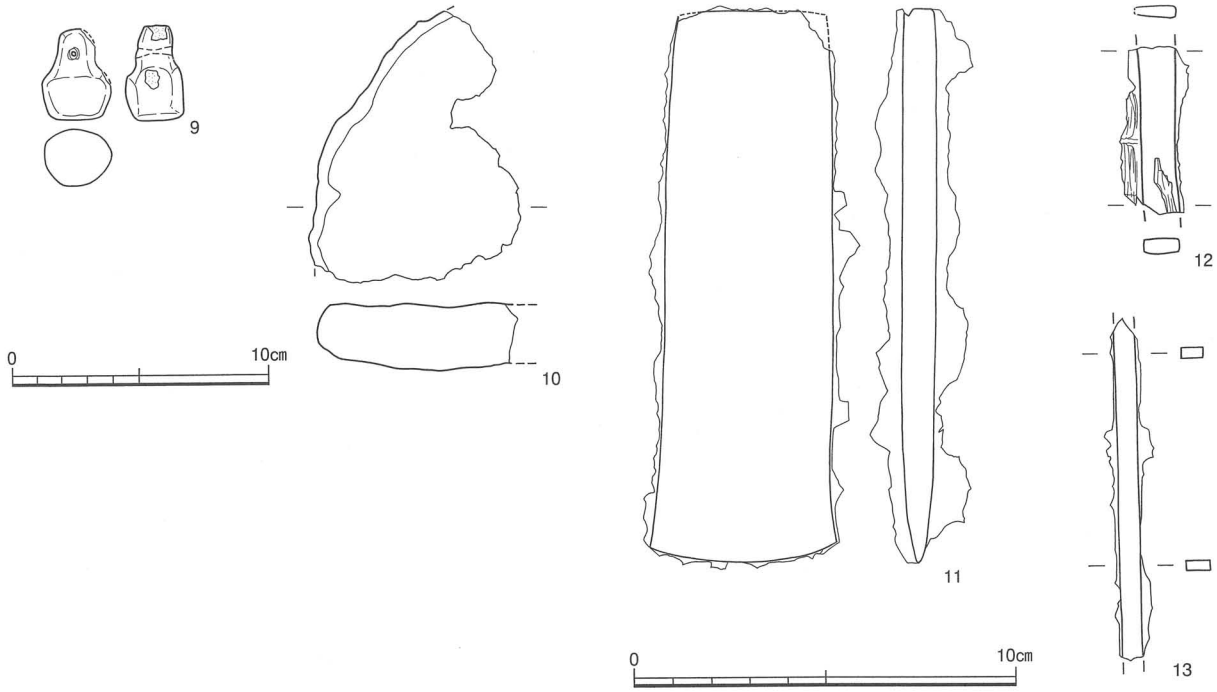
位置　調査区の中央部B2d1、C2a1、C1a4グリッドにある。　**規模と平面形**　4.75m×4.34mの長方形。**主軸方向**　Ｎ－77°－Ｗ　**壁**　壁高は約36cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　床面は硬化の度合いが低い。**ピット**　４箇所。Ｐ3は撹乱で壊されているが出入り口ピット、Ｐ2は炉に関係するピットと思われる。Ｐ1は床面を壊す新しいピット、Ｐ4は撹乱穴底面で確認されたピットでいずれも住居に伴うかどうかは不明である。　**炉**　住居跡の北東隅側に寄った位置にある。長径0.64m、短径0.40mの楕円形で深さ３cm。中央部は焼土化している。　**覆土**　覆土は４層で、最上層の１層は焼土粒を含んだ黒褐色土で、住居跡中央部床面を覆う。壁際に堆積している２～３層は暗褐色土層。　**遺物**　覆土から鉄製品で11の短冊形鉄斧、13の鉄鏃の柄の破片、12のヤリガンナ片が出土している。土器類では床面から７の土師器の高坏脚部と２の小型壺、４の複合口縁壺の口縁部が出土している。高坏脚部は坏部を取り去った脚部から裾部にかけてのもので、小型壺は口縁部を取り除いた体部のみのものである。壺体部に高坏脚部を差し込んだ状態で炉の南側の床上から出土している。複合口縁壺の口縁部は、炉の北西側縁近くの床面から出土している。鐸ないし土鈴形をした、釣り手に穿孔のある小型土製品は炉の南側床面から出土している。　**所見**　床上に残された壺、高坏、土製品は、祭祀的な用途が窺われる。覆土から出土した短冊形鉄斧は、住居跡出土としては非常に珍しい。これは鉄鏃、ヤリガンナとともに古墳の副葬品に由来するものが住居覆土中へ廃棄されたのかもしれない。



3号住居跡

1 黒褐色　ローム粒子少量、焼土粒少量
2 暗褐色　ローム粒子少量、締り有り
3 暗褐色　ローム粒子中量、やや軟らかい
4 褐色　褐色土主体、軟らかい
5 褐色　ローム主体、掘り方覆土、締り有り

第８図　３号住居跡（１）



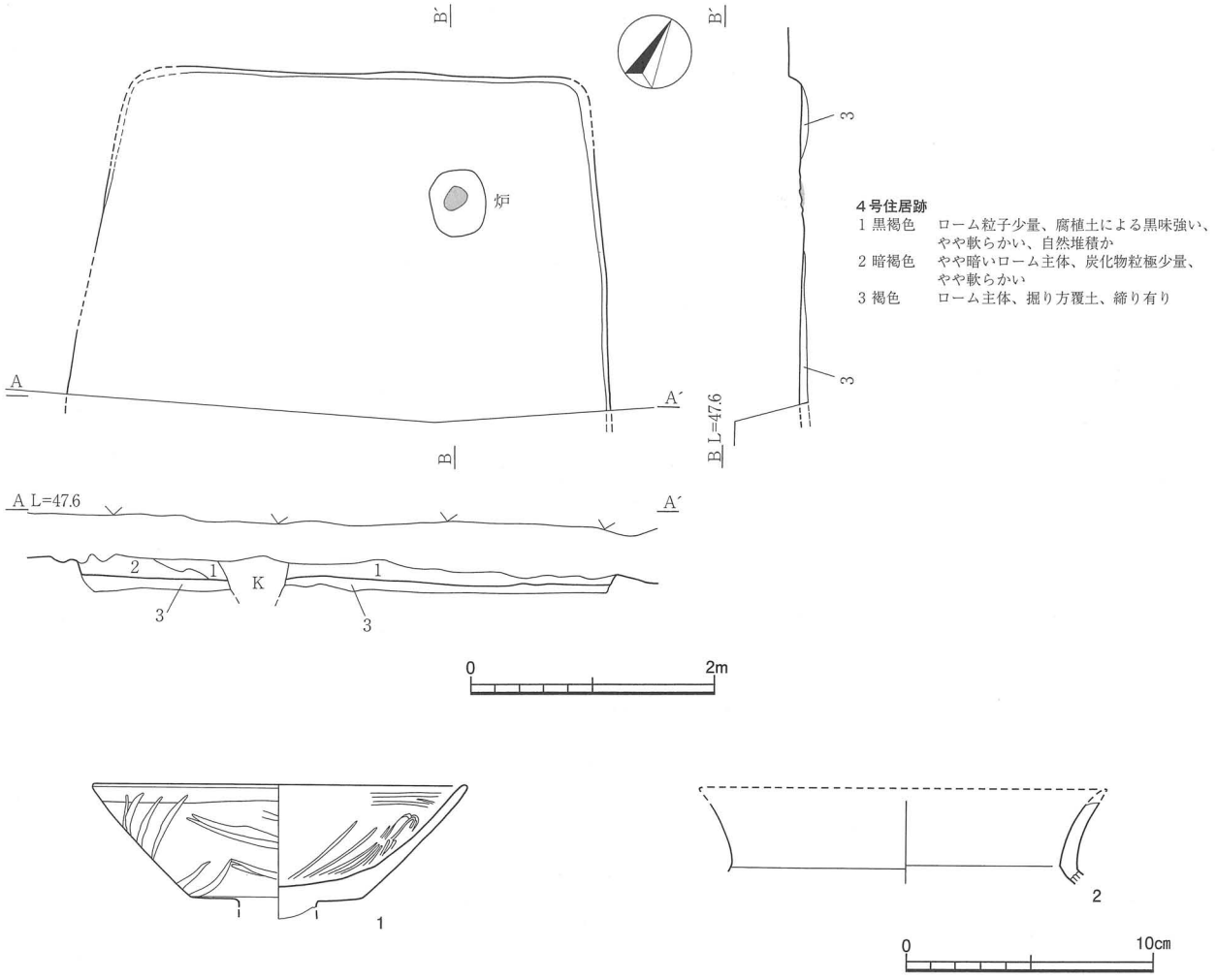
第９図　３号住居跡（２）

表３　３号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 小型坩	－ － 2.6	体上半部ミガキ、下半部ヘラナデ。底部ヘラナデ。	長石、石英	良好	にぶい橙色	
2	土師器 小型壺	－ － 3.8	体上半部外面ハケメ、下半部ヘラナデ。底部ヘラナデ。	長石、石英	良好	橙色	
3	土師器 小型壺	－ － 3.4	胴下半部外面横位のヘラケズリ。内面ヘラナデ。	長石礫、石英	良好	橙色	
4	土師器 壺	15.0 － －	複合口縁。口縁部外面ハケメ。内面ハケメ後ミガキ。	長石、石英	良好	にぶい橙色	
5	土師器 壺	－ － (6.4)	胴部外面ミガキ、内面ヘラナデ。底部低い輪高台。	長石、石英	良好	黒褐色	
6	土師器 壺	－ － 7.6	胴部外面ミガキ、内面ヘラナデ。底部低い輪高台。	長石、石英、 チャート	良好	にぶい赤褐色	
7	土師器 高坏	－ － 12.0	脚～裾部外面ミガキ、脚部内面ヘラケズリ、脚裾部内面ヨコナデ。	石英、チャート	良好	橙色	
8	土師器 甕	(18.6) － －	口縁部片。口縁部外面斜位ハケメ、内面横位ハケメ。	長石、石英、 チャート	良好	黒褐色	
9	土製品 鐸（鈴）形	高3.8、幅2.7、厚さ2.2、重18.5g			良好	黒褐色	
10	土製品 炉粘土板	長―、幅―、厚さ2.5、重245.8g		長石、石英、 チャート	普通	にぶい橙色	
11	鉄製品 短冊形鉄斧	長14.5、幅4.9、厚さ0.9、重354g					
12	鉄製品 ヤリガンナ	長[4.4]、幅0.95、厚さ0.32～0.4、重[7.94]g、木質付着（竹か）					
13	鉄製品 鏃	長[8.9]、幅0.5、厚さ0.3、重[7.90]g					

４号住居跡　（第10図）

位置　調査区の南部D1a4、D2a1グリッドにある。　**規模と平面形**　4.40×（2.84）m。南半分が調査区外にある。　**主軸方向**　N－31°－W　**壁**　壁高は約23cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　全体に弱く硬化している。　**ピット**　―　**炉**　住居跡の北東隅側に寄った位置にある。長径51cm、短径44cmの楕円形でほぼ平坦。中央部が特に赤変硬化している。　**覆土**　覆土は２層で、上層は自然堆積と見られる黒褐色土層で、下層の暗褐色土中には炭化物粒を含む。　**遺物**　覆土から古墳時代前期末から中期初め頃の高坏と甕口縁部片が出土している。　**所見**　遺構の特徴や遺物から、古墳時代の５世紀初め頃の住居跡と考えられる。



第10図　４号住居跡

表４　４号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 高坏	(15.2) － －	坏部内外面ミガキ。脚部柱状脚か。	長石、石英、 チャート	良好	にぶい褐色	
2	土師器 甕	(18.3) － －	口縁部内外面ヨコナデ。	石英、チャート	良好	黒褐色	

５号住居跡　（第11・12図）

位置　調査区の西部C0b4グリッドにある。　**規模と平面形**　3.97×3.50mの横に長い長方形。　**主軸方向**　N－1°－E　**壁**　壁高は35cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　床面全体が硬化している。壁溝は部分的に途切れながら、カマド部分以外全周している。　**ピット**　１箇所。Ｐ１は、南壁寄りの住居の中軸上にあり、住居南側の壁に向かって、約67°の角度で掘り込まれている。　**カマド**　住居北壁中心から僅かに東に寄った位置にあり、粘土を使用して、住居内に袖部を張り出して構築している。燃焼室の幅はおよそ43cmある。　**覆土**　覆土はロームブロックを多く含んだ上層とローム主体の下層ともに埋め戻しの人為堆積層である。　**遺物**　カマド焚口前の床面から、底部に墨書文字の書かれた４の須恵器盤、住居の北東隅から９の台石が出土している。その他はカマド付近の覆土中から出土しているものが多い。　**所見**

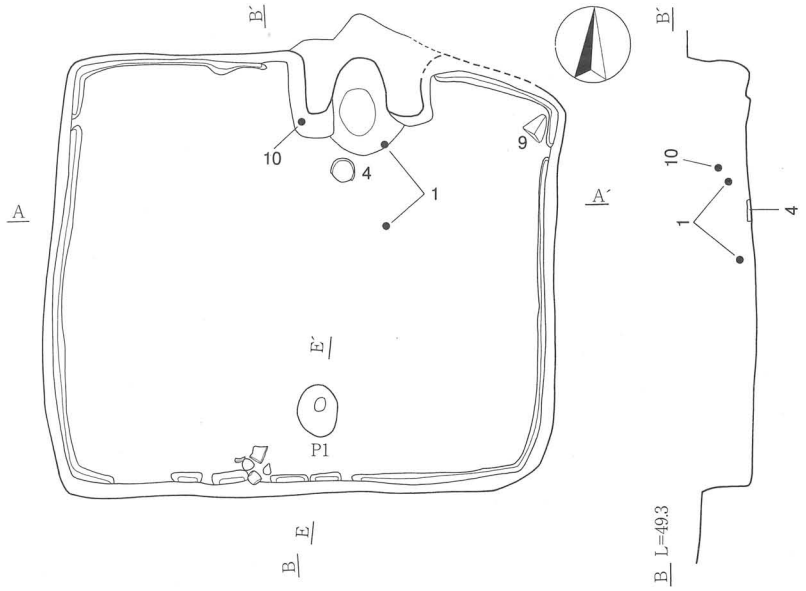
Ｐ1の南側傾斜角度にそって、一本梯子を復元的に入れてみると、住居の南壁がさらに上方に延びているとすると床面からおおよそ0.85mの高さで交差する。この高さが住居を構築した時の旧地表面の可能性が推測できる。床面出土須恵器盤に書かれた「刀良」はトラと読んで男性名であろうか。

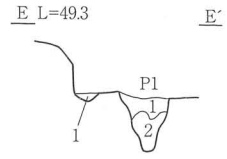
表５　５号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	13.9 4.9 7.6	底部回転ヘラ切り離し、無調性。底部外面墨書記号「○」。	長石、チャート、海綿骨針	やや不良	灰褐色	
2	須恵器 坏	(12.2) － －		長石、石英、海綿骨針	普通	灰色	
3	須恵器 坏	13.0 4.2 (6.2)	底部回転ヘラ切り離し。	長石、海綿骨針	普通	灰色	
4	須恵器 盤	16.6 4.3 10.3	底部外面ヘラ記号「×」、底部外面墨書文字「刀良」。	長石、石英、海綿骨針、チャート	やや不良	灰白色	
5	須恵器 盤	18.1 4.0 11.3	底部回転ヘラケズリ、ロクロ右回転。	長石、石英、海綿骨針	不良	灰色	
6	土師器 甕	20.6 － －	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部外面ナデ、下半部ミガキ、内面ヘラナデ。	石英、微砂粒	普通	にぶい橙色	
7	土師器 甕	24.2 － －	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部外面ナデ、下半部ミガキ、内面ヘラナデ。	長石、石英、雲母	良好	にぶい橙色	
8	土製品 棒状土製品	長[3.5]、径1.05、重4.97g		石英、角閃石	良好	橙色	両端欠損
9	石製品 台石	長17.1、幅15.4、厚さ5.0、重1680g、砂岩					
10	鉄製品 刀子	長[9.5]、幅1.18、厚さ0.3、重〔7.85〕g					

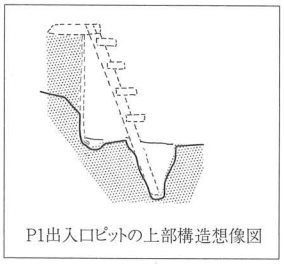
６号住居跡　（第13図）

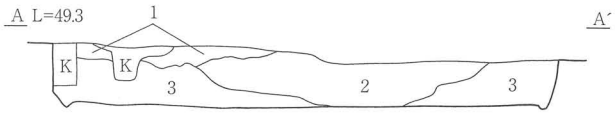
位置　調査区の北部B0d3グリッドにある。　**規模と平面形**　3.00×3.05mの方形。　**主軸方向**　N－81°－E　**壁**　壁高は約50cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　ほぼ平坦で壁際を除いて踏み固められており、カマド寄りの床面にはカマド材の礫と焼土が散存している。また、壁溝は南壁下と北壁下の一部に見られる。　**貯蔵穴**　北壁の北東コーナー部寄りに付設されており、深さ22cmである。底面は平坦で、壁は外傾



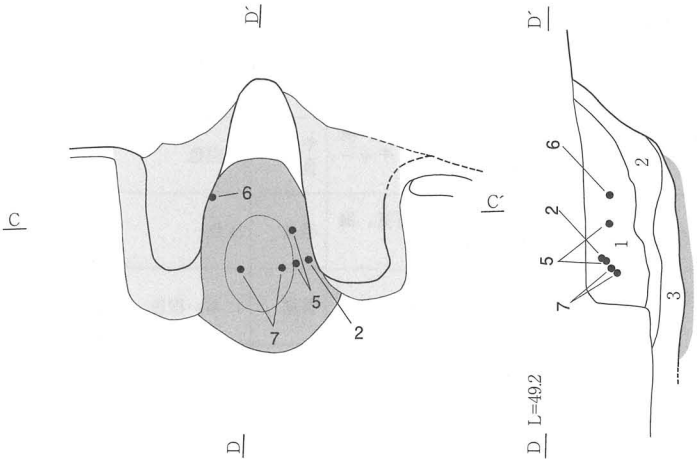


5号住居跡ピット
1 暗褐色　褐色ローム中大ブロック多量、埋め戻し土層、固く締り有り
2 暗褐色　ローム小ブロック少量、ローム主体、軟らかい

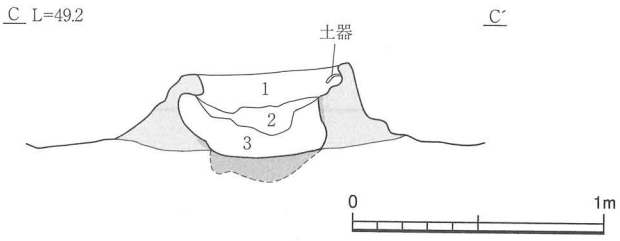


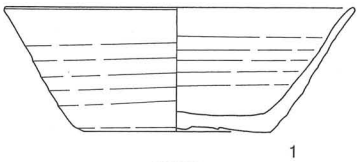


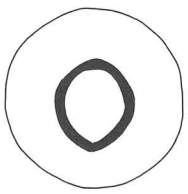
5号住居跡
1 暗褐色　ローム粒子少量、締り有り
2 褐色　ローム粒子・ローム小～中ブロック中量、埋め戻し土層、軟らかい
3 褐色　ローム主体、ハードローム小ブロック少量、やや軟らかい

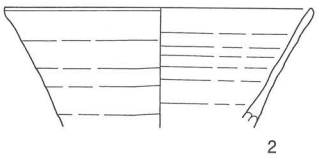


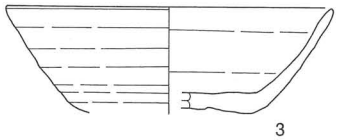
5号住居跡カマド
1 暗褐色　ローム粒子中量、炭化物粒極少量、やや締り有り
2 暗褐色　粘土小ブロック少量、焼土粒中量、やや軟らかい
3 赤褐色　焼土小ブロック主体、やや軟らかい



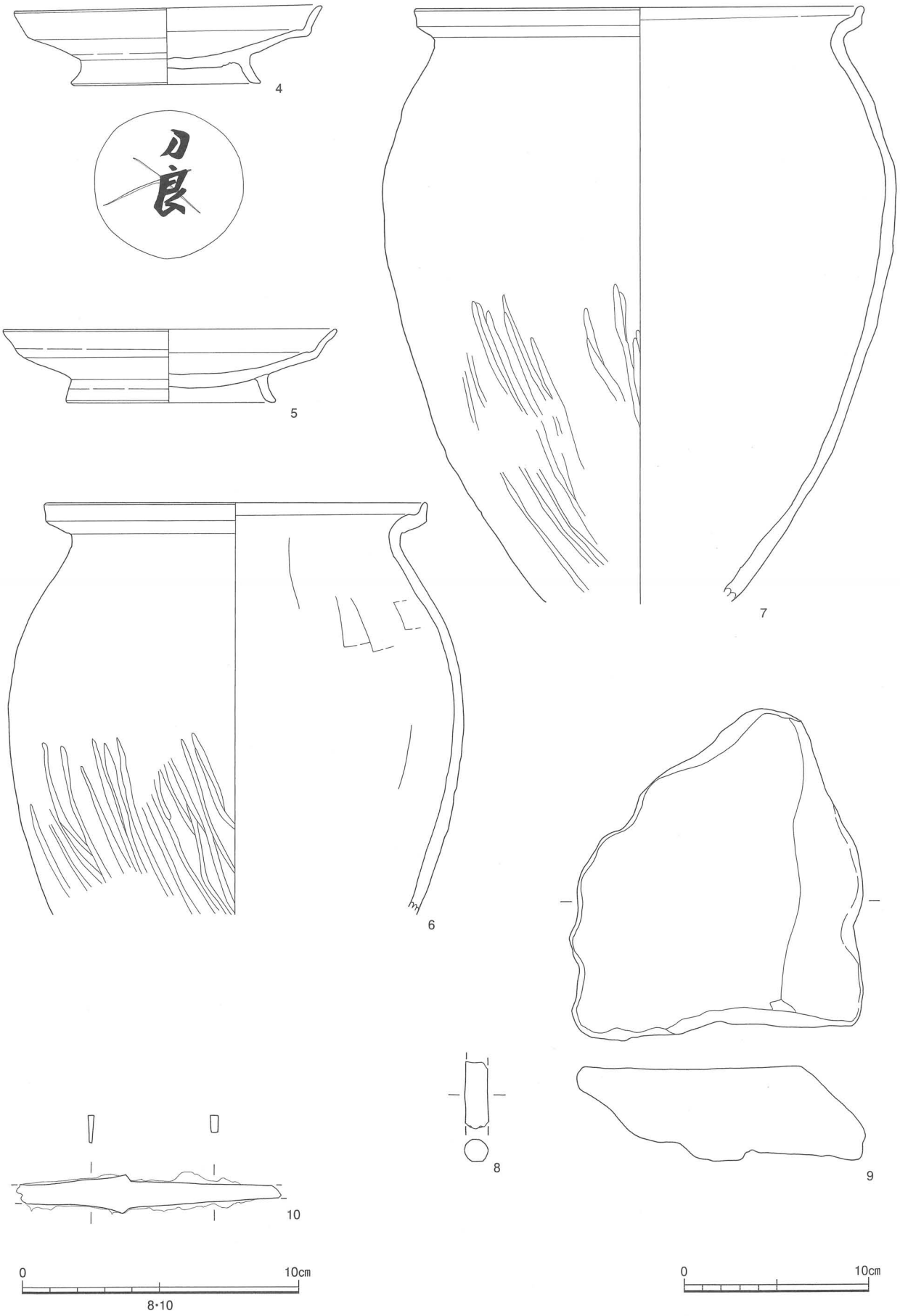




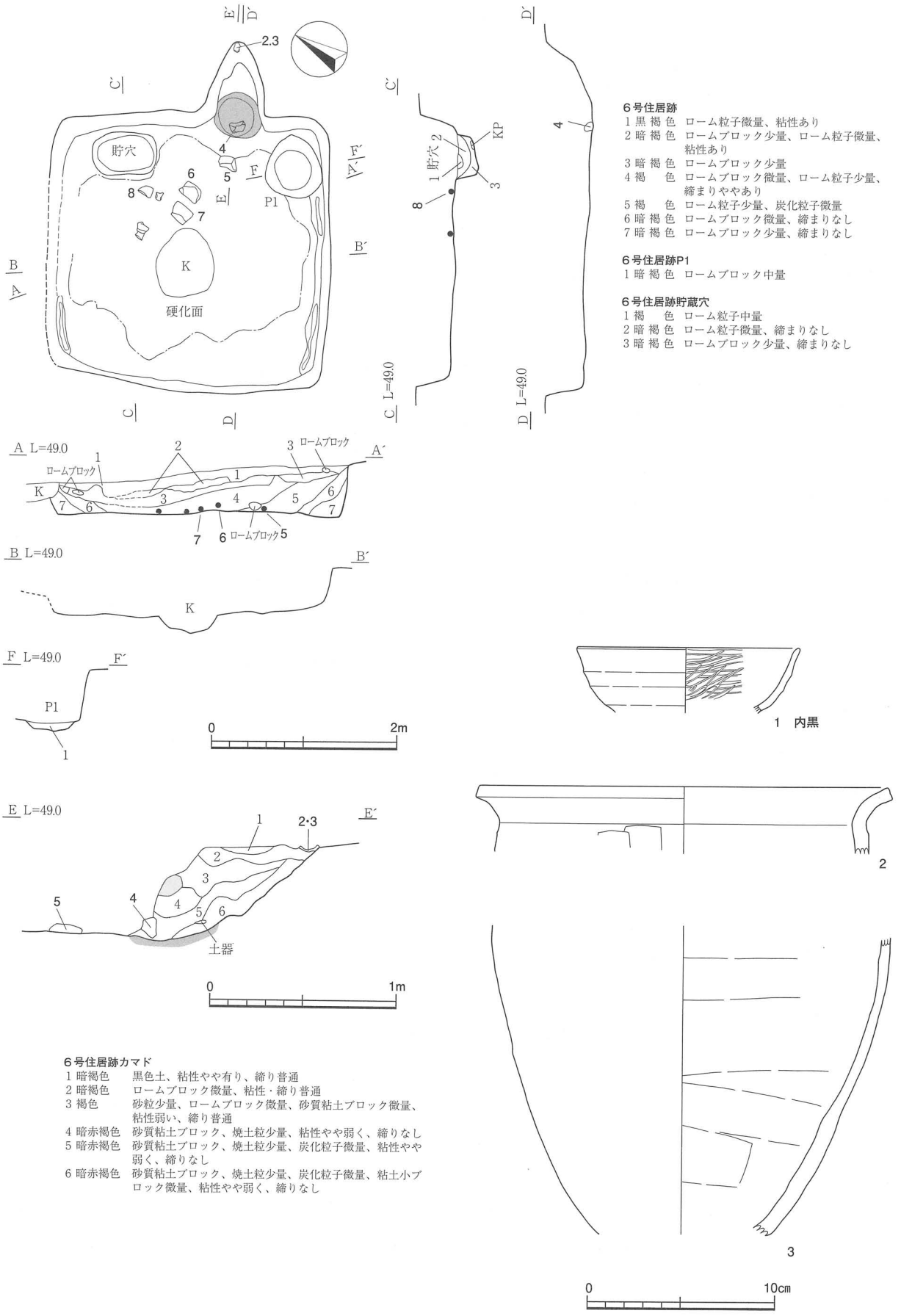




第11図　5号住居跡（1）



第12図　５号住居跡（２）



6号住居跡
1 黒 褐 色　ローム粒子微量、粘性あり
2 暗 褐 色　ロームブロック少量、ローム粒子微量、粘性あり
3 暗 褐 色　ロームブロック少量
4 褐　　色　ロームブロック微量、ローム粒子少量、締まりややあり
5 褐　　色　ローム粒子少量、炭化粒子微量
6 暗 褐 色　ロームブロック微量、締まりなし
7 暗 褐 色　ロームブロック少量、締まりなし

6号住居跡P1
1 暗 褐 色　ロームブロック中量

6号住居跡貯蔵穴
1 褐　　色　ローム粒子中量
2 暗 褐 色　ローム粒子微量、締まりなし
3 暗 褐 色　ロームブロック少量、締まりなし

6号住居跡カマド
1 暗褐色　　黒色土、粘性やや有り、締り普通
2 暗褐色　　ロームブロック微量、粘性・締り普通
3 褐色　　砂粒少量、ロームブロック微量、砂質粘土ブロック微量、粘性弱い、締り普通
4 暗赤褐色　砂質粘土ブロック、焼土粒少量、粘性やや弱く、締りなし
5 暗赤褐色　砂質粘土ブロック、焼土粒少量、炭化粒子微量、粘性やや弱く、締りなし
6 暗赤褐色　砂質粘土ブロック、焼土粒少量、炭化粒子微量、粘土小ブロック微量、粘性やや弱く、締りなし

1　内黒

2

3

第13図　6号住居跡

して立ち上がる。　**ピット**　1箇所。南東コーナー部にあり、深さ10cmの浅い窪み穴で、性格は不明である。　**カマド**　東壁南寄りに付設されている。焚口部から煙道部まで125cm、燃焼部幅45cmである。袖部はほとんど遺存しておらず、わずかに地山の上に砂質粘土が確認されただけである。火床面は火を受けて赤変硬化しているが、焼土や灰の堆積はほとんど認められない。カマド土層4～7層は天井部の崩落土である。カマド掘り込み面右側に赤変した袖石片が僅かに残存していた。　**覆土**　覆土は7層で、上層が黒褐色土の自然堆積、下層はロームブロックを含んだ暗褐色～褐色土層で、人為堆積と見られる。　**遺物**　覆土から土師器の内黒埦、カマド煙道部埋没土から土師器甕片が出土している。カマド焚口部から住居跡中央部にかけて砂岩の切り石破片が散在しているが、これらはいずれも被熱している。**所見**　本跡は小型の住居跡で東壁に竈を付設している。床上で出土した砂岩の切り石はカマドの構築材として使用され、廃絶時に遺棄されたものと推測される。住居形態や出土遺物から10世紀前葉頃の住居跡と考えられる。

表6　6号住居跡出土遺物観察表

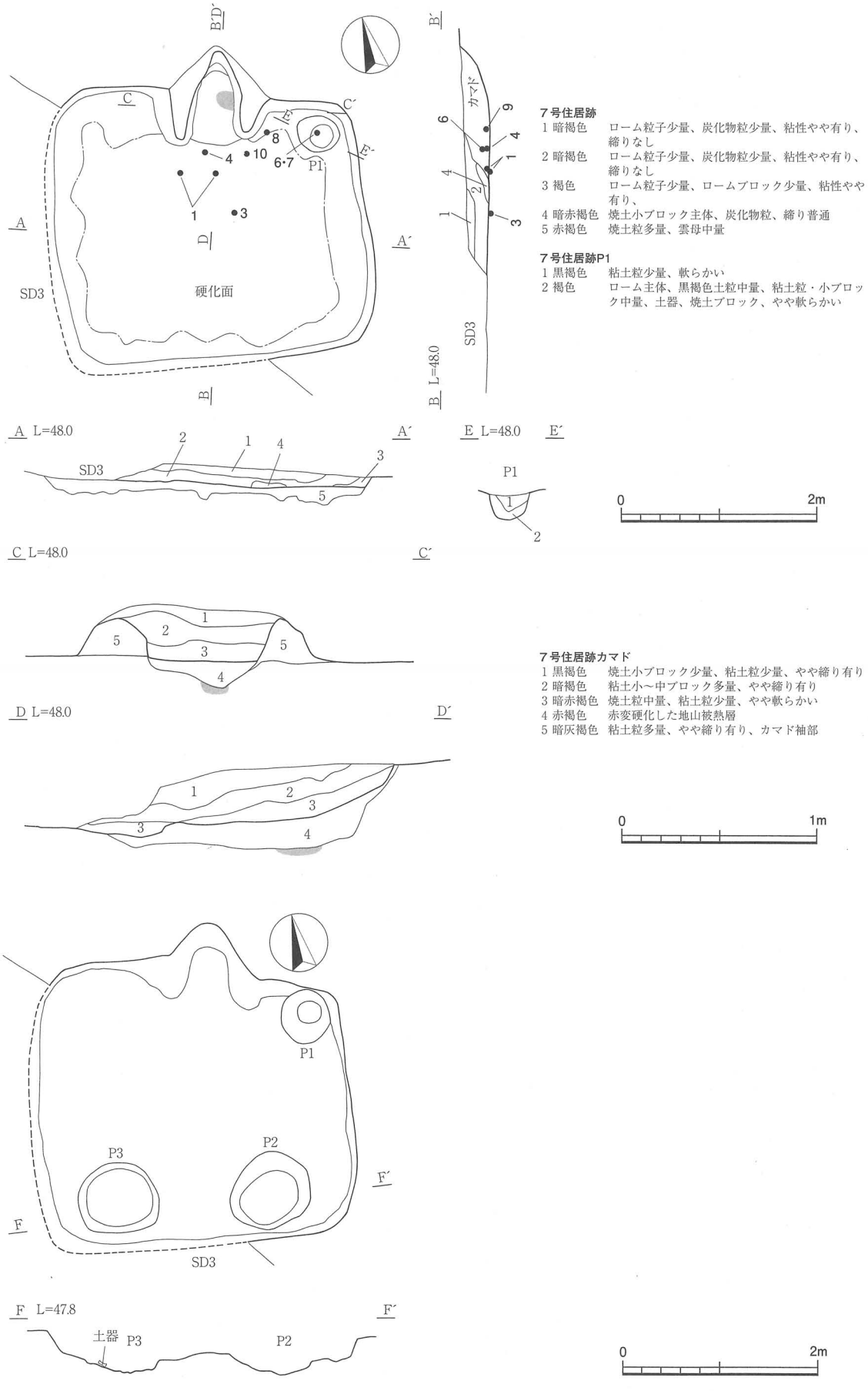
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 埦	(12.8) － －	内面黒色処理・ミガキ。	石英	普通	にぶい橙色	
2	土師器 甕	(22.2) － －	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ。	石英	良好	褐灰色	
3	土師器 甕	－ － (9.0)	胴下半部外面斜位のヘラケズリ後ナデ。内面ヘラナデ。	長石、石英微粒	良好	にぶい褐色	

7号住居跡　（第14・15図）

位置　調査区の中央部C1b4グリッドにある。　**規模と平面形**　3.35×2.98の方形。　**主軸方向**　N－10°－E　**壁**　壁高は約37cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　壁周辺を除いて硬化している。　**ピット**　P1は住居跡北東隅にある。P2・3は床下から確認されており、南壁寄りの西と東に大きく開いている。　**カマド**　北壁中央にあり、袖部は粘土を含んだ暗灰褐色土で構築されている。燃焼室から煙道部へは緩やかに立ち上がっている。　**覆土**　覆土には炭化物粒や焼土ブロックを含んでいる。　**遺物**　カマド前面の床上から1・3・4の土師器の内黒埦片、10の灰釉陶器埦片が出土している。6・7の土師器甕はP1の覆土から出土している。　**所見**　出土遺物から10世紀前半頃の住居跡と考えられる。

表7　7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	15.2 5.6 8.3	底部回転ヘラ切り後ヘラナデ。	長石、石英、微砂粒	普通	にぶい橙色	
2	土師器 坏	(13.8) 4.6 6.2	底部回転ヘラ切り離し後一方向ヘラナデ。体部下端手持ちヘラケズリ。底部内面一方向ヘラミガキ。口縁部横方向ヘラミガキ。	石英粒多、長石、海綿骨針微量	良好	にぶい橙色	60%
3	土師器 坏	(13.8) 4.4 5.8	底部多方向ヘラケズリ。底部周縁手持ちヘラケズリ。内面ロクロナデ。	石英、金雲母、海綿骨針微量	不良	橙色	



7号住居跡

1 暗褐色　ローム粒子少量、炭化物粒少量、粘性やや有り、締りなし
2 暗褐色　ローム粒子少量、炭化物粒少量、粘性やや有り、締りなし
3 褐色　ローム粒子少量、ロームブロック少量、粘性やや有り、
4 暗赤褐色　焼土小ブロック主体、炭化物粒、締り普通
5 赤褐色　焼土粒多量、雲母中量

7号住居跡P1

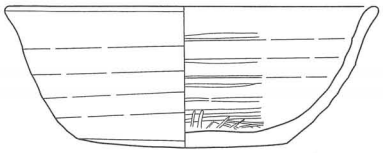
1 黒褐色　粘土粒少量、軟らかい
2 褐色　ローム主体、黒褐色土粒中量、粘土粒・小ブロック中量、土器、焼土ブロック、やや軟らかい

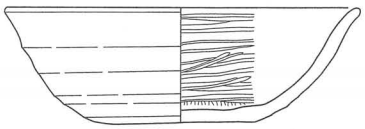
7号住居跡カマド

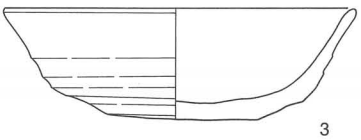
1 黒褐色　焼土小ブロック少量、粘土粒少量、やや締り有り
2 暗褐色　粘土小～中ブロック多量、やや締り有り
3 暗赤褐色　焼土粒中量、粘土粒少量、やや軟らかい
4 赤褐色　赤変硬化した地山被熱層
5 暗灰褐色　粘土粒多量、やや締り有り、カマド袖部

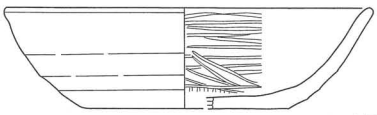
第14図　7号住居跡（1）

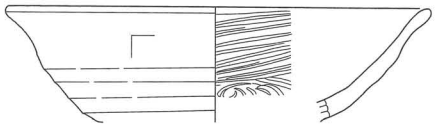
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
4	土師器 坏	14.4 4.0 7.8	体部下端～底部回転ヘラケズリ、ロクロ右回転。内面黒色処理・ミガキ。	石英	普通	褐灰色	
5	土師器 坏	(15.6) － －	内面口縁部右肩上がり横方向ヘラミガキ。内面黒色処理。	石英粒多、海綿骨針微量	良好	にぶい橙色	30%、墨書「子而?」
6	土師器 甕	(20.6) － －	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英、角閃石	良好	にぶい橙色	
7	土師器 甕	(23.0) － －	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英、角閃石	良好	にぶい橙色	
8	土師器 甕	－ － 8.7	胴部外面ヘラケズリ。底部外面オサエ。	石英、微砂粒	普通	褐灰色	
9	土師器 甕	－ － (7.7)	胴部外面ヘラケズリ。底部外面オサエ。	石英、角閃石	普通	褐灰色	
10	灰釉陶器 埦	(13.8) 4.2 (6.0)	灰釉付け掛け。	精良	良好	灰白色	

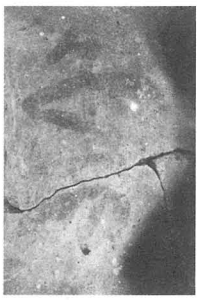

1

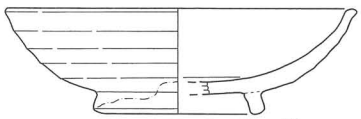

2

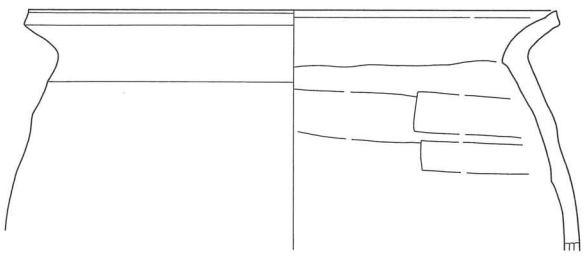

3

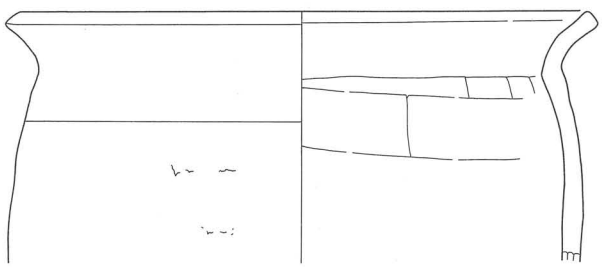

4　内黒

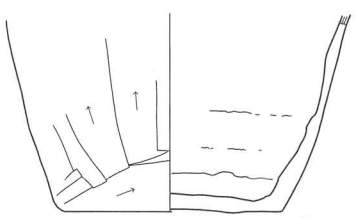

5　内黒

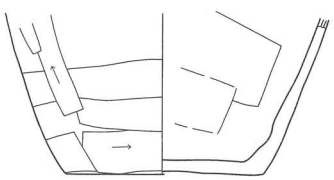



10

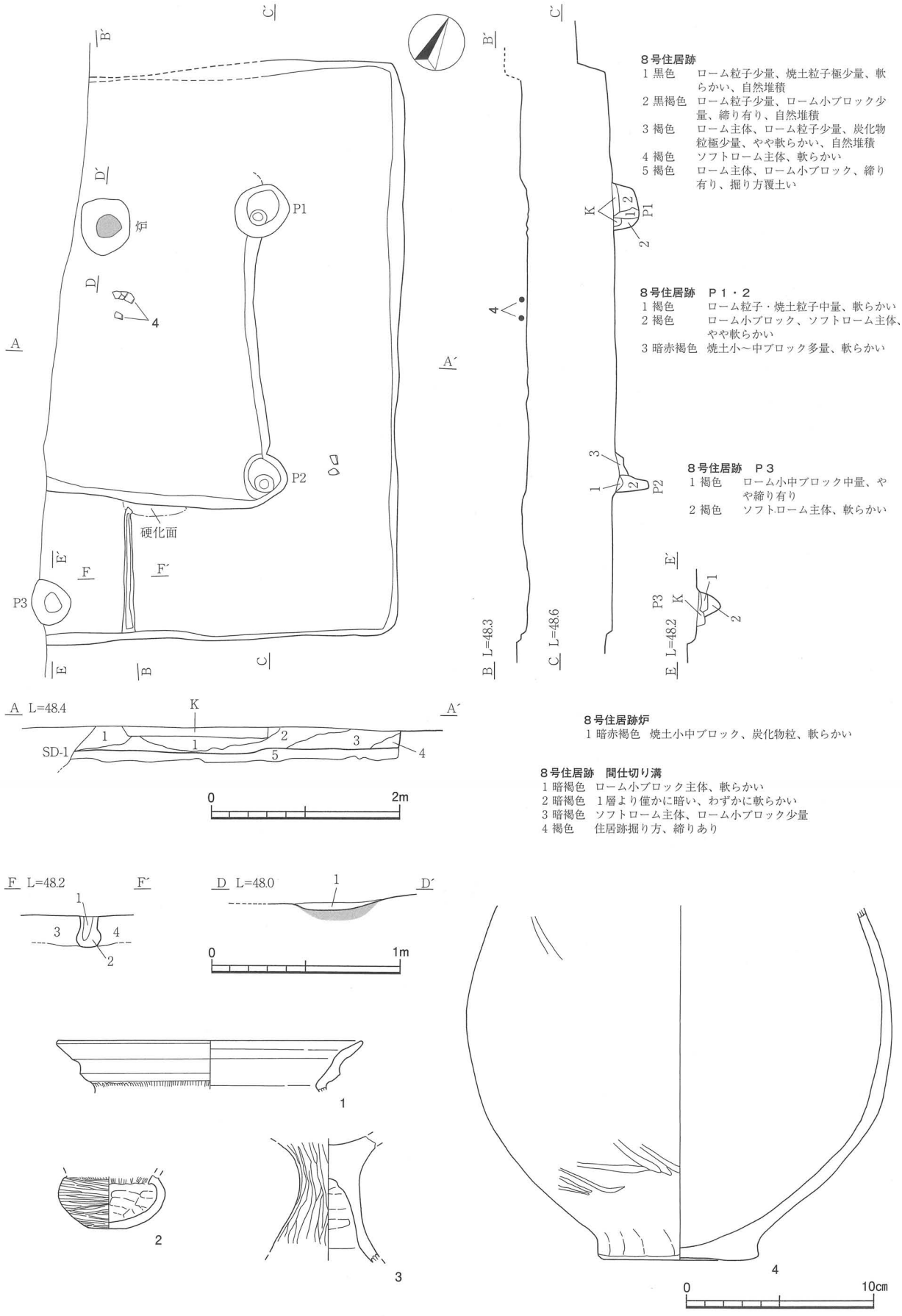

6


7


8


9

第15図　７号住居跡（２）



8号住居跡
1 黒色　ローム粒子少量、焼土粒子極少量、軟らかい、自然堆積
2 黒褐色　ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、締り有り、自然堆積
3 褐色　ローム主体、ローム粒子少量、炭化物粒極少量、やや軟らかい、自然堆積
4 褐色　ソフトローム主体、軟らかい
5 褐色　ローム主体、ローム小ブロック、締り有り、掘り方覆土い

8号住居跡　P1・2
1 褐色　ローム粒子・焼土粒子中量、軟らかい
2 褐色　ローム小ブロック、ソフトローム主体、やや軟らかい
3 暗赤褐色　焼土小～中ブロック多量、軟らかい

8号住居跡　P3
1 褐色　ローム小中ブロック中量、やや締り有り
2 褐色　ソフトローム主体、軟らかい

8号住居跡炉
1 暗赤褐色　焼土小中ブロック、炭化物粒、軟らかい

8号住居跡　間仕切り溝
1 暗褐色　ローム小ブロック主体、軟らかい
2 暗褐色　1層より僅かに暗い、わずかに軟らかい
3 暗褐色　ソフトローム主体、ローム小ブロック少量
4 褐色　住居跡掘り方、締りあり

第16図　8号住居跡

８号住居跡　（第16図）

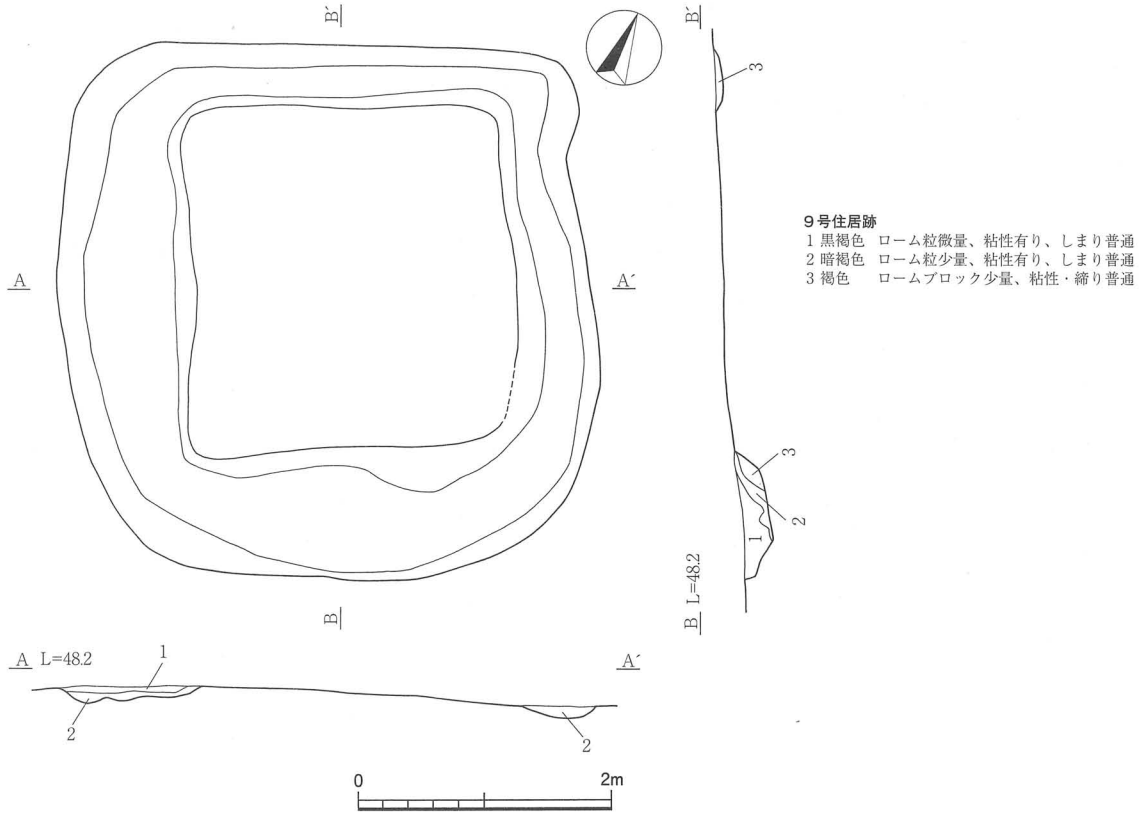
位置　調査区の中央部C1a3～b3、b4グリッドにある。　**規模と平面形**　6.20×（4.00）m。１号堀によって東側を壊されている。　**主軸方向**　N－25°－W　**壁**　壁高は６～18cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　南側と東側の主柱穴の外側の区画がベット状に約５cm高まっている。Ｐ２とＰ３の間のベッド状の高まりの端の一部が硬化していたが、他は床の硬化面の風化が進んでいる。間仕切り溝は、南壁から直角に中心に向かってベット状遺構を切り込んで造られている。　**ピット**　４本主柱穴のうち東側列のＰ１・２が残っており、床面では柱痕として確認できた。柱痕層上層では焼土粒が見られた。Ｐ3は南壁際の炉の対面やや西寄りの位置にあり、出入り口ピットと考えられる。　**炉**　間仕切り溝を延長したラインの少し西に寄った位置にあり、長径62cm、短径52cmの楕円形で深さ５cmで、火床面中央部が焼土化している。　**覆土**　覆土は自然堆積で、壁際のロームの三角堆積中に炭化物が含まれる。上層の黒色土中にも焼土粒が含まれる。　**遺物**　覆土から精製土器の有段口縁壺口縁部、小型坩、住居中央部の床面近くから４の壺体部が出土している。　**所見**　住居跡はベッド状遺構を持ち、出入り口ピットと間仕切り溝、炉の各施設を住居の中軸線のやや左側に持った住居である。出土遺物や遺構の特徴から古墳時代前期の住居跡と考えられ、焼失住居と見られる。

表８　８号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 有段口縁壺	(16.3) － －	緩いＳ字状に屈曲する有段口縁の口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ。	石英	良好	にぶい橙色	
2	土師器 小型坩	－ － 1.9	底部は小さな凹面の平底。口縁部内外面ミガキ、体部外面ミガキ、内面ナデ。	石英、微砂粒、海綿骨針微量	良好	にぶい赤褐色	
3	土師器 高坏	－ － －	脚部片。脚部外面ミガキ。	長石、石英、海綿骨針微量	良好	にぶい褐色	
4	土師器 壺	－ － (8.3)	底部は下方に突出し、底面は低い輪台状で種実圧痕有り。胴部外面ミガキ。	石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色、黒色	

９号住居跡　（第17図）

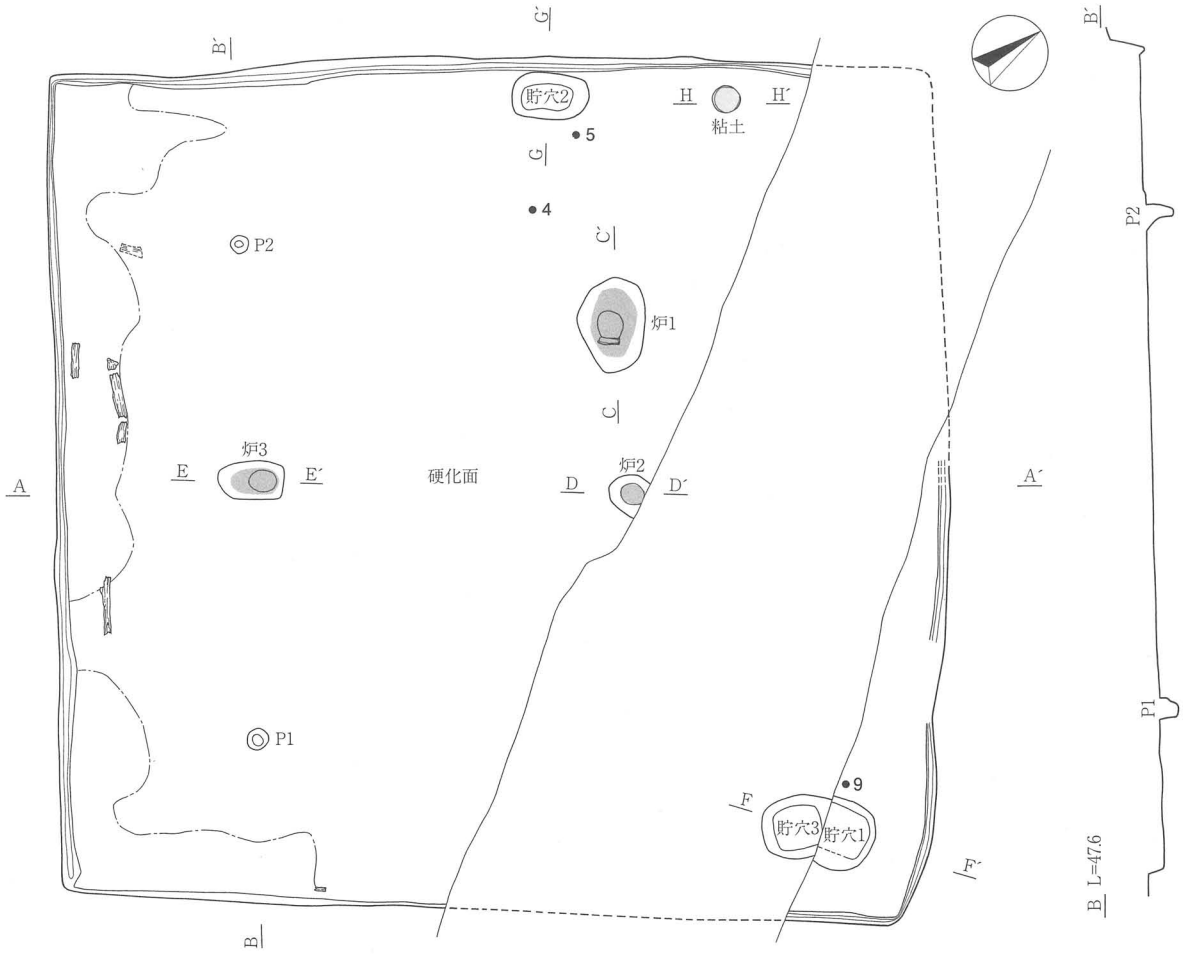
位置　調査区の中央部C1b4グリッドにあり、床下の掘り方が確認されている。　**規模と平面形**　掘り方の範囲は（4.30）×（4.25）m。　**主軸方向**　N－26°－W　**壁**　―　**床**　床が残存しておらず、床下の掘り方が四角く廻る溝状に確認されている。　**ピット**　―　**火処**　―　**覆土**　床下覆土は薄く３層あり締りがある。　**遺物**　―　**所見**　掘り方の規模と平面形から、元の竪穴住居跡は、一辺4.30mを少し超える方形の住居跡と考えられる。軸方向は、８号住居と近いので、古墳時代前期の住居の可能性が考えられる。



第17図　９号住居跡

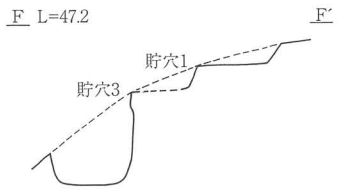
10号住居跡　（第18・19図）

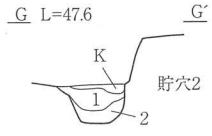
位置　調査区の中央部南寄りC1c4～d4、C2c1～d1グリッドにある。　**規模と平面形**　8.48×8.63mの方形、東側床面を１号溝によって壊されている。　**主軸方向**　N－59°－W　**壁**　壁高は23cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　南西壁際～南東壁南寄りの幅40cmの範囲以外全体に硬化している。　**ピット**　２箇所。主柱穴は西側の２本が残存している。　**炉**　３か所ある。炉１は規模が長径101cm、短径64cmと大きく、炉２は炉１に近い位置にあり径23cmと小さい。炉３はP1とP2の間にあり、長径65cm、短径21cmある。　**貯蔵穴**　３か所ある。貯蔵穴１と貯蔵穴３は東隅にあり、貯蔵穴２は北西壁の中央壁際にある。　**覆土**　覆土は３層で、下層堆積の２層はローム主体で、壁際堆積土の３層には炭化材片や焼土が含まれている。　**遺物**　覆土から小型の鉢、坩、高坏、壺、甕、粗製器台、舟形土製品が出土している。小型鉢は１の粗製と２の精製品が、４はミニチュア土器の甕、６は中実脚の高坏裾部、10の脚台部は、台付甕脚部にしては大型であり、11号住居出土の粗製器台に似ており粗製器台の脚台部としたい。住居跡北側壁近くの床面上から、大きさ上径26cm、下径33cm、高さ13cmの平面円形のにぶい褐色粘土塊が出土している。　**所見**　貯蔵穴が３か所、炉が３か所あり、貯蔵穴１と３は南東隅にあり切り合い関係がある。炉１と３は、大型住居跡に見られる、複数炉の配置と考えれば、火処を別にするまとまりが同時に最低２単位あったと考えられる。貯蔵穴２の近くの床上に残された粘土塊は、粘土を入れた円形の桶状の入れ物の形を反映しているのかもしれない。出土遺物から、古墳時代前期の住居跡と考えられる。



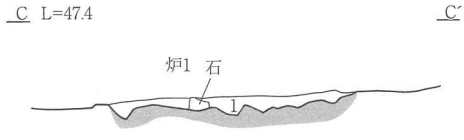
10号住居跡
1 黒褐色　暗褐色土ベース、黒褐色土ブロック多量、やや締り有り
2 褐色　　ローム主体、明褐色土中ブロック少量、締り有り
3 褐色　　ローム主体、明褐色土中ブロック中量、焼土粒極少量、やや締り有り
4 褐色　　ローム主体、締り有り

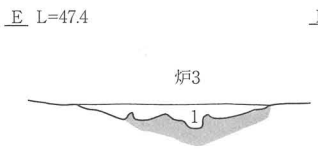
0　4m



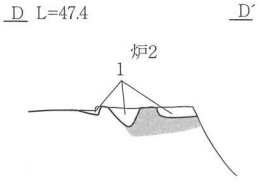


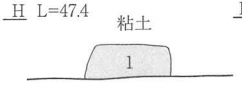
10号住居跡貯蔵穴２
1 暗褐色　焼土小中ブロック少量、やや軟らかい
2 褐色　　焼土小中ブロック多量、やや軟らかい





10号住居跡炉
1 暗赤褐色　焼土小中ブロック、炭化物粒、軟らかい

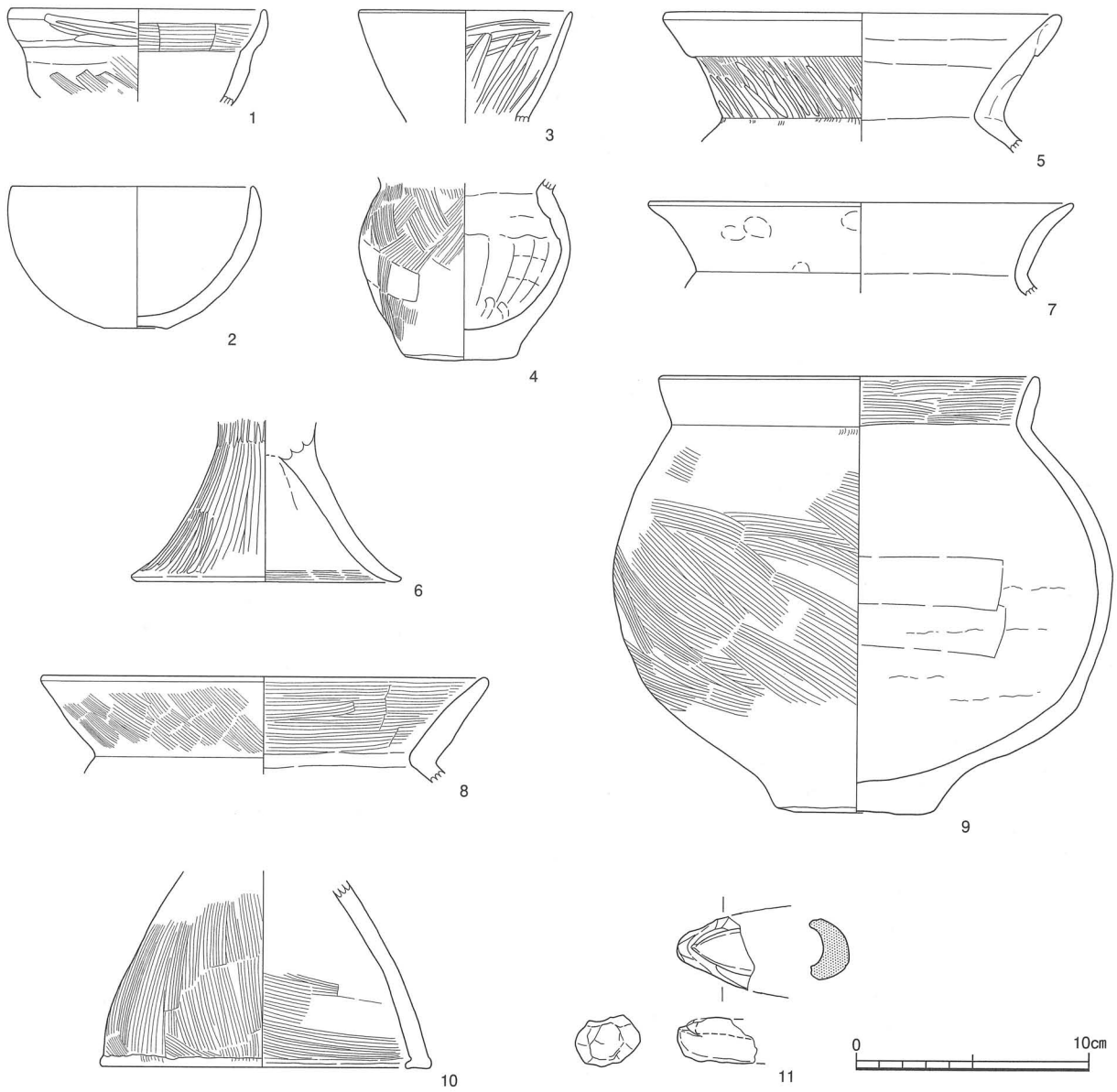




10号住居跡粘土ブロック
1 にぶい褐色　長石微粒を多量含む
　　にぶい褐色粘土ブロック

0　1m

第18図　10号住居跡（１）



第19図　10号住居跡（２）

表９　10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 鉢	(10.8) － －	口縁上半部ヨコナデ、下半部ナデ、内面ハケメ。 体部外面斜方向のハケメ。	長石粒・礫、石英、海綿骨針微量	良好	にぶい褐色	
2	土師器 鉢	(10.3) 6.1 2.8	小さな凹面の平底で、体部は半球形。内外面とも斜方向のミガキ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
3	土師器 小型坩	(9.0) － －	口縁部片。内外面赤彩、外面摩耗、内面ミガキ。	長石、石英	普通	にぶい赤褐色	
4	土師器 小型甕	－ － 4.8	口縁部欠損。胴部外面ハケメ、底部は無調性で籾状圧痕、内面ヘラナデ。	長石、石英、海綿骨針	良好	橙色	
5	土師器 壺	(17.2) － －	複合口縁壺の口縁部片。頸部外面斜方向のハケメ後斜方向のミガキがまばらに入る。内面横方向のヘラナデ。	石英、海綿骨針	良好	にぶい橙色	

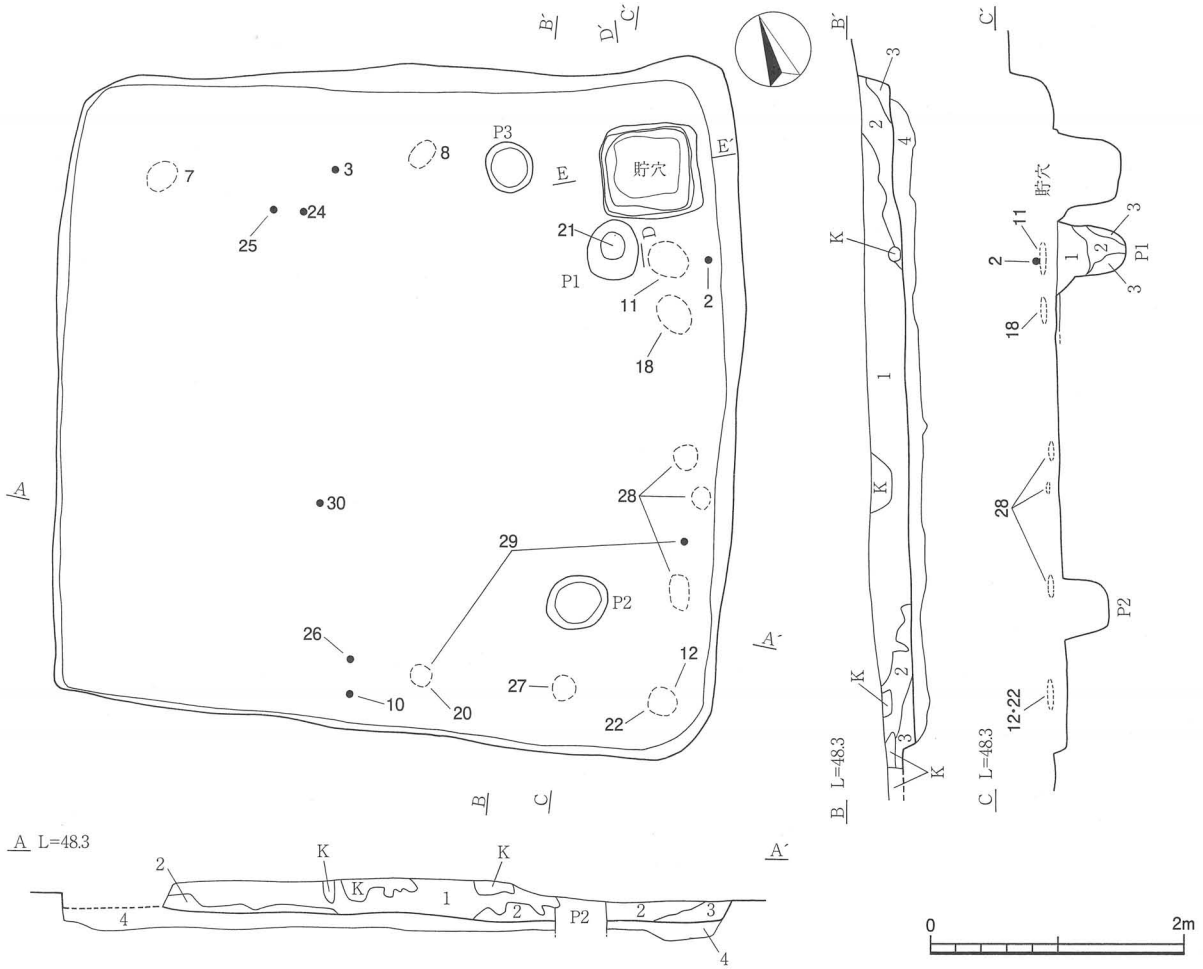
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
6	土師器 高坏	－ － (11.4)	脚部片。やや小振りな「ハ」の字状に開く脚部で、外面は縦方向のミガキ、内面はハケメ。	長石、石英	普通	黒色、にぶい橙色	
7	土師器 甕	(18.2) － －	外反して立ち上がる口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ、一部指頭痕。	長石、石英	良好	黒色	
8	土師器 甕	(19.2) － －	口縁部は直線的に外傾し、やや長めに立ち上がる。口縁部外面斜方向のハケメ、内面横方向のハケメ。	長石、石英	良好	にぶい橙色	
9	土師器 甕	(16.0) 19.0 6.8	口縁部は直線的に短く立ち上がる。胴部は拉げた球胴形で、底部が別作りのため接合部で傾斜角度と調整が変わる。底部は、底面が不明瞭な輪台状。胴部外面は斜方向のハケメ、下位はナデ、胴部内面ヘラナデ。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい橙色	
10	土製品 粗製器台	－ － (14.3)	粗製の器台脚部片。外面縦方向のハケメ、内面下半部横方向のハケメ、上半部ナデ。	長石・石英	普通	にぶい褐色	
11	土製品 舟形土製品	幅[2.8]長[3.3]厚[2.2]、重11.38g、舳先部分の破片。		長石・石英粒	良好	にぶい褐色	

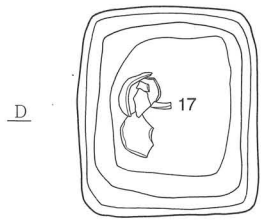
11号住居跡　（第20・21図）

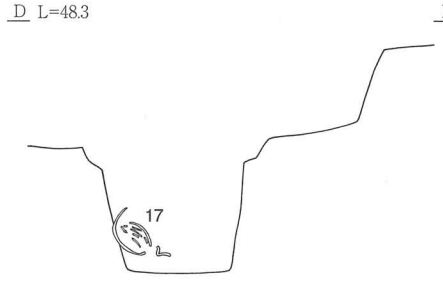
位置　調査区の南西部C1c3～d3グリッドにある。　**規模と平面形**　5.42×5.43の方形。　**主軸方向**　N－70°－W　**壁**　壁高は約24cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　全体に弱く硬化している。　**ピット**　1箇所。Ｐ１は柱穴状で、図にあるＰ２とＰ３は住居を壊す新しいピット。　**炉**　―　**覆土**　覆土は３層で、壁際２・３層は暗褐色土、上層の１層は黒褐色土層である。　**遺物**　覆土２層から古墳時代前期の土師器と粗製器台が、１層からは須恵器甕が口縁から底部にかけて破片で出土している。古墳時代前期の土器は、２のように小さな平底を持つ小形壺がある。外面全体にミガキを掛けた壺は、11のように下膨れのもの、12のような有段口縁のもの、13や16のように底部の突出するものがある。甕は24の甕のように口唇部付近で屈曲するもの、22,の甕のように口唇部を小さく折り返し端部にキザミを入れるものがある。　**所見**　出土遺物の特徴や粗製器台の出土から古墳時代前期の中葉頃の住居跡と考えられる。１層出土の須恵器甕は、擬格子状の叩き、内面に当て具痕、肩部～頸部のカキメ等から古墳時代後期６～７世紀前半代のものかと思われる。

表10　11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 鉢	－ － (4.8)	平底で、口縁部は外反して開く。体部～口縁部外面ミガキ、内面ナデ。	石英	良好	黒褐色	
2	土師器 鉢	－ － 2.4	底部は小さな凹面でナデ。体部赤彩、横方向のミガキ。	長石、石英	良好	橙色	
3	土師器 小型鉢	－ － 2.8	底部は小さな平底。胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。器壁薄い。	石英、海綿骨針微量	良好	にぶい橙色	
4	土師器 小型鉢	10.3 7.0 3.1	粗製の小形鉢で、底部は胴部との境が不明瞭な平底。胴部ハケメ。口縁部内面横方向のハケメ、口唇部ヨコナデ、内面ナデ。	長石、石英	良好	にぶい橙色	
5	土師器 鉢	(14.6) 6.0 2.3	底部は小さな凹面で、底部を除き内外面赤彩・ミガキ。	石英、海綿骨針	普通	赤褐色	





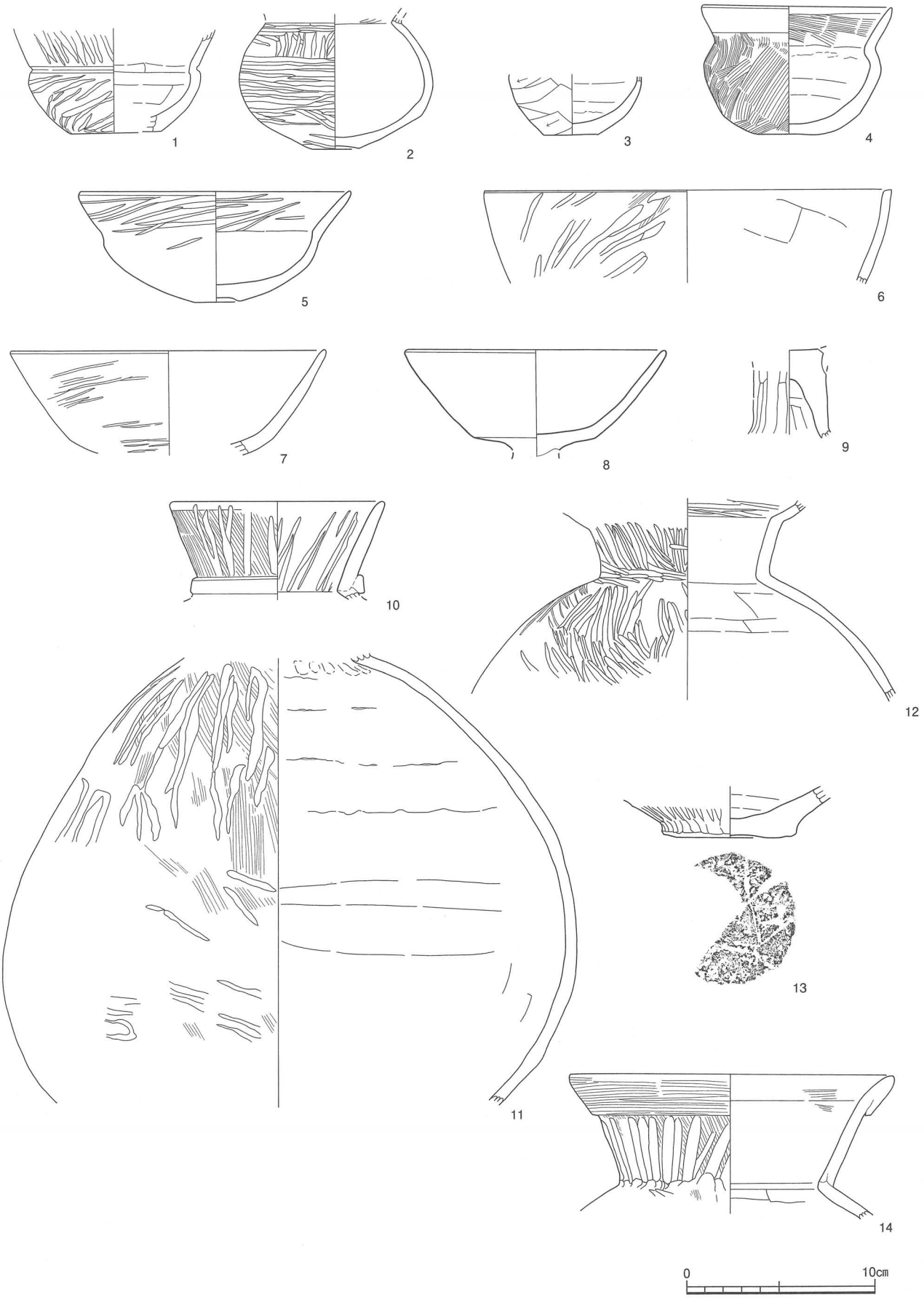


11号住居跡
1 黒褐色　ローム粒子極少量、下層に暗褐色土小中ブロック多量、やや締り有り
2 暗褐色　暗褐色土小中ブロック主体、締り有り
3 暗褐色　暗褐色土主体、ローム粒子少量、軟らかい
4 褐色　　ローム主体、締り有り、掘り方覆土

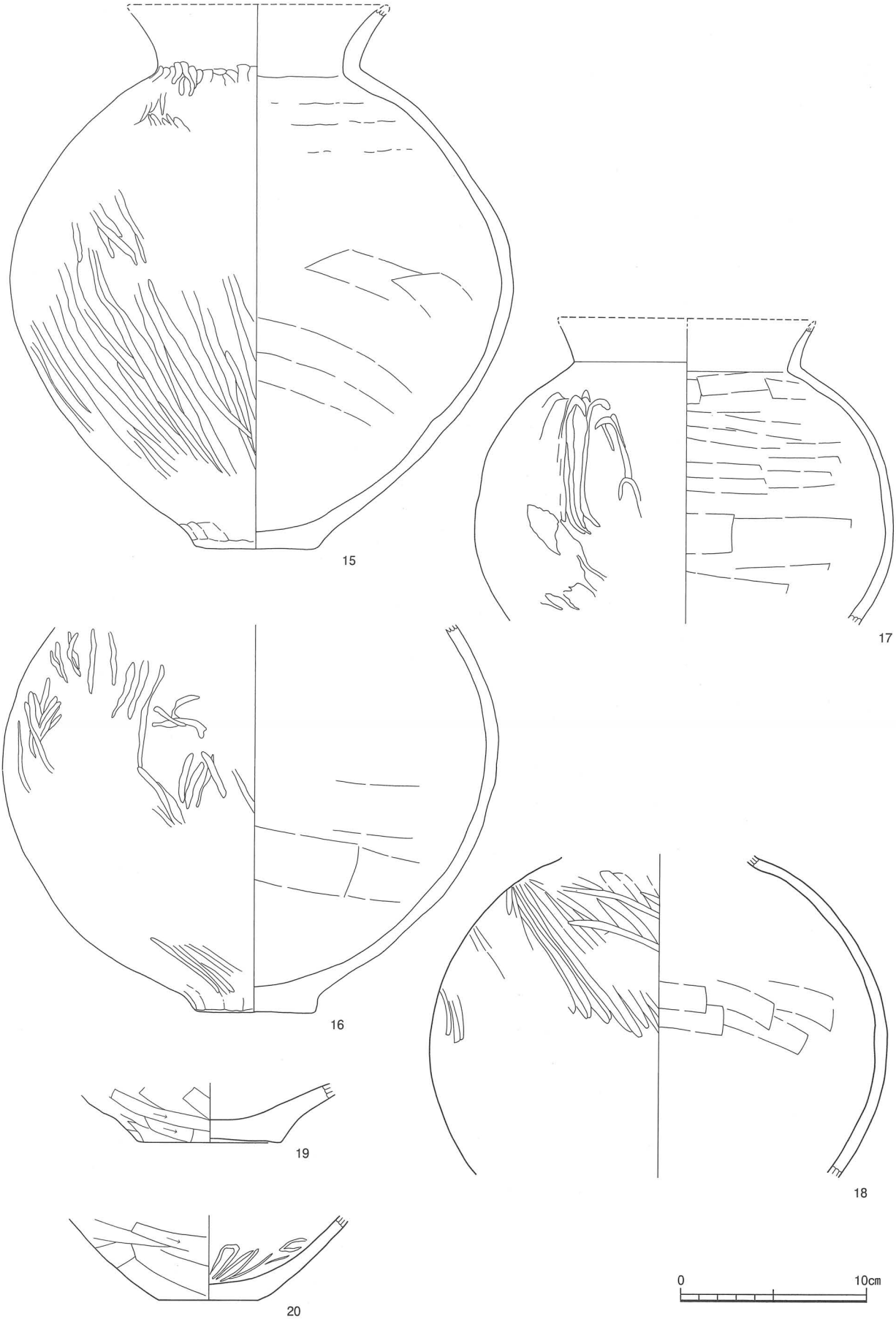
11号住居跡　P 1
1 暗褐色　ローム粒子中～多量、炭化物粒少量、やや軟らかい
2 暗褐色　ローム粒子中量、軟らかい
3 暗褐色　ローム粒子多量、やや軟らかい

11号住居跡　貯蔵穴
1 暗褐色　ローム粒子少量、暗褐色土小中ブロック少量、やや軟らかい
2 黒褐色　ローム粒子少量、暗褐色土小中ブロック少量、やや軟らかい
3 黒褐色　暗褐色土主体、ローム粒子少量、軟らかい

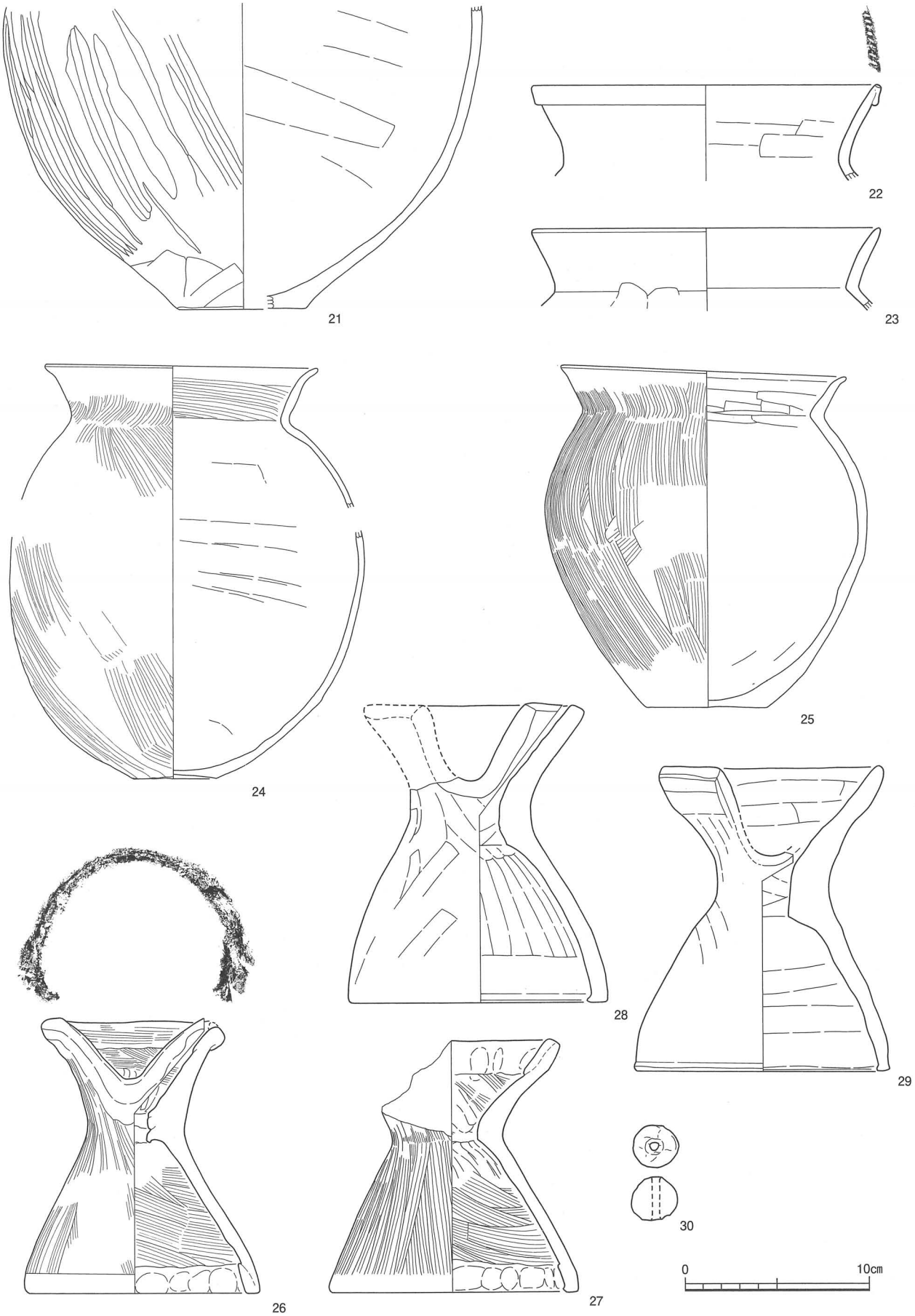
第20図　11号住居跡（1）



第21図　11号住居跡出土遺物（2）



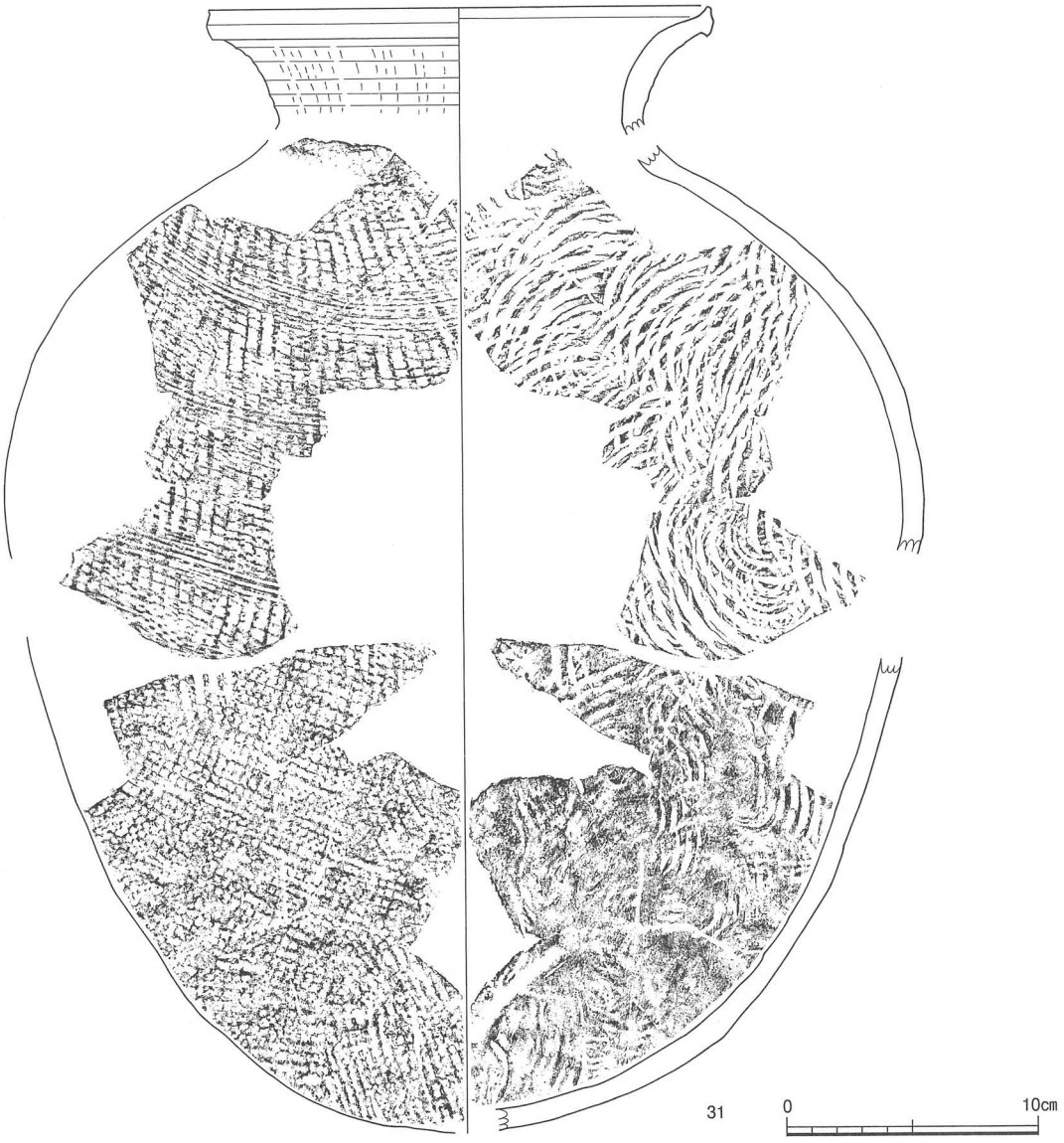
第22図　11号住居跡出土遺物（３）



第23図　11号住居跡出土遺物（４）

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
6	土師器 甕	(22.0) － －	口縁部片。口縁端部を面取りする。口縁部外面ミガキ、内面ヘラナデ。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色	
7	土師器 鉢	(17.0) － －	底部欠損。体部内外面赤彩・ミガキ。	石英、チャート	普通	赤褐色	
8	土師器 高坏	(14.0) － －	坏部内外面赤彩。	石英、チャート	良好	赤褐色	
9	土師器 高坏	－ － －	脚部片。短い柱状脚で下半部が中空。	長石、石英	良好	にぶい橙色	
10	土師器 壺	11.6 － －	口縁部片。直口縁で、頸部に粘土紐を巻きつける。口縁部外面ハケメ後一部ミガキ。内面ナデ後ミガキ。	長石・石英	良好	黒褐色	
11	土師器 壺	－ － －	胴部片。外面ハケメ後ミガキ。内面ヘラナデ。	長石、石英、海綿骨針	普通	にぶい橙色	
12	土師器 壺	－ － －	有段口縁壺の肩～頸部片。胴部外面ミガキ、内面ヘラナデ後オサエ。頸部内外面ミガキ。	長石、石英	やや不良	暗赤褐色	
13	土師器 壺	－ － 7.1	底部片。底部木葉痕。胴部内外面ミガキ。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色	
14	土師器 壺	17.2 － －	口縁部片。複合口縁で、頸部外面縦方向のミガキ、口縁部内面横方向のミガキ。	長石、石英	良好	にぶい赤褐色	
15	土師器 壺	(14.0) (29.5) 6.6	口縁上半部欠損。単口縁で、胴部中位に最大径を持ち、底部は小さく突出する。胴部外面斜方向のミガキ。底部外面木葉痕。	長石、石英、微砂粒	普通	にぶい橙色	
16	土師器 壺	－ － 6.4	胴上半部欠損。底部弱い木葉痕。胴部外面ミガキ、内面ヘラナデ。	長石、石英	やや不良	暗褐色	
17	土師器 壺	(13.8) － －	口唇部欠損。胴部外面ミガキ、内面ヘラナデ。	長石礫、石英	良好	にぶい橙色	
18	土師器 壺	－ － －	胴上半部外面ミガキ、内面ヘラナデ。	チャート、石英、海綿骨針	良好	灰褐色	
19	土師器 壺	－ － 7.6	底部片。底部外面ナデ。胴部外面ヘラケズリ後ミガキ。	長石粒・礫、石英、海綿骨針微量	普通	暗褐色	
20	土師器 甕	－ － 5.1	平底の底部片。底部と胴部下端ヘラケズリ、内面雑なミガキ。	長石、石英	良好	にぶい褐色	
21	土師器 壺	－ － (6.8)	胴部外面ミガキ、胴部下端ヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	長石礫、石英	良好	にぶい褐色	
22	土師器 甕	(18.0) － －	短い複合口縁で、口唇端部にキザミを入れる。口縁部内外面ナデ。	石英、チャート	良好	にぶい褐色	
23	土師器 甕	(18.9) － －	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラナデ。	長石、石英	良好	黒褐色	
24	土師器 甕	14.8 (22.5) 4.8	口縁～肩部破片。口縁部は端部で外反する。口縁部外面上半部横方向に連続する指頭痕、下半部ハケメ。胴部外面ハケメ、内面ナデ。器壁が薄い。	長石、金雲母	良好	黒色	
25	土師器 甕	15.4 18.3 5.4	平底で、胴下半部の膨らみが弱い。口縁部は外傾し、端部で屈曲して開く。胴部外面縦方向のハケメ、内面ヘラナデ。口縁部外面ヨコナデ、内面ミガキ。底部外面弱いハケメ。	チャート、石英	良好	にぶい褐色	
26	土師器 粗製器台	9.8 14.6 12.5	脚部一部欠損。外面ハケメ、内面ハケメ。受け部・脚部とも端部を内面に折り返し複合化している。	長石、石英	普通	にぶい黄橙色	
27	土師器 粗製器台	－ 13.6 13.5	受け部1/2欠損。外面ハケメ、内面ハケメ。受け部・脚部とも端部を複合化させ、器壁を厚くしている。	長石、石英、海綿骨針微量	普通	にぶい褐色	

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
28	土師器 粗製器台	(12.1) 16.3 14.1	受け部と脚の一部欠損。内外面ナデ。受け部は口縁部に一か所基部近くまで及ぶ逆三角形の切り込みが入る。	長石、石英、海綿骨針微量	良好	にぶい褐色	
29	土師器 粗製器台	(12.7) 16.5 (13.8)	受け部と脚の一部欠損。内外面ナデ。受け部は口縁部に一か所基部近くまで及ぶ逆三角形の切り込みが入る。	長石、石英、海綿骨針微量	普通	にぶい褐色	
30	土製品 土玉	－ － －	径2.4、厚さ2.2、孔径0.42、重10.82g	微砂粒	良好	にぶい褐色	
31	須恵器 甕	(20.0) － －	胴部外面擬格子叩き、内面同心円文当て具痕。	長石	やや不良	灰白色	覆土上層



第24図　11号住居跡出土遺物（５）

第2節　古　墳

調査区の東側区域で２基（１・２号墳）、西側区域で３基（３-５号墳）、合わせて５基の古墳が見つかっている。１号墳は埴輪をもち、円墳ならば周濠の1/3を残す６世紀の古墳。２号墳は埴輪をもつ円墳で６世紀の古墳、３・４号墳は円墳で４世紀、５号墳は円墳で時期不明である。１号墳のみ墳丘の一部が残っていたが、いずれも墳丘と周濠の上部は削平されており、埋葬施設は確認できなかった。

１号墳（第25・26図）

周濠の北西部と墳丘の中央部分が残る推定円墳である。調査区をはずれる東南部は削平をうけるなどして墳丘や周濠の痕跡は確認できないため、前方部が調査区外へ延びる前方後円墳である可能性も否定できない。現存する墳丘および周濠には埋葬施設が見つかっておらず、関連する遺物や構築物の伝聞もない。

位置　調査区の東端に位置する（B2c4グリッド）。

規模　墳丘直径は推定19m。周濠の外縁は同じく25m。

墳丘　現存する墳丘は直径約8.5m、もっとも深い周濠底からの比高差は3.4mである。旧地表面（第25図19層）上に薄い層を重ねて墳丘を築いている。周濠内で数個の礫が見つかったものの、表土や周辺からはでておらず、葺石があった可能性は低い。

周濠　幅は現状で3-3.5m、深さは0.7-1.1m、西側では長さ13mにわたって深さ1.5mと深くなっているが、その中に特別な施設は見つからなかった。

埋葬施設　調査区内では、見つからなかったが、墳丘南側に残っている可能性がある。

出土遺物　土師器と埴輪（円筒、朝顔形円筒、形象）が出土している。

（１）土師器

土師器は１点見つかっている（表11、第31・32図１）。

ほぼ完形の坏で、西側周濠のもっとも深い部分の底面上に横転した状態で出土した（第29・30図H-H'）。口縁部が外側に開く坏で、口縁は外傾して立ち上がり、上半途中を過ぎたところで屈曲して外側に開き、口唇端部でわずかにつまみあげている。赤く焼きあがる鉄分の多い胎土を使用し、橙色を呈す。内面は全体にミガキをかけており、口縁部では横方向に、体部上半部は往復する放射状に、体部内底面でやや乱れている。外面は口縁部がヨコナデで、体部はヘラケズリである。

出土状況は単独で、周囲に共伴する遺物は認められなかった。周濠内から出土した遺物のほとんどは、周濠にいくらかの土が堆積してから周濠に落ち込んだ状況を示しており、周濠底面から出土した遺物はこの土師器だけである。したがって、坏１は古墳築造時あるいは、埋葬時の祭祀と関連する可能性が高い。

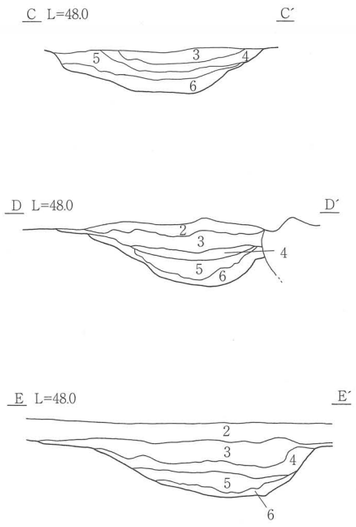
（２）埴輪

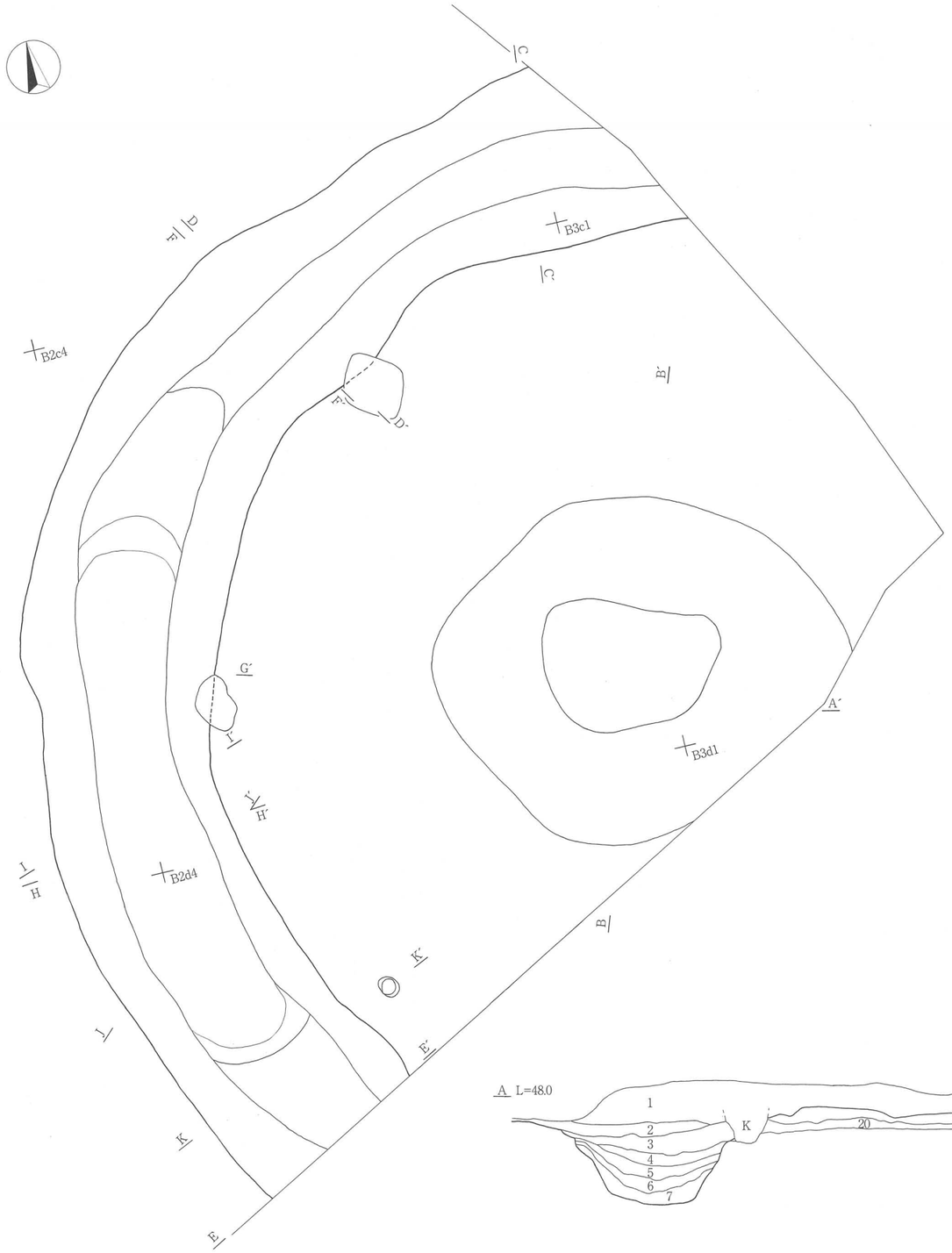
円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、形象埴輪が出土している。

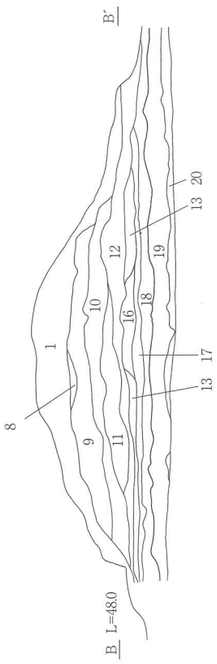
埴輪のほとんどは周濠内からの出土で、出土分布は北側の周濠に少なく、西側に多く見つかっている。特に、調査区の南端に近い場所では密度が高い。

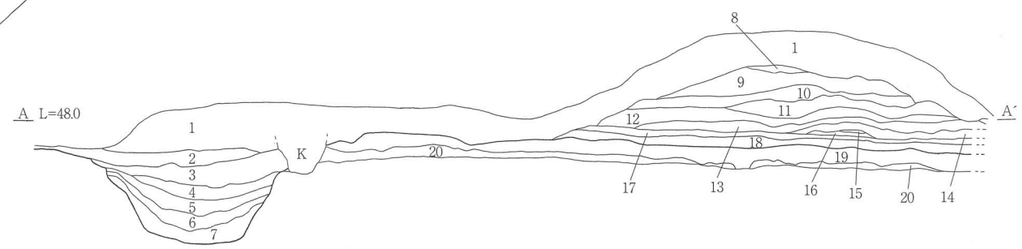
形象埴輪には、人物・馬形埴輪があるが、いずれも破片で全体が復元できるものはなかった。人物埴輪３点（51-53）が西側周濠南部墳丘寄り（第29・30図K-K'）から、馬形埴輪１点（66）が西側周濠中ほど（第27･28図G-G'）から出土している（第53図）。

埴輪はいずれも、周濠が一定量自然堆積した面に墳丘寄りに倒れこみ、さらにその上に土が堆積した状







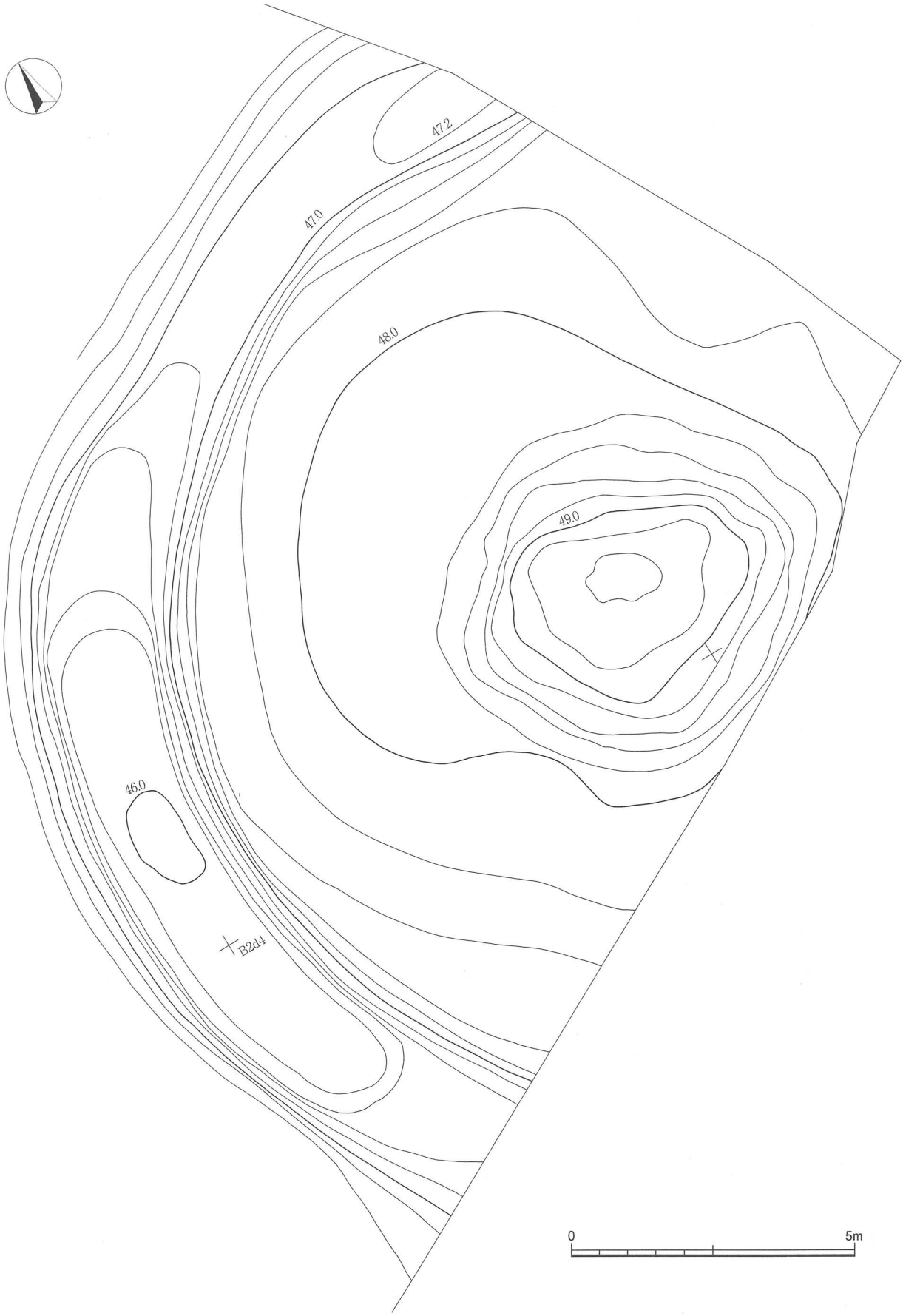


1号墳

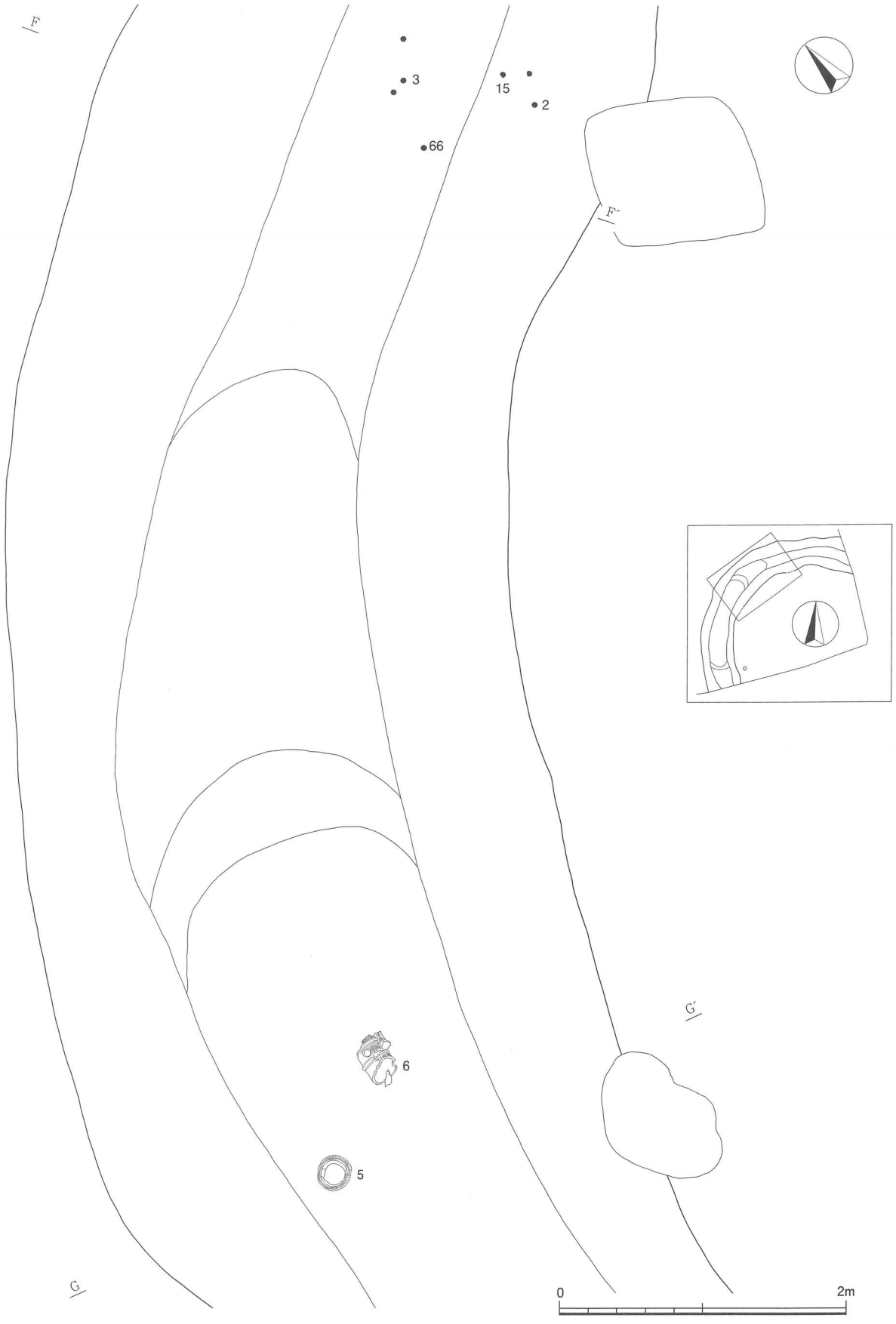
1 暗褐色土　褐色土主体、均質で軟らかい、表土
2 暗褐色土　褐色土主体の表土、均質で軟らかい
3 黒色土　黒色自然堆積層、ローム粒子少量、やや軟らかい
4 褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量、しまりあり
5 黒褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック少量、軟らかい
6 褐色土　ローム小・中ブロック含む、わずかに軟らかい
7 褐色土　ローム主体、ＫＰ粒子含む、しまりあり、粘性あり
8 暗褐色土　黒色土含む
9 褐色土　ローム粒子多量、小・中ロームブロック多量、黒色土粒子多量、ややしまりあり
10 褐色土　ローム粒子、小・中ロームブロック含む、黒色土小ブロック少量、ややしまりあり
11 褐色土　ローム、黒色土、褐色土中ブロック多量、しまりあり
12 褐色土　小・中ロームブロック多量、黒色土中ブロック少量、しまりあり
13 暗褐色土　暗褐色土主体、ローム粒子・小ブロック少量、しまりあり
14 褐色土　ロームブロック多量、しまりあり
15 黒色土　黒色土主体、固くしまりあり
16 褐色土　ロームブロック多量、しまりあり
17 黒色土　黒色土主体、固くしまりあり
18 褐色土　ローム主体、しまりあり
19 黒褐色土　ロームブロック少量、旧表土層
20 褐色土　地山ロームへの漸移層、しまりあり

0　5m

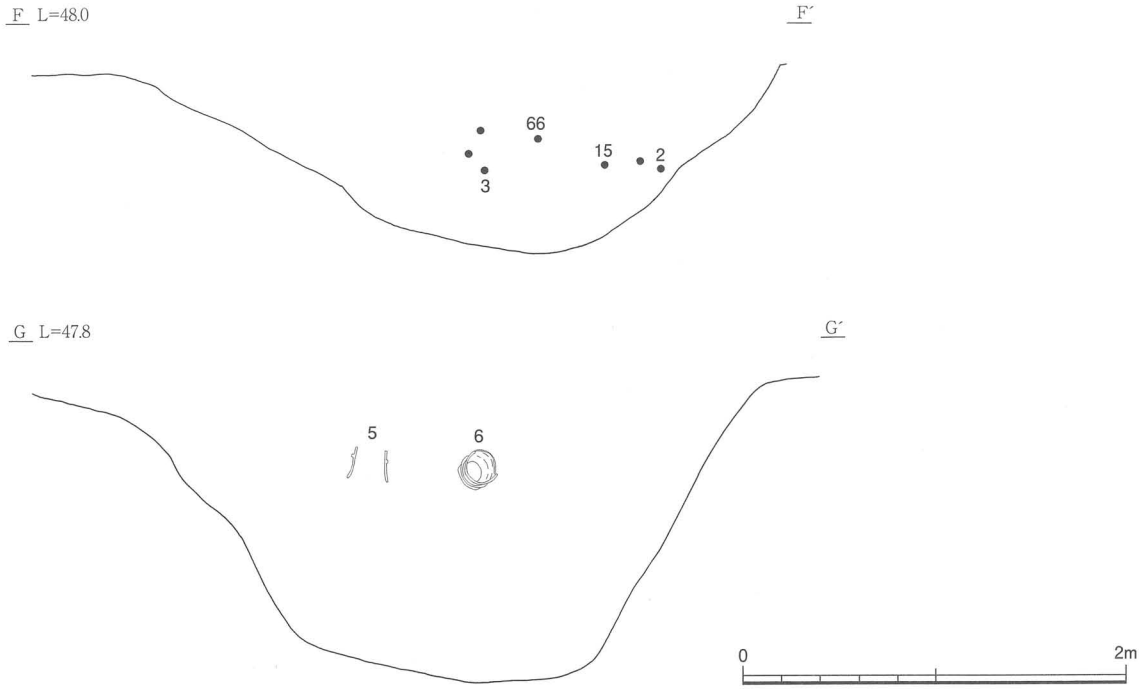
第25図　１号墳　墳丘実測図（１）



第26図　１号墳　墳丘実測図（２）



第27図　1号墳　遺物出土状況図（1）



第28図　１号墳　遺物出土状況図（２）

態で出土している（第27－30図）ことから、墳丘に立ち並んでいた埴輪は周濠が埋まりはじめてしばらくして、墳丘から周濠に滑り落ち、その後さらに埋没したと考えられる。

西側の周濠内で30cmほどの大きさの礫が数個見つかったが、円筒埴輪とは垂直位置が大きく異なっていて、これらの礫と埴輪、あるいは墳丘との直接的な関係は見出しがたい（第29・30図J-J´）。

円筒埴輪（表12-14、第32－37図2-43）　全体を復元できる円筒埴輪はすべて３条４段で、大きさや器形、色調、調整の特徴などは破片を含めて似かよっている。器形は底部からゆるやかに外傾し、口縁部に至ってややひらく。

復元できた６個体（10･11･14･21･28･29）の器高は47.6-51.7cm、口径は24.3-(27.3) cm、底径は14.4-(17.2) cmであり、やや細身である。

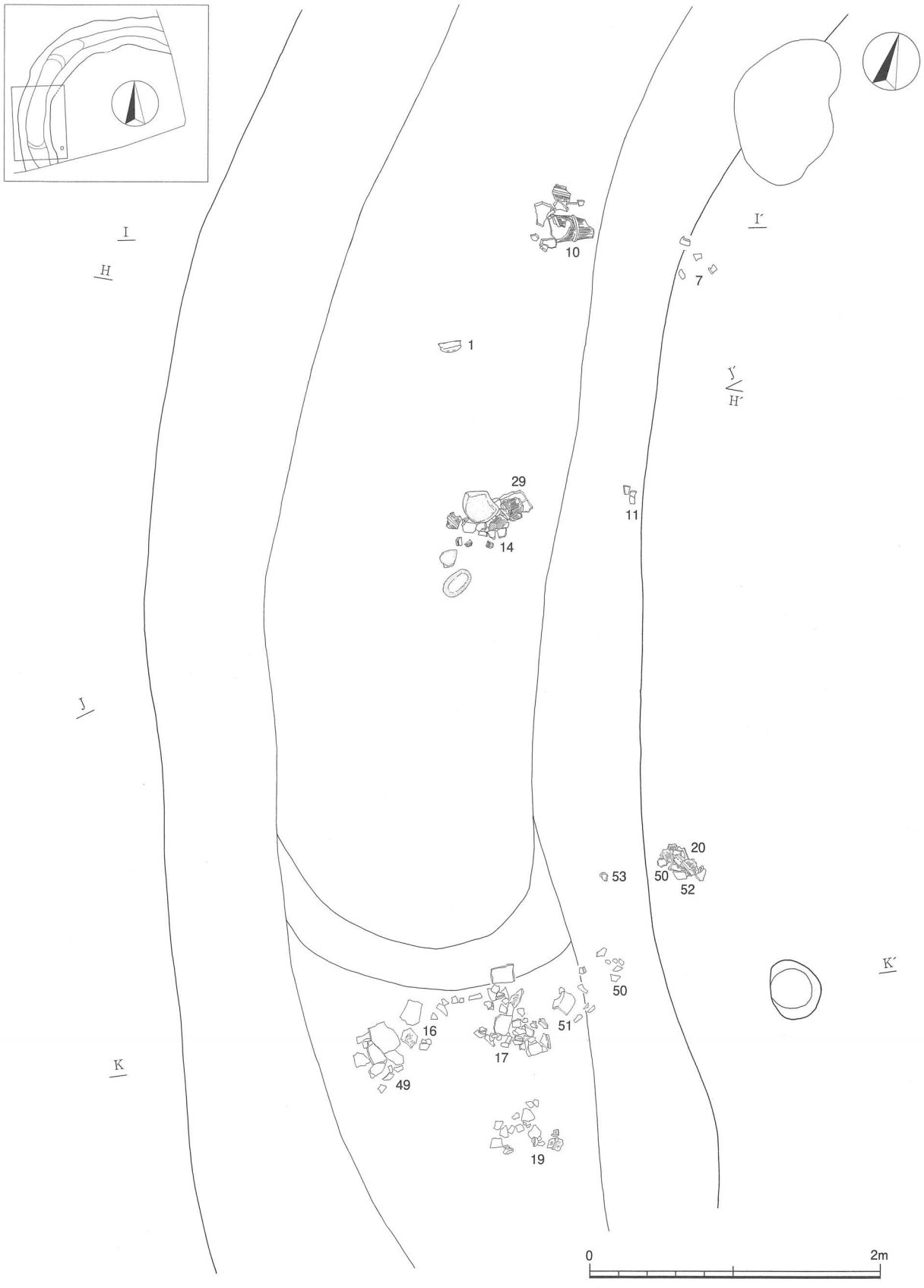
口縁部を第１段とし、下へ第２段、第３段と数えるとすると、円形の透孔は第２・３段にあけられており、それぞれの位置は直交している。突帯の断面形は低いM字形や台形である。段間（突帯間）が近似値を示す個体が多く、突帯設定をしていると考えられる。円筒下端に横方向のナデ、あるいは擦痕がみられるのは、突帯設定のための工具の当たりであろう。

外面はタテハケであるが、ハケメがはっきりしている。口縁部をナデる際、ヨコナデの下端が沈線状に残るものがある（20、21）。内面はハケ後ナデるが、口縁部周辺にはハケメの残るものがある。

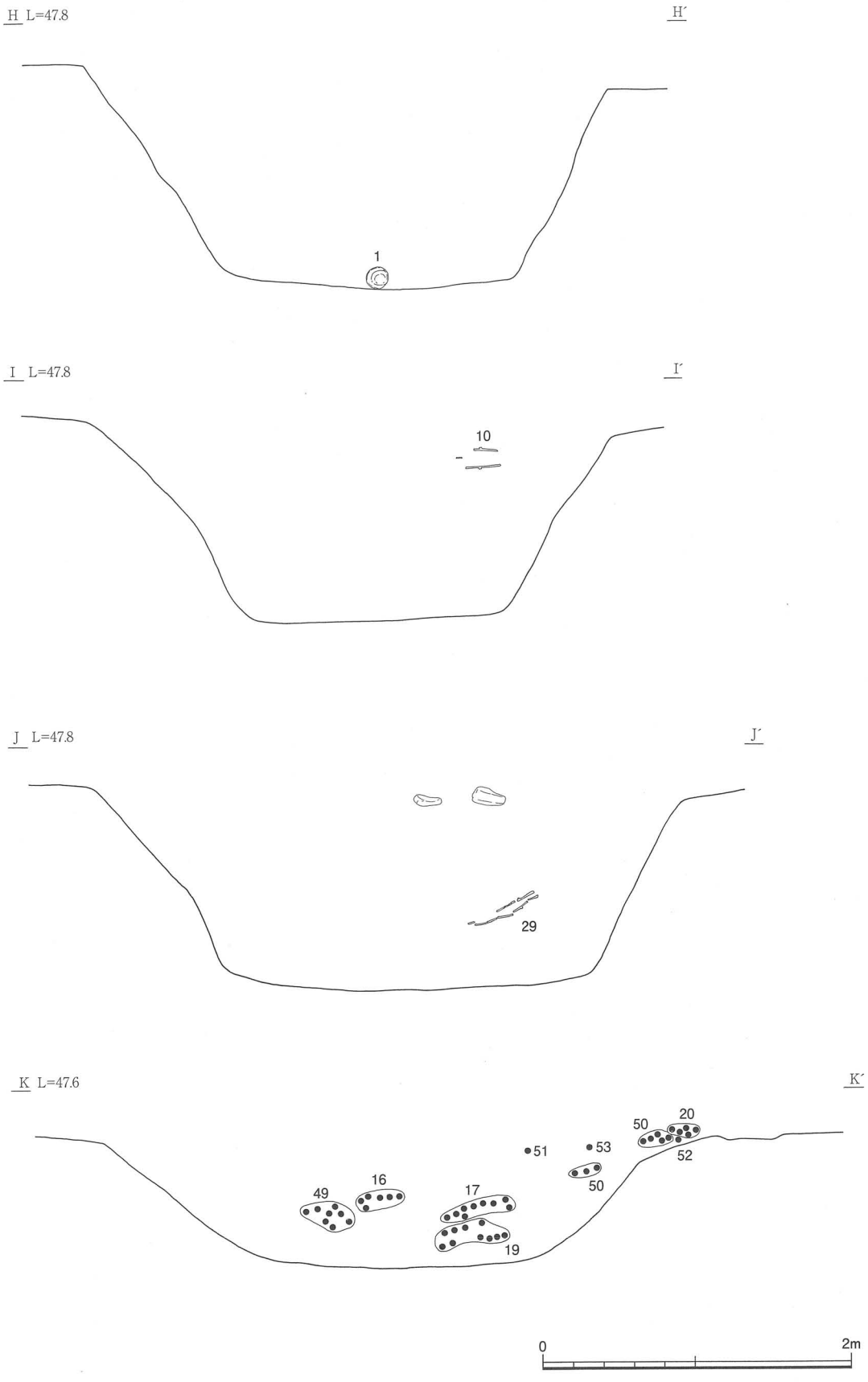
朝顔形円筒埴輪（表14、第37・38図44-50）　全体が復元できるものはなかった。５段目まで復元できたのは１点（49）で透孔は第３段と第５段にあけられており、６段以上あることは確実である。

第３段は肩がやや張っていて、短くひらく第２段を挟んで第１段は直線的に外傾し、口縁ではさらにひらく。透孔は円筒埴輪に比べて直径が小さい。口径のわかるもので40.0cmである。

外面はタテハケで、第３段のみタテハケ後横方向にナデを施す。内面はハケ後ナデる。



第29図　1号墳　遺物出土状況図（3）



第30図　1号墳　遺物出土状況図（4）

形象埴輪（表15、第39・40図51-73）　人物と馬形が出土している。51-54は人物埴輪。51は人物の腰部で、前正面から左寄りに大刀を佩いている。脇に透孔があく。基部の直径は推定16.0cmである。52は人物の上着裾部分であるが、51とは別個体である。53は顔の下半部である。成形後、口を切り込むが、内面をナデる際にその一部が塞がってしまっている。鼻孔の表現はない。54は左手で、親指は欠損している。手の甲に刺突がある。53と54は胎土や色調、ナデの仕上げなどが似ていて、同一個体の可能性があるが、51・52とは別個体と考えられる。

55-73は馬形埴輪。55は馬形の鼻づらに近い部分と考えられる。56は馬形の鞍の一部。57,58は何かから剥落したもので、馬形の馬具の飾り金具を表したものであろう。

59は種類不明である。何かから剥落している。

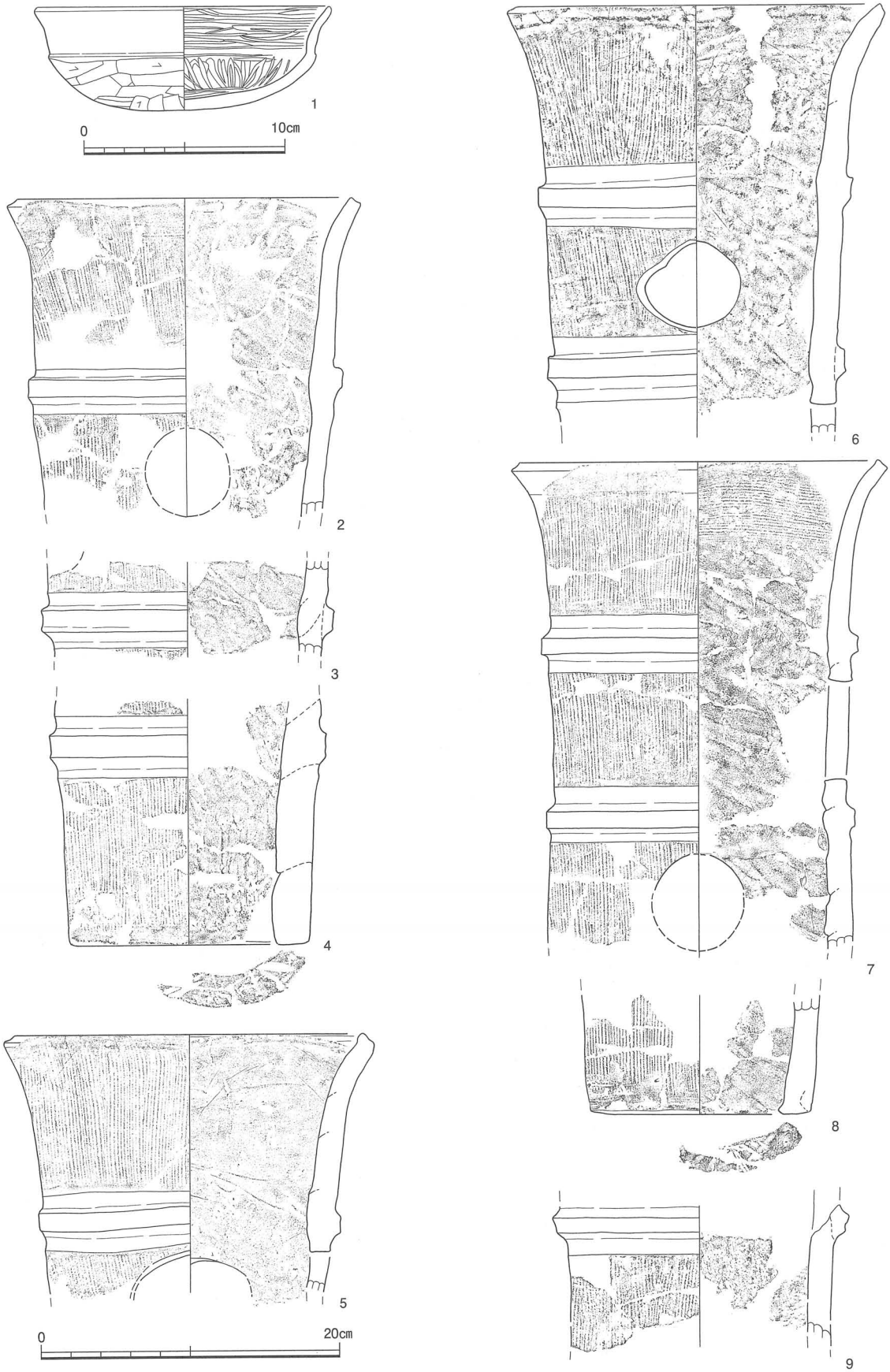
第31図　1号墳出土土器写真

表11　1号墳出土遺物観察表（1）

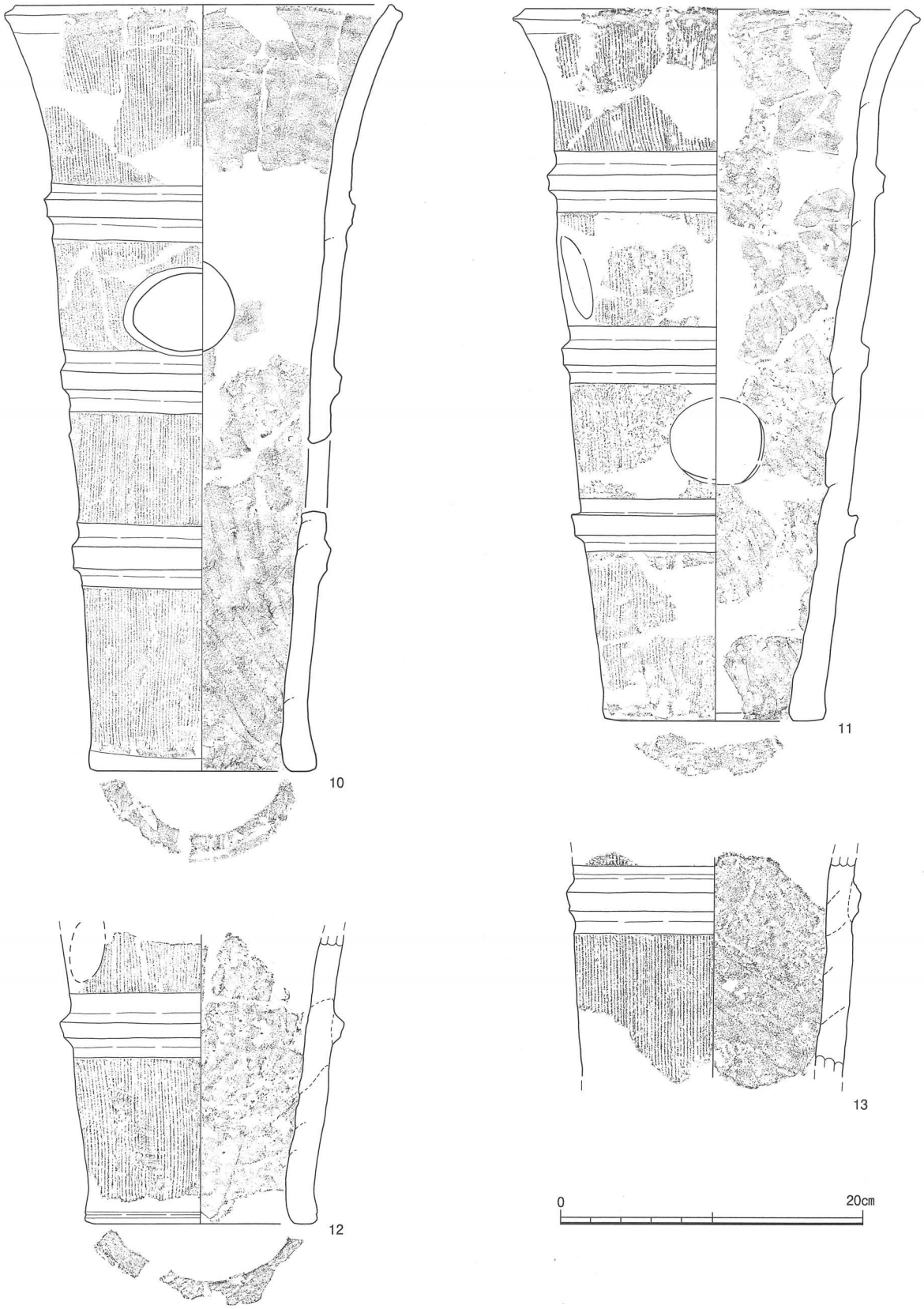
番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	14.6 5.2 －	口縁部は外傾し、口唇部に向かって弱く屈曲して開く。体部内面のミガキは中心部がやや乱れ、周辺部は放射状。口縁部は横方向のミガキ。体部外面ヘラケズリ。	金雲母	良好	橙色	

表12　1号墳出土遺物観察表（2）

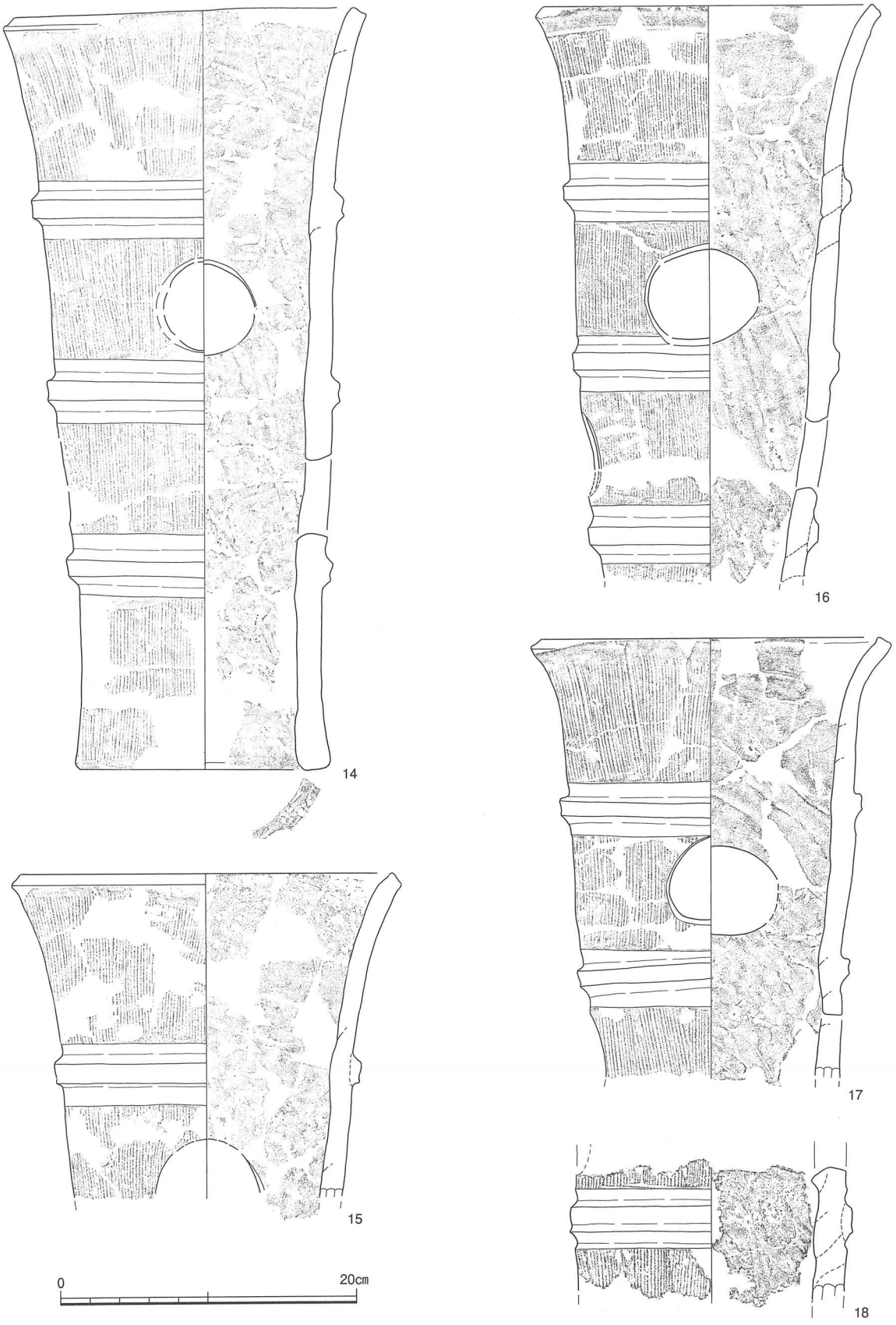
番号	埴輪種類	計測値(cm)	段間値(cm)	透孔 形状	透孔 数値(縦×横cm)	突帯断面	焼成	胎土・色調	成形・整形の特徴	備考	注記
2	円筒	口径　23.4 底径　－ 残高　21.4	1段　13.0			台形	良好	石英・角閃石・長石 浅黄橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ 内面　ナデ		No7，周2区， 墳丘表土
3	円筒	口径　－ 底径　－ 残高　6.4				台形	良好	石英・角閃石・白色粒・赤褐色粒 にぶい橙	外面　タテハケ 内面　斜のナデ		No6，周
4	円筒	口径　－ 底径　(16.0) 残高　16.5	最下段　13.5			台形	良好	石英・角閃石・チャート・赤褐色粒 内：淡橙　外：橙	外面　タテハケ，下端 横の擦痕 内面　縦のナデ		No20，周1区
5	円筒	口径　24.6 底径　－ 残高　17.3	1段　12.5			台形	良好	緻密　石英・角閃石・チャート・硬質乳白色料 にぶい橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ 内面　斜のナデ		No22
6	円筒	口径　25.0 底径　－ 残高　27.9	1段　12.3 2段　11.6	円	2段6.3×6.8	台形	良好	石英・角閃石・チャート・礫（5mm，15mm） 橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ 内面　斜のナデ		No23
7	円筒	口径　(25.0) 底径　－ 残高　32.9	1段　12.5 2段　11.5	円	2段6.8	台形～低M字	良好	石英・角閃石・チャート・赤褐色粒 橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ 内面　横のハケ後口縁ヨコナデ，斜のナデ		No8，周3区
8	円筒	口径　－ 底径　(13.1) 残高　7.8					良好	石英・角閃石・チャート にぶい橙	外面　タテハケ，下端　横の擦痕 内面　斜のナデ，		No9，周3区， 表土
9	円筒	口径　－ 底径　－ 残高　9.5				低M字	良好	石英・角閃石・白色粒 内：浅黄橙　外：橙	外面　タテハケ 内面　縦のナデ		No9
10	円筒	口径　(26.4) 底径　14.9 器高　51.2	1段　14.0 2段　11.4 3段　11.6 4段　14.2	円	2段6.4×7.2 3段5.5×6.4	台形	良好	石英・角閃石・長石・赤褐色粒 橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ，下端 横の擦痕 内面　斜のナデ	第1段外面黒色物付着	No8・9， 周2・3区， 墳丘2区表土



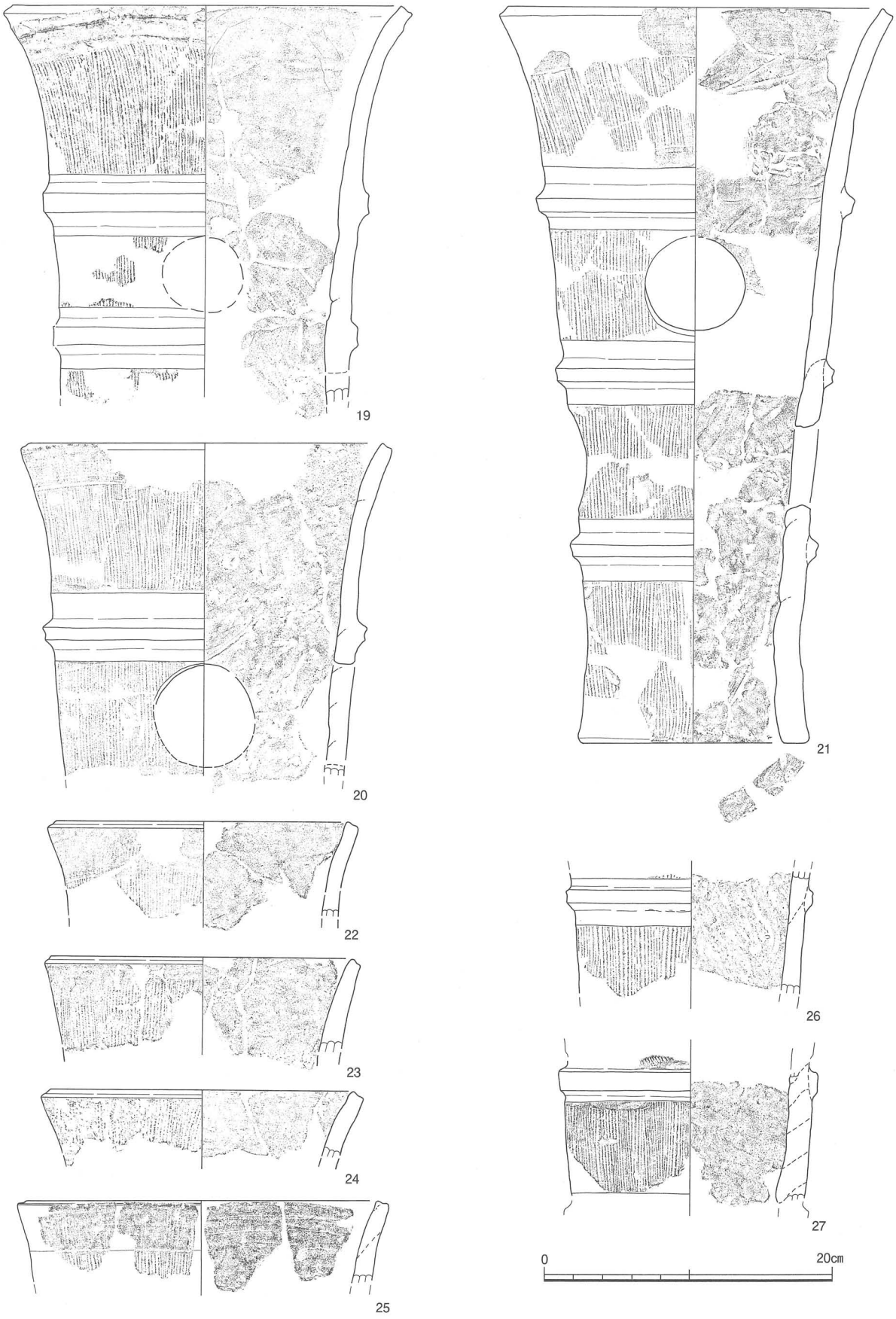
第32図　１号墳出土遺物実測図（１）



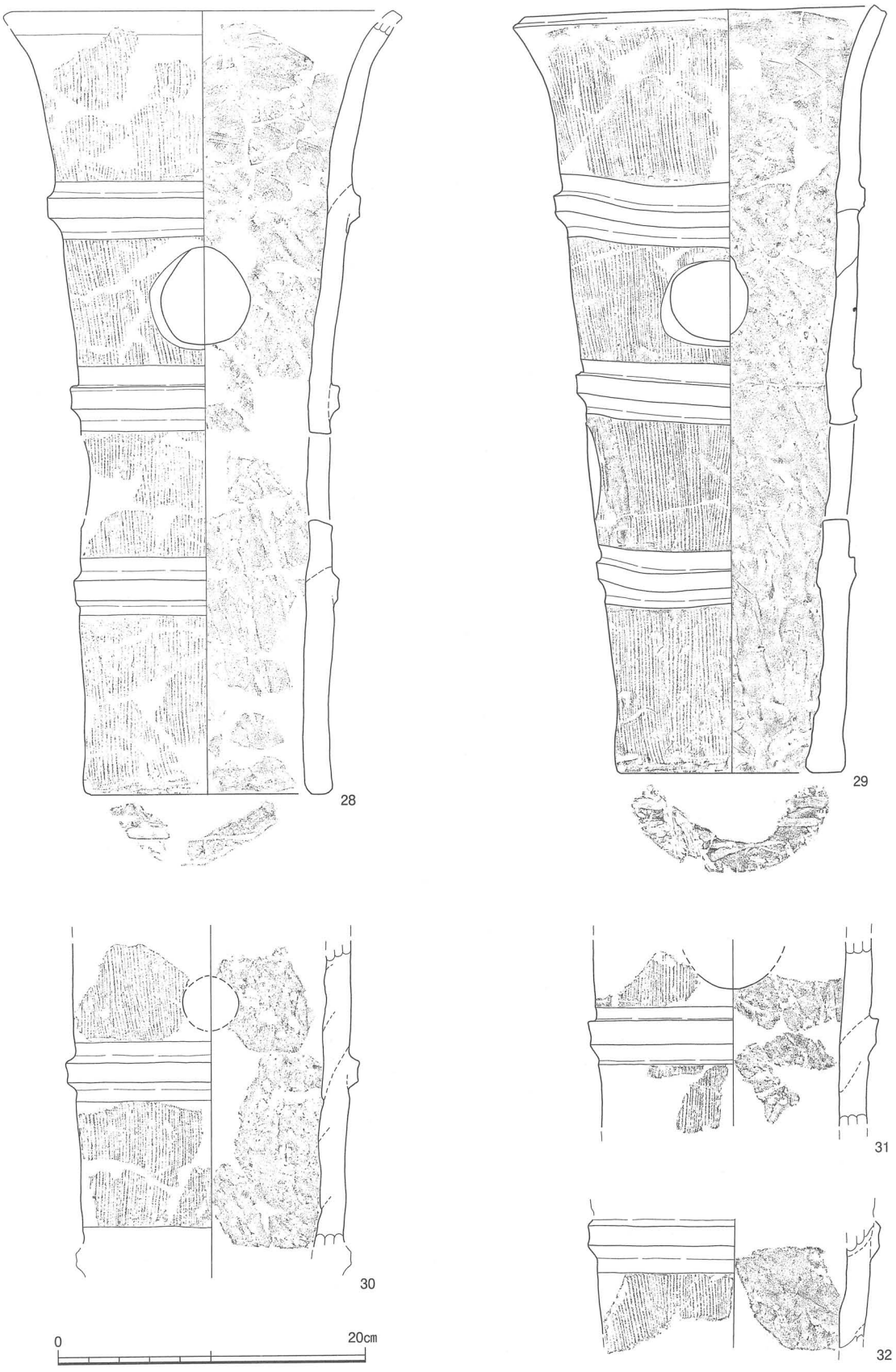
第33図　１号墳出土遺物実測図（２）



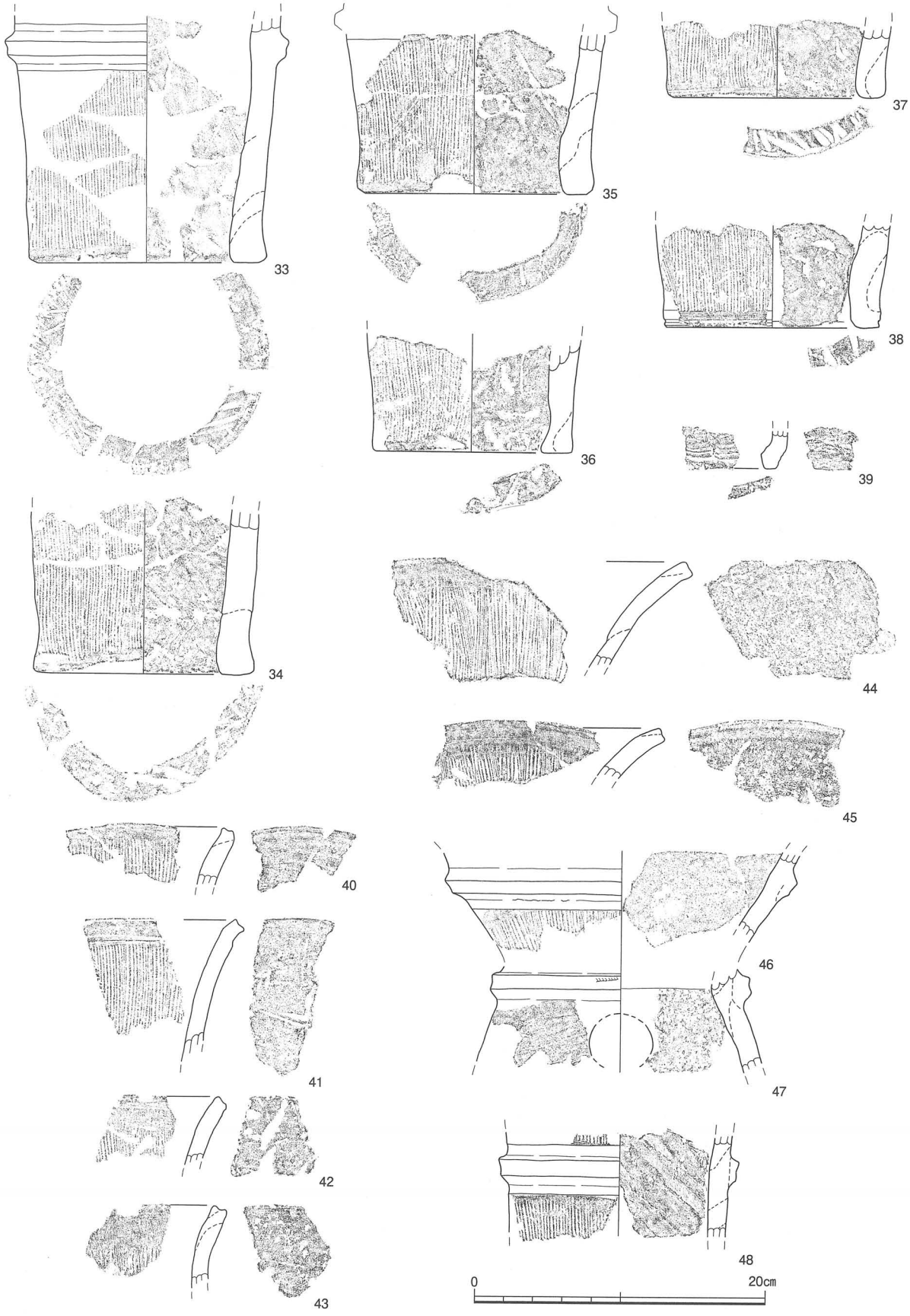
第34図　１号墳出土遺物実測図（３）



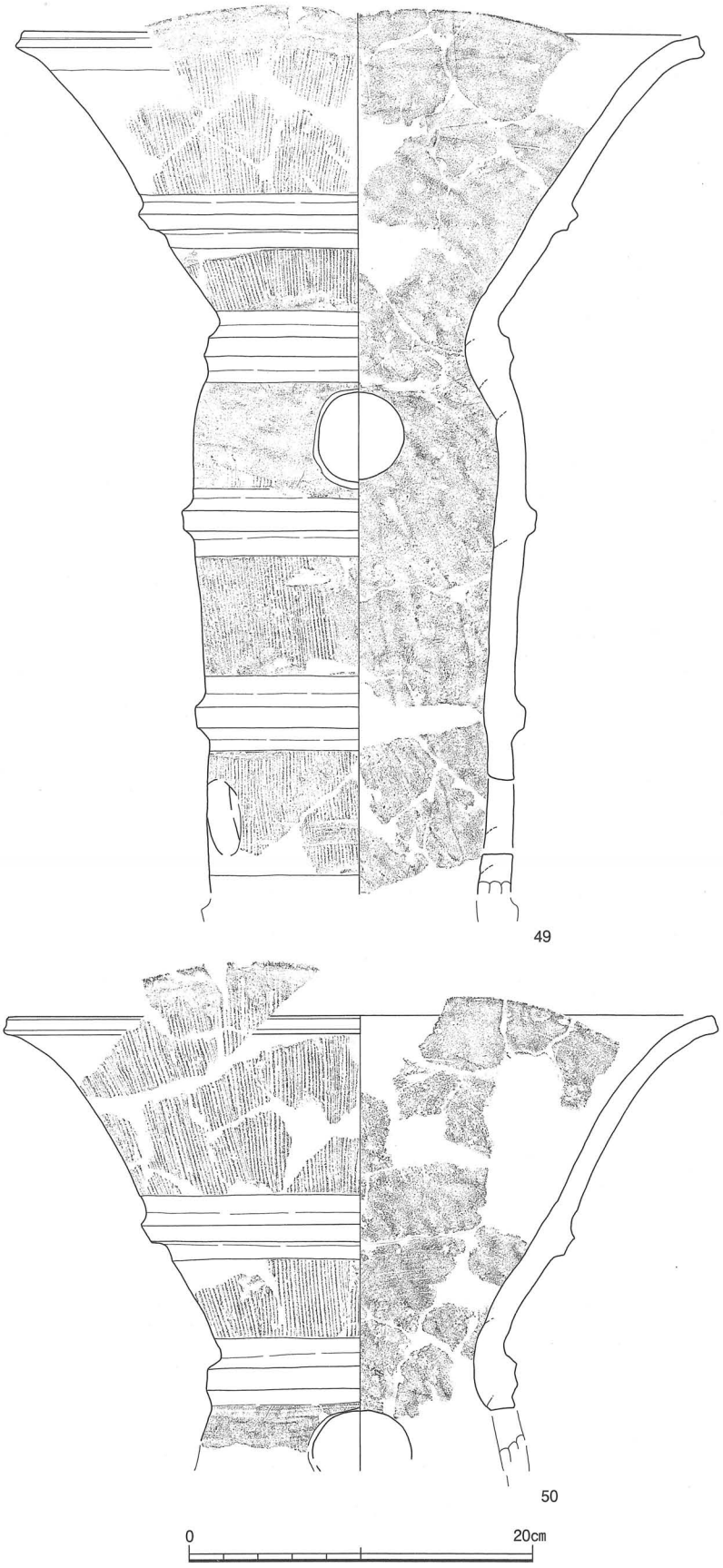
第35図　１号墳出土遺物実測図（４）



第36図　１号墳出土遺物実測図（５）



第37図　1号墳出土遺物実測図（6）



第38図　１号墳出土遺物実測図（７）

表13　1号墳出土遺物観察表（3）

番号	埴輪種類	計測値(cm)	段間値(cm)	透孔 形状	透孔 数値(縦×横cm)	突帯断面	焼成	胎土・色調	成形・整形の特徴	備考	注記
11	円筒	口径 (26.9) 底径 (14.4) 器高 47.6	1段 11.6 2段 11.6 3段 11.4 4段 13.0	円	3段 5.5	台形～低M字	良好	石英・角閃石・チャート・赤褐色粒・礫岩礫(8㎜) 橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ，下端 横の擦痕 内面　斜のナデ	外面剥離著しい	No13・25，周1・3区，表土
12	円筒	口径 － 底径 (15.5) 残高 19.4	最下段 13.0			台形	良好	石英・角閃石・チャート・礫(7㎜，2～5㎜) 内：浅黄橙　外：にぶい黄橙	外面　タテハケ，下端 横の擦痕 内面　斜のナデ		No10・21，周3区
13	円筒	口径 － 底径 － 残高 14.8				台形～低M字	良好	石英・白色粒・長石　やや砂粒多 にぶい橙	外面　タテハケ 内面　斜のナデ		No14
14	円筒	口径 24.3 底径 (17.2) 器高 51.7	1段 13.6 2段 12.6 3段 12.1 4段 13.4	円	3段 5.7	台形～低M字	良好	石英・角閃石・長石・チャート・赤褐色粒 橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ，下端 横の擦痕 内面　ナデ		No28・30・33・35・36・38，周3区，表土
15	円筒	口径 (26.2) 底径 － 残高 22.0	1段 13.5			台形	良好	石英・角閃石・チャート・赤褐色粒・チャート礫(11×5㎜) 橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ 内面　斜・縦のナデ		No25，周2・3・西3区，墳丘表土
16	円筒	口径 23.0 底径 － 残高 39.1	1段 12.7 2段 11.5 3段 11.7	円	2段 6.5×8.0 3段 6.7	台形	良好	石英・角閃石・赤褐色粒 橙	外面　タテハケ 内面　ナデ		No27・28・30・31，周3区，表土
17	円筒	口径 24.0 底径 － 残高 29.9	1段 11.5 2段 11.5	円	2段 6.0×6.6	台形～低M字	良好	石英・角閃石・赤褐色粒 橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ 内面　斜のナデ		No27・28・38，周3区
18	円筒	口径 － 底径 － 残高 9.9				台形	良好	石英・赤褐色粒 内：にぶい黄橙　外：浅黄橙	外面　タテハケ 内面　縦のナデ		周1区
19	円筒	口径 28.4 底径 － 残高 27.5	1段 13.9 2段 9.4			台形	良好	石英・角閃石・チャート・赤褐色粒・礫(7㎜) 淡橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ 内面　ナデ		No27，周3区
20	円筒	口径 (25.8) 底径 － 残高 23.4	1段 13.4	円	2段 7.7	低M字	良好	石英・角閃石・チャート・赤褐色粒 橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ，口縁端から3cmに沈線 内面　ナデ	剥離著しい	No40，周3・西区，墳丘表土
21	円筒	口径 (27.3) 底径 (16.0) 器高 51.7	1段 13.9 2段 12.0 3段 12.3 4段 13.5	円	3段 6.3×6.9	台形～低M字	良好	緻密　石英・角閃石・長石・赤褐色粒 橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ，ヨコナデの下端が沈線状に残る 内面　ナデ		No28・33，周1・3区
22	円筒	口径 (21.5) 底径 － 残高 7.3					良好	石英・角閃石・長石・赤褐色粒 明赤褐	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ		周2区，墳丘表土
23	円筒	口径 (22.0) 底径 － 残高 6.7					良好	石英・角閃石・赤褐色粒 灰白	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ		周1・2区
24	円筒	口径 (22.5) 底径 － 残高 4.7					良好	石英・角閃石・赤褐色粒・白色粒 橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ	内外面とも剥離著しい	No31，周3区
25	円筒	口径 (26.0) 底径 － 残高 5.7					良好	石英・角閃石・赤褐色粒 にぶい橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ		周3区
26	円筒	口径 － 底径 － 残高 7.9				低M字	良好	石英・角閃石・赤褐色粒・白色粒 明赤褐	外面　タテハケ 内面　斜のナデ		周表土
27	円筒	口径 － 底径 － 残高 10.0				低M字	良好	石英・角閃石・赤褐色粒・白色粒 にぶい橙	外面　タテハケ，突帯貼付後にも一部タテハケか 内面　斜のナデ		周表土
28	円筒	口径 － 底径 (16.0) 器高 50.6	2段 12.5 3段 12.6 4段 13.4	円	2段 6.7×7.0	台形	良好	石英・角閃石・チャート・赤褐色粒 にぶい橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ，下端 横の擦痕 内面　上半 斜のナデ，下半 斜のナデ		周3区
29	円筒	口径 24.6 底径 14.4 器高 50.2	1段 12.6 2段 11.9 3段 12.3 4段 13.4	円	2段 5.8×6.1 3段 6.3×6.5	台形	良好	石英・角閃石・チャート・赤褐色粒・礫(1～2㎜) 橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ，下端 横の擦痕 内面　斜のナデ		No24
30	円筒	口径 － 底径 － 残高 20.1		円	2段 (3.5)	低M字	良好	石英・角閃石・長石・赤褐色粒・白色粒 橙	外面　タテハケ 内面　粗い縦のナデ	朝顔形基部の可能性あり	周3区
31	円筒	口径 － 底径 － 残高 12.8				台形	良好	石英・角閃石・赤褐色粒・白色粒 にぶい赤褐	外面　タテハケ 内面　斜のナデ		周西3区
32	円筒	口径 － 底径 － 残高 8.4				台形～低M字	良好	石英・角閃石・赤褐色粒・白色粒 にぶい橙	外面　タテハケ 内面　斜のナデ		周3区
33	円筒	口径 － 底径 16.2 残高 17.2	最下段 15.0			低M字	良好	緻密　石英・角閃石・チャート・赤褐色粒 橙	外面　タテハケ，下端 横の擦痕 内面　ナデ		周3区

表14　1号墳出土遺物観察表（4）

番号	埴輪種類	計測値(cm)	段間値(cm)	透孔 形状	透孔 数値(縦×横cm)	突帯断面	焼成	胎土・色調	成形・整形の特徴	備考	注記
34	円筒	口径 － 底径 (15.1) 残高 11.5					良好	石英・チャートにぶい黄橙	外面　タテハケ，下端 横の擦痕 内面　斜のナデ		No31， 周3区
35	円筒	口径 － 底径 (16.2) 残高 11.1					良好	石英・角閃石・チャート にぶい黄橙	外面　タテハケ，下端 横の擦痕， 補修 内面　斜のナデ		周2区
36	円筒	口径 － 底径 (14.0) 残高 8.2					良好	石英・角閃石・長石・赤褐色粒 橙	外面　タテハケ 内面　ナデ		周2区
37	円筒	口径 － 底径 (15.0) 残高 5.4					良好	石英・チャート・長石・赤褐色粒 橙	外面　タテハケ，下端 横の擦痕 内面　斜のナデ		墳丘表土
38	円筒	口径 － 底径 (15.0) 残高 7.1					良好	石英・チャート・長石・赤褐色粒 橙	外面　タテハケ，下端 横の擦痕 内面　斜のナデ		
39	円筒	口径 － 底径 － 残高 2.6					良好	石英・角閃石・赤褐色粒・白色粒 赤褐	外面　横の粗いハケ 内面　横のナデ		周西3区
40	円筒	口径 － 底径 － 残高 3.9					良好	石英・角閃石・赤褐色粒・白色粒 にぶい黄橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ		周2区， 墳丘表土
41	円筒	口径 － 底径 － 残高 9.7					良好	石英・角閃石・赤褐色粒 内：にぶい黄橙　外：にぶい橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ 内面　ナデ		周3区
42	円筒	口径 － 底径 － 残高 4.8					良好	石英・角閃石・白色粒 内：灰黄　外：にぶい橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ		周
43	円筒	口径 － 底径 － 残高 5.7					良好	角閃石・赤褐色粒・白色粒 内：橙　外：にぶい橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ		墳丘表土
44	朝顔形円筒	口径 － 底径 － 残高 7.3					良好	石英・角閃石・白色粒 にぶい橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ	内面剥離著しい	周3区
45	朝顔形円筒	口径 － 底径 － 残高 3.9					良好	石英・角閃石・赤褐色粒・白色粒 橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ		No12， 周3区
46	朝顔形円筒	口径 － 底径 － 残高 6.5				低M字	良好	石英・角閃石・赤褐色粒・白色粒橙	外面　タテハケ	2段目内面剥離	周2区
47	朝顔形円筒	口径 － 底径 － 残高 7.4				低M字	良好	石英・角閃石・赤褐色粒・白色粒 橙	外面　ナデ，突帯にハケ痕あり 内面　ナデ	3段目	周2区
48	朝顔形円筒	口径 － 底径 － 残高 7.0				台形～低M字	良好	石英・角閃石・白色粒 にぶい赤褐	外面　タテハケ 内面　斜ナデ	径が小さく朝顔形の可能性高い	周表土
49	朝顔形円筒	口径 40.0 底径 － 残高 50.3	1段 10.9 2段 7.3 3段 10.1 4段 11.5	円	3段 5.6×5.2 5段 4.2	台形	良好	石英・角閃石・チャート・赤褐色粒・礫(2～3㎜) 橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ， ヒビ補修のナデ数ヶ所あり． 3段 タテハケ後ヨコナデ 内面　第1・2段横のナデ，上半 斜のナデ，下半 縦のナデ		No27・28・29・30・37， 周3区
50	朝顔形円筒	口径 (41.5) 底径 － 残高 26.4	1段 13.3 2段 7.4 3段			台形～低M字	良好	石英・角閃石・チャート・赤褐色粒 橙	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ第3段タテハケ後横のナデ 内面　横・斜のナデ	内面剥離	No27・33・34・35・38， 周3・西区， 墳丘表土

60は緩く曲がる突帯が貼りついた破片で、馬形あるいは人物が想定できるが胎土の類似から馬形の可能性が高い。61・62は馬形の皮帯表現の一部。63は馬形につく鈴である。

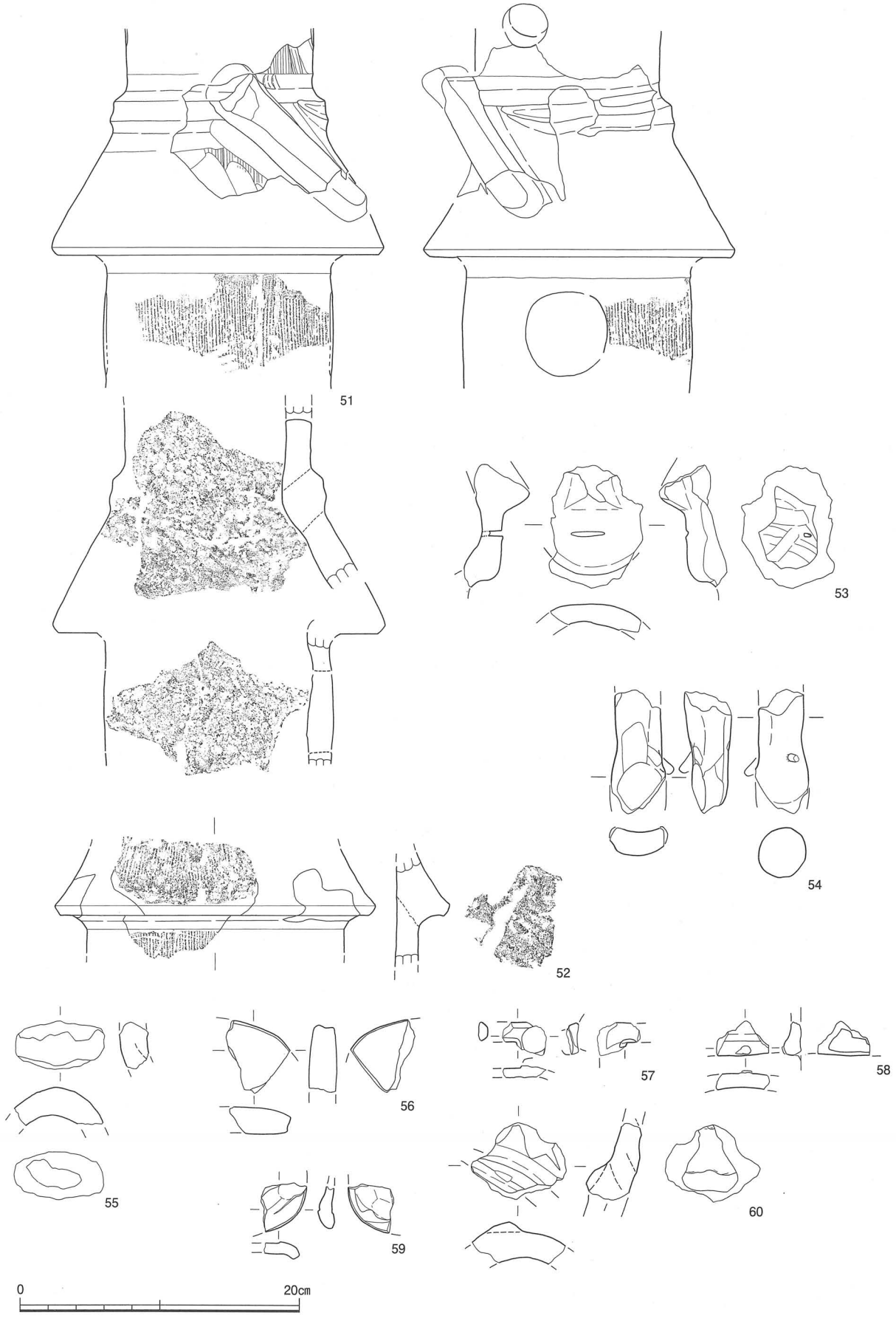
64は馬形の前股左脚側で、腹孔がある。65は同じ個体の後股で、両脚付け根で欠損している。66は別個体の前股で、右脚側である。64と同様腹孔がある。

67は帯が貼りついた胴の一部、68も帯の貼りつきが剥離している。69は貼りつく粘土板が伸びていくところで欠損しているもので、障泥の取りつき部分と考えられる。

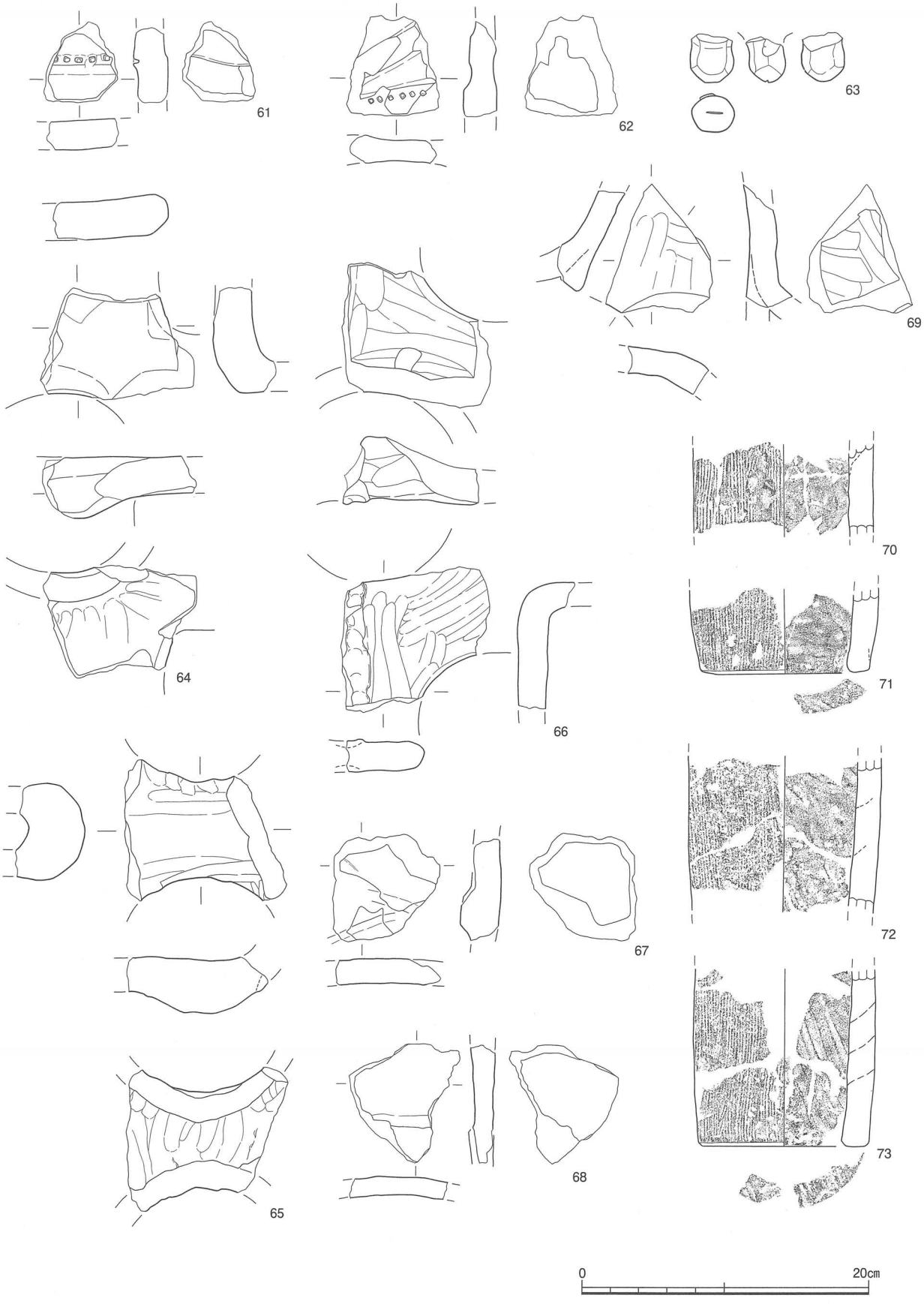
70－73は馬の脚でいずれも直径はおよそ13cmである。

(55－59)、(60－65、67、71－73)、(69・70) はそれぞれ同一個体。

68の胎土・焼成は後述する1号土坑の馬形埴輪（表21、第55図）に類似している。



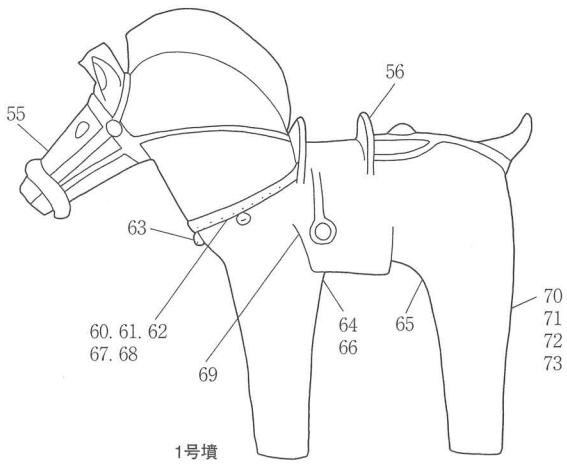
第39図　１号墳出土遺物実測図（８）



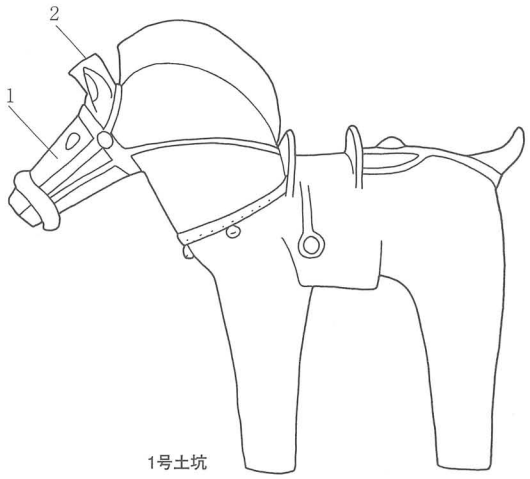
第40図　１号墳出土遺物実測図（９）

表15　1号墳出土遺物観察表（5）

番号	埴輪種類	計測値(cm)	焼成	胎土・色調	成形・整形の特徴	注記
51	人物	残長　13.0×15.0	良好	石英・チャート・赤褐色粒 橙～にぶい橙	人物腰部分．内面は風化による剥離が著しい．外面ハケ後一部ナデ，内面ナデ．基部外面タテハケ，内面斜のナデ．	No32， 西周3区
52	人物	最大径　(23.0) 基部径　(18.4)	良好	石英・角閃石・チャート 浅黄橙	人物上着裾部分．外面タテハケ．内面ナデ．	No41， 周3区
53	人物	残長　8.8×6.7	良好	良　石英・角閃石・長石・赤褐色粒 明赤褐	人物顔の下半部分．鼻孔表現はない．口はヘラで切りこむが，1/4だけ貫通している．鼻の両脇が赤くみえるので，頬は赤彩していた可能性がある．内面ナデ．	No19， 周3区
54	人物	残長　8.8×3.0	良好	緻密　石英・角閃石・長石 橙	左手．親指は欠損．粘土で中実に成形し，ナデて仕上げる．掌はややくぼむ．	墳丘表土
55	馬形	残長　3.5×6.3	良好	緻密　石英・角閃石・チャート・硬質白色粒 橙	馬の顔．鼻に近い部分．内外面ともナデ．	墳丘表土
56	馬形	残長　4.8×4.5	良好	緻密　石英・角閃石・赤褐色粒・硬質白色粒 橙	タテガミか鞍の一部．内外面ともナデ．上端面ナデ．	墳丘表土
57	馬形	残長　3.0×2.4	良好	緻密 明赤褐	飾金具か．粘土円板の装飾は欠落している．剥離面がある．部位不明．	表土
58	馬形	残長　2.4×3.8	良好	緻密　石英 橙	円形の飾りが欠落している．剥離面がある．部位不明．	周
59	馬形	残長　3.1×3.3	良好	緻密　石英 明赤褐	指で整形し，両面とも指ナデ．剥離面あり．部位不明．	3号フン
60	馬形	残長　5.5×6.9	良好	石英・角閃石・長石・赤褐色粒 にぶい赤褐	体部に粘土紐を貼りつける．部位不明．人物腰部の可能性もある．	周2・3区
61	馬形	残長　5.6×5.1	良好	やや密　石英・角閃石・赤褐色粒・硬質白色粒 橙	粘土帯貼付し，方形刺突を施す．内外面ともナデ．部位不明．	墳丘表土
62	馬形	残長　7.0×6.4	良好	やや緻密　石英・赤褐色粒・硬質白色粒 橙	全体をナデて仕上げる．方形刺突を施す帯と施さない帯とを貼りつける．部位不明．	フン北表土
63	馬形	残長　3.2×3.0	良好	緻密　石英・角閃石・赤褐色粒・硬質白色粒 橙	剥離面をもつ鈴．全体をナデてなめらかに仕上げている．	墳丘表土
64	馬形	残長　10.7×8.0	良好	石英・角閃石・長石・赤褐色粒 橙	前股（左脚側）腹側．腹孔がある．内外面ともナデ．	No2
65	馬形	残長　11.4×10.0	良好	やや密　石英・角閃石・長石・赤褐色粒 橙	後股部分．内外面ともナデ．	墳1
66	馬形	残長　10.4×10.2	良好	緻密　石英・角閃石・赤褐色粒 橙	前股（右脚側）．前側は粘土のつぎ目で折損しているが粘土を足して補強した痕跡がある．腹孔がある．内外面ともナデ．	北東表土
67	馬形	残長　7.4×7.4	良好	やや緻密　石英・角閃石・硬質白色粒 橙	粘土帯貼付が一部残る．部位不明．	タニ表土
68	馬形	残長　8.3×7.7	良好	緻密　石英・角閃石・チャート・硬質白色粒 橙	粘土帯を貼りつけるが，剥離している．内外面ともナデ．部位不明．	表土
69	馬形	残長　9.2×7.4	良好	石英・角閃石・長石・赤褐色粒・硬質白色粒 橙	左障泥の前とりつき部分か．内外面ともナデ．	周2
70	馬形	残長　6.4	良好	石英・角閃石・赤褐色粒 内：にぶい橙　外：橙	脚の一部．	墳丘表土
71	馬形	底径　(11.7) 残高　6.0	良好	石英・角閃石 橙	脚の一部．外面タテハケ，内面ナデ．	墳丘表土
72	馬形	残長　10.9	良好	石英・角閃石・チャート 橙	脚の一部．外面タテハケ，内面ナデ．	北周2区， 西周3区
73	馬形	底径　(11.7) 残高　12.5	良好	石英・角閃石・チャート・赤褐色粒 内：明赤褐　外：浅黄褐	脚の一部．外面タテハケ，内面ナデ．	周3区， 西周3区



1号墳



1号土坑

２号墳（第42・43図）

墳丘を完全に削平された円墳である。周濠の上部も削平を受けている。東側周濠は一部調査区をはずれている。遺構検出状況では埋葬施設の痕跡はなく、構築物や遺物に関する伝聞もない。

位置　調査区の東寄り、１号墳の西側7.5mに位置する（C2a2グリッド）。

規模　墳丘直径16.5m。周濠の外縁で22mである。

墳丘　地山まで削られた状況で、墳丘だけでなく周濠上部も残っていない。北から南に傾斜する台地縁にあり、南半分は緩やかに下がっている。南北の周濠上端の比高差は約1mである。

周濠　幅は現状で3.0-3.5m、深さは1.4-1.8m。

埋葬施設　見つからなかった。

出土遺物　土師器と埴輪が出土している。

（１）土師器

周濠内の覆土中から小片で坏が出土している（表16、第47図１）。赤く焼きあがる鉄分の多い胎土を使用し、橙色を呈す。内面のミガキは整った放射状である。体部外面はヘラケズリ後弱いミガキをかけてていねいに仕上げる。口縁部の外反は屈曲がなく、復元径は小さく器高は高い。

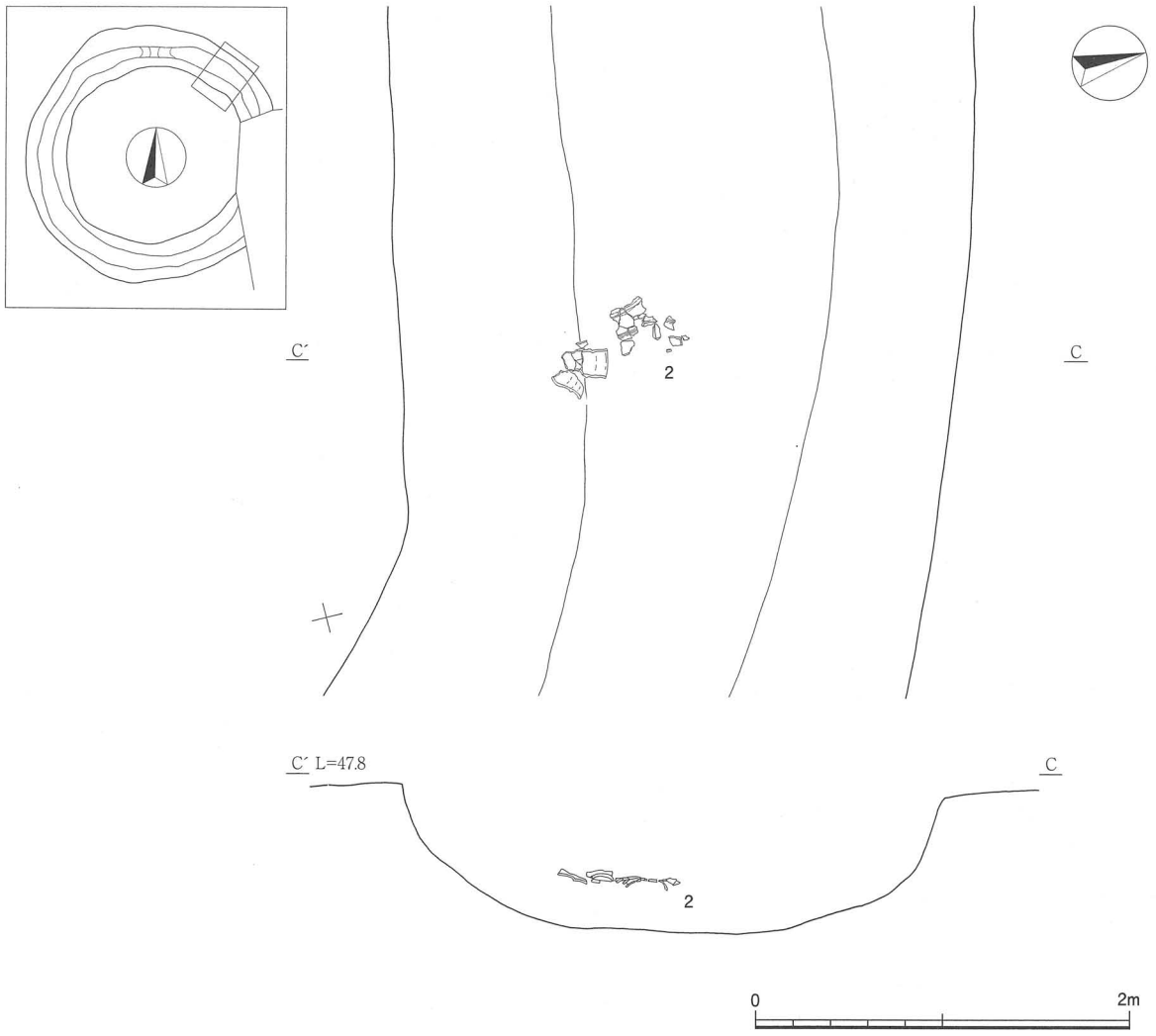
（２）埴輪

円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪が出土している。埴輪のほとんどは周濠内からの出土で、出土分布は北半分に少なく、南半分に多く見つかっている（第54図）。出土状況はいずれも、周濠が一定量自然堆積した面に墳丘寄りに横たわり、さらにその上に土が堆積している（第41・44－46図）。この状況は１号墳と共通しており、２号墳でも周濠が埋まりはじめてしばらくして、墳丘に立ち並んでいた埴輪が周濠に滑り落ち、その後さらに埋没したと考えられる。

円筒埴輪（表17－20、第47－52図2-49）　全体を復元できる円筒埴輪はすべて２条３段で、大きさや器形、色調、調整の特徴などは破片を含めて似かよっている。器形は底部から直線的にやや外傾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反するものが多い。復元できた８個体（４、５、６、７、11、12、15、16）での器高は37.2-40.5cm、口径は16.0-22.5cm、底径は11.1-(14.7) cmで、１号墳の埴輪と比較すると、小型で細い。器壁も薄くつくられている。色調も全体に赤褐色のものが多く、橙色が多くて白っぽく見える１号墳とは様子が異なる。口縁部を第１段とし、下へ第２段、最下段を第３段とすると、第１・２段の段間が約10cmであるのに対し、第３段では16-18cmと長く、脚高の器形である。

円形の透孔は第２段にあけられている。突帯の断面形は低いM字形、台形、ほぼ三角形に近いものがある。円筒下端に横方向のナデ、あるいは擦痕がみられ、突帯設定のための工具の当たりと推測できるので、突帯設定をおこなっていると考えられる。また、第２段の段間と同じ間隔の沈線が、第１段にもはいるものがあり（３、７、９）、その沈線は口縁とは平行せず、第１突帯と平行しているので、なんらかの理由で突帯をまわさない第１段にも突帯設定線をいれてしまったと考えられる。第２段にも沈線がまわっているものが２点ある（12、16）。12では高さ23.5cm、16では21.5cmの位置に認められるが、16では幅広くひきずった一部が沈線のようにみえている。

ハケメは凹凸が少なく明瞭ではない。基本的にタテハケのみであるが、第２段にタテハケ後に横方向のナデを全面（８）あるいは透孔周辺に施すものがある（11、16、21、33）。ヨコハケの技法のようであるがハケメは見えない。口縁部の破片でタテハケ後、縦方向のナデを施したものが１点ある（32）。口縁部のヨコナデは口唇部に限られるものが多い。



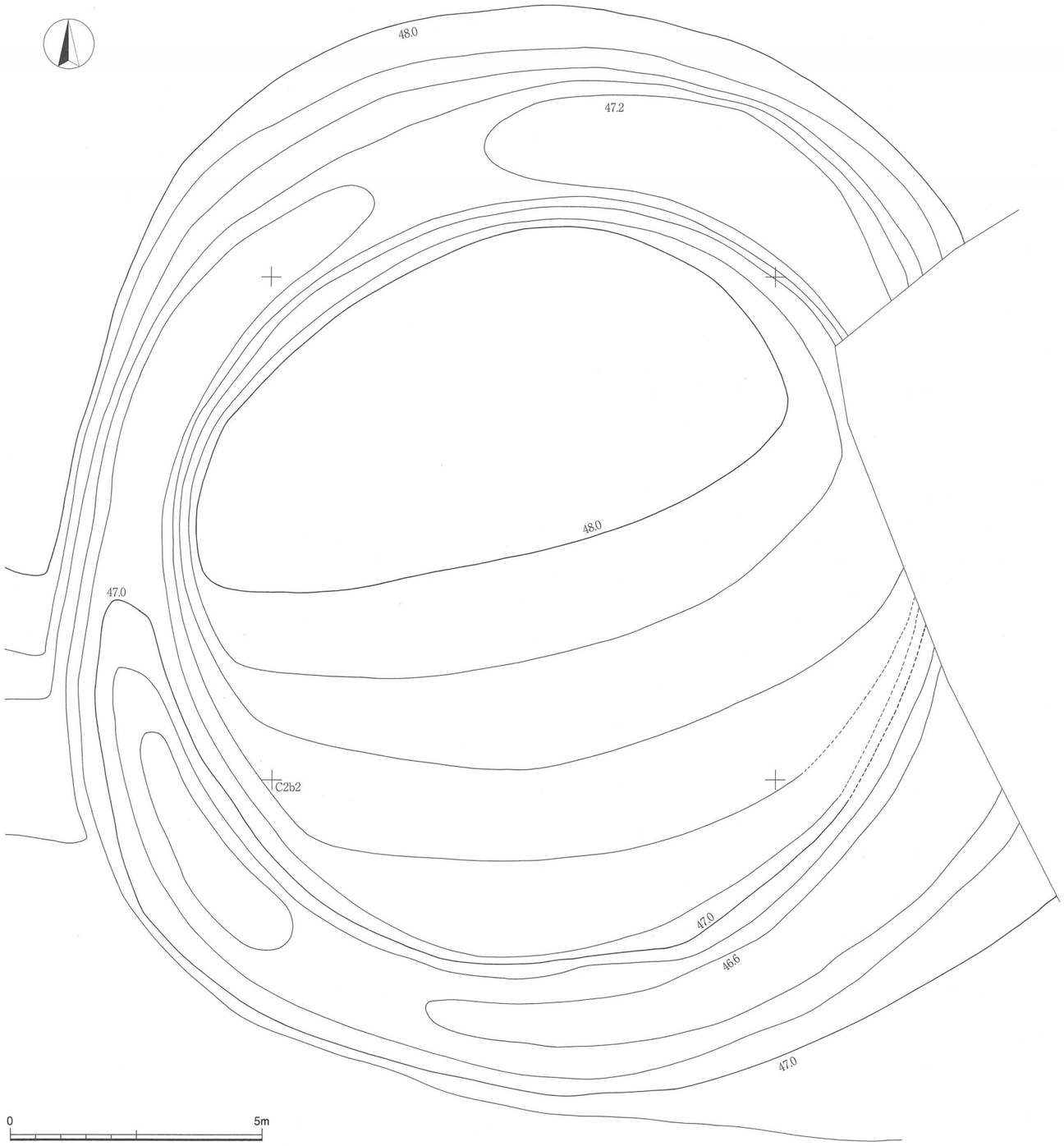
第41図　２号墳　遺物出土状況図（１）

表16　２号墳出土遺物観察表（１）

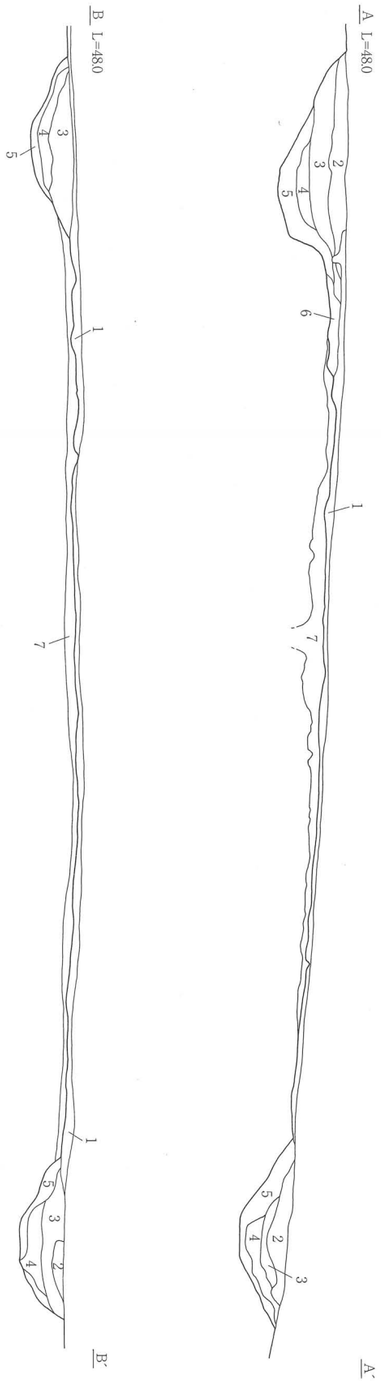
番号	種別・器種	計測値(cm)		特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	口径 器高 底径	－ － －	口縁部が外反して開く．体部内面，放射状のミガキ．口縁部は横方向のミガキ．体部外面ヘラケズリ後弱いミガキ．	金雲母微粒	良好	明赤褐色	

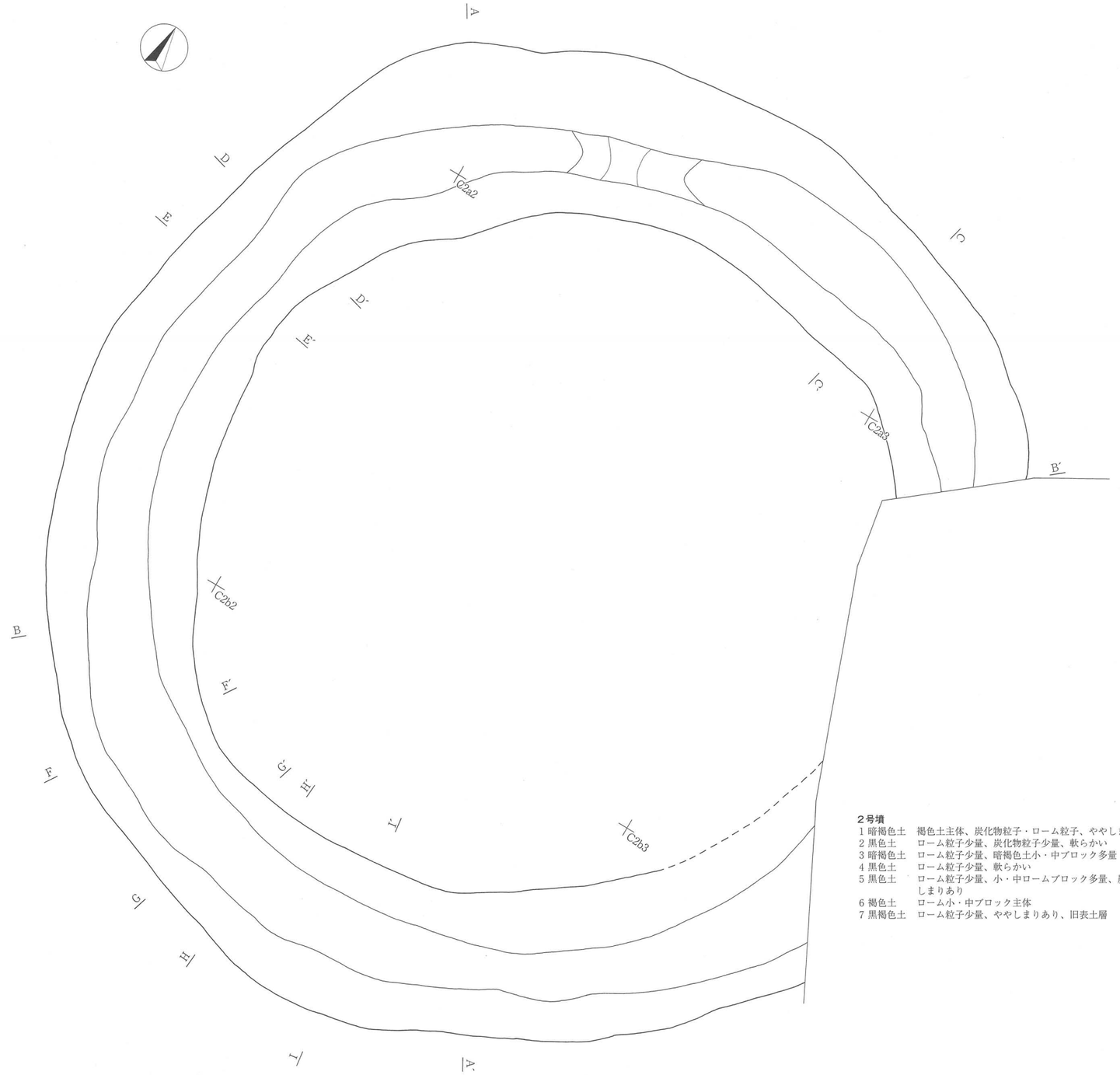
表17　２号墳出土遺物観察表（２）

番号	埴輪種類	計測値(cm)	段間値(cm)	透孔 形状	透孔 数値(縦×横cm)	突帯断面	焼成	胎土・色調	成形・整形の特徴	備考	注記
2	円筒	口径 22.5 底径 － 残高 24.5	1段 10.0 2段 10.5	円	2段 5.9×6.5	台形～三角形	良好	石英・角閃石・長石・チャート(粒～礫1.2cm) 内：赤褐　外：明赤褐	外面　タテハケ後口唇ヨコナデ 内面　上半 横のハケ・ナデ，下半 斜のナデ		No24, 周4区
3	円筒	口径 18.6 底径 － 残高 36.9	1段 11.6 2段 10.3	円	2段 5.3×5.7	台形	良好	石英・角閃石・長石・チャート 内：明黄褐　外：明赤褐	外面　タテハケ後口唇ヨコナデ，口縁 第１突帯と平行する(10.5cm)沈線 内面　口縁 斜のハケ後ナデ		No21・ 22
4	円筒	口径 16.0 底径 (10.3) 器高 40.5	1段 10.9 2段 10.4 3段 19.2	円	2段 6.0×6.7	台形	良好	緻密　石英・長石・チャート 内：暗赤褐　外：赤褐	外面　タテハケ後口唇ヨコナデ 内面　上1/3は斜のハケ，下2/3は斜のナデ，下端 指押さえ		No20, 周3区
5	円筒	口径 20.4 底径 (13.4) 器高 37.9	1段 10.4 2段 11.1 3段 16.3	円	2段 5.8×6.2	台形	良好	石英・角閃石・長石・チャート 赤褐	外面　タテハケ後口唇ナデ，第１段全体に横の擦痕 内面　口縁 横のハケ，上半 斜のハケ，下半 斜のハケ・ナデ		No25
6	円筒	口径 20.8 底径 11.1 器高 37.4	1段 10.4 2段 9.4 3段 17.1	円	2段 5.7×5.0	台形～三角形	良好	石英・長石・チャート・赤褐色粒 明赤褐	外面　タテハケ，下端 横の擦痕 内面　上半 横～斜のハケ，下半 斜のナデ		No10・ 12, 周2区



第42図　２号墳　墳丘実測図（１）

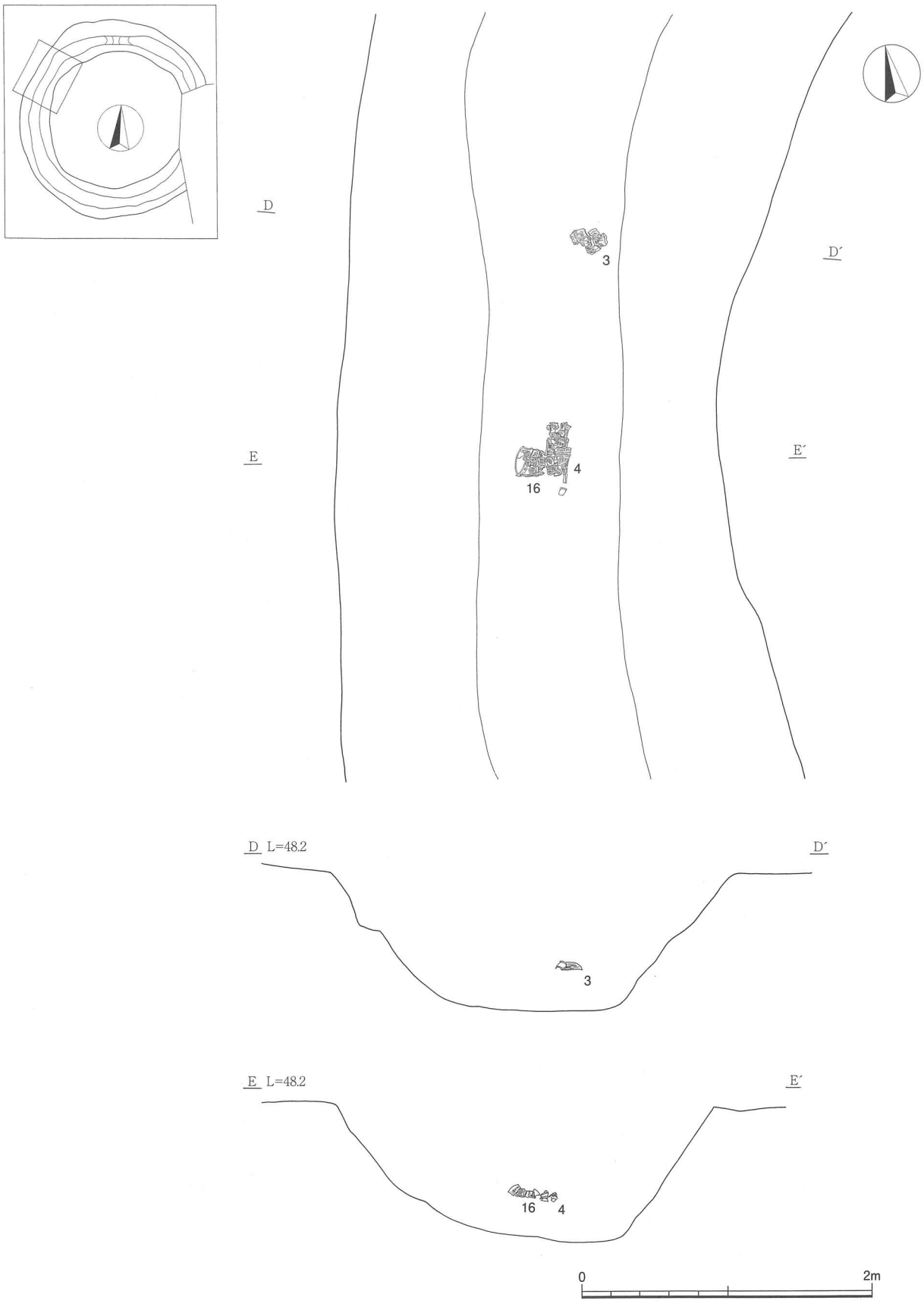




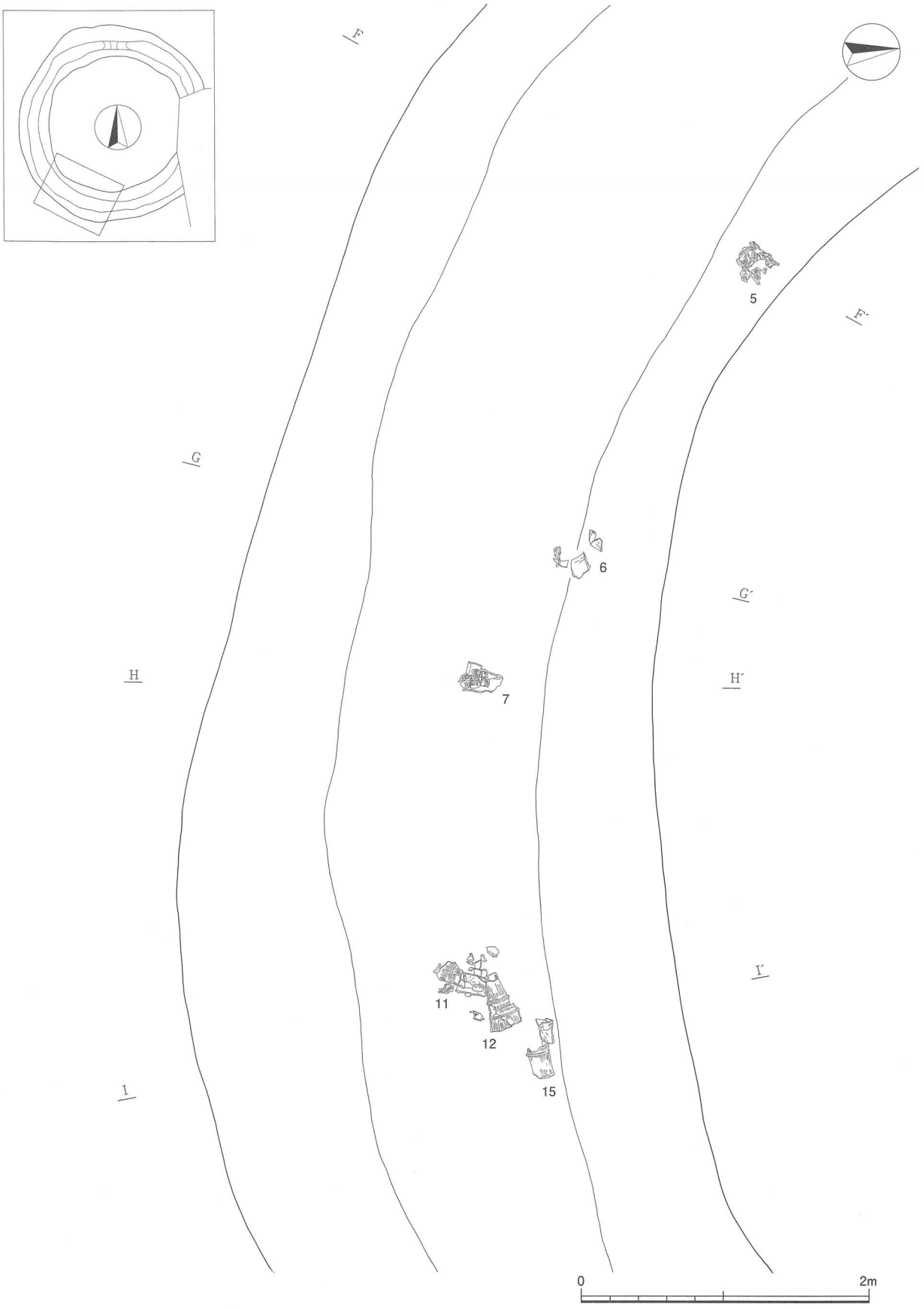
2号墳

1 暗褐色土　褐色土主体、炭化物粒子・ローム粒子、ややしまりあり
2 黒色土　ローム粒子少量、炭化物粒子少量、軟らかい
3 暗褐色土　ローム粒子少量、暗褐色土小・中ブロック多量
4 黒色土　ローム粒子少量、軟らかい
5 黒色土　ローム粒子少量、小・中ロームブロック多量、炭化物粒子少量、しまりあり
6 褐色土　ローム小・中ブロック主体
7 黒褐色土　ローム粒子少量、ややしまりあり、旧表土層

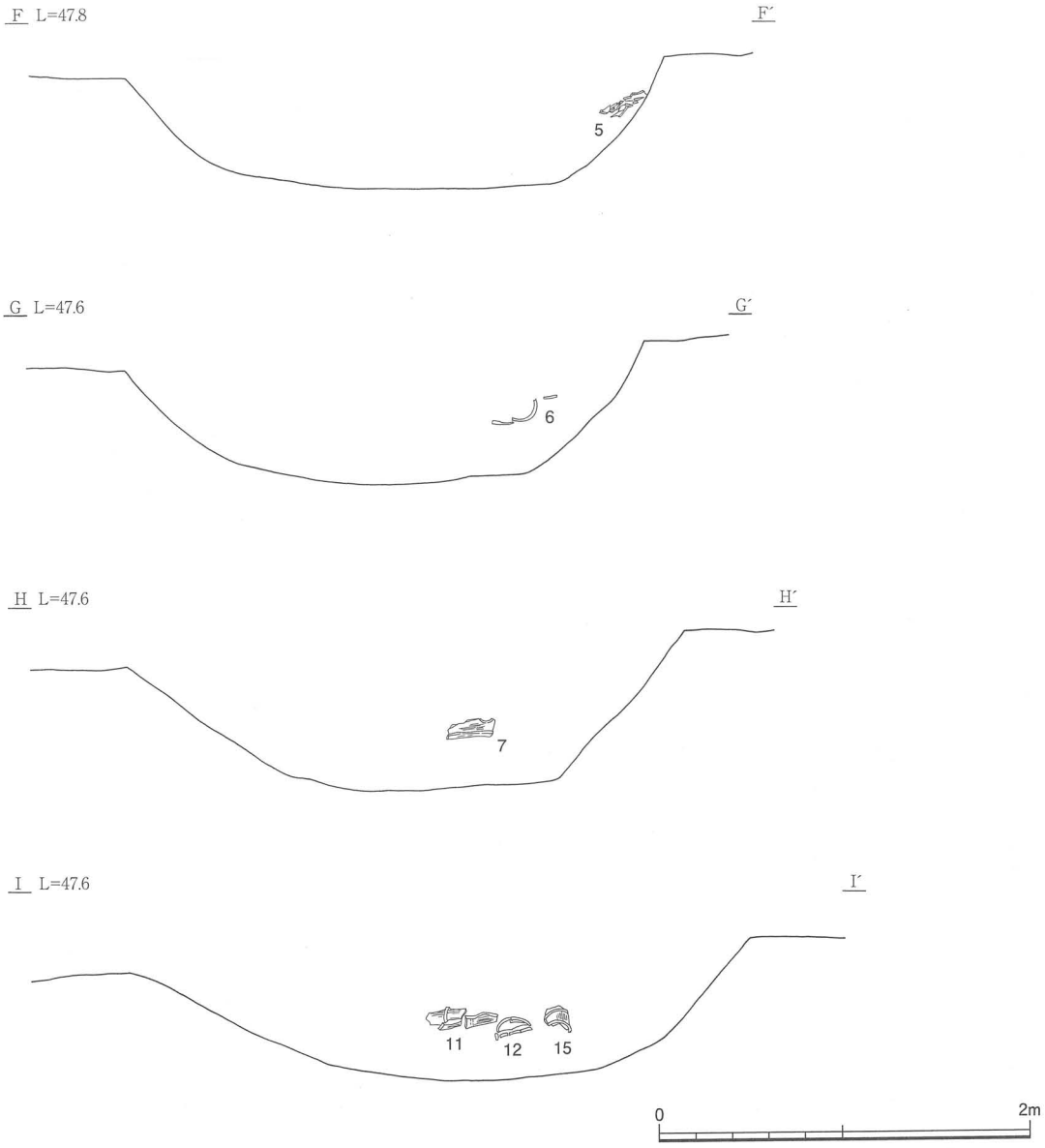
第43図　2号墳　墳丘実測図（2）



第44図　２号墳　遺物出土状況図（２）



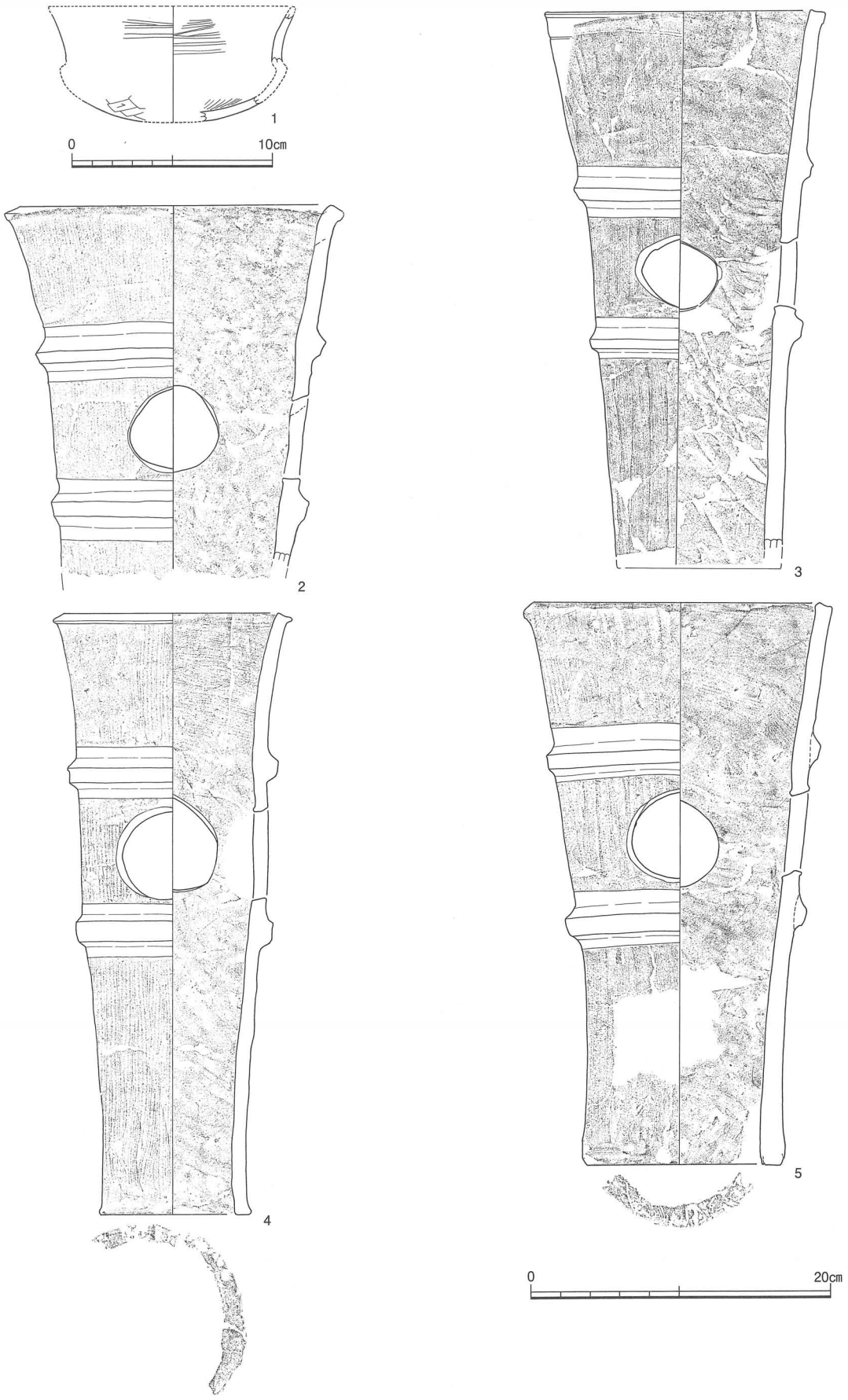
第45図　２号墳　遺物出土状況図（３）



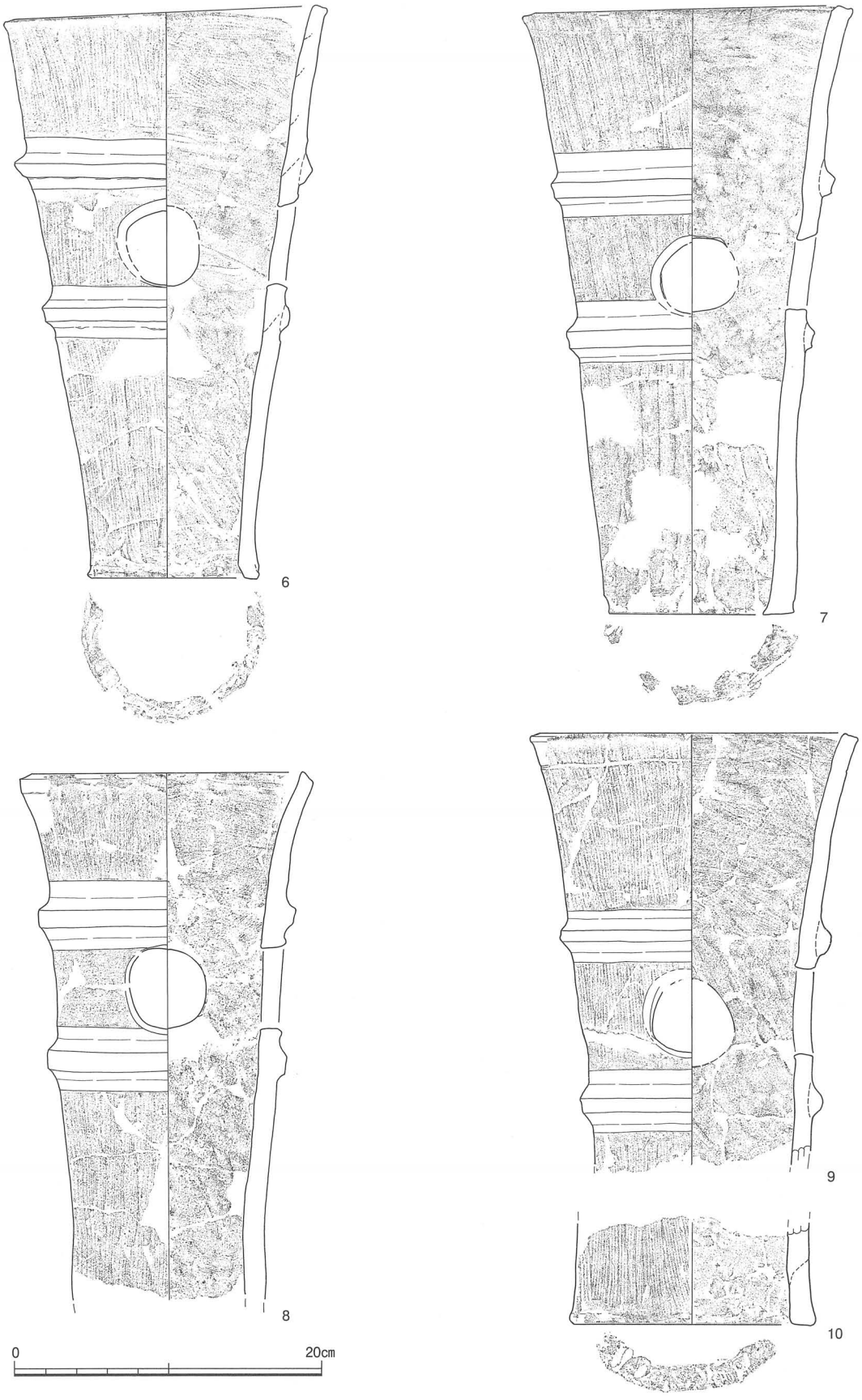
第46図　2号墳　遺物出土状況図（4）

表18　2号墳出土遺物観察表（3）

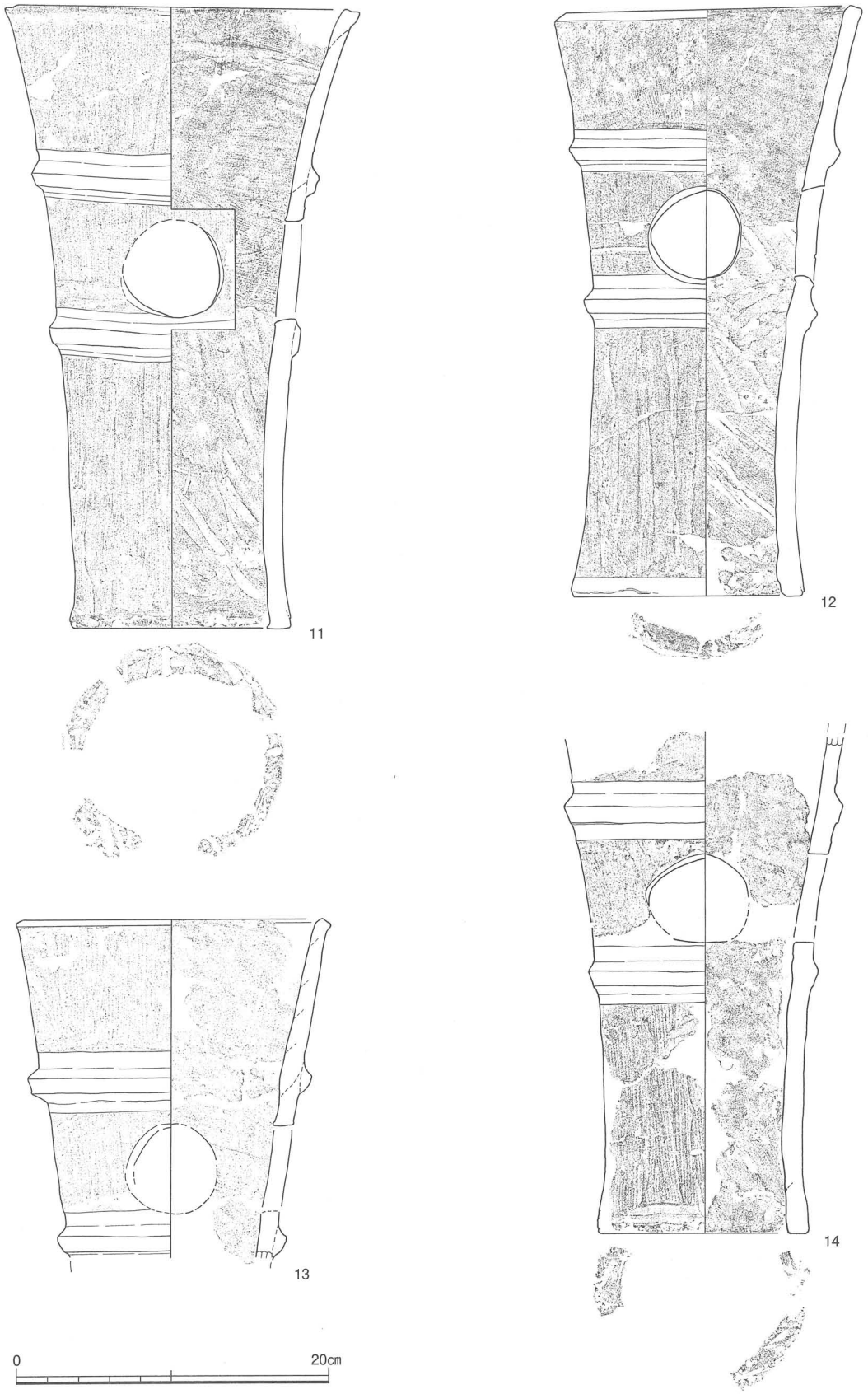
番号	埴輪種類	計測値(cm)	段間値(cm)	透孔 形状 数値(縦×横cm)	突帯断面	焼成	胎土・色調	成形・整形の特徴	備考	注記
7	円筒	口径 21.2 底径 (12.0) 器高 39.8	1段 11.7 2段 9.9 3段 18.0	円 2段 5.5×6.4	台形～低M字	良好	石英・角閃石・長石・チャート・軟質乳白色粒 赤褐	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ，口縁に第1突帯と平行する(10cm)沈線状擦痕，第2段下半 横の擦痕，下端 擦痕 内面 斜のナデ		No8・周2・3区
8	円筒	口径 (19.0) 底径 － 残高 34.5	1段 9.4 2段 9.4	円 2段 5.6×4.7	台形	良好	石英・角閃石・チャート 橙	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ，第2段タテハケ後横のナデ 内面 上1/3横・斜のハケ，下2/3斜のナデ		南周1区
9	円筒	口径 21.1 底径 － 残高 28.3	1段 13.3 2段 11.0	円 2段 5.8×6.0	台形～三角形	良好	石英・角閃石・長石・チャート 内：明褐 外：明黄褐	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ，口縁に第1突帯と平行する(11cm)沈線 内面 上半 斜のハケ，下半 縦のナデ		周南1・2区
10	円筒	口径 － 底径 (16.0) 残高 6.7				良好	石英・長石・チャート にぶい黄橙	外面 タテハケ，下端 横の擦痕 内面 横のナデ		周2区
11	円筒	口径 22.5 底径 14.0 器高 40.2	1段 11.2 2段 10.1 3段 18.6	円 2段 5.0	台形～低M字	良好	緻密 石英・角閃石・長石・チャート 明赤褐	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ，下端 横の擦痕 内面 上半 横～斜のナデ，下半 斜のナデ		No5・6
12	円筒	口径 19.4 底径 (14.3) 器高 37.2	1段 9.5 2段 10.1 3段 18.2	円 2段 6.3×5.7	台形	良好	石英・長石・チャート・軟質乳白色粒 赤褐	外面 タテハケ後口縁ヨコナデ，下から23.5cmの高さに沈線，下端 横の擦痕 内面 斜のナデ		No18・周2区



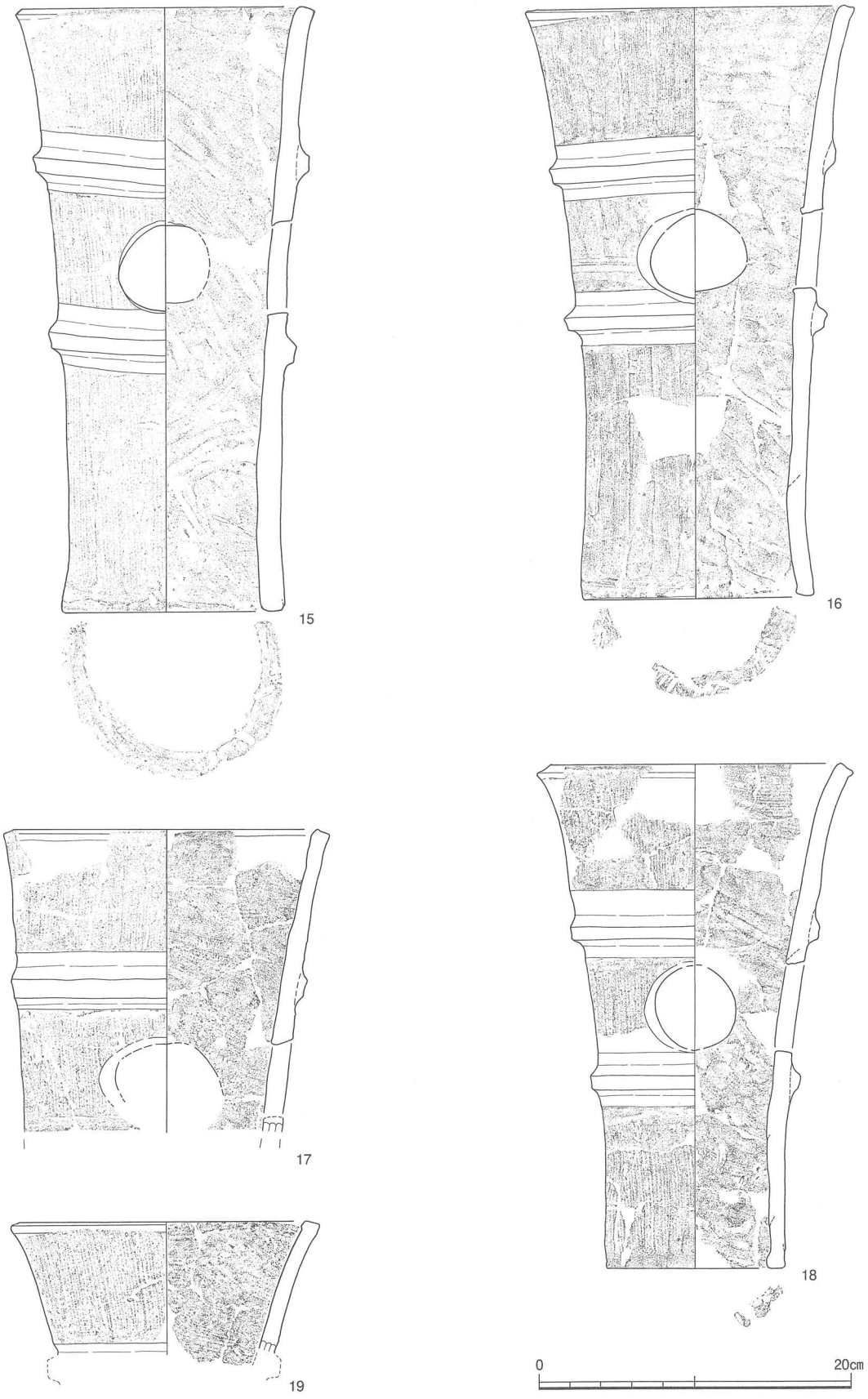
第47図　２号墳出土遺物実測図（１）



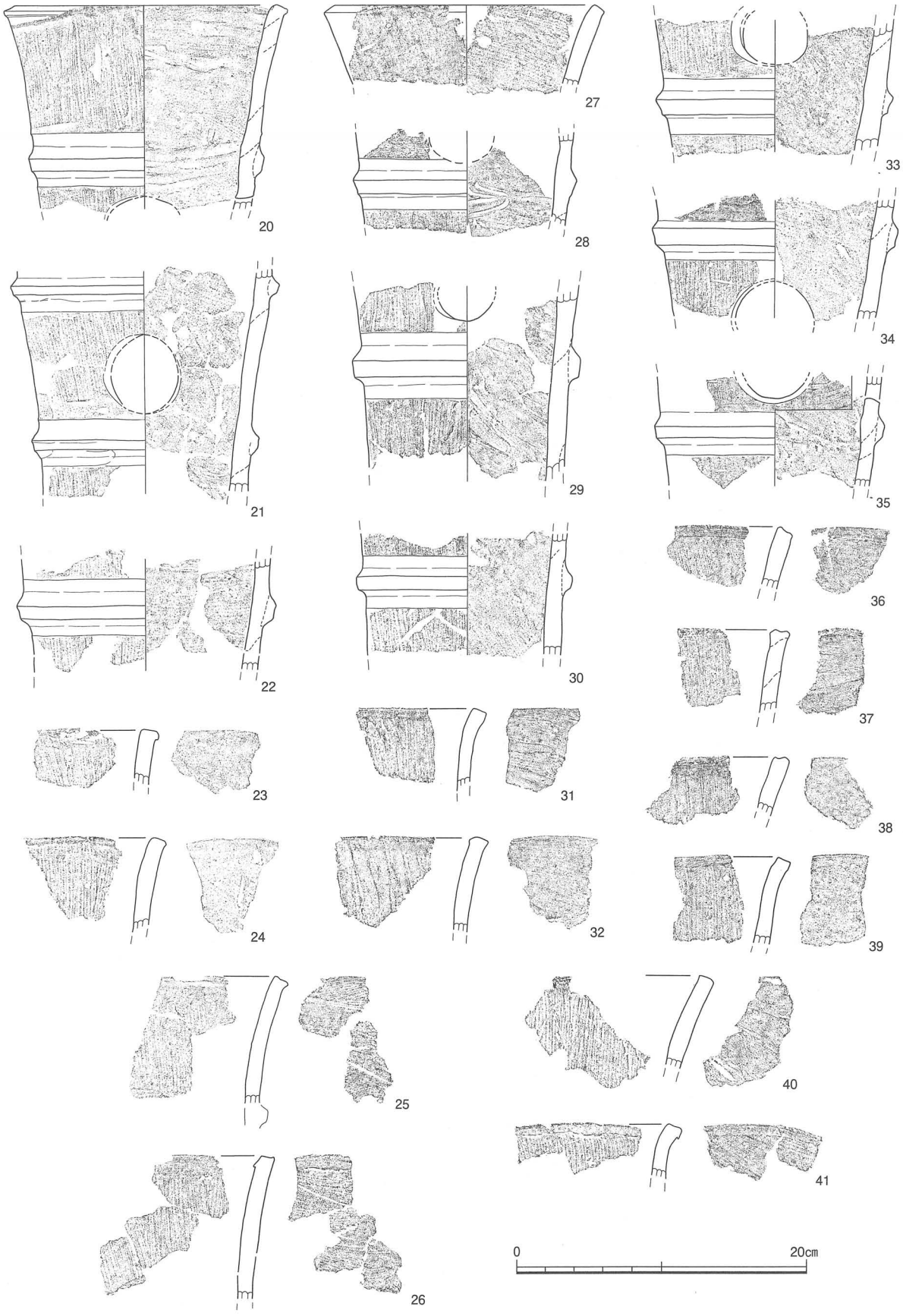
第48図　２号墳出土遺物実測図（２）



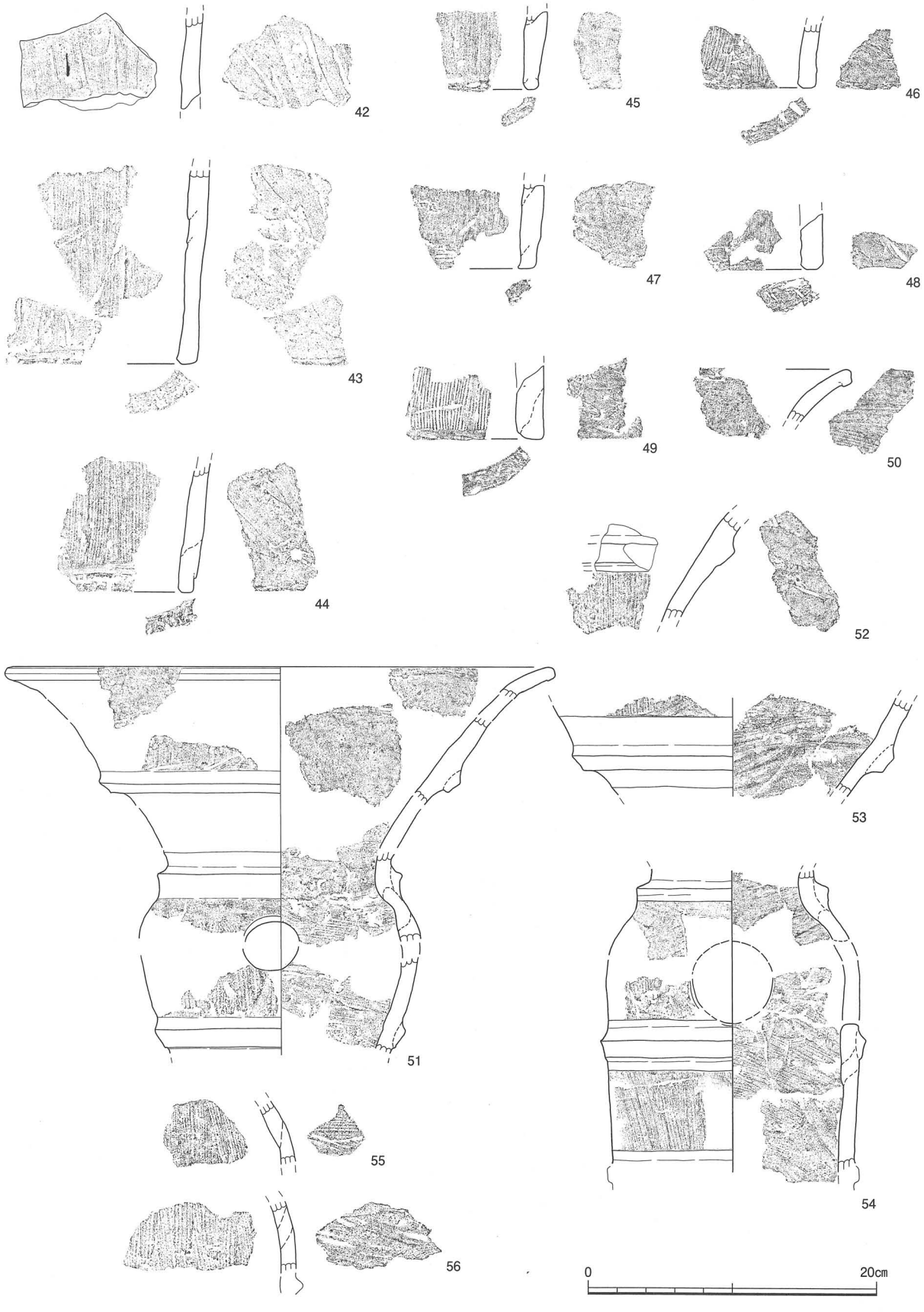
第49図　２号墳出土遺物実測図（３）



第50図　２号墳出土遺物実測図（４）



第51図　２号墳出土遺物実測図（５）



第52図　２号墳出土遺物実測図（６）

表19　2号墳出土遺物観察表（4）

番号	埴輪種類	計測値(cm)	段間値(cm)	透孔 形状	透孔 数値(縦×横cm)	突帯断面	焼成	胎土・色調	成形・整形の特徴	備考	注記
13	円筒	口径 20.0 底径 − 残高 21.7	1段 10.6 2段 10.3	円	2段 6.0	台形〜三角形	良好	石英・角閃石・チャート 明黄褐	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ 内面 口縁 横のナデ，下半 斜のナデ		No1・2・8，周2区
14	円筒	口径 − 底径 13.0 残高 31.9	2段 10.6 3段 16.4			台形〜三角形	良好	石英・角閃石・チャート 明赤褐	外面 タテハケ，下端 横の擦痕 内面 斜のナデ，底部 横・斜のハケ		周1区
15	円筒	口径 19.0 底径 14.2 器高 39.3	1段 10.3 2段 11.7 3段 17.2	円	2段 5.8×5.7	台形〜低M字	良好	石英・角閃石・チャート 明赤褐	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ，下端 横の擦痕 内面 斜のハケ後口縁ヨコナデ，一部さらに斜のナデ，下半 斜のナデ		No3・4・18
16	円筒	口径 21.9 底径 (14.7) 器高 38.5	1段 10.2 2段 10.1 3段 17.9	円	2段 6.0×6.5	台形〜低M字	良好	石英・角閃石 赤褐	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ，下から高さ21.5cmに沈線状の擦痕 内面 斜のハケ，下半 縦のナデ		No19・20，周3区
17	円筒	口径 21.0 底径 − 残高 19.6	1段 10.3	円	2段 7.0	台形	良好	石英・角閃石・長石・チャート 明黄褐	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ 内面 横・斜のハケ・ナデ		No22，周3区
18	円筒	口径 (20.2) 底径 (11.4) 残高 32.7	1段 10.9 2段 9.7 3段 12.1	円	2段 5.7	台形〜低M字	良好	石英・角閃石・チャート・赤褐色粒 浅黄橙	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ，下端 横の擦痕 内面 口縁 横のハケ後 斜のナデ		No5，周南1・2区
19	円筒	口径 (10.0) 底径 − 残高 8.5					良好	石英・長石・硬質乳白色粒 内：赤褐 外：赤	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ 内面 横〜斜のハケ		No23
20	円筒	口径 19.4 底径 − 残高 14.6	1段 11.0			台形	良好	石英・長石・チャート 赤褐	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ 内面 横〜斜のハケ		周南・1区
21	円筒	口径 − 底径 − 残高 15.6	2段 10.8			台形	良好	石英・角閃石 にぶい赤褐	外面 タテハケ後第2段透孔にかけて横の擦痕 内面 上半 斜のハケ，下半 斜のナデ		周4区
22	円筒	口径 − 底径 − 残高 7.6				台形	良好	石英・角閃石・長石・チャート 内：赤褐 外：明赤褐	外面 タテハケ 内面 横のハケ		周
23	円筒	口径 − 底径 − 残高 4.7					良好	石英・長石・チャート 赤	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ 内面 横のハケ		周2区
24	円筒	口径 − 底径 − 残高 6.6					良好	石英・角閃石・長石・チャート 赤褐	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ 内面 斜のハケ後口縁ヨコナデ		No4
25	円筒	口径 − 底径 − 残高 8.9					良好	石英・角閃石・長石・チャート にぶい赤褐	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ 内面 横のハケ，斜のナデ		周4区
26	円筒	口径 − 底径 − 残高 10.0					良好	石英・長石 にぶい赤褐	外面 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 横のハケ		周2区
27	円筒	口径 (19.4) 底径 − 残高 5.5					良好	石英・角閃石 明赤褐	外面 タテハケ後口唇ヨコナデ 内面 横・斜のハケ		周南
28	円筒	口径 − 底径 − 残高 6.5				台形	良好	石英・角閃石 明赤褐	外面 タテハケ後第2段横のナデ 内面 横のナデ		周南
29	円筒	口径 − 底径 − 残高 13.6				台形	良好	石英・長石・チャート 内：赤褐 外：明赤褐	外面 タテハケ 内面 斜のハケ・ナデ		No8，周2・3区，表土
30	円筒	口径 − 底径 − 残高 8.3				台形	良好	石英・角閃石・チャート 明赤褐	外面 タテハケ 内面 斜のハケ後 斜のナデ		南
31	円筒	口径 − 底径 − 残高 5.8					良好	石英・チャート 赤	外面 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 横のハケ・ナデ		周4区
32	円筒	口径 − 底径 − 残高 6.9					良好	石英・角閃石 赤褐	外面 タテハケ後縦のナデ，口縁ヨコナデ 内面 横のハケ		周
33	円筒	口径 − 底径 − 残高 9.2				台形〜低M字	良好	石英・角閃石・長石・チャート・白色粒 明赤褐	外面 タテハケ後第2段透孔周辺横のナデ 内面 斜のナデ		周
34	円筒	口径 − 底径 − 残高 8.3				台形	良好	石英・チャート にぶい赤褐	外面 タテハケ 内面 斜のナデ		周1区
35	円筒	口径 − 底径 − 残高 7.7					良好	石英・角閃石・チャート 赤	外面 タテハケ後第2段横のナデ 内面 斜のナデ		周
36	円筒	口径 − 底径 − 残高 4.7					良好	石英・長石・チャート 赤褐	外面 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 斜のナデ後口縁ヨコナデ		周2区
37	円筒	口径 − 底径 − 残高 5.8					良好	石英・長石・チャート 明赤褐	外面 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 斜のナデ		周2区
38	円筒	口径 − 底径 − 残高 4.3					良好	石英・長石 にぶい赤褐	外面 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 斜のナデ		南
39	円筒	口径 − 底径 − 残高 6.0					良好	石英・長石・チャート 明褐	外面 タテハケ後口縁ヨコナデ 内面 斜のナデ		No22

表20　２号墳出土遺物観察表（５）

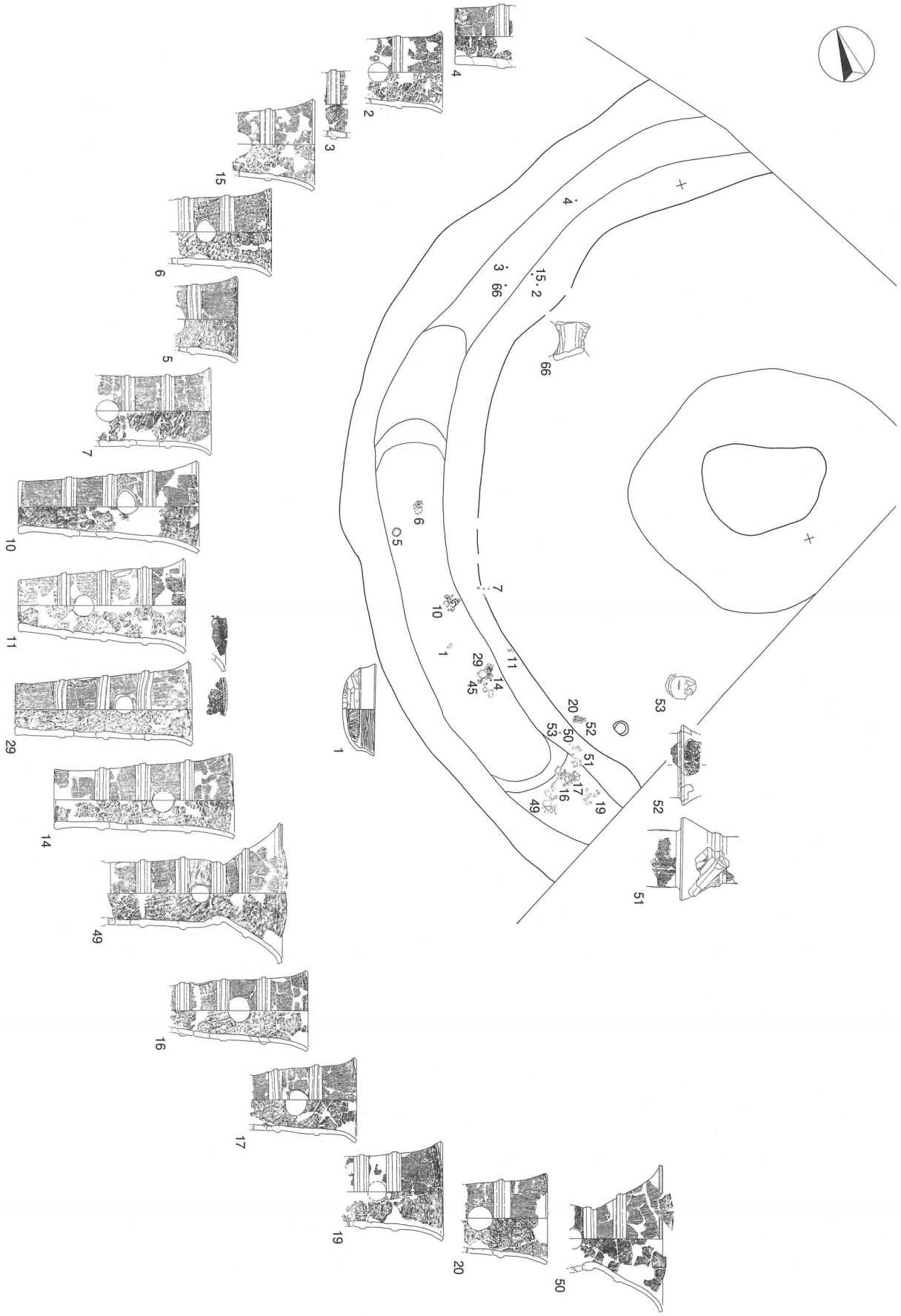
番号	埴輪種類	計測値(cm)	段間値(cm)	透孔 形状	透孔 数値(縦×横cm)	突帯断面	焼成	胎土・色調	成形・整形の特徴	備考	注記
40	円筒	口径 － 底径 － 残高 8.2					良好	石英・長石 内：赤褐　外：赤	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ 内面　斜のナデ		周3区
41	円筒	口径 － 底径 － 残高 3.5					良好	石英・長石・チャート にぶい赤褐	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ 内面　横のハケ		周4区
42	円筒	口径 － 底径 － 残高 6.7					良好	石英・長石・チャート 内：暗赤褐　外：にぶい赤褐	外面　タテハケ 内面　斜のナデ	黒色の滴下痕	南
43	円筒	口径 － 底径 － 残高 13.5					良好	石英・長石・チャート 内：明褐　外：橙	外面　タテハケ，下端 横の擦痕 内面　斜のナデ		墳3区，周
44	円筒	口径 － 底径 － 残高 9.0					良好	石英・長石・チャート 赤褐	外面　タテハケ，下端 横の強い擦痕 内面　斜のナデ，下端 横のナデ		周
45	円筒	口径 － 底径 － 残高 5.6					良好	石英・長石・チャート 内：橙　外：にぶい橙	外面　タテハケ，一部タテハケ後 縦のナデ 内面　斜のナデ		周
46	円筒	口径 － 底径 － 残高 4.5					良好	石英・長石 赤褐	外面　タテハケ，下端 擦痕 内面　横・斜のナデ		周3区
47	円筒	口径 － 底径 － 残高 6.3					良好	石英・長石・チャート橙	外面　タテハケ後 横の擦痕 内面　斜のナデ		周
48	円筒	口径 － 底径 － 残高 4.0					良好	石英・角閃石・長石 にぶい赤褐	外面　タテハケ 内面　横・斜のナデ		周
49	円筒	口径 － 底径 － 残高 5.2					良好	緻密　石英・角閃石・長石 橙	外面　タテハケ後底部ナデ 内面　横のナデ		周3区
50	朝顔形円筒	口径 － 底径 － 残高 3.6					良好	石英・長石 内：明赤褐　外：にぶい赤褐	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ 内面　横のハケ後口縁ヨコナデ		周3区
51	朝顔形円筒	口径 (38.1) 底径 － 残高 26.7					良好	石英・角閃石・長石・チャート にぶい赤褐	外面　タテハケ後口縁ヨコナデ，第３段タテハケ後ナデ 内面　横のナデ		No8，周2区，1号墳3区
52	朝顔形円筒	口径 － 底径 － 残高 7.6				台形	良好	石英・長石・チャート 明赤褐	外面　タテハケ 内面　斜のナデ	第２段	周1区
53	朝顔形円筒	口径 － 底径 － 残高 7.0				台形	良好	石英・長石・チャート 赤	外面　タテハケ 内面　横のナデ	第２突帯	周3区，表土
54	朝顔形円筒	口径 － 底径 － 残高 20.8	３段　10.7			２段・３段三角形	良好	石英・角閃石・長石・チャート 橙	外面　タテハケ，第３段タテハケ後 斜のナデ 内面　斜のハケ		周4区
55	朝顔形円筒	口径 － 底径 － 残高 4.4					良好	石英・赤褐色粒 橙	外面　タテハケ 内面　横のナデ	第３段	周4区
56	朝顔形円筒	口径 － 底径 － 残高 5.0					良好	石英・角閃石・長石・チャート・赤褐色粒 橙	外面　タテハケ 内面　横のナデ	第３段	表土

朝顔形円筒埴輪（表20、第52図50-54）　全体を復元できるものはなかった。第３段のよく張った肩から第２段に直線的にひらき、口縁部でさらにひらいている。第３段は縦方向にハケを施した後、上半を横方向にナデている。透孔は第３段にあけるが、ほかは不明である。復元できた口径は38.1cmである。

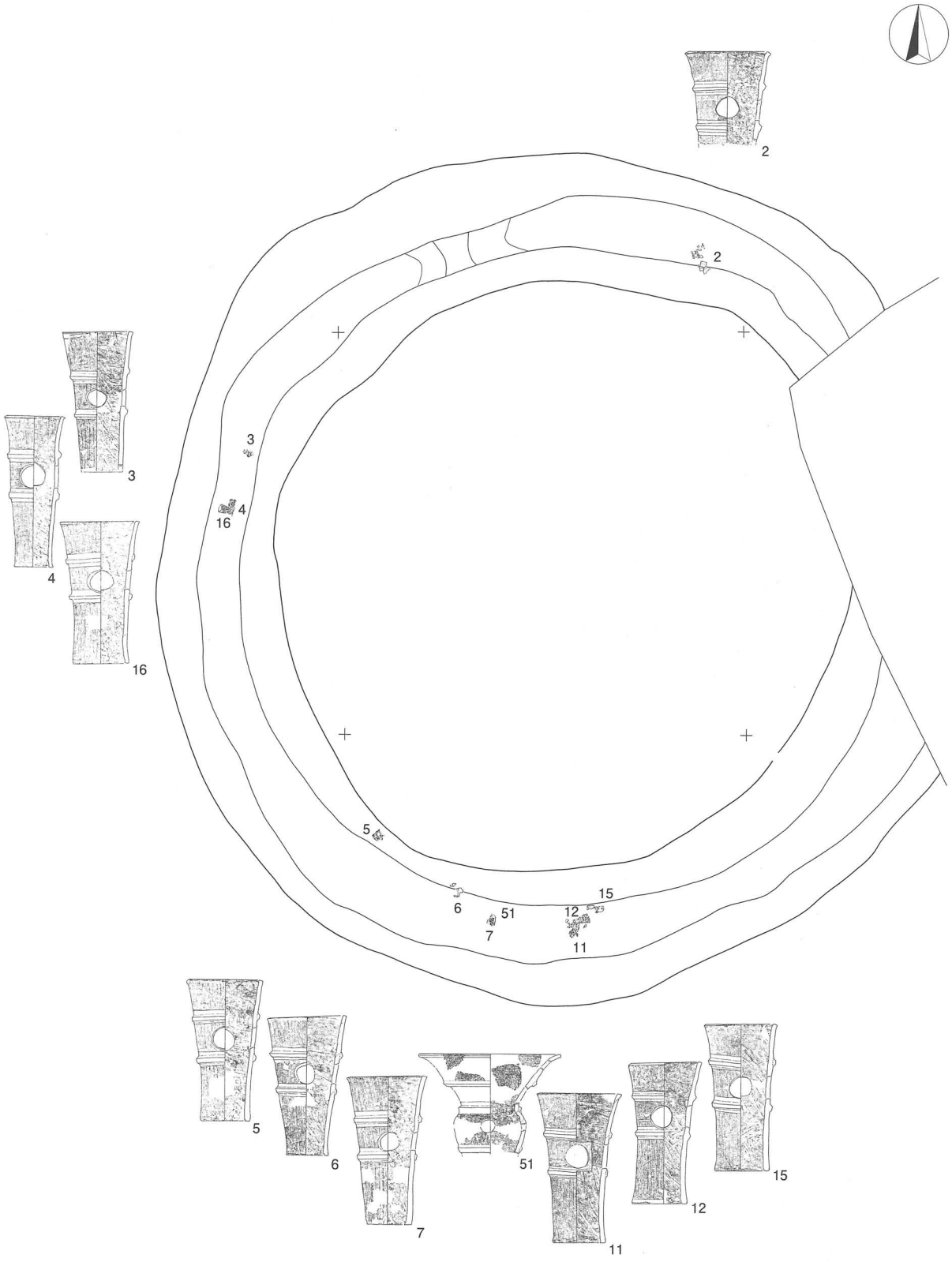
小　結

１・２号墳は台地の東端に立地し、近接した位置にある。１号墳を直径19mの円墳とすると、２号墳は直径16.5mで、１号墳がやや大きいけれども現状での周濠幅や深さなども差はあまりない。またどちらも埴輪をもつ点で共通するが、埴輪の器形・段数・大きさ・色調などの特徴は１号墳と２号墳で異なっている。つまり２つの古墳は似た立地・規模でありながら、違うタイプの埴輪をそれぞれ立て並べていたのである。また、１号墳には形象埴輪（人物・馬形）があるが、２号墳には確認できなかった。

埴輪の出土状況はどちらも墳丘から周濠に転落した状態で見つかっており、墳丘の平坦面（墳丘が段築をもたない場合は墳頂平坦面）に埴輪が並べられていたと予想できる（第53・54図）。朝顔形円筒埴輪は少ないが、出土状況からみると円筒埴輪数本につき１本を組み合わせ、埴輪列を構成していたと考えられ



第53図　1号墳　埴輪配置図



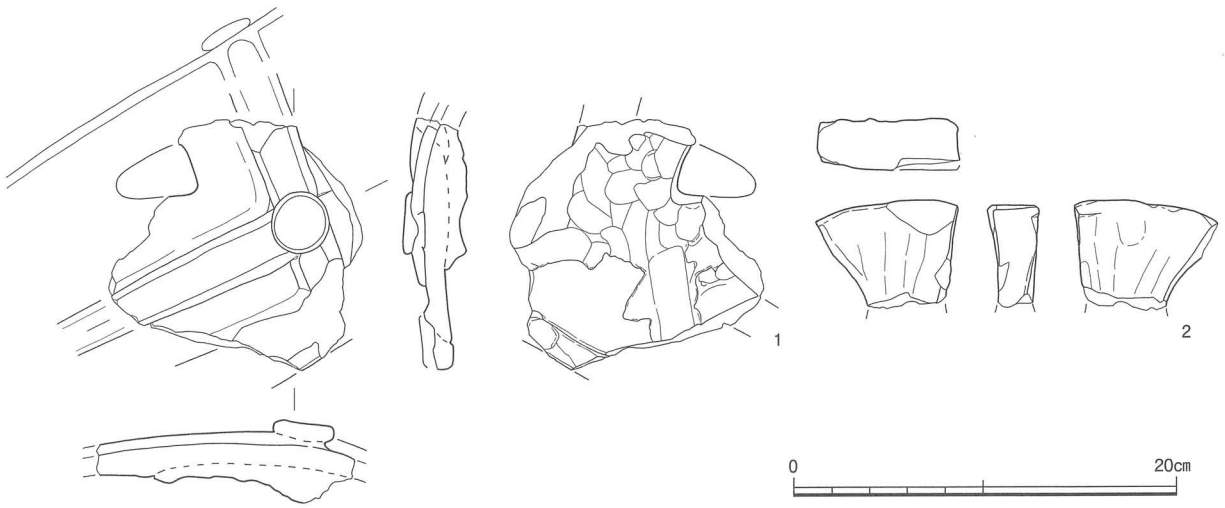
第54図　２号墳　埴輪配置図

る。１・２号墳とも南寄りに埴輪の出土量が多く、南に篤い樹立を想定させる。ただし埋葬施設がみつかっていないため、それとの位置関係あるいは関連性は不明である。１号墳の人物・馬形埴輪は円筒・朝顔形円筒埴輪に混じって出土していることから、円筒埴輪列と同列あるいは平行する列を墳丘の南西寄りに展開していたのであろう。胎土や焼成の類似性から人物埴輪は３体以上、馬形埴輪も３体以上あったと考えられる。馬形埴輪についてはさらに１号土坑（第60図）から出土した馬形埴輪の破片２点（表21、第55図1-2）と１号墳68の胎土・焼成などがよく似ており、１号土坑の破片が１号墳の馬形埴輪のものであるとすれば、全部で４体の馬形埴輪が樹立されていたことになる。

１・２号墳の円筒埴輪は外面タテハケの１次調整で川西編年Ⅴ期（川西1978）にあたる。ただし２号墳ではタテハケ後２段目に限って横方向に工具によるナデを施すものが数点あり、ヨコハケではないものの２次調整と考えると１号墳よりも古くみることができる。それぞれから出土している土師器坏をみると２号墳の坏は器形やていねいな放射状ミガキなど、１号墳のものより古い要素をもっている。土師器からみて両古墳は前方後円墳集成畿内編年９期（広瀬1992）であり、およそ６世紀前半と考えられる。２号墳は９期の古いところ、１号墳は９期でも新しいところであり、埴輪の時期とも対応すると考えられる。

行者遺跡と同じ丘陵に連なるすぐ西側には８基の円墳が確認されている高寺古墳群がある。調査が行われた２号墳は埋葬施設が横穴式石室であり、時期が下ることがわかっている。そうするとこの丘陵上に小型の古墳が作られ始めたのは行者２号墳の頃からで、丘陵の東側にある行者遺跡からはじまり、西へと場所を遷し時期を下りながら古墳造営が高寺古墳群まで続いたということであろう。

６世紀前半には、円筒埴輪列だけでなく人物や馬形などの形象埴輪を墳丘平坦面に列状に樹立するようになる。高寺古墳群を含むこの一群においては、古墳群形成の初めから墳丘に埴輪を樹立し、行者１号墳で形象埴輪を含む列状の埴輪配列を採用したと考えられる。



第55図　１号土坑出土遺物実測図

表21　１号土坑出土遺物観察表

番号	埴輪種類	計測値(cm)	焼成	胎土・色調	成形・整形の特徴	注記
1	馬形	残長　13.5×14.0	良好	密　石英・角閃石・長石・白色粒 橙	顔の左側面．外面は丁寧なナデ．内面は下から上に粘土を足して指でナデつけている．	No1
2	馬形	残長　5.4×　7.5	良好	密　石英・角閃石・長石・赤褐色粒・白色粒 橙	飾りたてがみか．外面はナデで整える．端面の仕上げはやや雑．	No1

３号墳　（第56・57図）

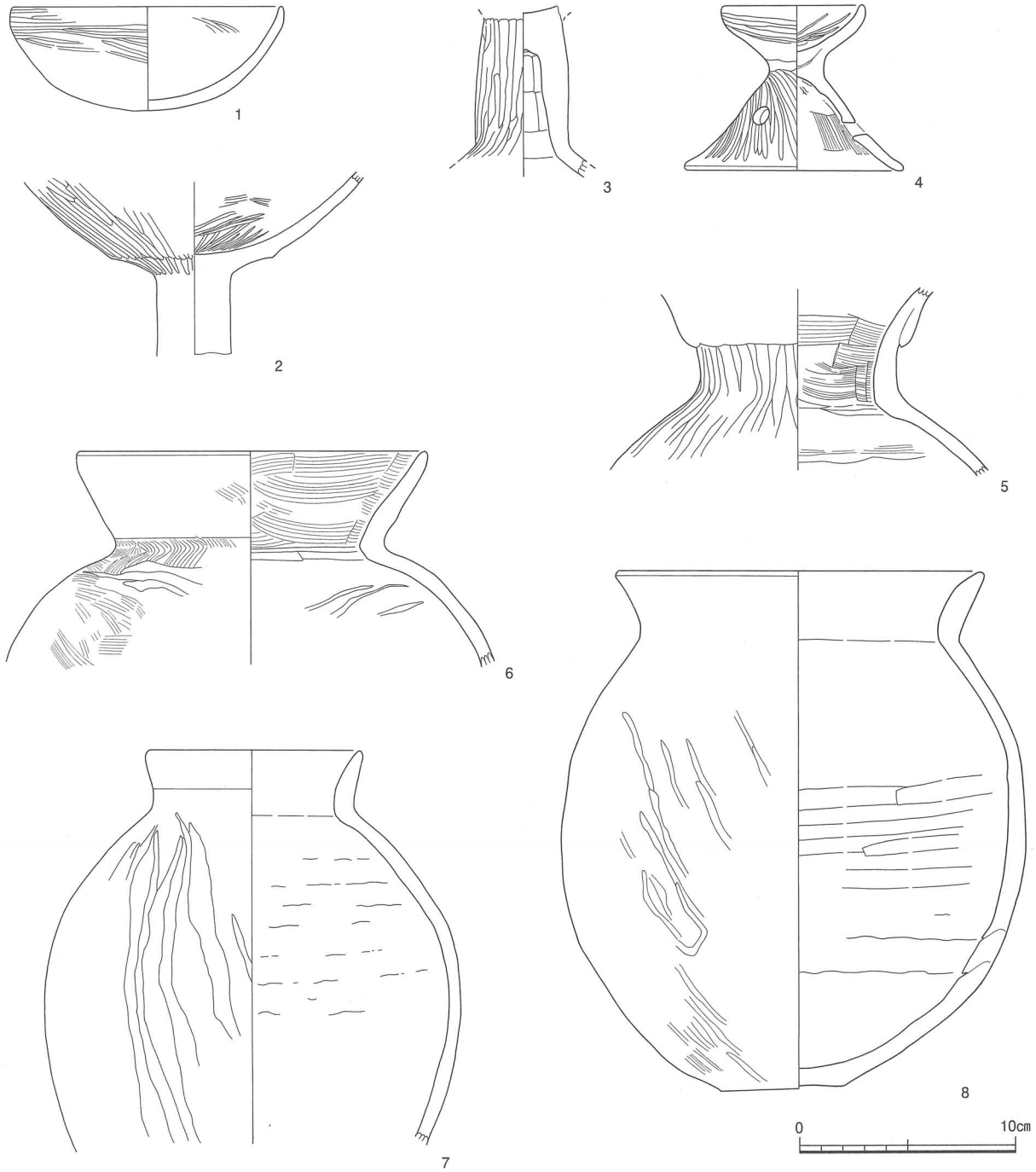
位置　調査区の南西部C1d2グリッドを中心とした位置にある。４号墳の南に隣接している。

墳丘　墳丘直径は10.60m、墳丘は確認面より上部は削平されて残存していない。

周濠　周濠は外縁径12.9m、幅0.7～1.5m、深さ0.07～0.38mで、平面形はほぼ円形である。周濠覆土は２層で、下層は暗褐色土、上層は土師器片を含んだ黒褐色土層である。

出土遺物　周濠南部底面から、土師器の７の壺、８の甕が出土している。

所見　周濠出土土器から、古墳時代前期４世紀代の古墳と考えられる。



第56図　３号墳出土遺物

表22　３号墳出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 鉢	12.4 4.8 －	半球形状の鉢。外面横方向のミガキ、内面斜方向のミガキ。	石英	良好	明赤褐色	
2	土師器 高坏	－ － －	脚部は中実柱状。坏部内外面、脚部ミガキ。全面赤色塗彩。	石英	良好	赤褐色	
3	土師器 高坏	－ － －	脚部片。脚部は柱状で外面ミガキ、内面ヘラケズリ。	長石、石英	良好	にぶい橙色	
4	土師器 小型器台	6.0 7.6 10.1	受け部は鉢のように開いて立ち上がり、端部を上方に向ける。脚部は「ハ」の字状に開き、三方向に円窓を開ける。受け部内外面、脚部外面ミガキ。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色	
5	土師器 壺	－ － －	複合口縁壺の口縁部片。頸部～胴部外面ミガキ。内面横方向のハケナデ。	長石、石英、海綿骨針	良好	橙色	
6	土師器 壺	(16.0) － －	口縁～肩部破片。口縁部は外傾する単口縁。口縁部外面ヨコナデ、内面ハケメ、胴部は内外面ともハケメ後ミガキ。	石英、角閃石	良好	灰褐色～黒色	
7	土師器壺	10.0 － －	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ状のミガキ。	長石、石英	普通	にぶい褐色	
8	土師器 甕	17.0 24.0 5.7	胴部外面ミガキ、内面横位のヘラナデ。	長石、石英、海綿骨針、チャート	普通	にぶい橙色	

４号墳　（第58図）

位置　調査区の南西部C1d2グリッドを中心とした位置にある。３号墳の北に隣接している。

墳丘　墳丘直径は推定11.4m、墳丘は削平されて残存していない。

周濠　周濠は推定外径13.4m、幅1.0～1.8m、深さ0.26～0.38mで、全体の約４/５の範囲を調査で確認したが、残りは調査区外に延びている。周濠覆土は３層で、やや軟らかい暗褐色土層が堆積している。

出土遺物　周濠覆土から１のミニチュア土器の鉢と２の小形坩底部片が出土している。

所見　周濠出土土器は古墳時代前期の土器であり、古墳時代前期４世紀代の古墳と考えられる。

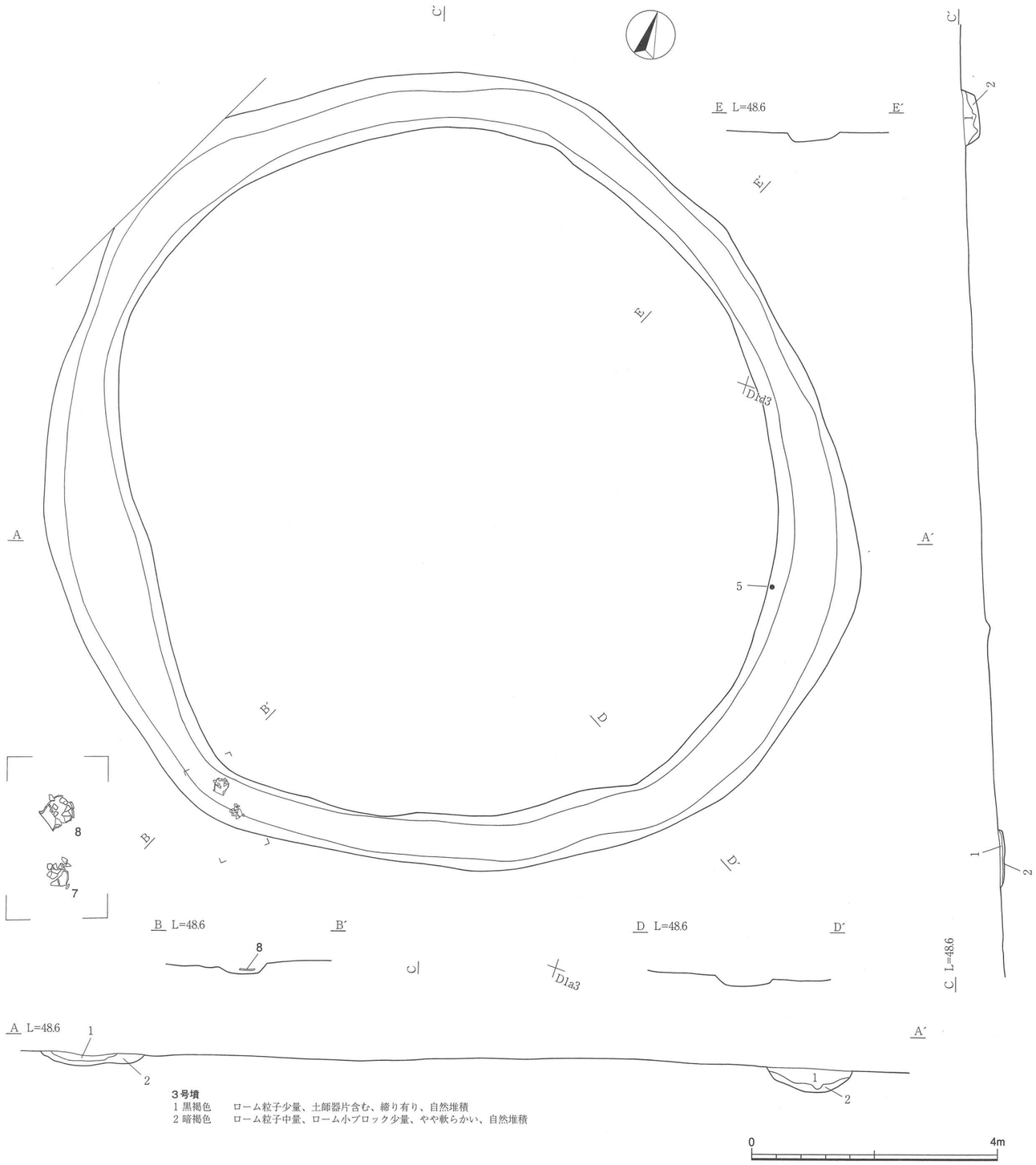
表23　４号墳出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 ミニチュア坩	－ － (1.6)	平底。胴部外面横位ミガキ。	長石	良好	にぶい橙色	
2	土師器 ミニチュア土器	－ － (2.4)	平底。胴部外面ナデ。	長石	良好	にぶい橙色	

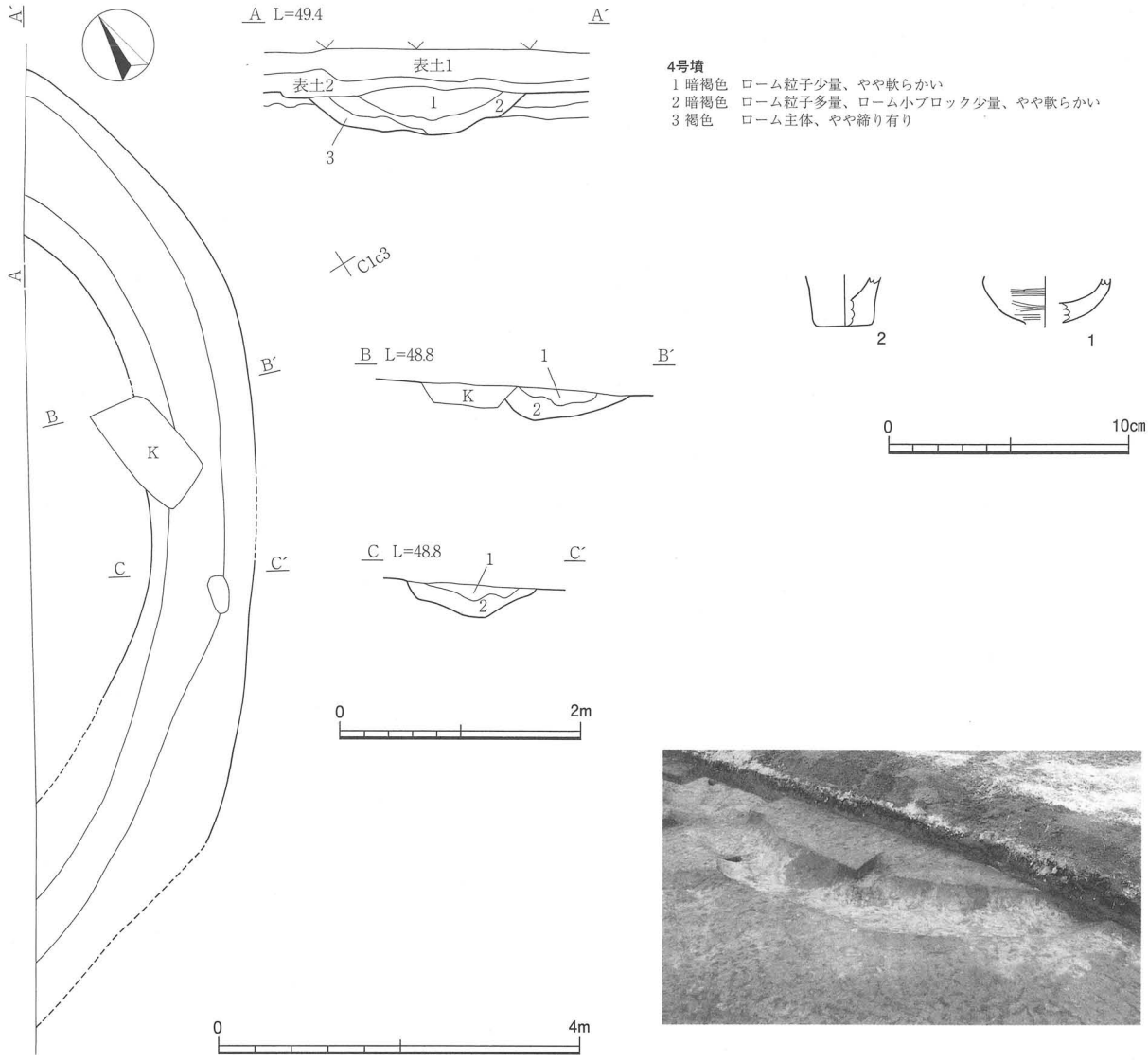
５号墳　（第59図）

位置　調査区の東部C1a1グリッドを中心とした位置にある。４号墳の北側にある。

墳丘　墳丘直径は13.5m、墳丘は削平されて残存していない。


E L=48.6 E´
B L=48.6 B´
D L=48.6 D´
C L=48.6
A L=48.6 A´
3号墳
1 黒褐色　ローム粒子少量、土師器片含む、締り有り、自然堆積
2 暗褐色　ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、やや軟らかい、自然堆積
0 4m

第57図　３号墳



第58図　4号墳

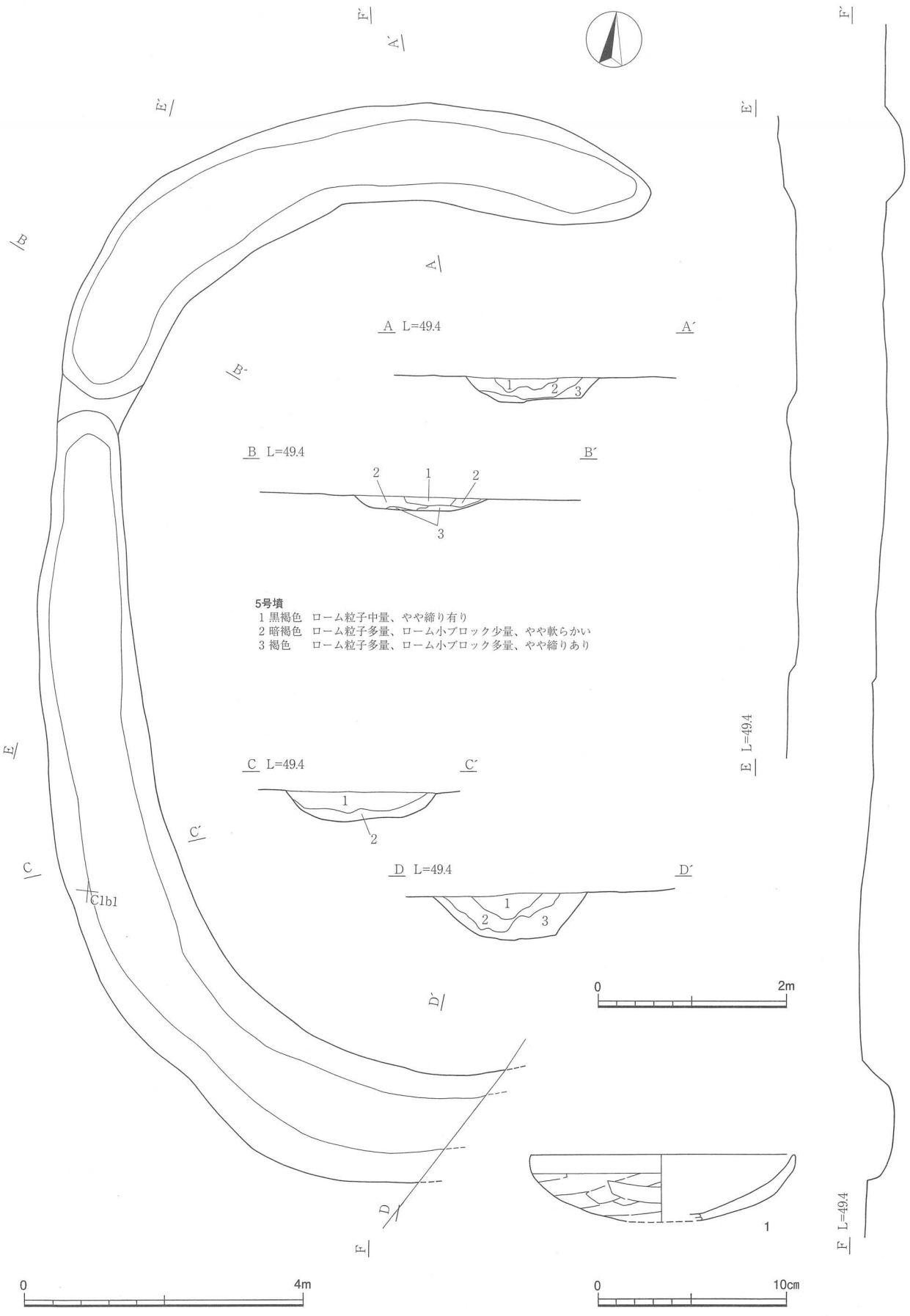
周濠　周濠は外縁径15.4m、幅1.0～1.9m、深さ0.14～0.47mで、全体の約2/3の範囲を調査で確認した。南東側周濠が調査区外に延び、北側周濠が途中で浅くなり途切れてしまっているので墳形は不明である。周濠の北西部が一部ブリッジ状に浅くなっている。周濠覆土は3層で、下層の3層はロームの小ブロックを多量に含む。

出土遺物　周溝覆土から土師器の坏が出土している。

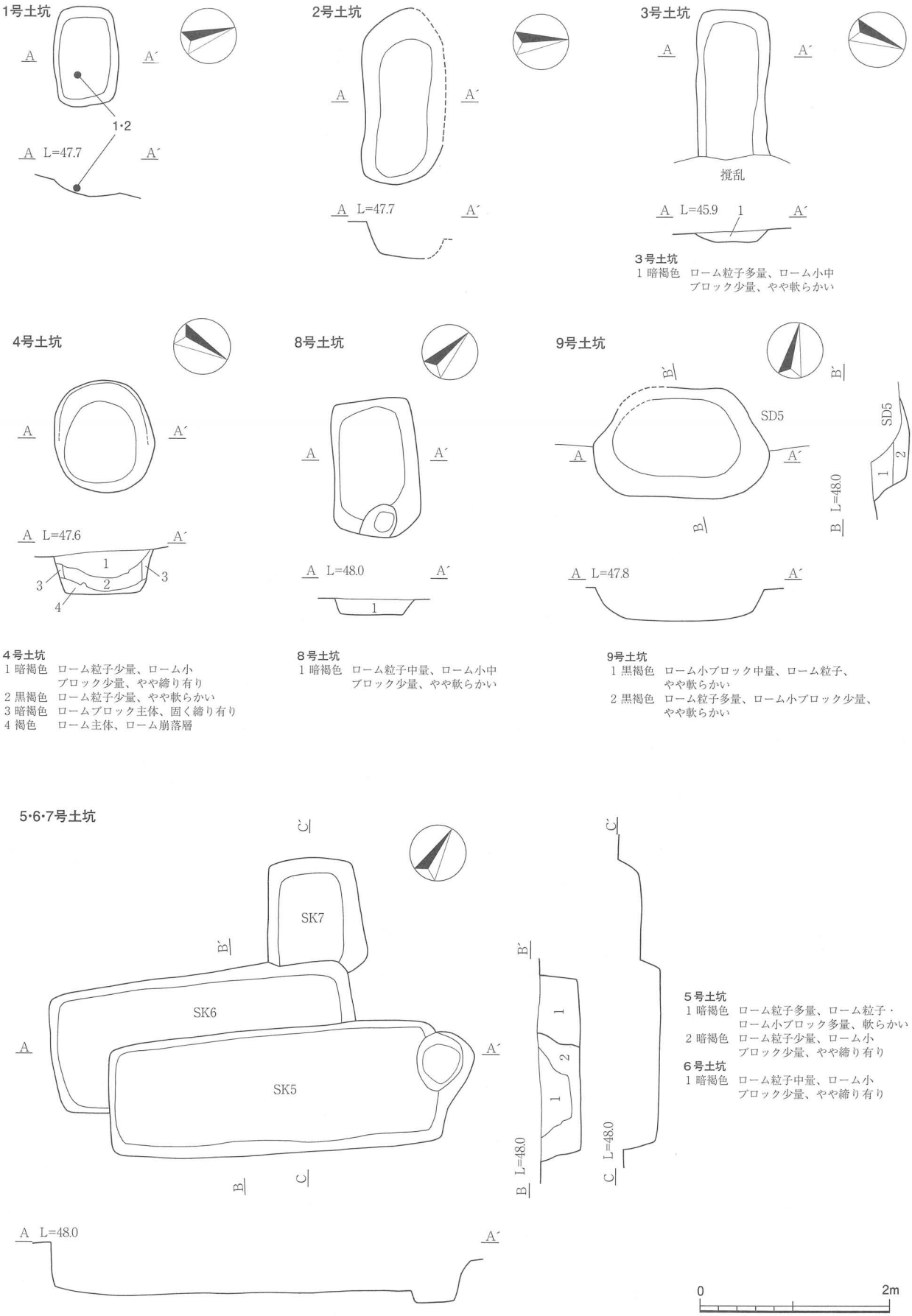
所見　出土遺物1点は古墳時代後期の土器であるが、周溝の東側中央部の上～中層は、近代の撹乱が入っており、撹乱中の混入遺物の可能性もある。

表24　5号墳出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(14.4) － －	丸底坏。口縁部内外面ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	石英、海綿骨針	良好	にぶい黄色	


A L=49.4
A´
B L=49.4
B´
C L=49.4
C´
D L=49.4
D´
E L=49.4
F L=49.4
5号墳
1 黒褐色　ローム粒子中量、やや締り有り
2 暗褐色　ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、やや軟らかい
3 褐色　　ローム粒子多量、ローム小ブロック多量、やや締りあり
C1b1
0
2m
0
4m
0
10cm

第59図　5号墳


1号土坑
A
A´
1・2
A L=47.7
A´
2号土坑
A
A´
A L=47.7
A´
3号土坑
A
A´
撹乱
A L=45.9
1
A´
3号土坑
1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小中
ブロック少量、やや軟らかい
4号土坑
A
A´
A L=47.6
A´
1
2
3
3
4
4号土坑
1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小
ブロック少量、やや締り有り
2 黒褐色 ローム粒子少量、やや軟らかい
3 暗褐色 ロームブロック主体、固く締り有り
4 褐色 ローム主体、ローム崩落層
8号土坑
A
A´
A L=48.0
A´
1
8号土坑
1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小中
ブロック少量、やや軟らかい
9号土坑
B´
SD5
A
A´
B
B L=48.0
SD5
1
2
A L=47.8
A´
9号土坑
1 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子、
やや軟らかい
2 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、
やや軟らかい
5・6・7号土坑
C´
SK7
B´
SK6
A
A´
SK5
B
C
A L=48.0
A´
B´
1
2
1
B L=48.0
C´
C L=48.0
5号土坑
1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム粒子・
ローム小ブロック多量、軟らかい
2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小
ブロック少量、やや締り有り
6号土坑
1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小
ブロック少量、やや締り有り
0
2m

第60図　土坑

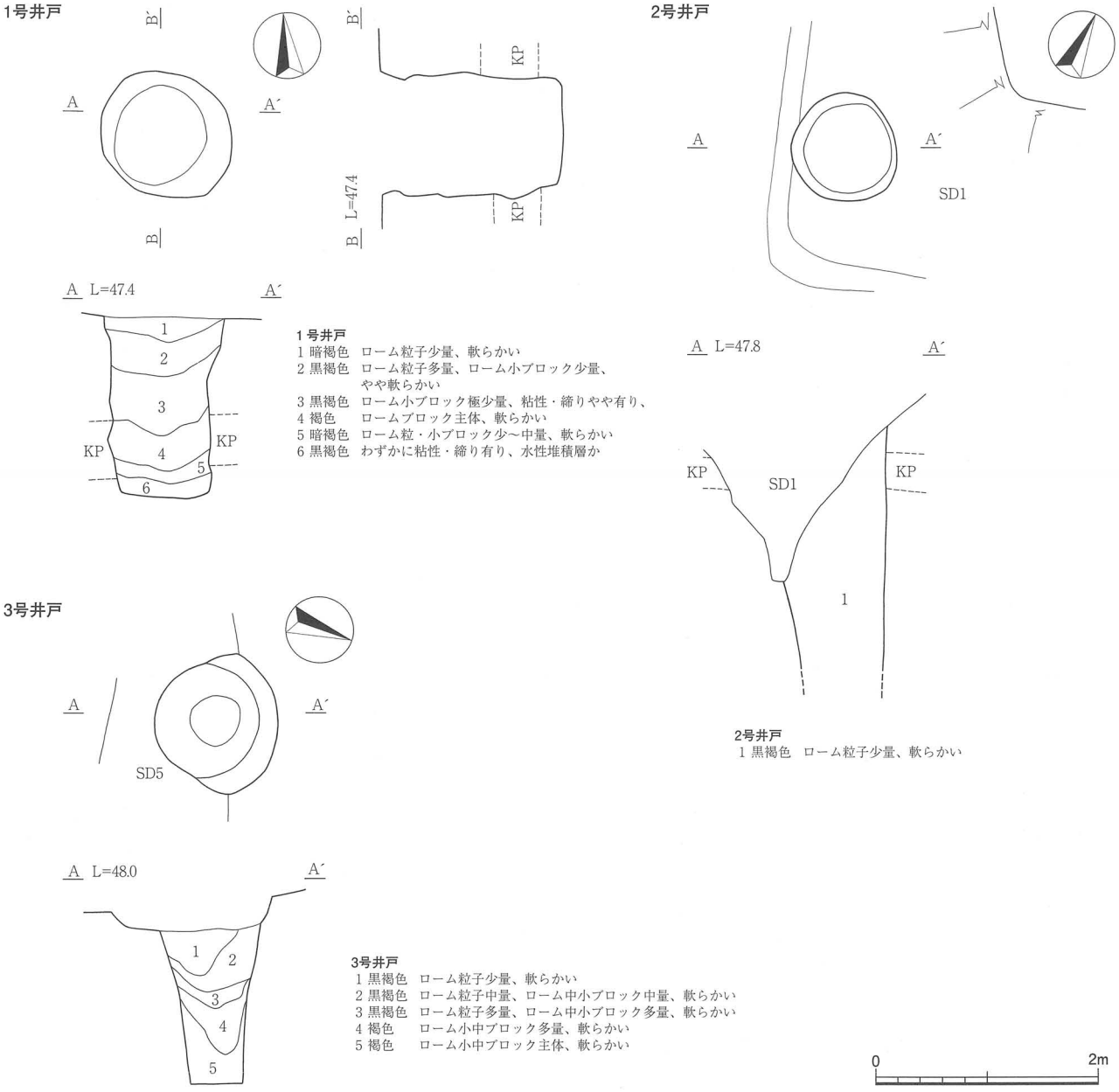
第３節　土坑、井戸、地下式坑

土坑　（第60図）

土抗は調査区内から9基確認されている。１号土坑は、馬形の形像埴輪片（第55図）を出土しており、

表25　土坑一覧表

遺　構　名	位　　置	規　　模　(長径×短径×深さ)cm			備　　考
１号土坑	B2a3	110	74	10	馬形埴輪片出土
２号土坑	B2b2～B2b3	190	86	35	
３号土坑	C2d4	(160)	74	13	
４号土坑	C1d3～C1d4	123	106	47	
５号土坑	B2d2	356	136	46	
６号土坑	B2d2	326	134	46	
７号土坑	B2d2	125	106	28	
８号土坑	B2d2	148	142	18	
９号土坑	D1a2	182	118	32	



第61図　井戸

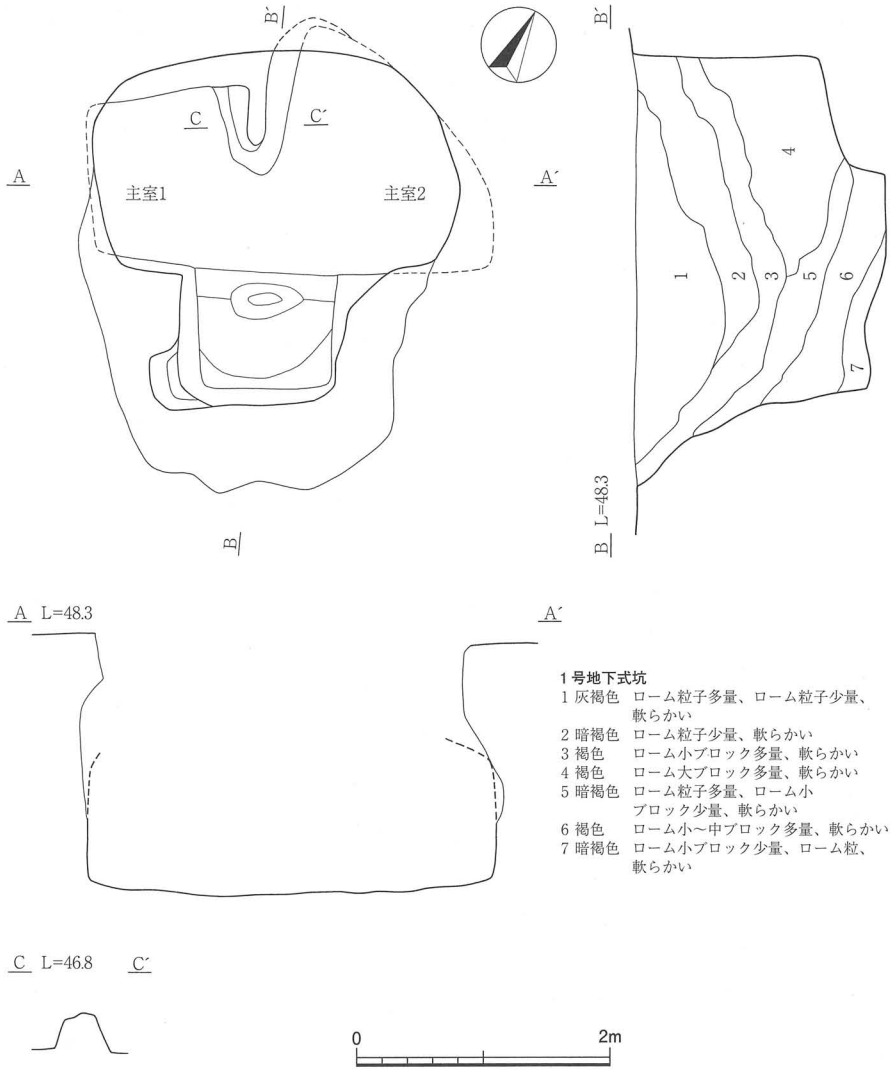
古墳時代の土坑の可能性が考えられる。中央部北西寄りには、長方形の土坑がまとまってあり、覆土のようすから見て中世のものかと思われる。この他の土坑は単独で、分散した状態で確認されており、時期的には近世以降のものと思われる。表25に概要をまとめている。

井戸（第61図）

井戸は調査区の南東部に３基確認されている。３基とも素掘りの井戸で15～23m程の距離をあけて掘られている。出土遺物がないが、２号井戸は１号堀を壊して掘り込んでおり、近世以降の井戸と見られる。表26に概要を掲載している。

地下式坑（第62図）

地下式坑は、１基確認されている。やや大きめの竪坑と天井部の落下している主室は複式構造で、主室の平面形は左側第１主室がほぼ方形、幅110cm、奥行き140cm、開口部幅90cm。右側の第２主室が扇形で、開口部幅100cm、奥行き120～130cmある。床面から天井部までの推定の高さは、壁から天井部へ向かう立ち上がりのよく残存している部分で見ると、いずれも130cm余りとなる。出土遺物は、埴輪片が竪坑覆土上層から、第２主室奥壁際底面から約３cm浮いて、長さ19cm、幅11cm、厚さ８cmの板状の自然礫が出土している。通常見られる主室形態と異なり、地下式坑としてよいかどうか問題はある。天井部の落下層や竪坑側からの埋土の流入、遺物がないこと等、平面形以外は通常の地下式坑と共通している。



第62図　１号地下式坑

表26　井戸一覧表

遺構名	位置	規模（長径×短径×深さ)cm			備考
1号井戸	D1d4	128	108	163	
2号井戸	C1c3	98	90	(220)	
3号井戸	D1a1	102	93	180	

第4節　堀跡・溝跡と盛り土遺構

調査区中央には中世後半代の時期とみられる断面薬研状の規模の大きな堀が南北に走っており、堀の北端部西側には、盛り土遺構が残存している。その他、調査区内からは6条の溝が確認されている。切り合い関係や出土遺物、配置等から近世以降の時期のものを主体としていると見られる。溝は遺構一覧表にまとめている（表27)。

1号堀（第63～66図）

位置　調査区の北西部B1e2グリッドからC1c4グリッドに向かって直線的に45m延び、東へ90°屈曲し約10m延びて再度南東方向に90°屈曲しさらに直線的に38m延び、調査区外へ至る。

規模と形状　全体の長さは調査範囲内で約93m、幅2.5～2.7m、深さ1.9～2.1m、壁面の立ち上がり角度は西側約65°、東側約62°。底面が巾の狭い平坦面をつくる薬研堀である。

ピット　堀の屈曲部から南東へ延びる部分の堀斜面両側から、70基余りのピットが確認されている。柱状のものを傾斜面に立てた穴の跡と見られるが、橋脚や建物柱にしては、十分な深さと企画性が乏しく、何らかの別の施設の痕跡と見られる。

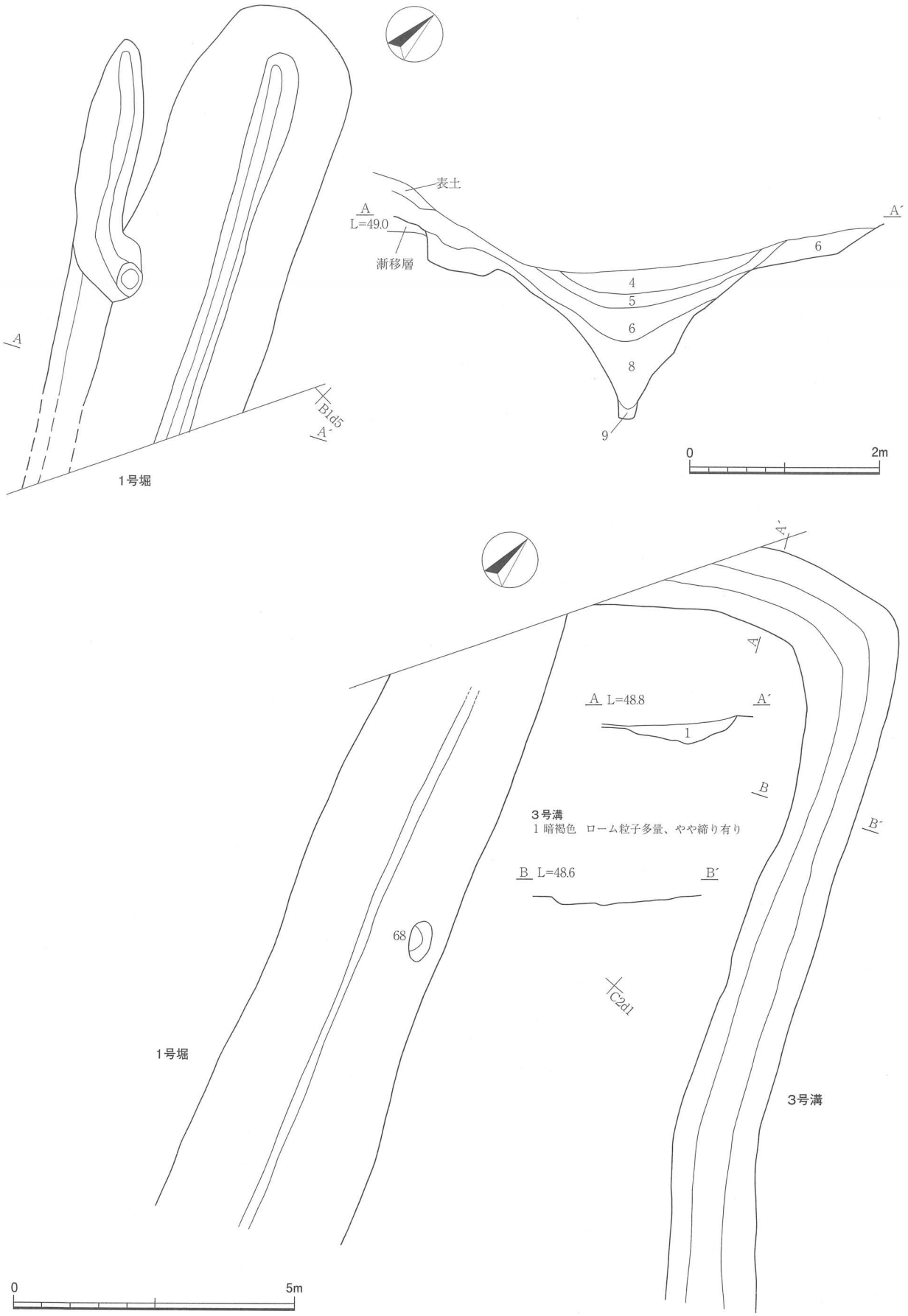
覆土　9層に分かれる。上層の1～4層は暗褐色土層主体、下層は褐色土主体で、6・8層は一時期の埋め戻し層と見られる。

出土遺物　屈曲部の下層の9層から「洪武通寶」が、上層の3層から瀬戸産の陶器皿が出土している。その他に覆土中からは、中世後半代の内耳堝や寛永通寶等近世遺物も出土している。

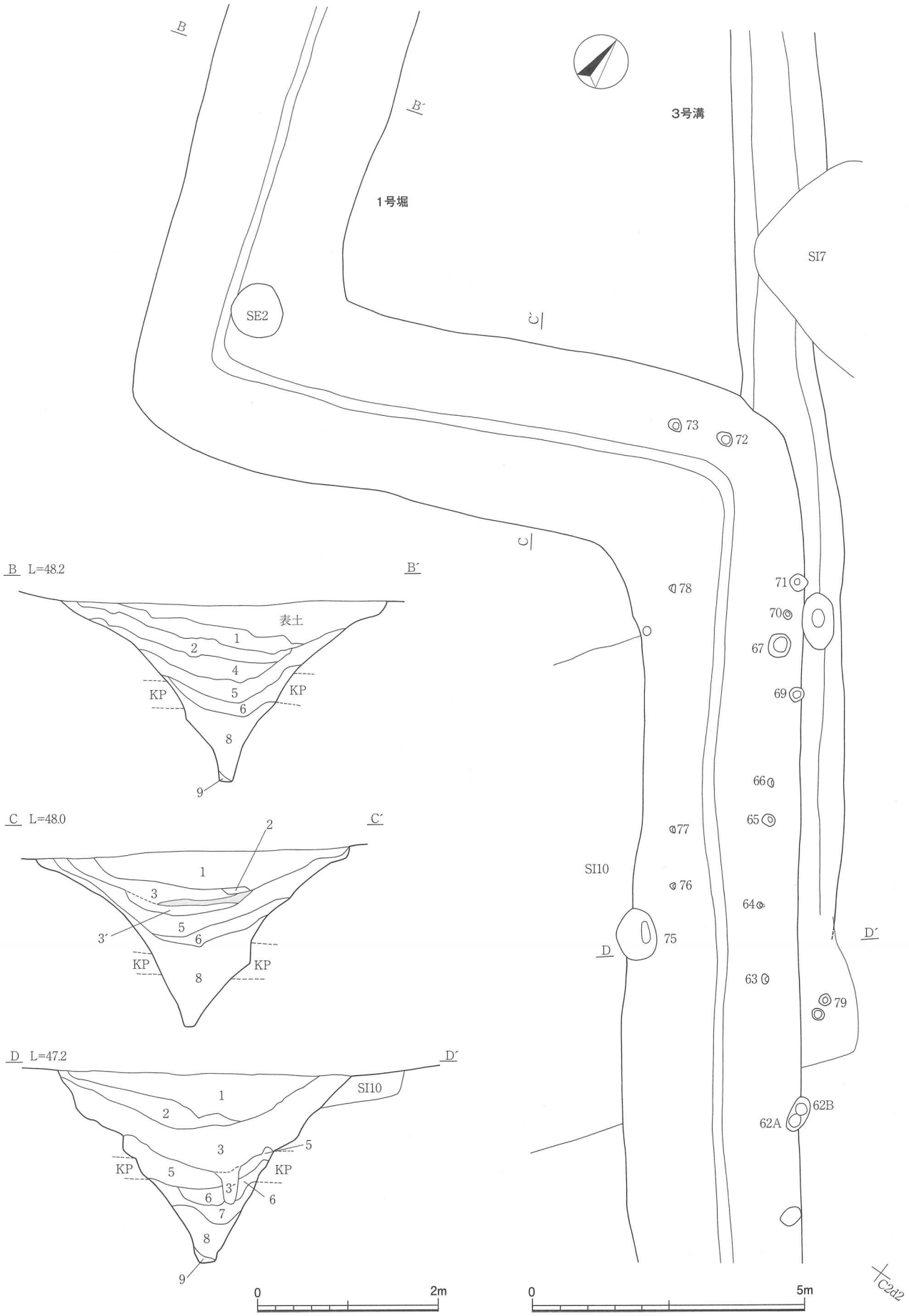
所見　出土遺物から中世後半に掘削され、近世前半頃にはしだいに埋没し、後半代には別の近世の溝が上部に造られていることから完全に埋まっていたものと見られる。形状や出土遺物から戦国期に掘られた防備のための掘り割りと考えられる。堀の南半部の堀傾斜面に穿たれたピットは、図のD—D’土層断面に見られるピット状の穴が同じものとすると、溝を中層まで埋めた後の行為によるものと考えられ、逆茂木のようなものを埋め込んだ跡の可能性も考えられる。

表27　溝一覧表

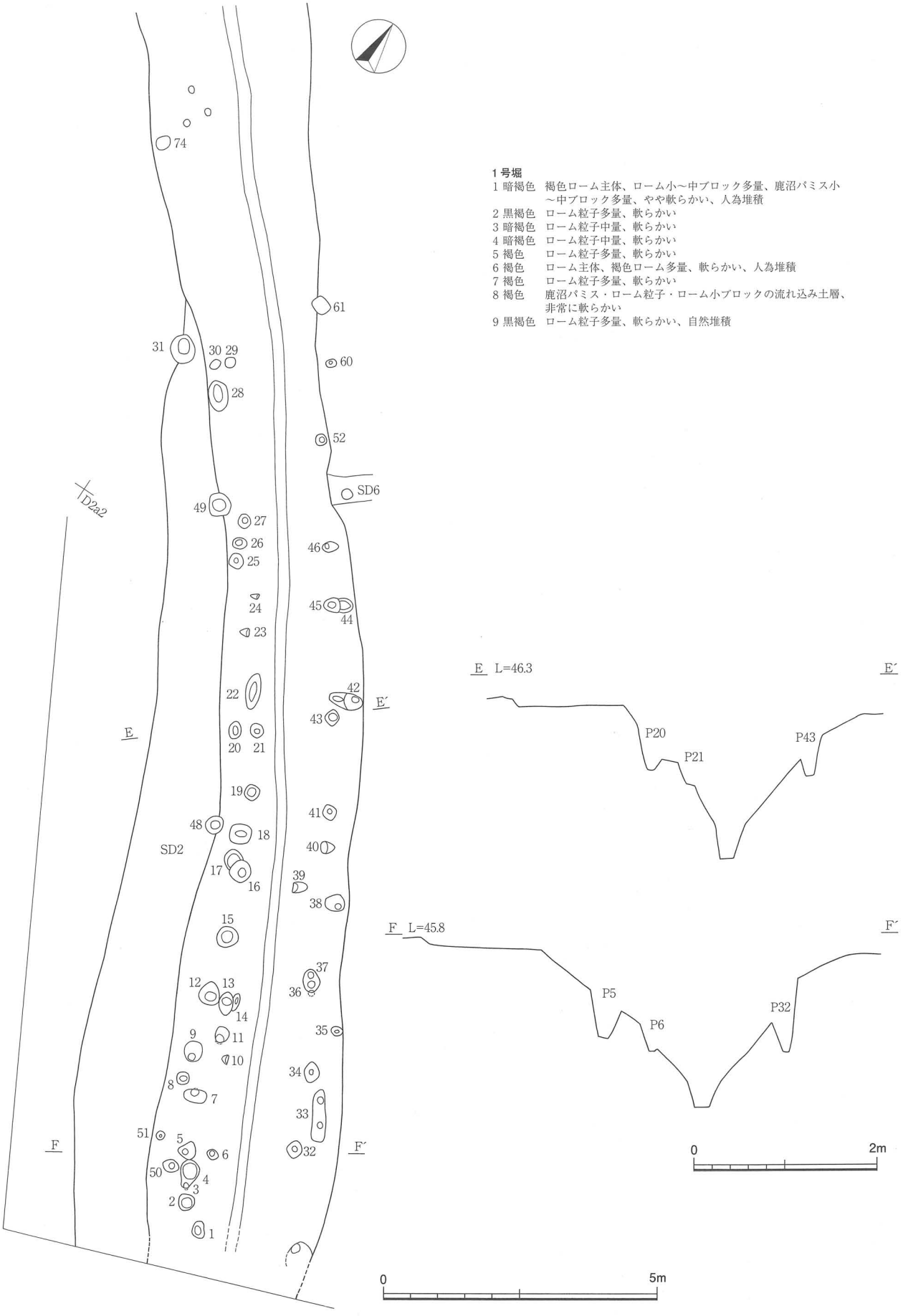
遺構名	位置	規模（長さ×幅×深さ)m			備考
1号溝	—	—	—	—	欠番　1号堀に変更
2号溝	C2d3～D2b2	30	2.20～4.20	0.16	近世～
3号溝	C1a3～C2c1	24.4	1.1～1.7	0.06～0.20	
4A号溝	B1d1～C1d3	12.5＋14.1	0.85～1.95	0.22～0.59	中世か
4B号溝	B1d1～C1b2	15	0.58～0.84	0.22～0.54	中世か
5号溝	D1a2～C1d4	32.5	0.5～1.2	0.27～0.36	
6号溝	C2d2～C2d3	17.1	0.30～0.50	0.1	



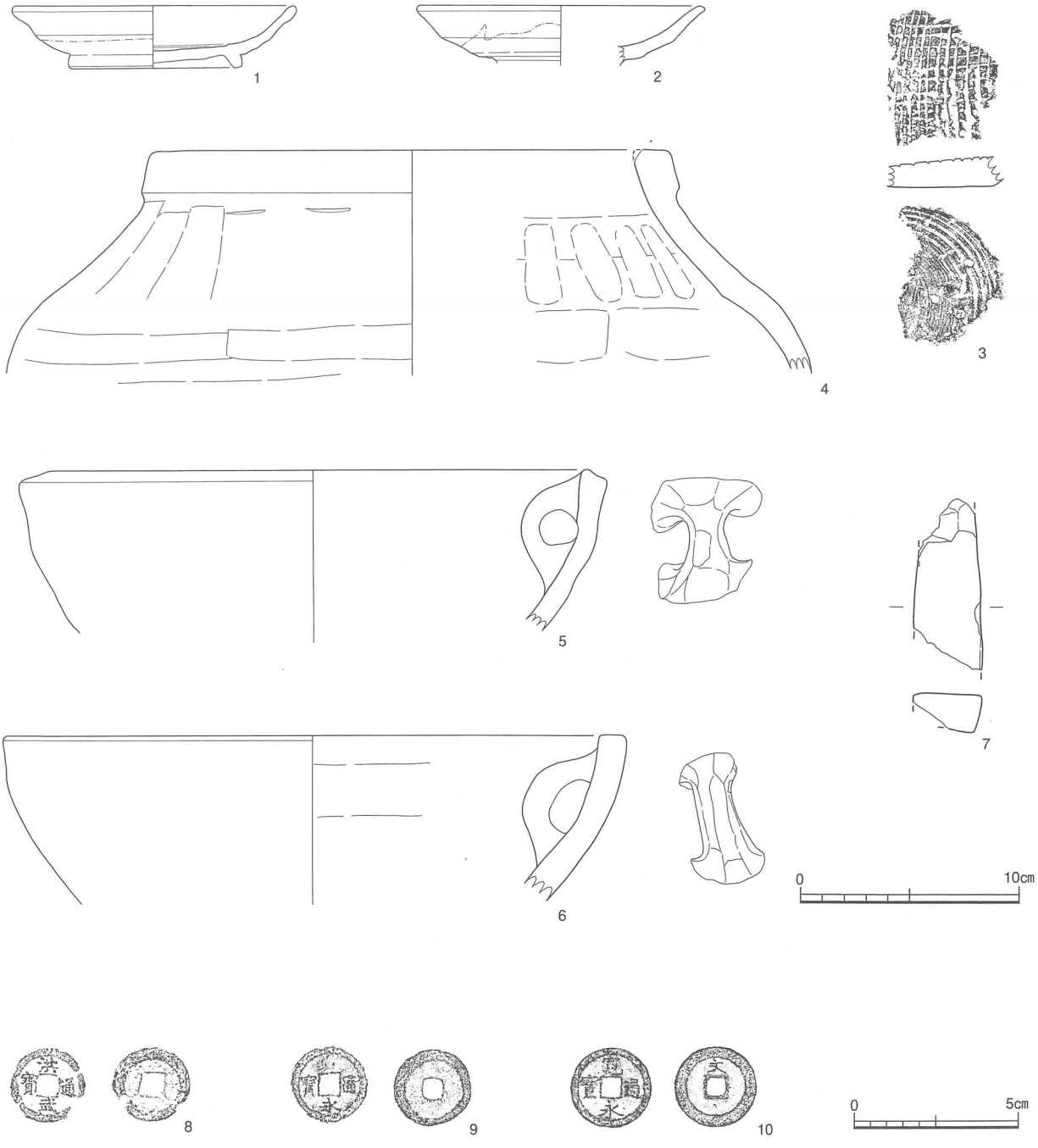
第63図　1号堀（1）・3号溝



第64図　1号堀（2）・3号溝


1号堀
1 暗褐色 褐色ローム主体、ローム小～中ブロック多量、鹿沼パミス小～中ブロック多量、やや軟らかい、人為堆積
2 黒褐色 ローム粒子多量、軟らかい
3 暗褐色 ローム粒子中量、軟らかい
4 暗褐色 ローム粒子中量、軟らかい
5 褐色 ローム粒子多量、軟らかい
6 褐色 ローム主体、褐色ローム多量、軟らかい、人為堆積
7 褐色 ローム粒子多量、軟らかい
8 褐色 鹿沼パミス・ローム粒子・ローム小ブロックの流れ込み土層、非常に軟らかい
9 黒褐色 ローム粒子多量、軟らかい、自然堆積
D2a2
SD2
SD6
E
E´
F
F´
E L=46.3
P20
P21
P43
F L=45.8
P5
P6
P32
0
2m
0
5m

第65図　1号堀（3）



第66図　1号堀出土遺物

表28　1号堀出土遺物観察表

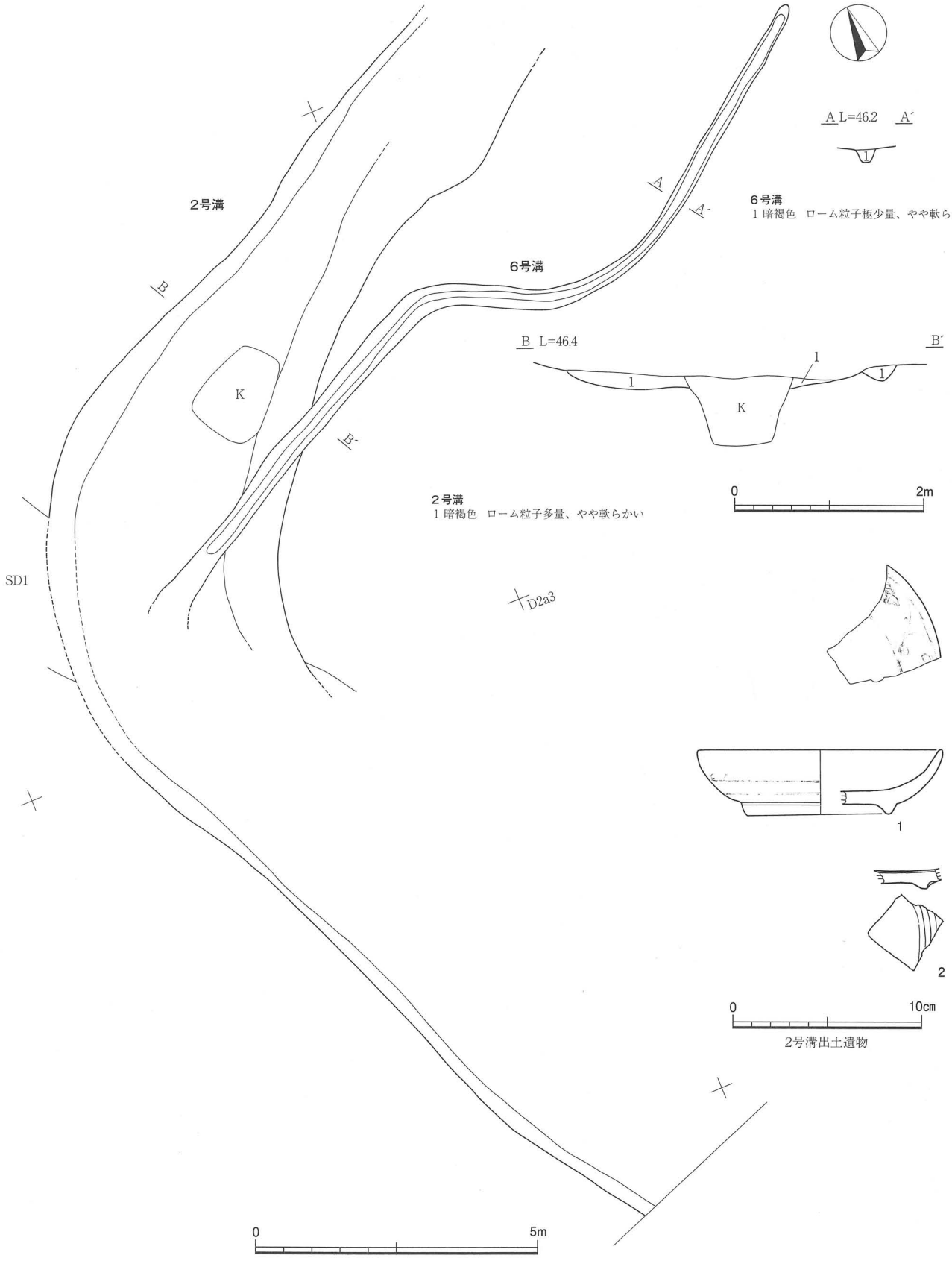
図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	瀬戸 皿	13.3 3.0 7.9	外面中位から内面灰釉掛け、内面重ね焼き高台部釉薬剥離。	長石粒少量	良好	灰白色	
2	陶器 皿	(13.4) － －	外面中位から内面灰釉掛け。	精良	良好	灰白色	
3	瀬戸 卸皿	－ － －	内面卸目、底部外面回転糸切り痕。	長石礫少量	良好	灰白色	

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
4	土師質土器 広口壺	(23.5) － －	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ヘラナデ。	長石、石英、海綿骨針、チャート	普通	灰褐色	
5	土師質土器 内耳堝	(27.6) － －	外面煤付着。	長石、石英	良好	灰白色(内)、黒色(外)	
6	土師質土器 内耳堝	(28.7) － －	内外面煤付着。	長石、石英	良好	黒色	
7	砥石	長[7.9]、幅3.1、厚さ1.8、重48.28g、凝灰岩					
8	洪武通寶	外径2.24、内径0.62、厚さ0.12、重2.08g、1368年～					
9	寛永通寶	外径2.42、内径0.61、厚さ0.08、重1.98g					
10	寛永通寶	外径2.53、内径0.57、厚さ0.11、重2.98g、1668年～、新寛永「文」銭					

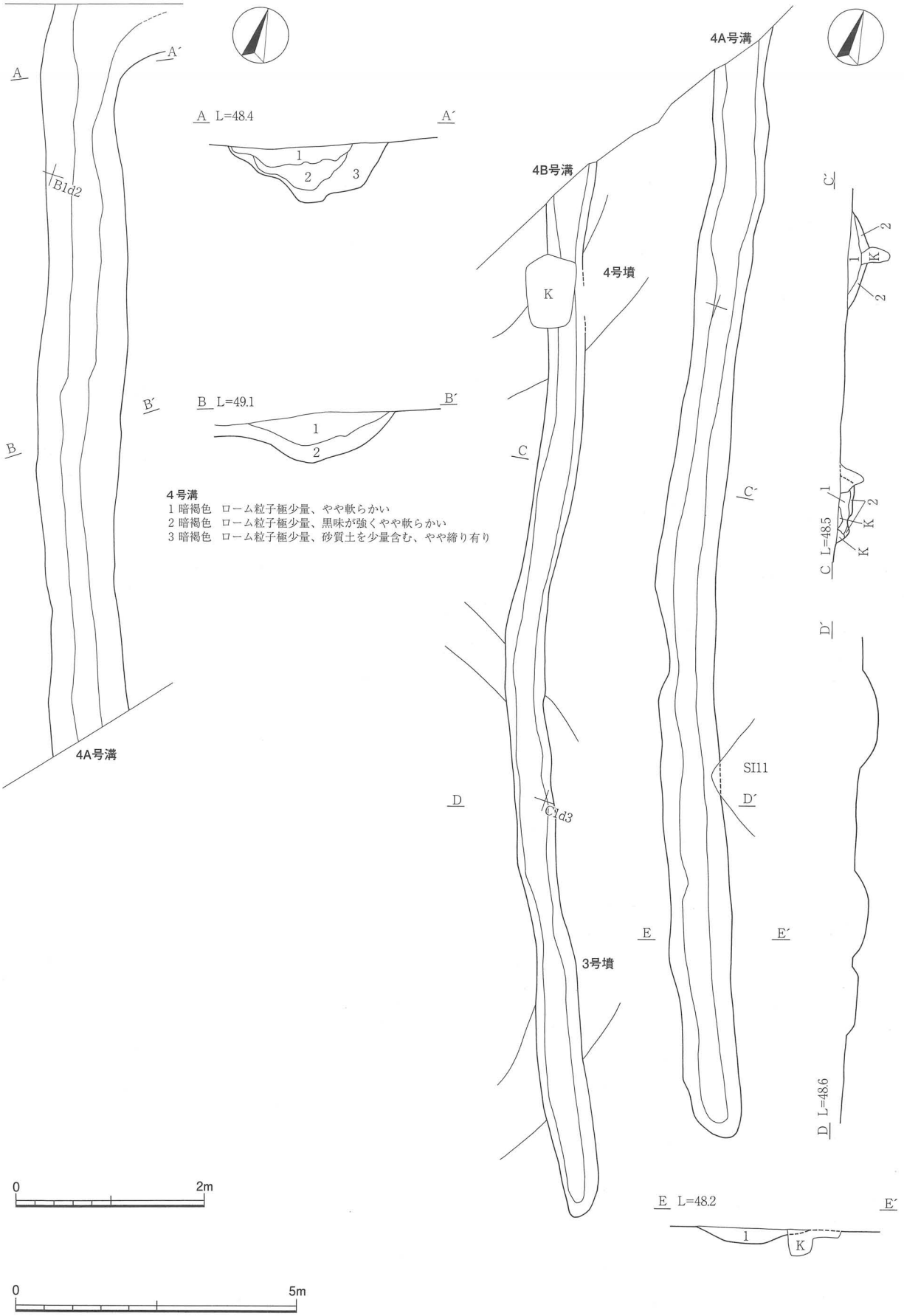
表29　1号堀斜面部ピット一覧表

ピット名	位　置	規模（長径×短径×深さ）cm			備　考
1号ピット	D2b2	31	20	24	
2号ピット	D2a2	30	30	48	
3号ピット	D2a2	16	15	37	
4号ピット	D2a2	37	35	42	
5号ピット	D2a2	32	31	54	
6号ピット	D2a2	19	17	34	
7号ピット	D2a2	42	23	61	
8号ピット	D2a2	23	22	28	
9号ピット	D2a2	34	33	35	
10号ピット	D2a2	17	11	26	
11号ピット	D2a2	29	24	34	
12号ピット	D2a2	43	39	28	
13号ピット	D2a2	42	24	37	
14号ピット	D2a2	31	13	33	
15号ピット	D2a2	39	37	45	
16号ピット	D2a2	43	37	52	
17号ピット	D2a2	39	23	62	
18号ピット	D2a2	39	37	77	
19号ピット	D2a2	32	23	53	
20号ピット	D2a2	33	23	43	
21号ピット	D2a2	27	21	32	
22号ピット	D2a2	63	27	55	
23号ピット	D2a2	18	17	30	
24号ピット	C2d2	15	11	38	
25号ピット	C2d2	30	27	21	
26号ピット	C2d2	27	23	45	
27号ピット	C2d2	27	23	42	
28号ピット	C2d2	57	33	68	
29号ピット	C2d2	21	18	33	
30号ピット	C2d2	21	15	44	
31号ピット	C2d2	55	43	30	
32号ピット	D2a3	33	29	34	
33号ピット	D2a3	95	24	31	
34号ピット	D2a2	41	29	34	
35号ピット	D2a2	19	19	26	
36号ピット	D2a2	29	25	40	
37号ピット	D2a2	24	23	70	

ピット名	位　置	規模（長径×短径×深さ）cm			備　考
38号ピット	D2a2	34	33	67	
39号ピット	D2a2	25	22	51	
40号ピット	D2a2	25	25	19	
41号ピット	D2a2	27	25	27	
42号ピット	D2a2	36	28	57	
43号ピット	D2a2	25	27	44	
44号ピット	C2d2	28	27	32	
45号ピット	C2d2	33	27	35	
46号ピット	C2d2	31	18	38	
47号ピット	D2a3	45	36	52	
48号ピット	D2a2	33	32	13	
49号ピット	D2a2	45	38	32	
50号ピット	D2a2	30	21	－	
51号ピット	D2a2	15	13	－	
52号ピット	C2d2	21	21	－	
53～59号ピット					欠番
60号ピット	C2d2	21	15	10	
61号ピット	C2d2	34	24	20	方形
62a号ピット	C2c1	34	33	47	
62b号ピット	C2c1	33	32	47	
63号ピット	C2c1	19	11	31	
64号ピット	C2c1	10	8	46	
65号ピット	C2c1	23	20	41	
66号ピット	C2c1	17	12	21	
67号ピット	C2c1	45	40	31	
68号ピット	C1b3	72	37	36	
69号ピット	C2c1	27	25	39	
70号ピット	C2c1	19	15	17	
71号ピット	C2c1	30	28	34	
72号ピット	C1b4	32	23	48	
73号ピット	C1b4	30	23	45	
74号ピット	C2d1	26	24	1	
75号ピット	C2c1	97	73	46	
76号ピット	C2c1	13	9	1	
77号ピット	C2c1	12	8	5	
78号ピット	C1c4	17	13	3	
79号ピット	C2c1	19	18	76	


2号溝
6号溝
SD1
K
D2a3
A L=46.2 A´
1
6号溝
1 暗褐色 ローム粒子極少量、やや軟らかい
B L=46.4 B´
1
1
1
K
2号溝
1 暗褐色 ローム粒子多量、やや軟らかい
0 2m
1
2
0 10cm
2号溝出土遺物
0 5m

第67図　2・6号溝

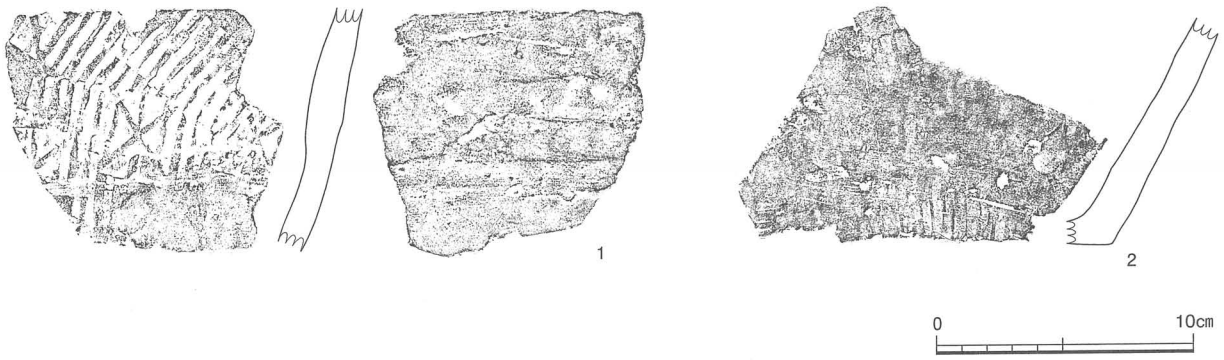


4号溝
1 暗褐色　ローム粒子極少量、やや軟らかい
2 暗褐色　ローム粒子極少量、黒味が強くやや軟らかい
3 暗褐色　ローム粒子極少量、砂質土を少量含む、やや締り有り

第68図　4号溝

表30　２号溝出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	肥前陶器 丸皿	12.9 3.3 7.6	波佐見の五寸皿。見込み二重圏線内に菊唐草文。高台内に一重圏線。	緻密	良好	灰白色	
2	陶器 皿	－ － －	底部小片。白濁色の志野釉掛け。	緻密	良好	灰白色	



第69図　４号溝出土遺物

表31　４号溝出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	常滑 甕	－ － －	外面平行叩き、「×」文スタンプ押印。	長石礫、黒色鉄分粒	良好	灰色	4A号溝 （北側）
2	常滑 甕	－ － －	外面平行叩き。	長石礫	良好	灰色	4A号溝 （北側）

盛り土遺構　（第71図）

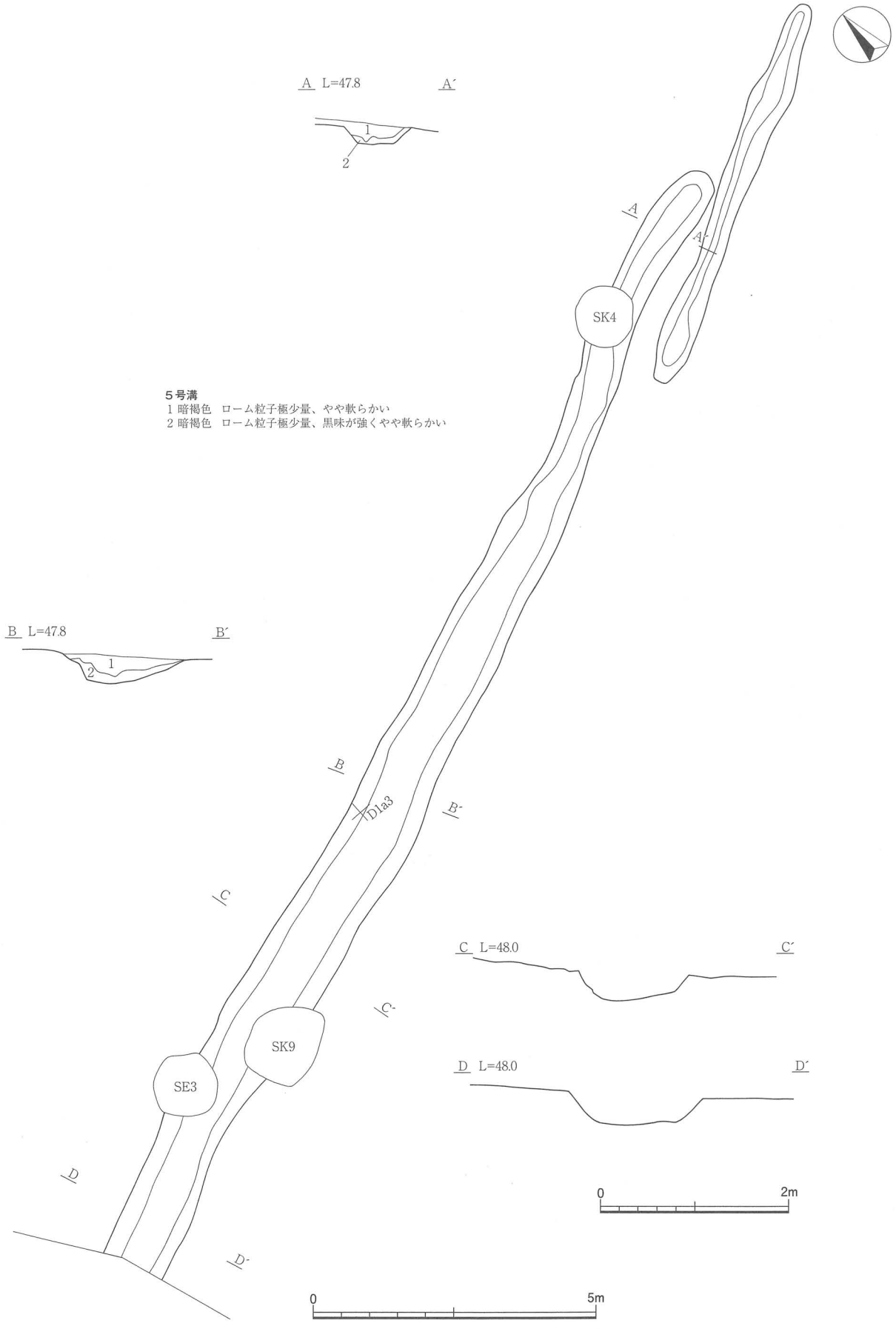
位置　調査区の東部B1d2グリッドにある。１号堀北端部の西側にある。4A号溝を埋めて盛り土がされている。

規模　南北方向12m、東西方向5.0m、高さ1.2m。東側が緩やかで、西側は堀のラインに沿うように傾斜角度がある。

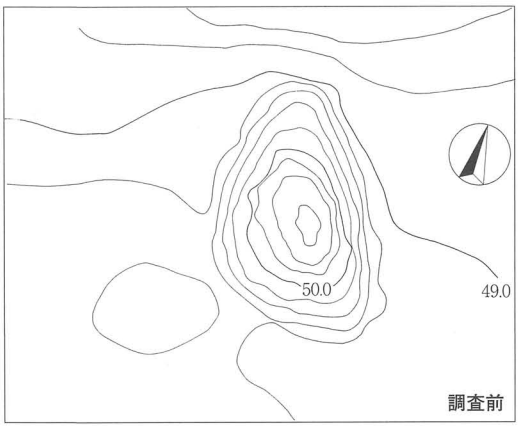
盛り土の堆積状況　表土を含めず、大きく３枚の盛り土層（１～３層）とその下に盛り土構築前の旧表土層（4層）、その下に４号溝を埋める堆積層（５・６層）がある。

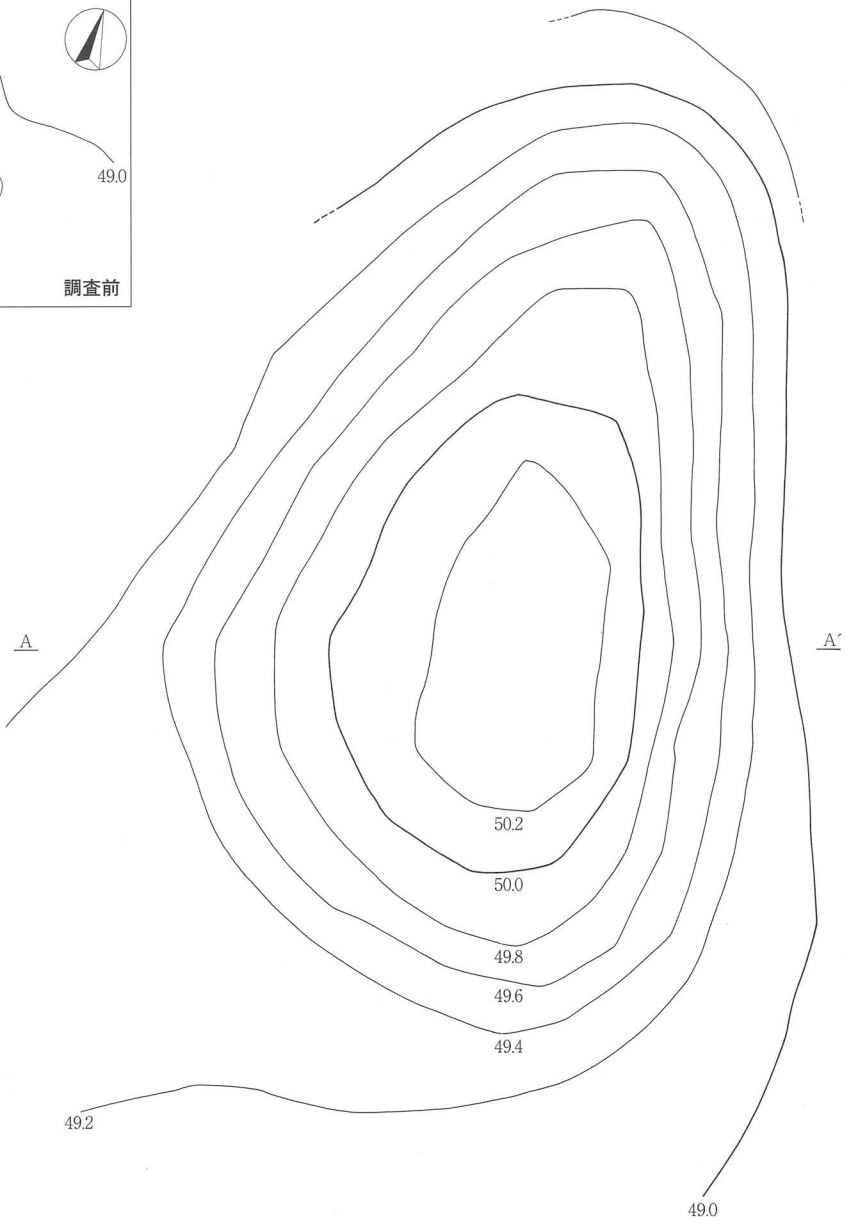
出土遺物　盛り土表土層から土師質土器の小皿片が２点出土している。

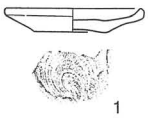
所見　１号堀の北端部にあり、堀に伴う土塁の残存とも考えられたが、表層から出土したかわらけの年代観が近世前半頃と見られる。そのため近世前半頃の盛り土遺構で、近世の時期に塚のようなものとして新たに造られたと考えられる。


A L=47.8
A´
1
2
A
A´
SK4
5号溝
1 暗褐色 ローム粒子極少量、やや軟らかい
2 暗褐色 ローム粒子極少量、黒味が強くやや軟らかい
B L=47.8
B´
1
2
B
D1a3
B´
C
C´
SK9
SE3
C L=48.0
C´
C´
D L=48.0
D´
D
D´
0
2m
0
5m

第70図　5号溝



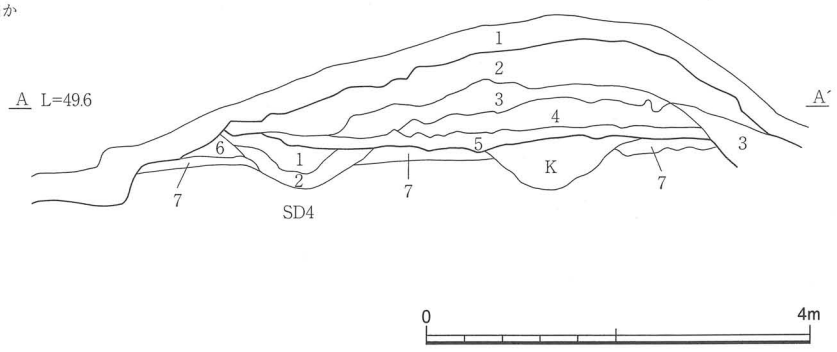




盛り土遺構出土遺物

盛り土遺構

1 暗褐色　表土層、植物根が密集し非常に軟らかい
2 褐色　　ローム主体、軟らかい
3 褐色　　ローム小・中ブロック多量、やや軟らかい
4 暗褐色　ローム粒少量、やや軟らかい
5 暗褐色　ローム粒少量、やや締り有り
6 暗褐色　ローム粒少量、やや締り有り、旧表土に相当か
7 褐色　　ローム漸移層



第71図　盛り土遺構

表32　盛り土遺構出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師質土器 小皿	5.5 1.0 2.8	底部回転糸切り。口縁部で肥厚する小形で浅身の器形。ロクロ右回転。	石英	良好	にぶい褐色	
2	土師質土器 小皿	－ － 3.8	内外面摩耗。底部ヘラケズリか。	石英	良好	浅黄橙色	

第５節　遺構外遺物

縄文土器は遺構外遺物（１）の中の第72図に、その他の時期の遺物は、土器、石器、金属製品と種別毎に遺構外遺物（２）として第73図に掲載している。

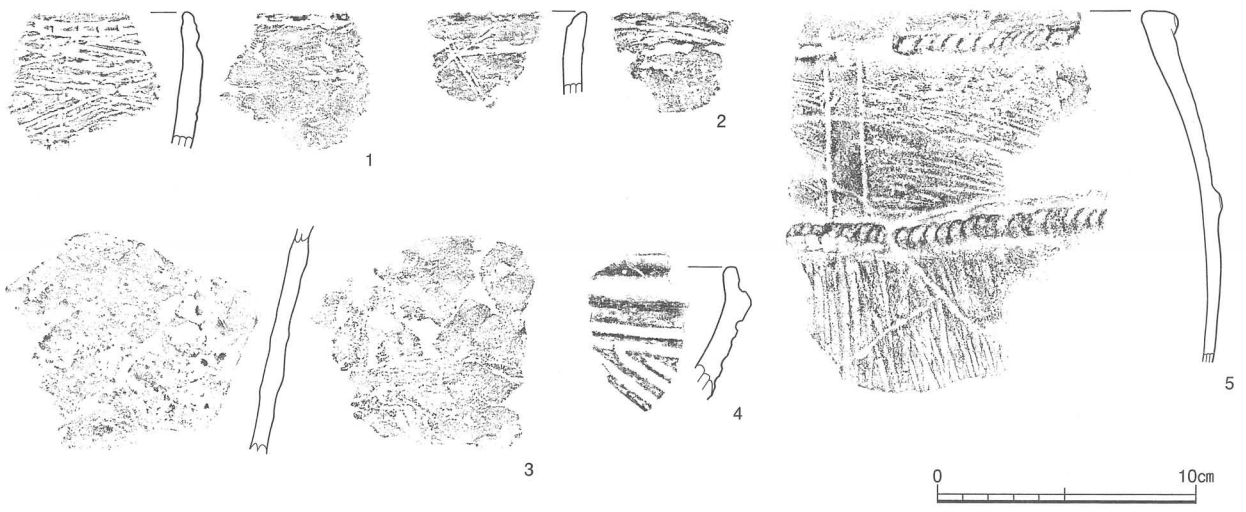
縄文土器

１～３は前期黒浜式土器で、１の口縁部は、爪形文と羽状構成の撚糸文が施されている。４は堀之内１式の口縁部、５は安行２式土器の粗製深鉢である。

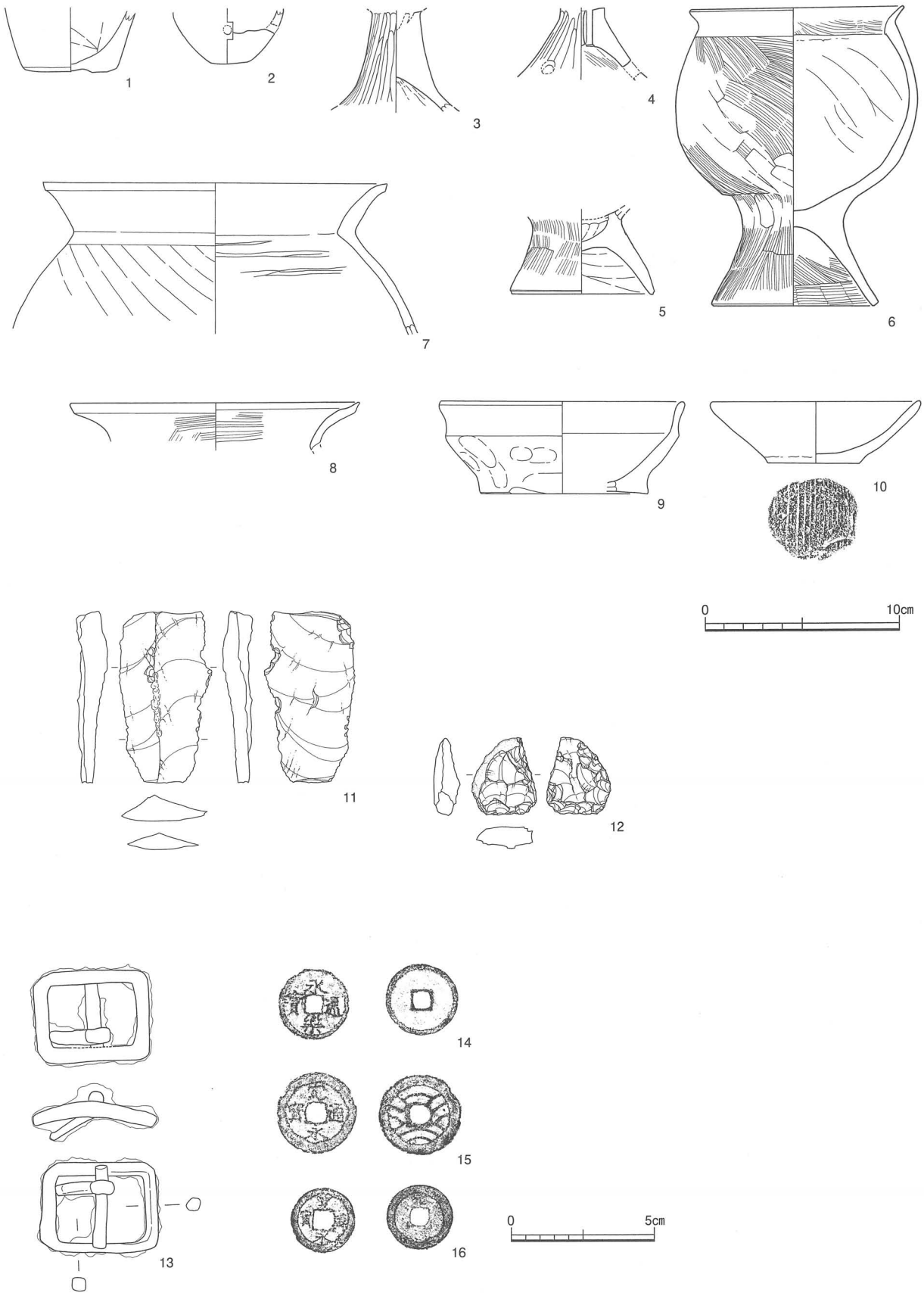
その他の時期の土器

第73図の１～８は古墳時代前期の土器、７・８の甕は口縁部に面取りを行っている。９は体部調整に指頭痕を残し、手捏ね土器の範疇に入る古墳時代後期の坏か。10は、中世のかわらけで、底部は回転糸切り後板目圧痕が付く。11の瑪瑙製の削器は、２号墳の表土から出土したものである。両設打面石核から剥離した縦長剥片を素材とし、打面側と縁端部を接断し、微細な剥離痕を残す２次加工が認められる。石材や剥離技術などから旧石器時代のものと思われる。

12のチャート製の石鏃未製品は２号墳周溝覆土上層から出土したもので、縄文時代のものと考えられる。金属製品では、鉄製の鉸具が２号墳の墳丘表土から出土している。表土からは、永楽通寶、寛永通寶も出土している。



第72図　遺構外出土遺物（１）



第73図　遺構外出土遺物（2）

表33　遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別・器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 ミニチュア鉢	－ － 4.8	外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英	良好	にぶい橙色	
2	土師器 ミニチュア壺	－ － 1.8	胴部外面ナデ、下半部に焼成前穿孔による小孔あり。	長石、石英	良好	にぶい橙色	
3	土師器 小型高坏	－ － －	体部外面ミガキ、脚部は中実で裾部は強く開く。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい橙色	
4	土師器 小型器台	－ － －	脚部片。脚部外面ミガキ・赤彩、内面ハケメ。三方向に円孔が開く。	長石礫、石英、海綿骨針	良好	にぶい橙色	
5	土師器 小型台付甕	－ － 7.4	脚部片。脚部外面ハケメ、内面ヘラナデ。胴部との接合部内面指ナデ。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい黄橙色	
6	土師器 小型台付甕	(11.0) 15.5 8.0	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケメ。胴部～脚部外面ハケメ、胴部内面ヘラナデ、脚部内面ハケメ。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色	
7	土師器 甕	(17.8) － －	口縁～胴上部破片。口縁部は外反し、端部に僅かに外傾する平坦面を持つ。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラナデ、内面ミガキ。	石英、長石礫、海綿骨針	良好	明黄褐色	
8	土師器 甕	(15.0) － －	口縁部破片。口縁部は強く外反し、端部を摘まみ、外面に面取りする。口縁部内外面ハケメ。	長石	良好	橙色	
9	土師器 坏	(12.8) － (8.6)	口縁部ヨコナデ。体部指ナデ、指オサエ。底部ヘラケズリ。	微砂粒	良好	外面明黄褐色、内面黒褐色	
10	土師質土器 小皿	10.9 3.2 4.6	底部回転糸切り、後板目圧痕。	石英、角閃石、海綿骨針	普通	外面浅黄色、内面暗灰黄色	
11	削器	長さ6.0、幅3.2、厚さ1.05、重13.79g、瑪瑙製					
12	石鏃未製品	長さ2.72、幅2.25、厚さ0.89、重5.39g、チャート製					
13	鉄製品鉸具	長さ4.0、幅3.15、厚さ0.85、重19.80g					
14	永楽通寶	外径2.42、内径0.57、厚さ0.11、重2.73g、1411年～					
15	寛永通寶	外径2.84、内径0.64、厚さ0.1、重4.926g、銅四文銭、1769年～					
16	寛永通寶	外径2.30、内径0.62、厚さ0.1、重2.29g、「元」字銭、1741年～					

第Ⅴ章　総括

旧石器～縄文時代の遺構は検出されなかったが、表土からナイフ形石器、縄文土器では前期前半の黒浜式土器、後期の堀之内式土器、加曾利Ｂ式土器が出土している。

行者遺跡から確認された遺構は、住居跡は弥生時代後期１軒、古墳時代前期から古墳時代中期初め５軒、奈良・平安時代３軒、時期不明２軒である。古墳は前期が２基、後期が２基、不明１基である。土坑は古墳時代後期の可能性のあるもの１基、中近世以降のもの８基である。堀は中世１条で、堀に伴うと思われるピット53基が確認されている。溝は中・近世５条、井戸は近世３基である。

弥生時代後期の１号住居跡からは、十王台式土器と炭化した椎の実が出土している。

古墳時代前期には、径約12mの規模の小円墳が少なくとも２～３基、遺跡の西寄りに造られている。同じころ竪穴住居からなる集落も始まり、古墳が南北方向に並び、その東側の空間に集落が展開している。

古墳時代前期～中期初め頃の集落の住居跡では、一辺8.5mの大型住居（10号住）があり、この地域の最大規模の住居跡と思われる。この他の住居跡は、主柱を竪穴床面に立てない簡易な構造の住居である。出土遺物は土師器、土製品、鉄製品があり、ほとんど住居跡からの出土である。前期古墳の周溝内から、土師器の甕と壺が出土しているが、集落からの廃棄土器かと思われる。古墳時代中期初め頃の３号住居跡では、覆土上層から短冊型鉄斧とヤリガンナ片が出土している。短冊型鉄斧は古墳の埋葬施設から発見される例が多く、竪穴住居跡から出土した例は非常に珍しい。

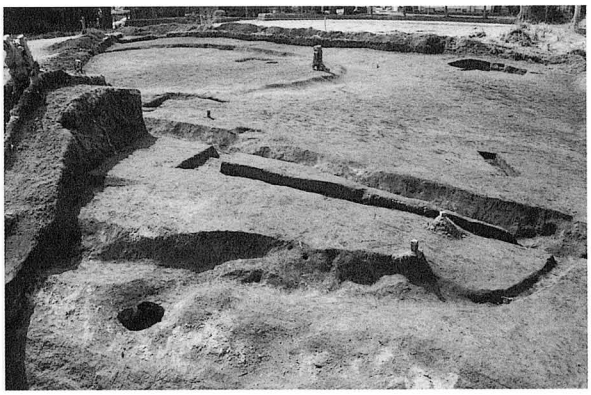
古墳時代中期から後期の初めにかけては、遺物も遺構もほとんど見られない。古墳時代前期の11号住居跡は、廃絶後埋め戻されることなく放置され、自然埋没し窪地の状態であったようである。そこに須恵器の中型甕が細片化して廃棄されている。須恵甕は、６世紀頃のものと見られる。

６世紀前半頃になると、遺跡の東側に埴輪を伴う墳丘直径20m弱の円墳２基が造られる。先に造られたのは２号墳で、赤褐色を呈する２条３段の円筒埴輪を樹立していた。続いて築造された１号墳は前方後円墳である可能性も否定できない。周濠底から土師器坏がほぼ完形で出土している。埴輪は３条４段の円筒埴輪のほか、形象埴輪（人物・馬形）が見つかっている。これら２基の古墳は、同じ丘陵に占地する高寺古墳群の一部を構成すると考えてよく、時期的には先行するものである。古墳から少し離れた北東側斜面の肩部付近に小型の土坑があり、ここから馬形埴輪片が２片出土している。

奈良・平安時代の住居跡は、９世紀前葉頃、９世紀後葉頃、10世紀前葉頃のものが１軒ずつあり、同じ時期の集落は北側の谷を挟んだ寺上遺跡に集中して在るので、集落としては寺上遺跡の集落の周縁部に当たるのかもしれない。奈良・平安時代の出土遺物では、５号住居の須恵器の盤に『刀良』と読める墨書文字が記されており人物名と思われる。

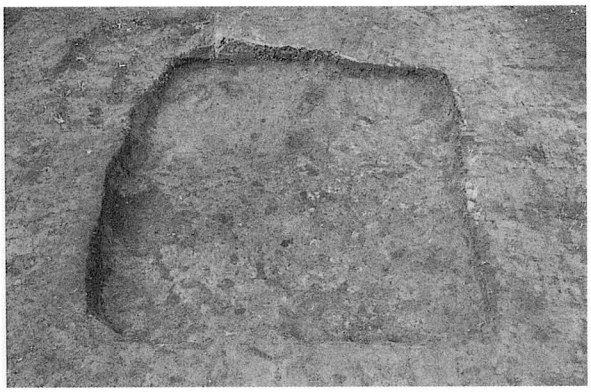
その後、中世には地下式坑が１基つくられ、台地中央には、台地を東西に分断する、薬研堀が掘削されている。地下式坑は主室が複室構造で方形と扇形の平面形に特徴がある。薬研堀は、底面が狭小で16世紀頃の掘削と考えられ、堀底から洪武通寶が出土している。堀は17世紀には埋め戻されていることが瀬戸・美濃皿等の出土遺物から判明している。戦国時代地域の中核となっていた小原城との関連が考えられる遺構となるものと思われる。

写　真　図　版

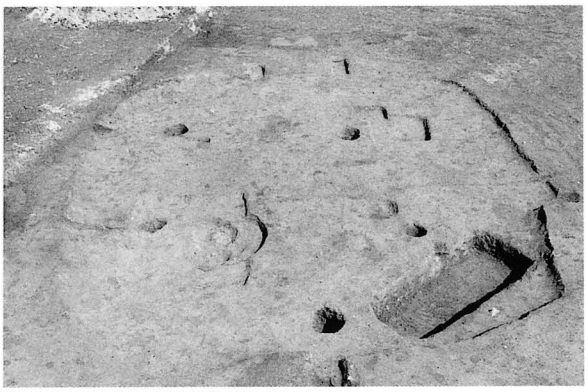


北部全景（北から）

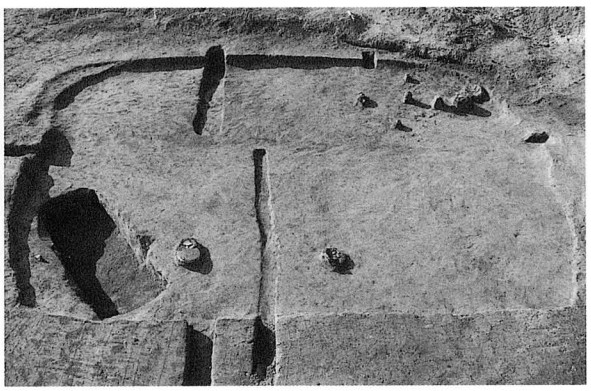
南部全景（西から）



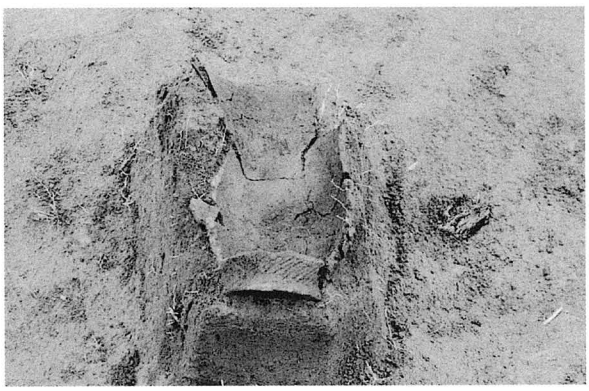
1号住居跡



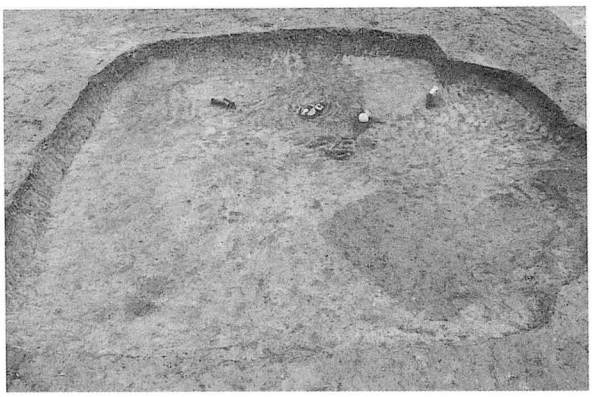
2号住居跡



2号住居跡遺物出土状況



2号住居跡出土遺物



3号住居跡遺物出土状況

3号住居跡遺物出土状況（短冊形鉄斧）

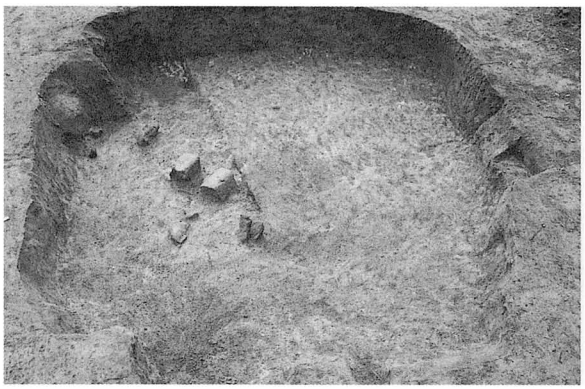
3号住居跡遺物出土状況

3号住居跡掘り方

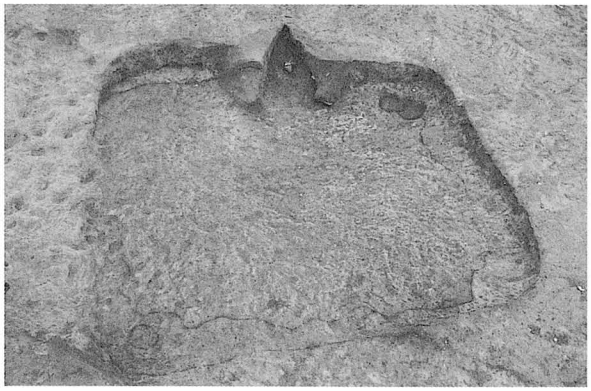
4号住居跡

5号住居跡

5号住居跡カマド



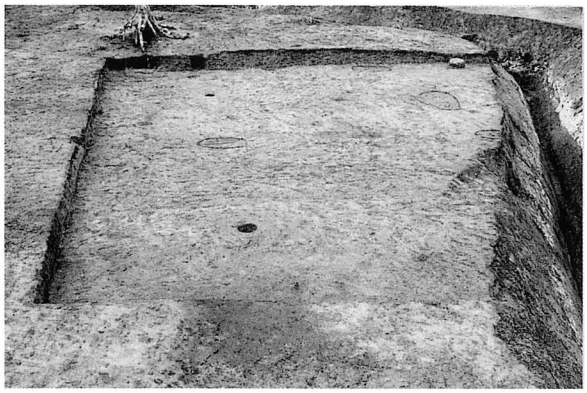
6号住居跡遺物出土状況



7号住居跡

7号住居跡掘り方

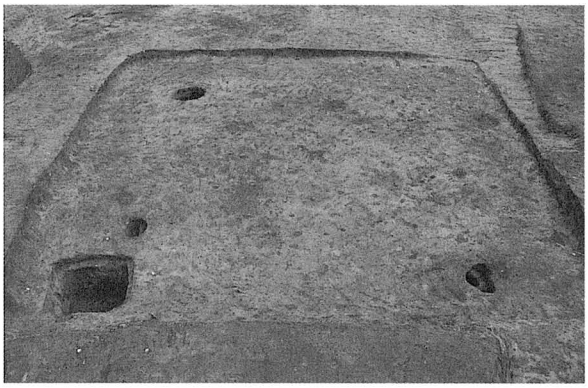
8号住居跡



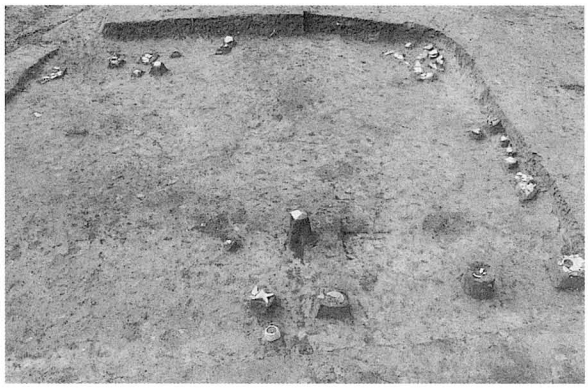
10号住居跡

10号住居跡炉

10号住居跡貯蔵穴



11号住居跡

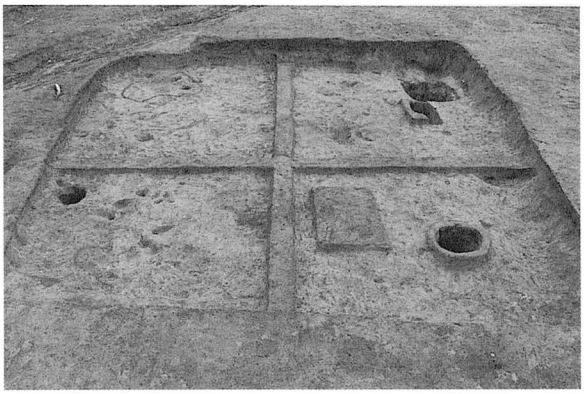


11号住居跡遺物出土状況

11号住居跡遺物出土状況

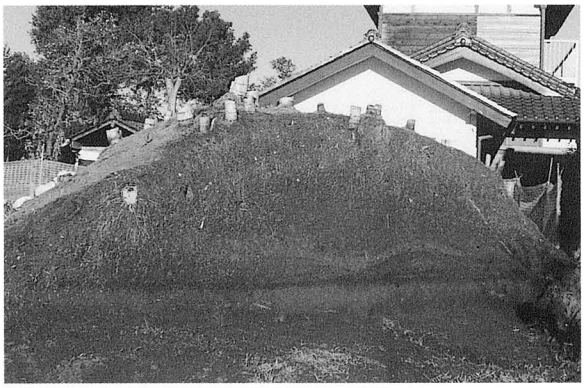
11号住居跡貯蔵穴

11号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



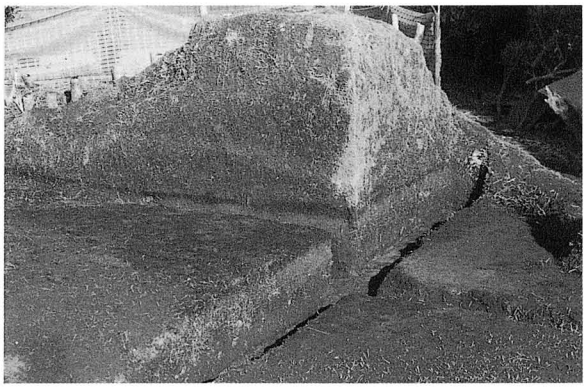
11号住居跡掘り方

1号墳調査前の状況



1号墳墳丘断面

1号墳完掘状況



1号墳盛り土土層及び下層整地層面の状況

1号墳周溝西側（南から）

1号墳周溝北側（西から）

周溝西側遺物出土状況

周溝西側底面遺物出土状況

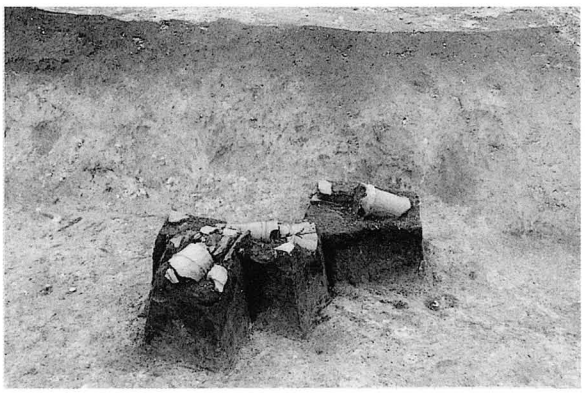
周溝西側遺物出土状況

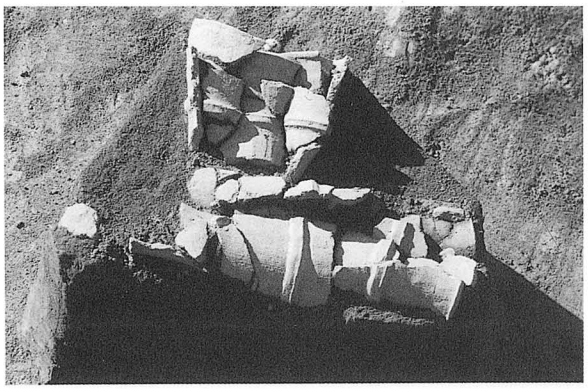
周溝西側遺物出土状況

周溝内側墳丘肩部遺物出土状況

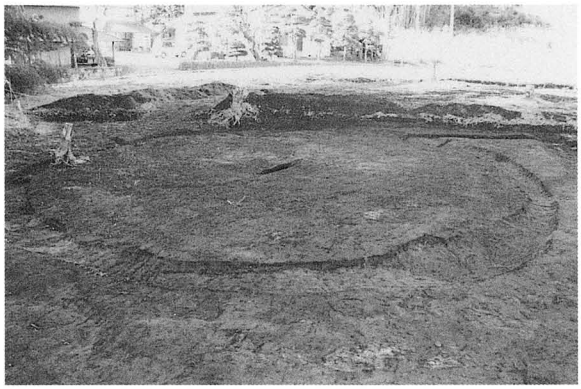
2号墳完掘状況

2号墳周溝円筒埴輪出土状況





2号墳周溝円筒埴輪出土状況



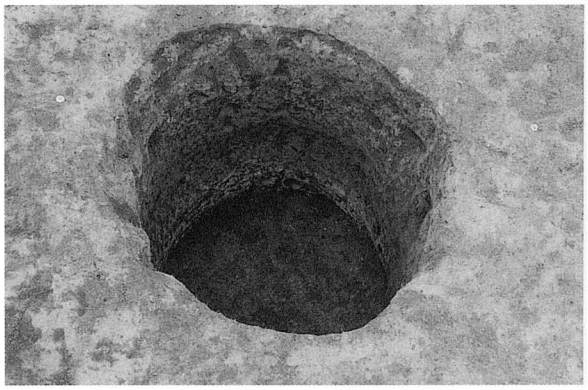
3号墳

3号墳出土遺物

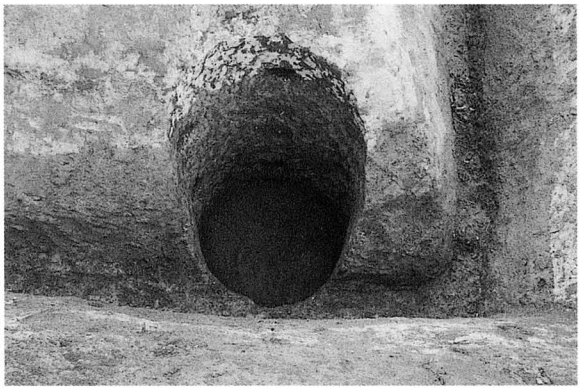
5号墳

1号土坑遺物出土状況

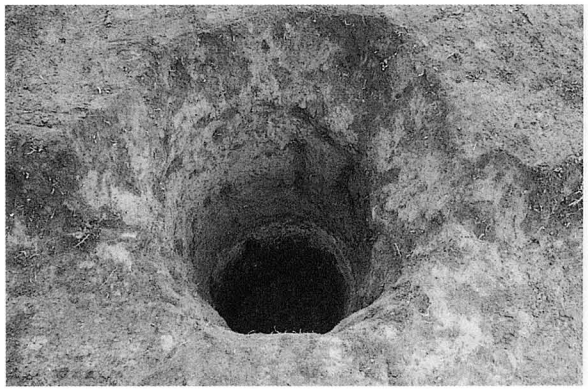
4号土坑



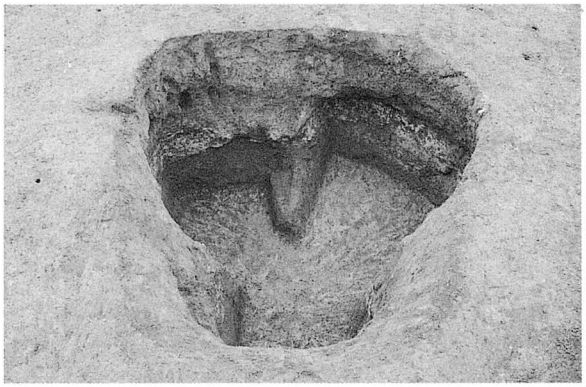
1号井戸



2号井戸



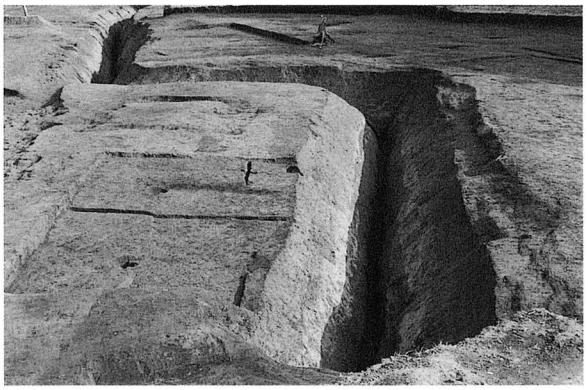
3号井戸



1号地下式坑

1号地下式坑主室2

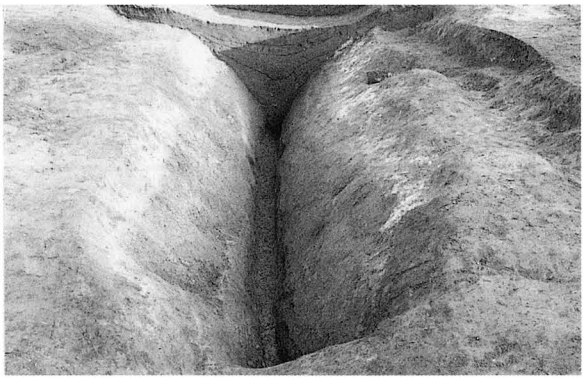
1号地下式坑主室1



1号堀全景（北から）

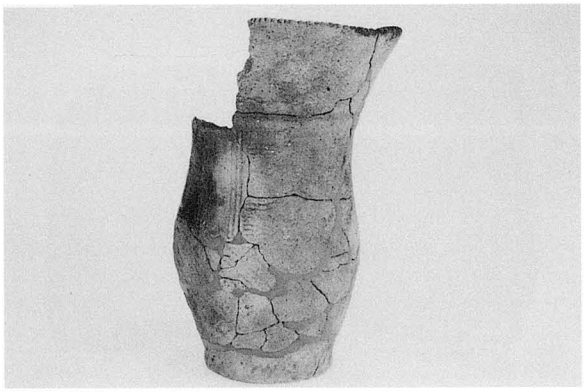
1号堀南部全景（北から）

1号堀南部斜面のピット群（西から）

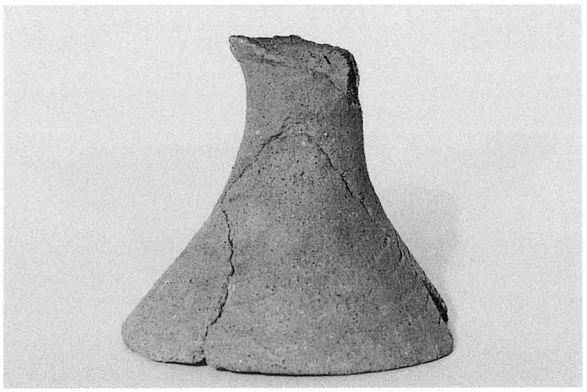


1号堀北端部（北から）

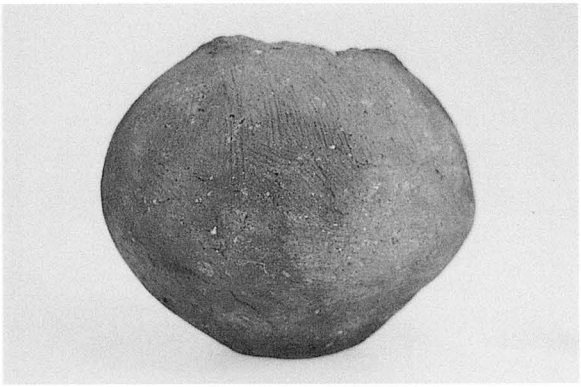
盛り土遺構（西から）



SI 2-1



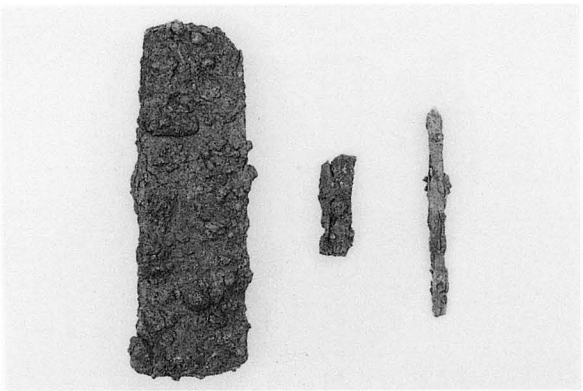
SI 2-11



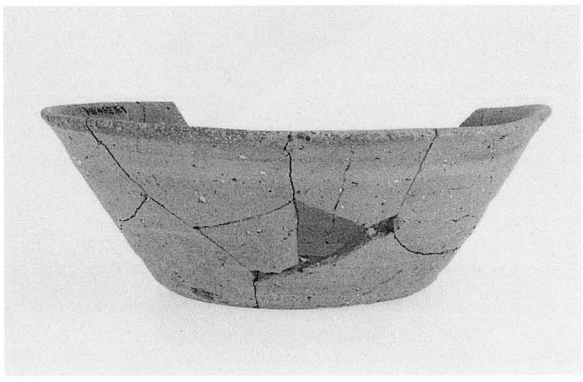
SI 3-2

SI 3-7

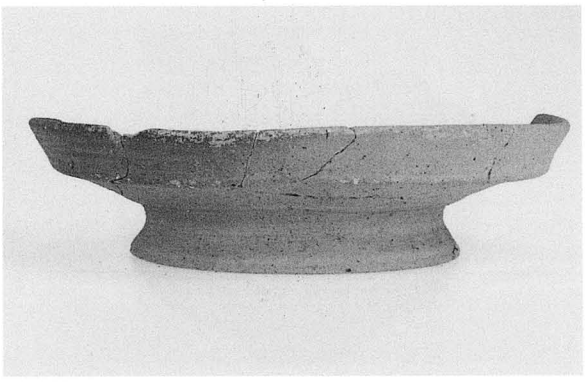
SI 3-9



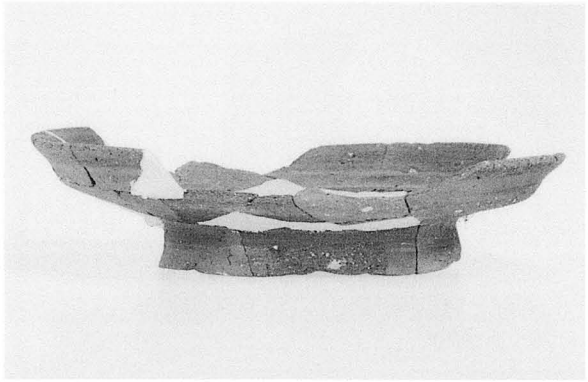
SI 3-11, 12, 13



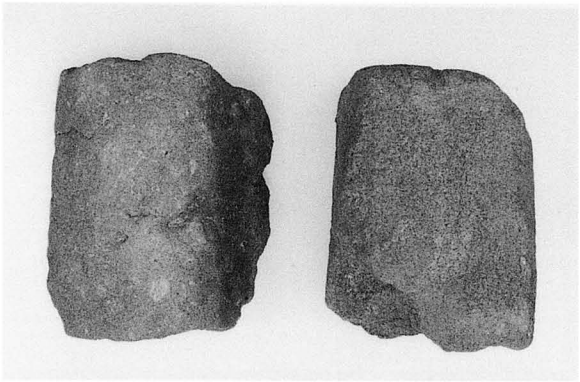
SI 5-1



SI 5-4

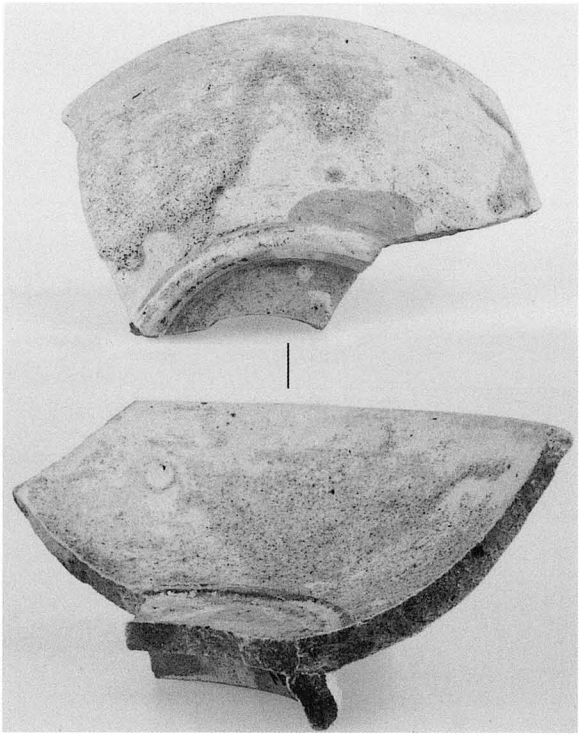


SI 5-5



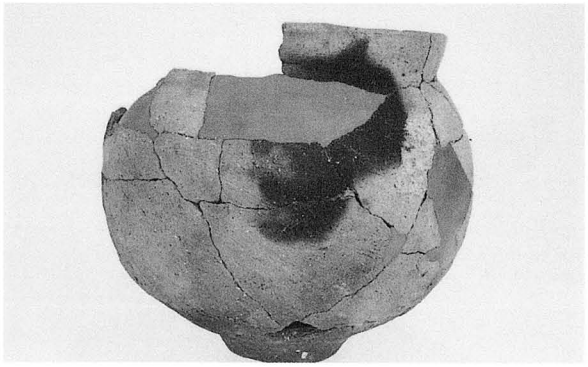
SI 6-6, 7

SI 7-1

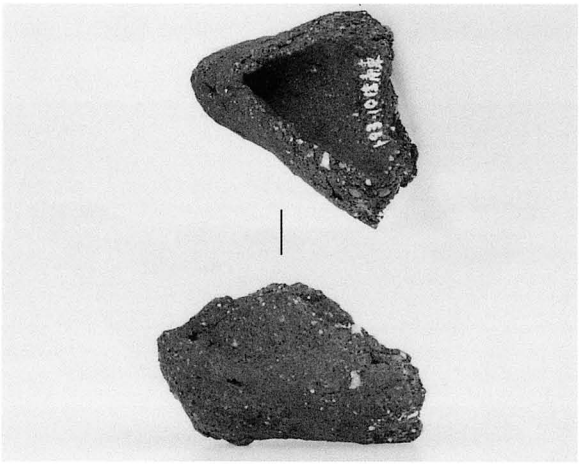


SI 7-10

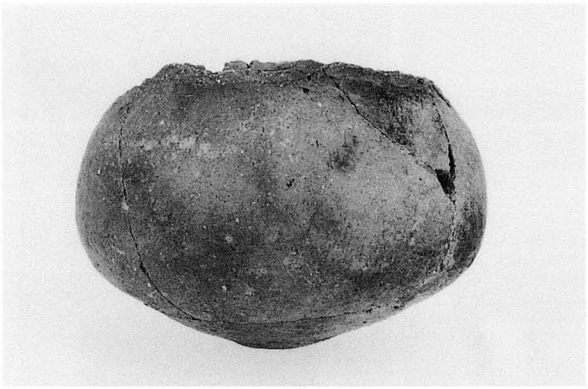
SI 10-4



SI 10-9



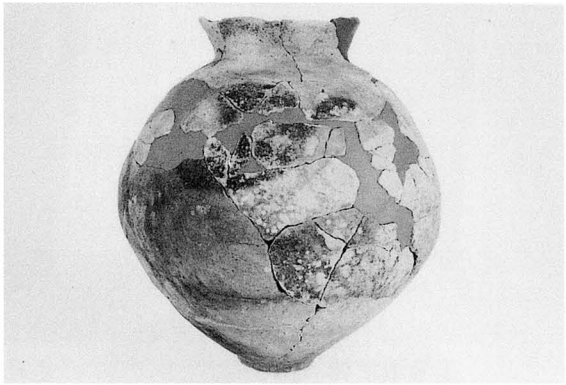
SI 10-11



SI 11-2

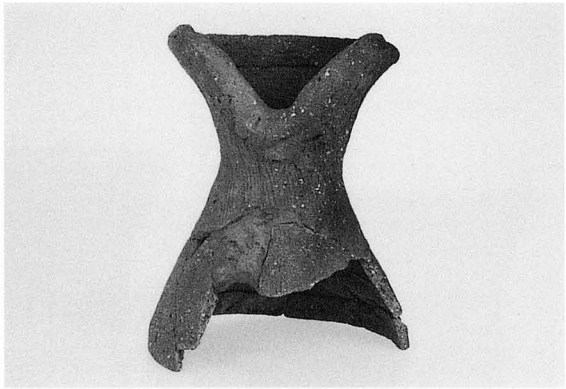
SI 11-4

SI 11-5

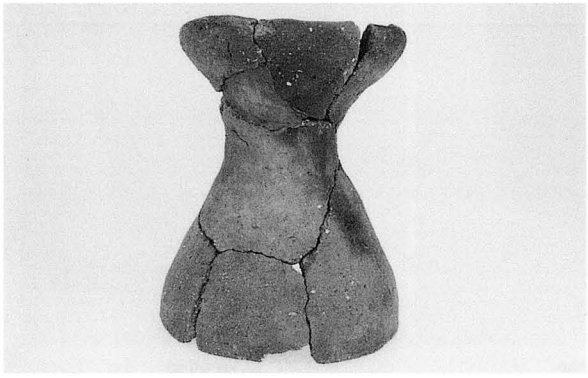


SI 11-15

SI 11-25



SI 11-26

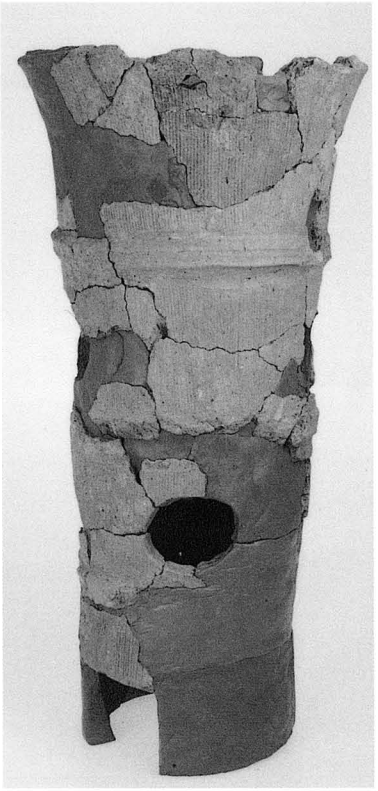


SI 11-29

SI 11-26, 29, 27

1号墳埴輪　10

1号墳埴輪　11



1号墳埴輪　14

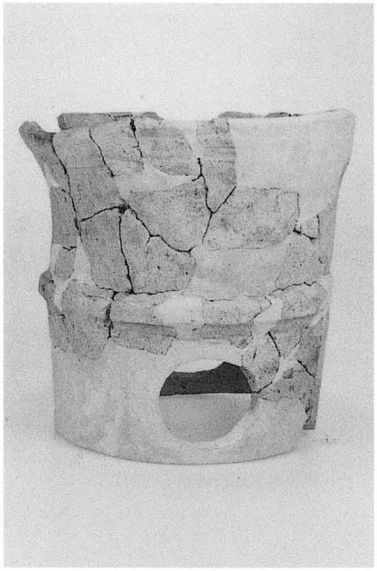
1号墳埴輪　6

1号墳埴輪　7

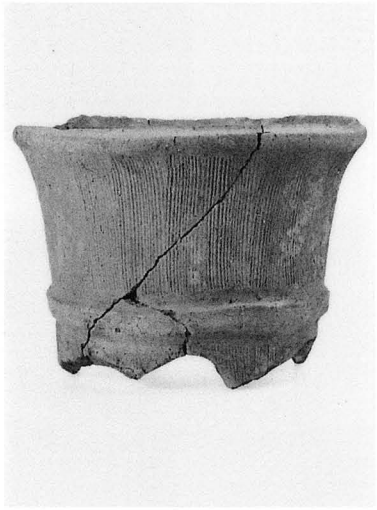
1号墳埴輪　16

1号墳埴輪　21

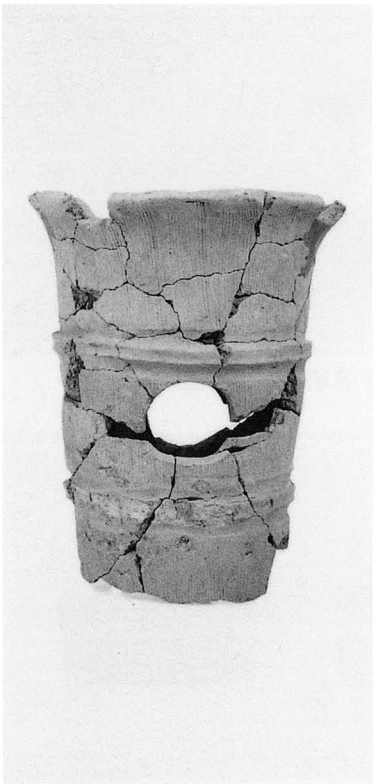
1号墳埴輪　29



1号墳埴輪　2



1号墳埴輪　5

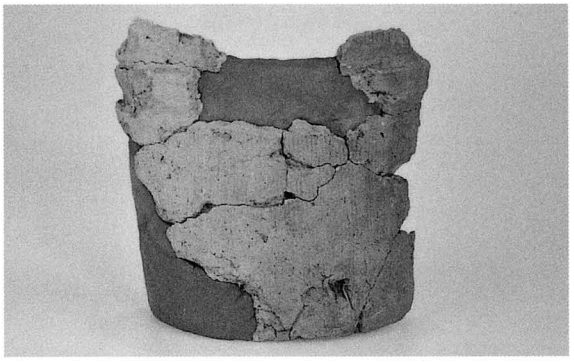


1号墳埴輪　17

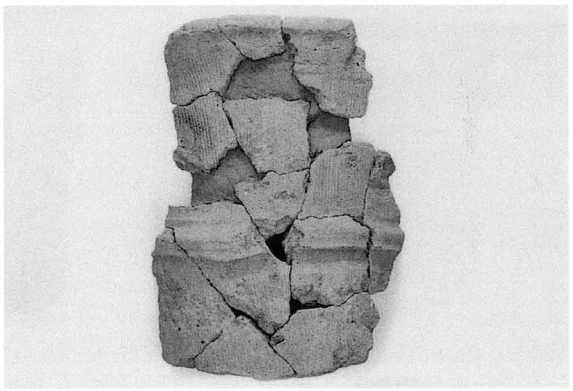
1号墳埴輪　19

1号墳埴輪　20

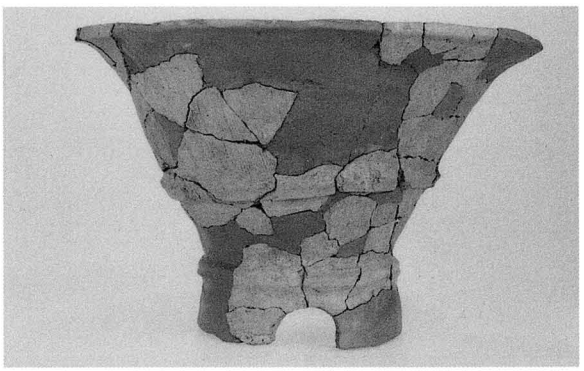
1号墳埴輪　49



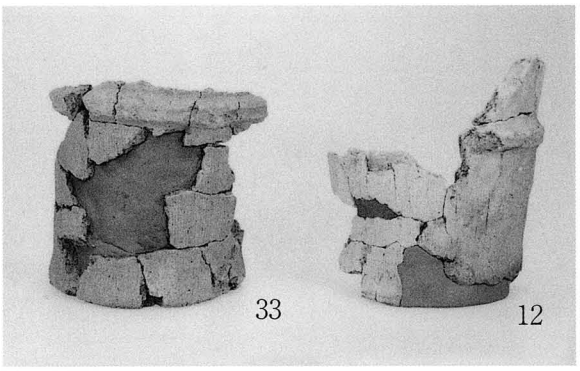
1号墳埴輪　4



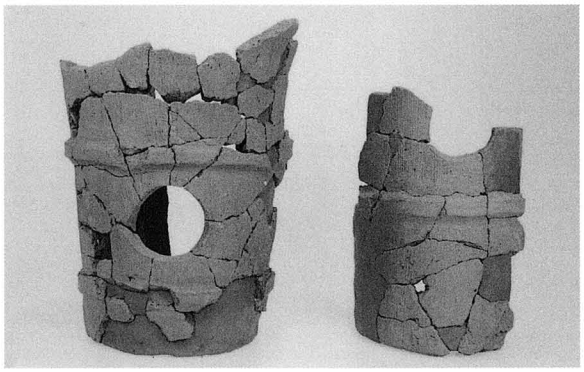
1号墳埴輪　15



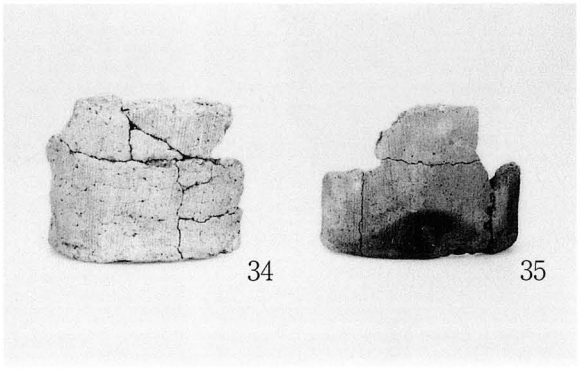
1号墳埴輪　50



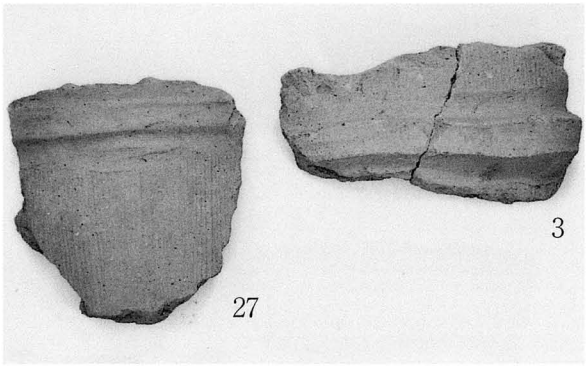
1号墳埴輪　33・12



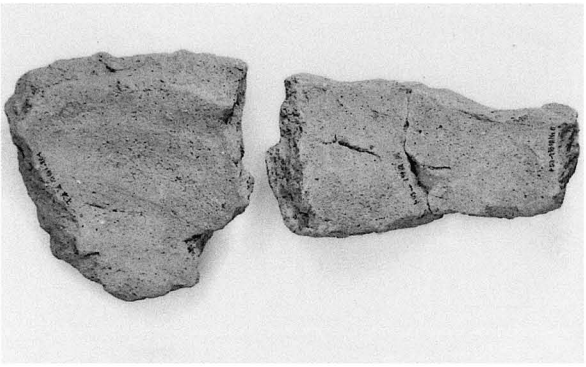
1号墳埴輪　28



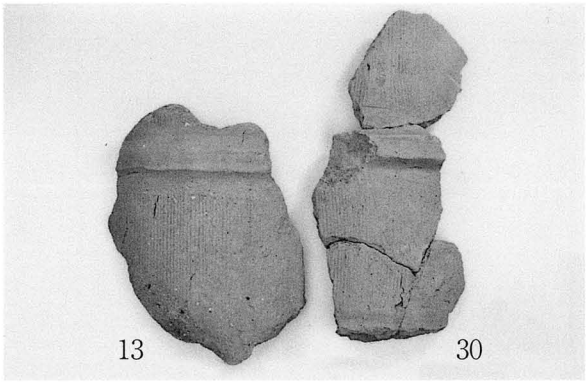
1号墳埴輪　34・35



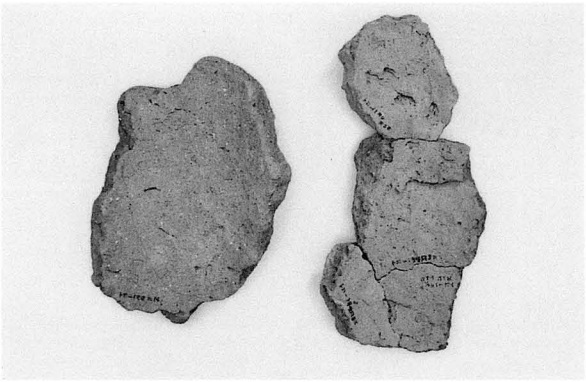
1号墳埴輪　3・27（外面）



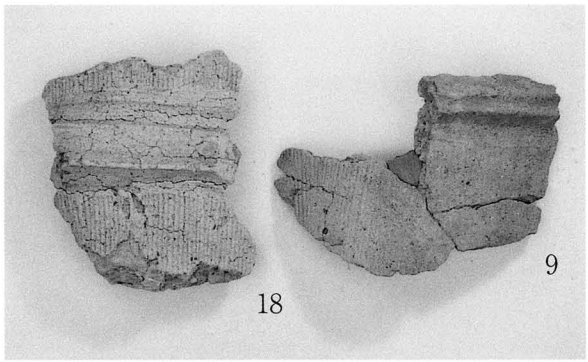
1号墳埴輪　3・27（内面）



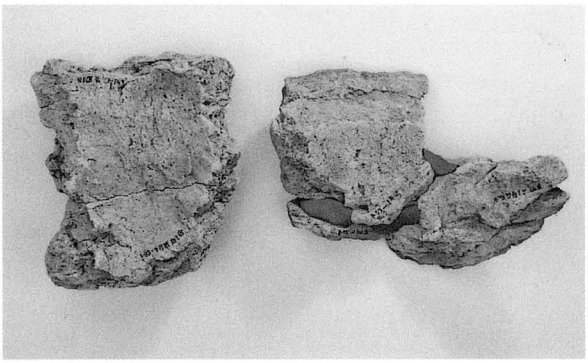
1号墳埴輪　13・30（外面）



1号墳埴輪　13・30（内面）

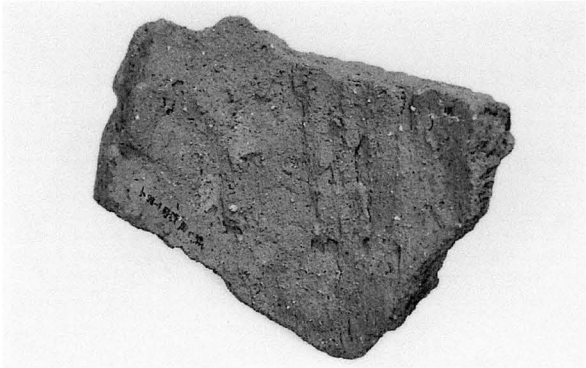


1号墳埴輪　9・18（外面）

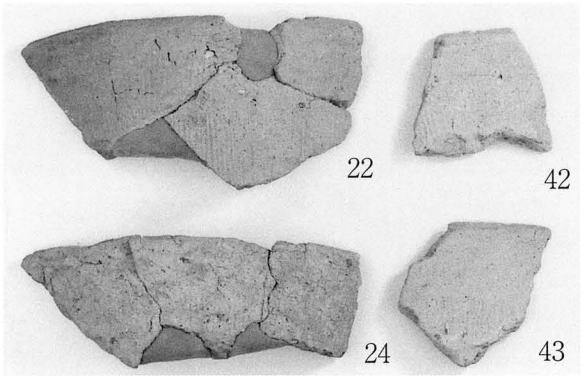


1号墳埴輪　9・18（内面）

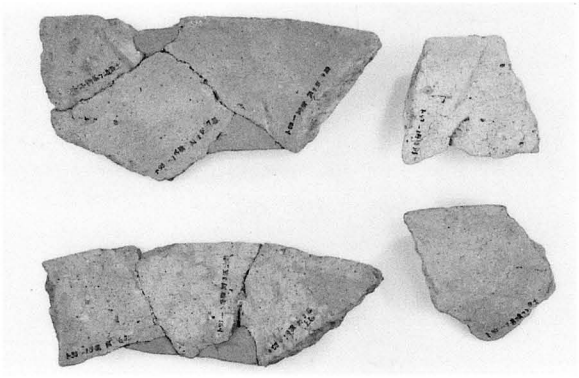
1号墳埴輪　26（外面）



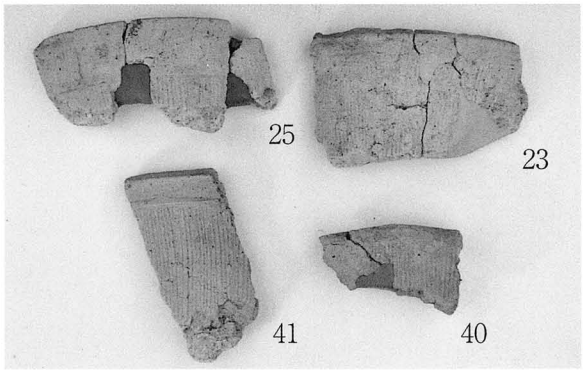
1号墳埴輪　26（内面）



1号墳埴輪　22・24・42・43（外面）

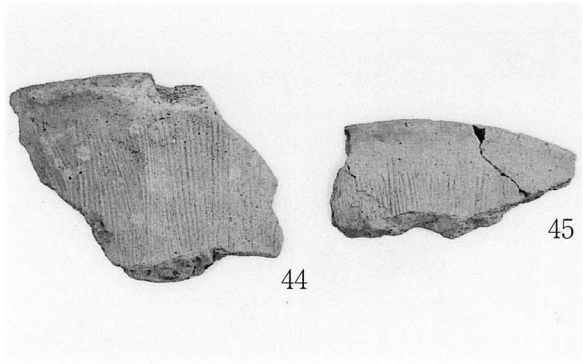


1号墳埴輪　22・24・42・43（内面）

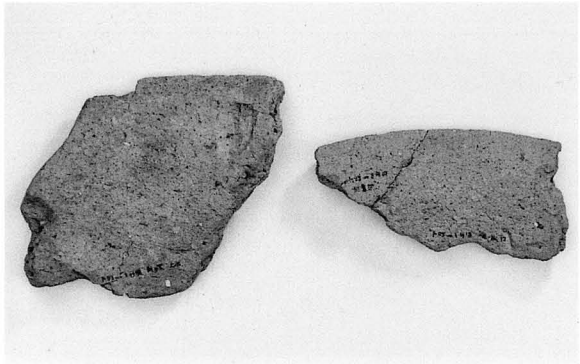


1号墳埴輪　23・25・40・41（外面）

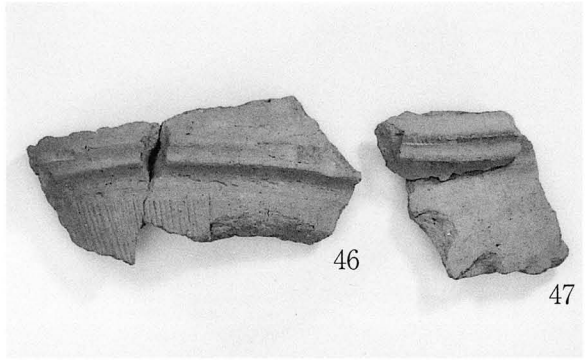
1号墳埴輪　23・25・40・41（内面）



1号墳埴輪　44・45（外面）

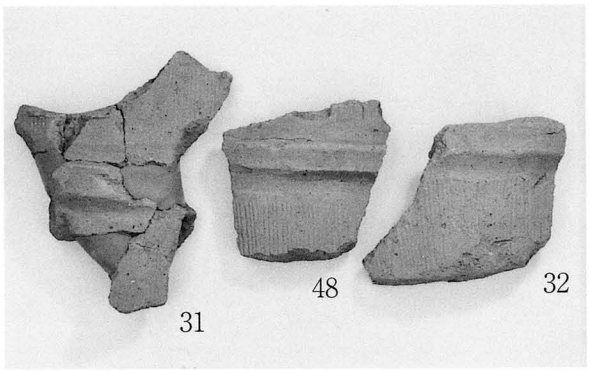


1号墳埴輪　44・45（内面）

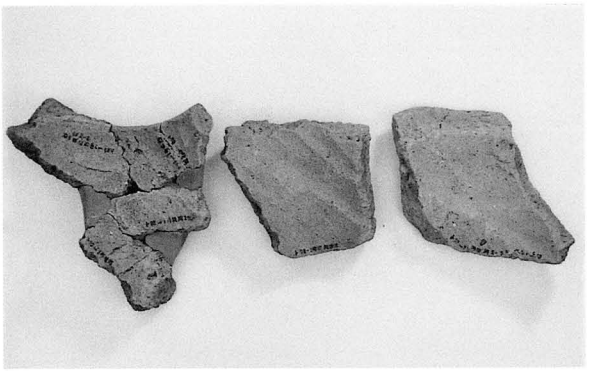


1号墳埴輪　46・47（外面）

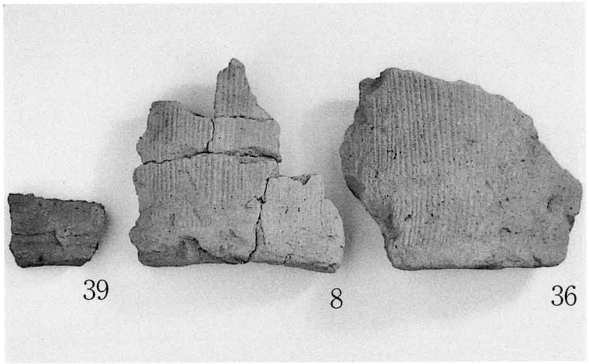
1号墳埴輪　46・47（内面）



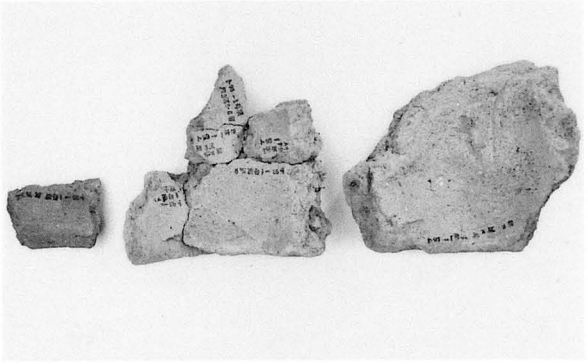
1号墳埴輪　31・32・48（外面）



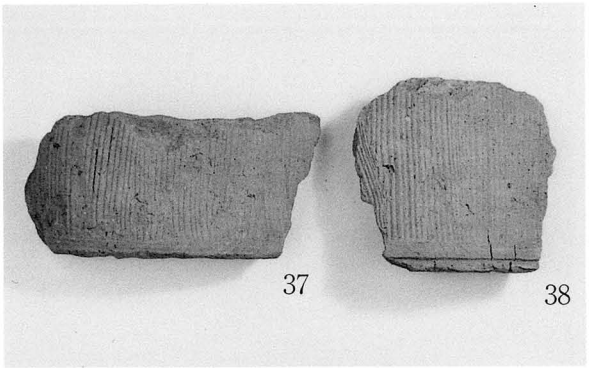
1号墳埴輪　31・32・48（内面）



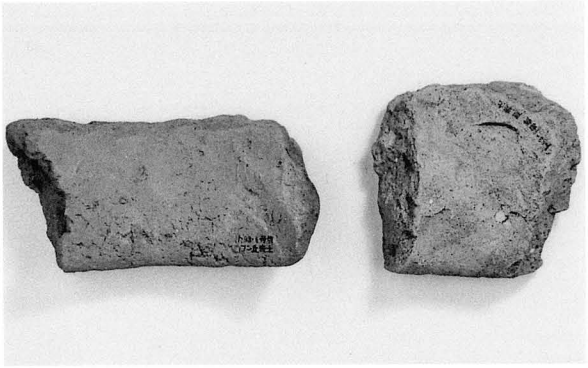
1号墳埴輪　8・36・39（外面）



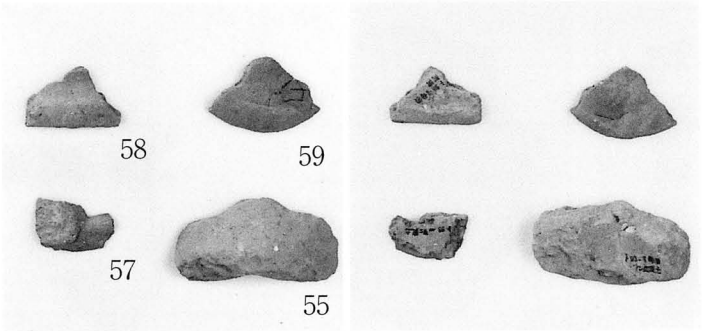
1号墳埴輪　8・36・39（内面）



1号墳埴輪　37・38（外面）



1号墳埴輪　37・38（内面）

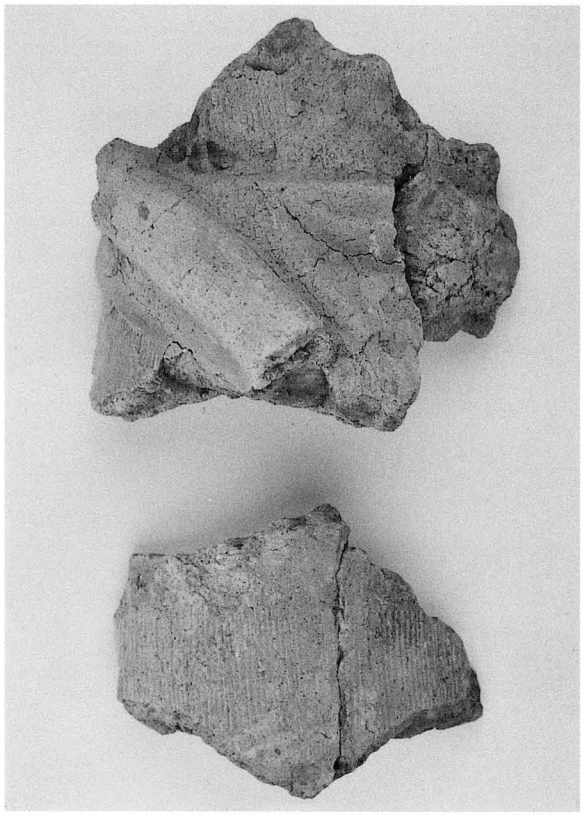


（外面）　　（内面）

1号墳埴輪　55・57・58・59

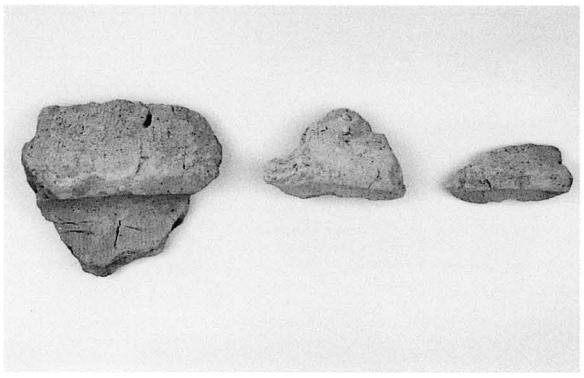
（外面）　　（内面）

1号墳埴輪　68

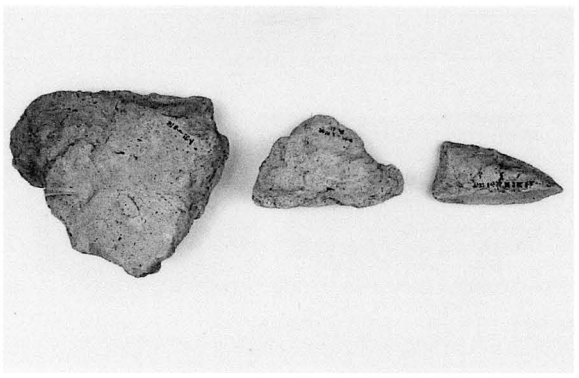


1号墳埴輪　51（外面）

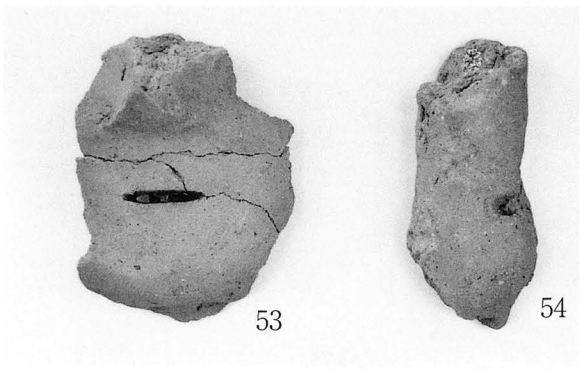
1号墳埴輪　51（内面）



1号墳埴輪　52（外面）

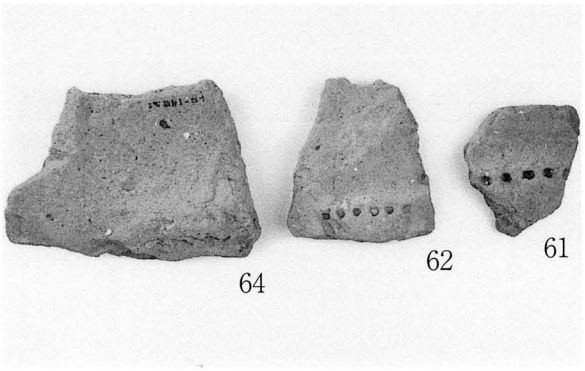


1号墳埴輪　52（内面）



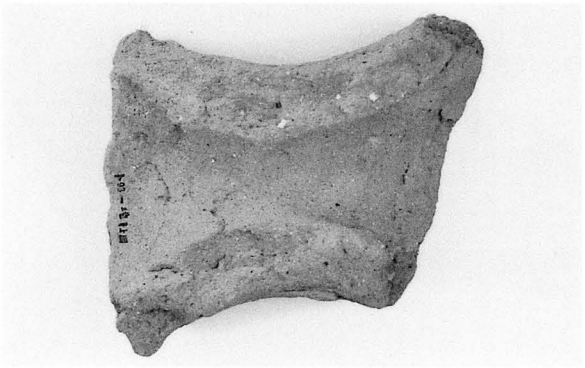
1号墳埴輪　53・54（外面）

1号墳埴輪　53・54（内面）



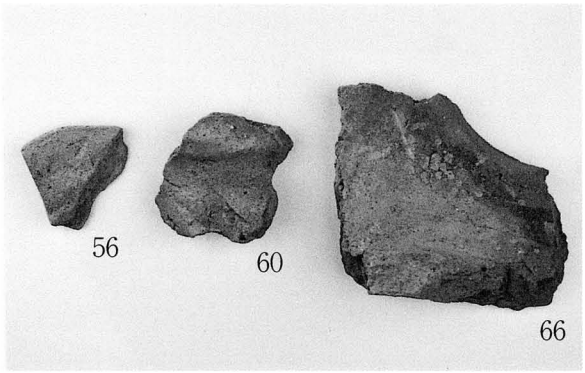
1号墳埴輪　61・62・64（外面）

1号墳埴輪　61・62・64（内面）

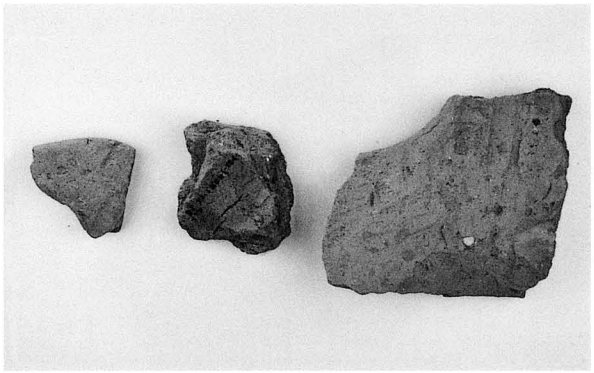


1号墳埴輪　65（外面）

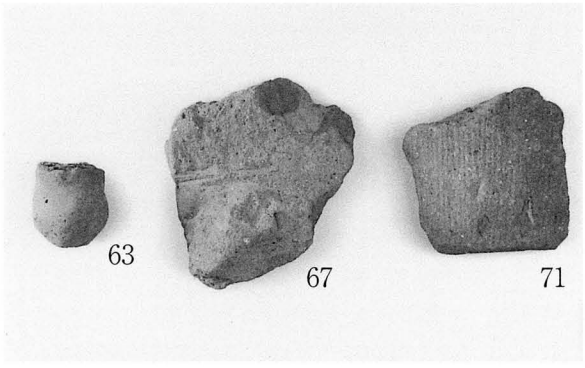
1号墳埴輪　65（内面）



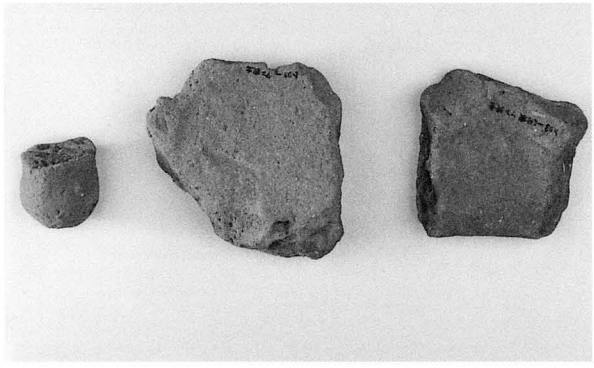
1号墳埴輪　56・60・66（外面）



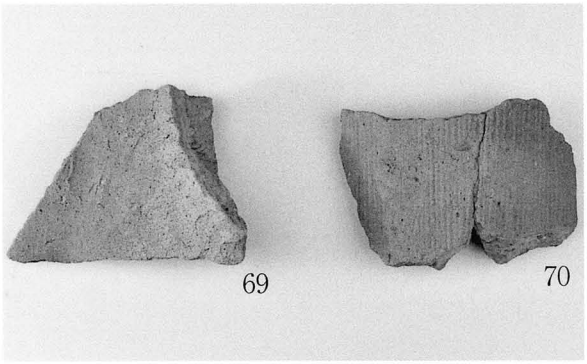
1号墳埴輪　56・60・66（内面）



1号墳埴輪　63・67・71（外面）

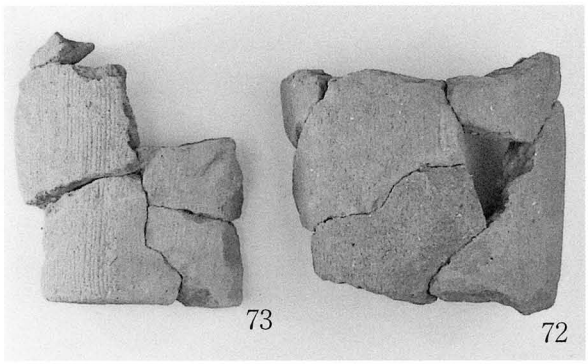


1号墳埴輪　63・67・71（内面）

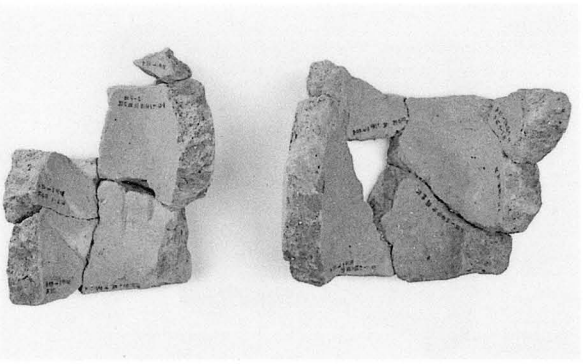


1号墳埴輪　69・70（外面）

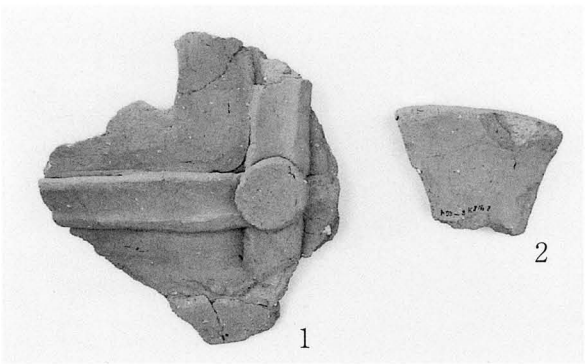
1号墳埴輪　69・70（内面）



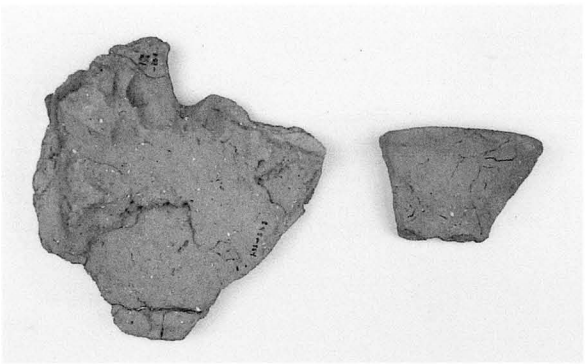
1号墳埴輪　72・73（外面）



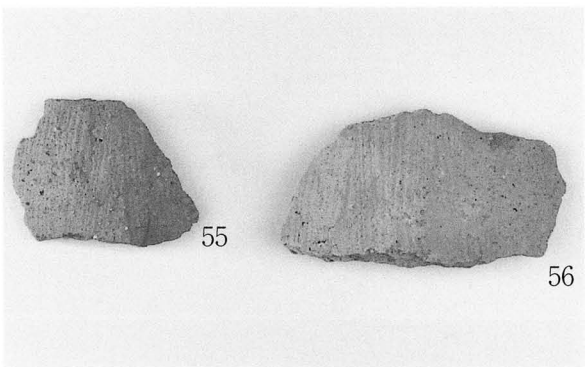
1号墳埴輪　72・73（内面）



1号土坑埴輪　1・2（外面）



1号土坑埴輪　1・2（内面）



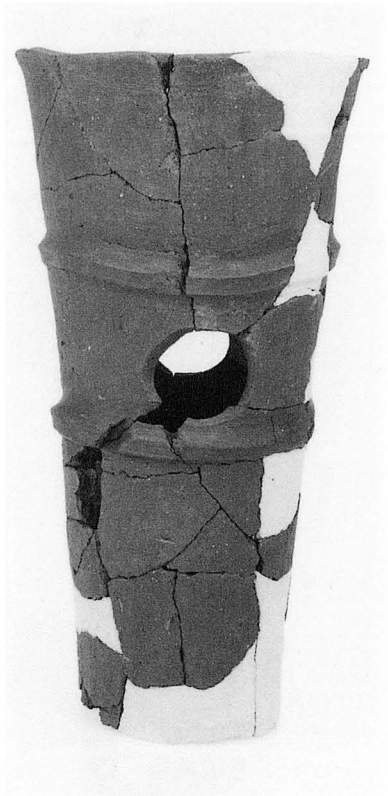
2号墳埴輪　55・56（外面）

2号墳埴輪　55・56（内面）

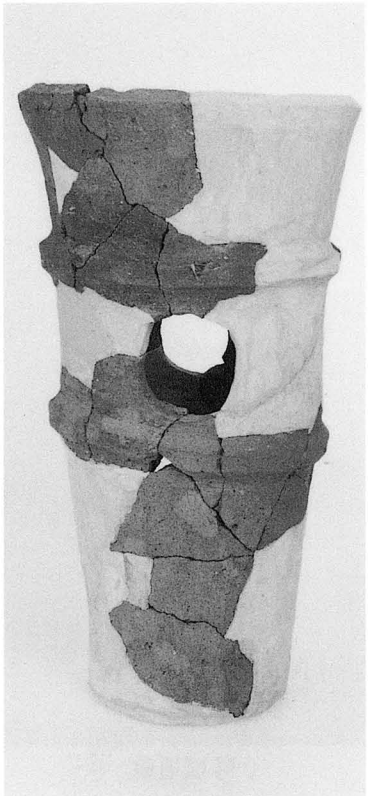
2号墳埴輪　3

2号墳埴輪　4

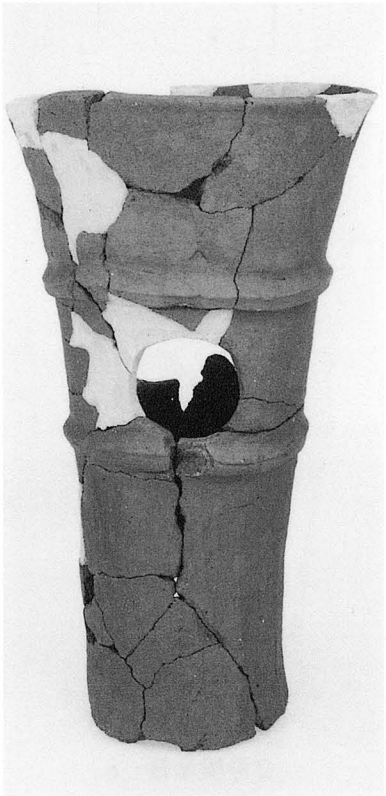
2号墳埴輪　5



2号墳埴輪　7

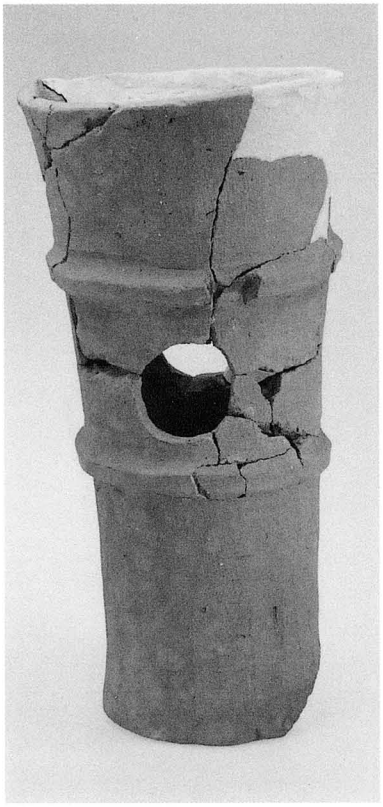


2号墳埴輪　8

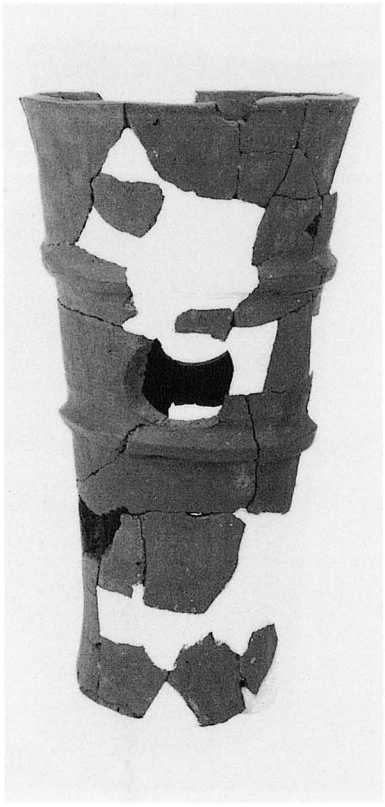


2号墳埴輪　11

2号墳埴輪　12



2号墳埴輪　15

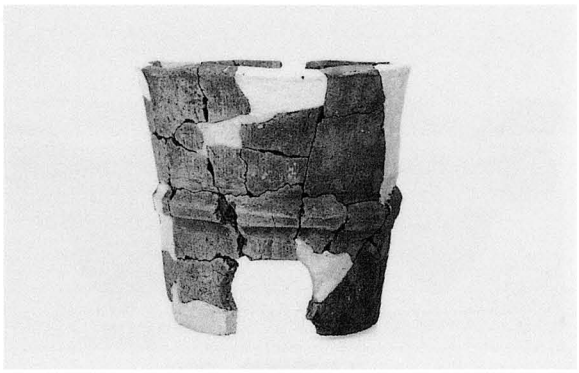


2号墳埴輪　16

2号墳埴輪　6

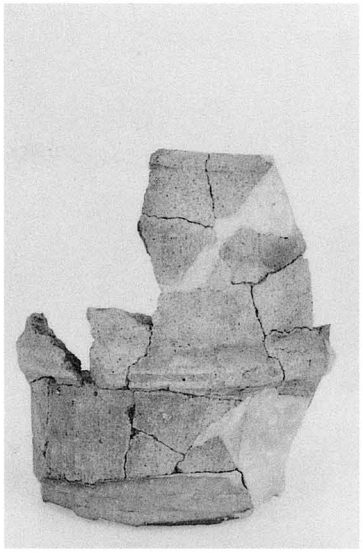
2号墳埴輪　9

2号墳埴輪　13

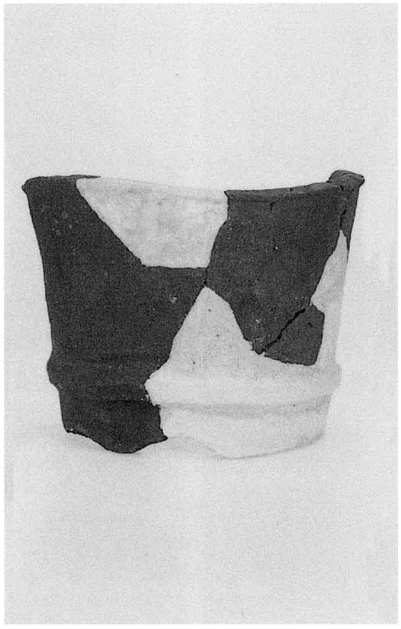


2号墳埴輪　17

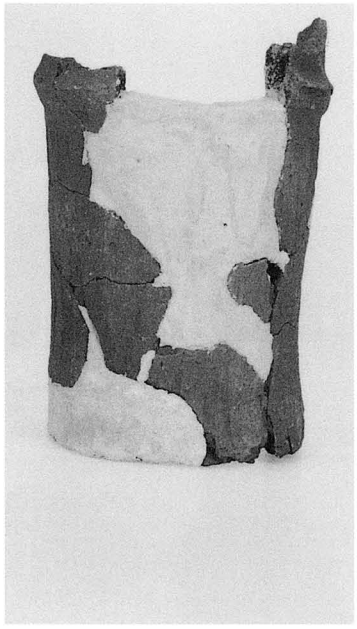
2号墳埴輪　14



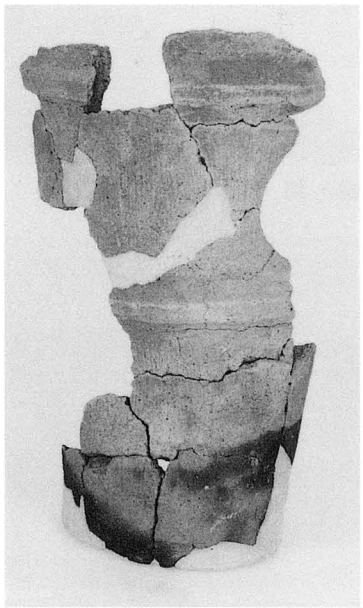
2号墳埴輪　18



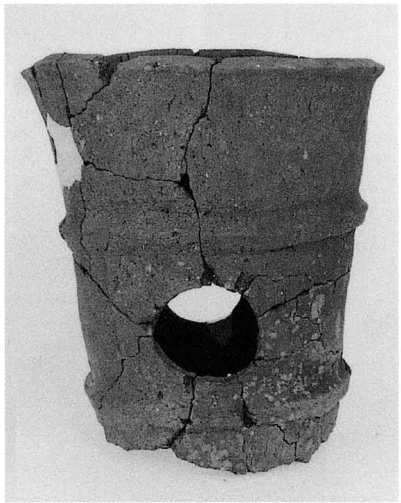
2号墳埴輪　20



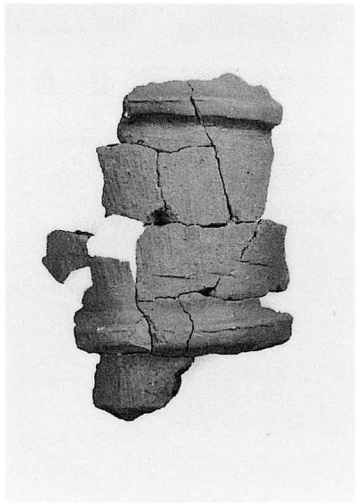
2号墳埴輪　14



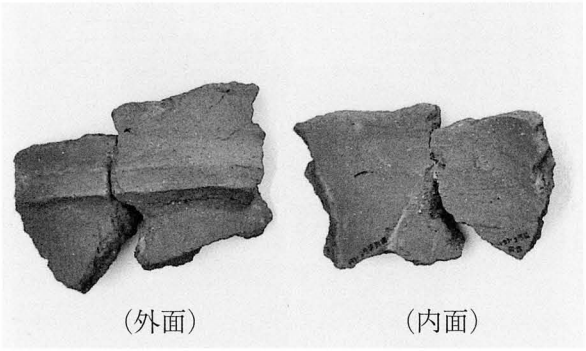
2号墳埴輪　18



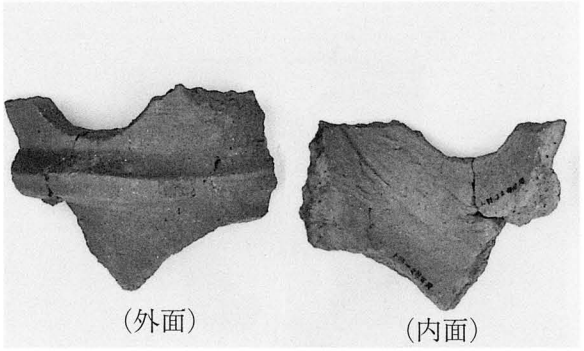
2号墳埴輪　2



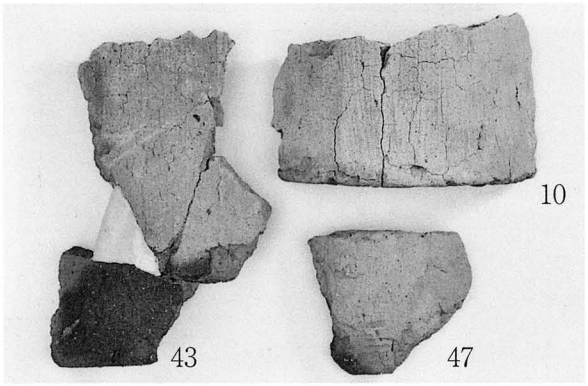
2号墳埴輪　21



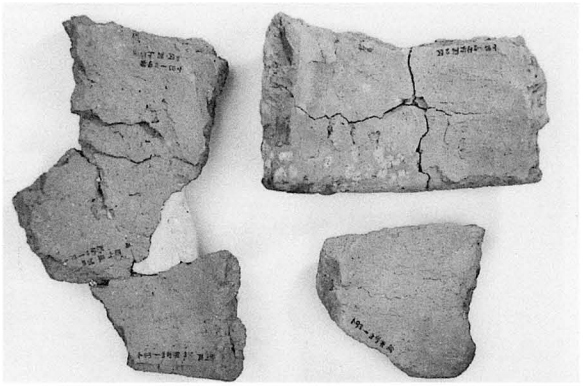
2号墳埴輪　22



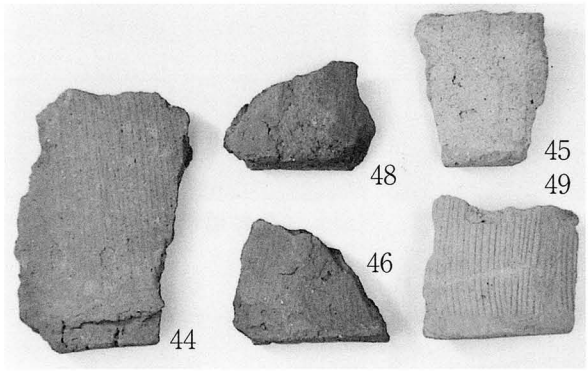
2号墳埴輪　35



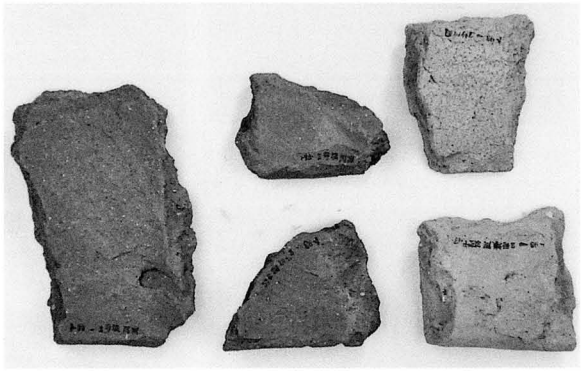
2号墳埴輪　10・43・47（外面）



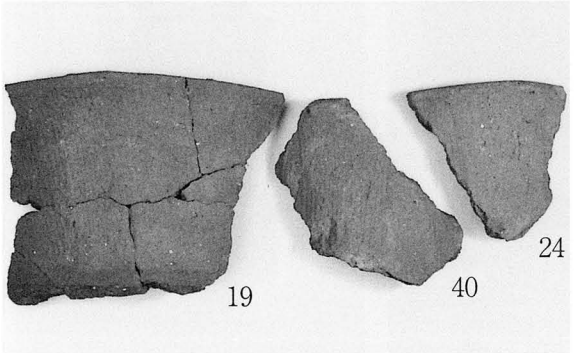
2号墳埴輪　10・43・47（内面）



2号墳埴輪　44・45・46・48・49（外面）

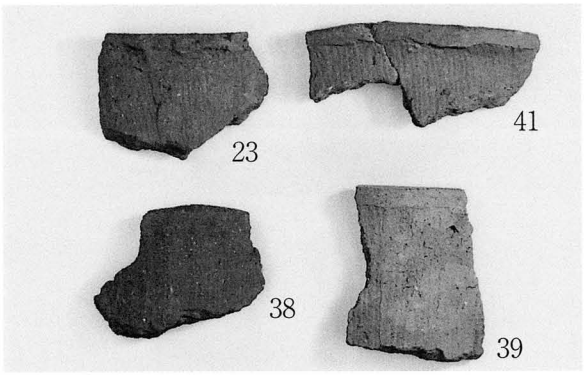


2号墳埴輪　44・45・46・48・49（内面）

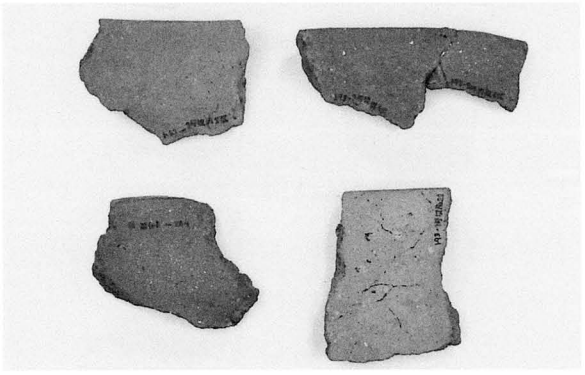


2号墳埴輪　19・24・40（外面）

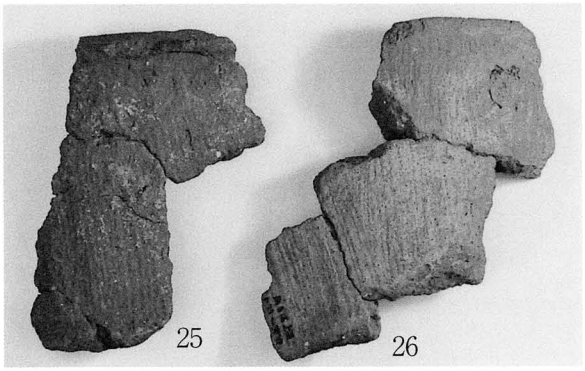
2号墳埴輪　19・24・40（内面）



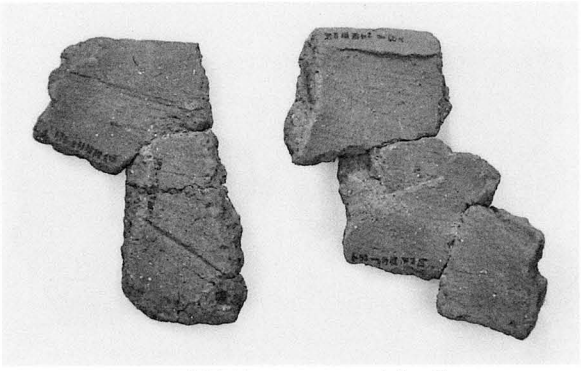
2号墳埴輪　23・38・39・41（外面）



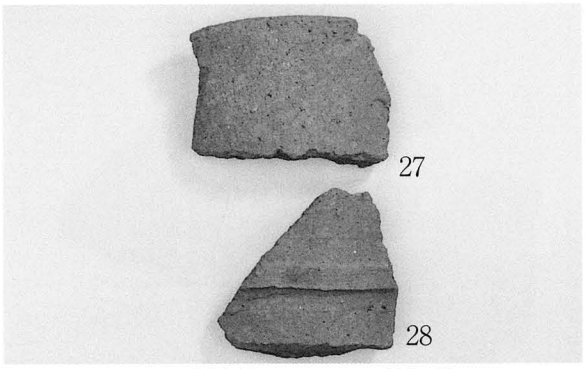
2号墳埴輪　23・38・39・41（内面）



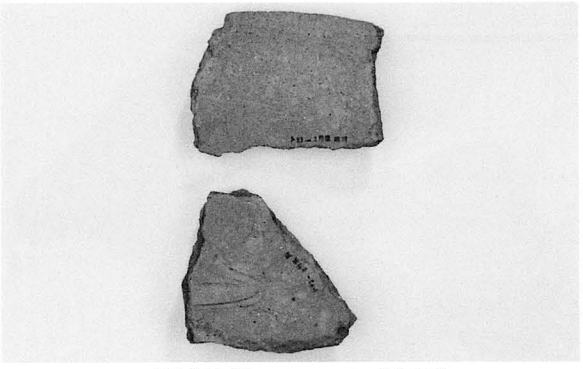
2号墳埴輪　25・26（外面）



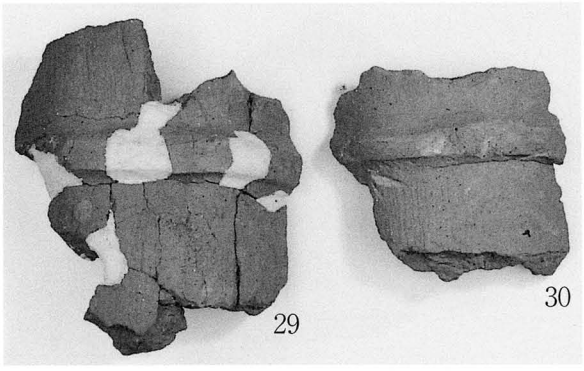
2号墳埴輪　25・26（内面）



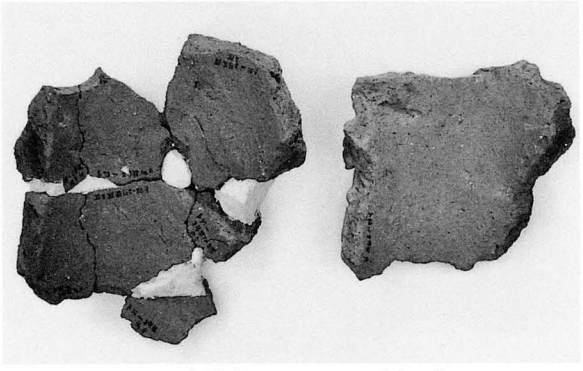
2号墳埴輪　27・28（外面）



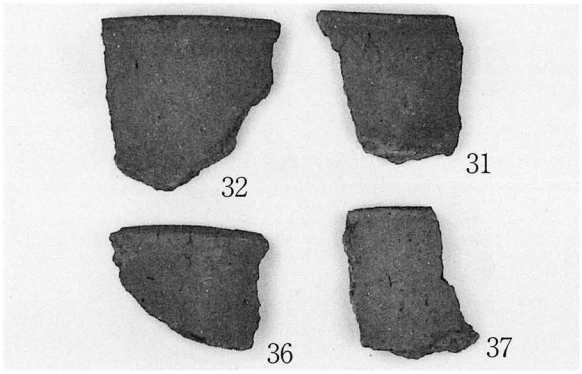
2号墳埴輪　27・28（内面）



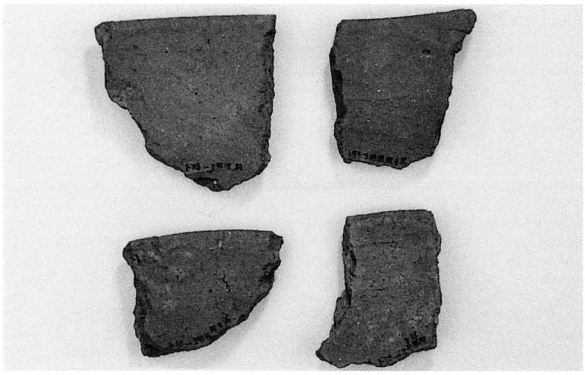
2号墳埴輪　29・30（外面）



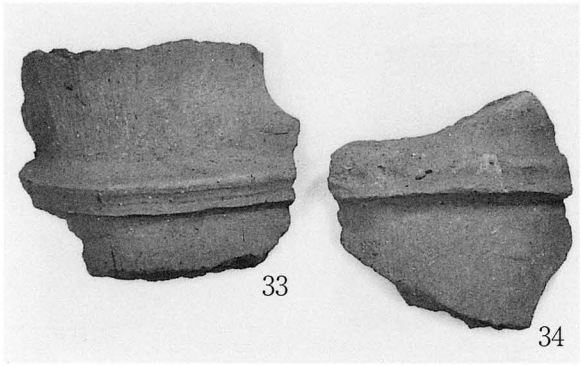
2号墳埴輪　29・30（内面）



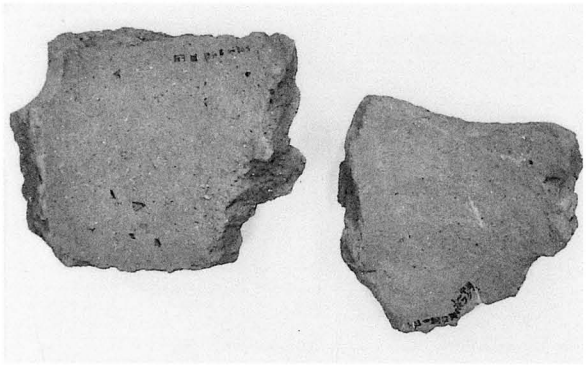
2号墳埴輪　31・32・36・37（外面）



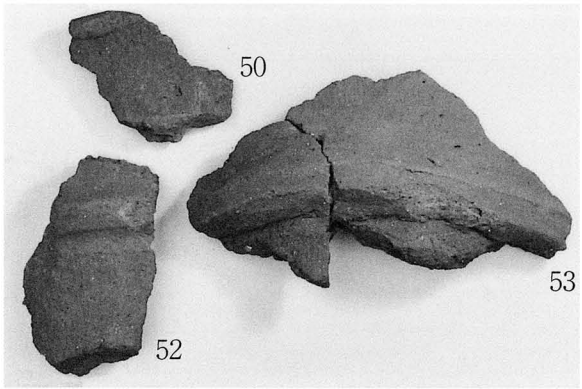
2号墳埴輪　31・32・36・37（内面）



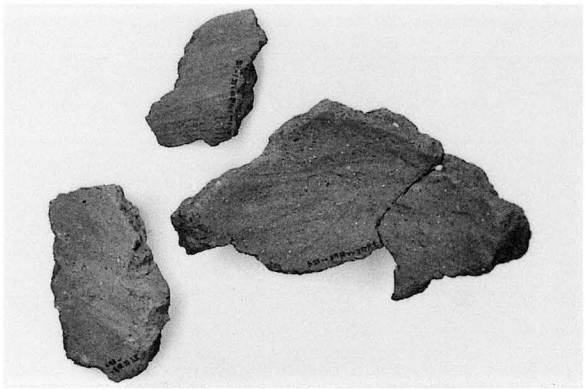
2号墳埴輪　33・34（外面）



2号墳埴輪　33・34（内面）



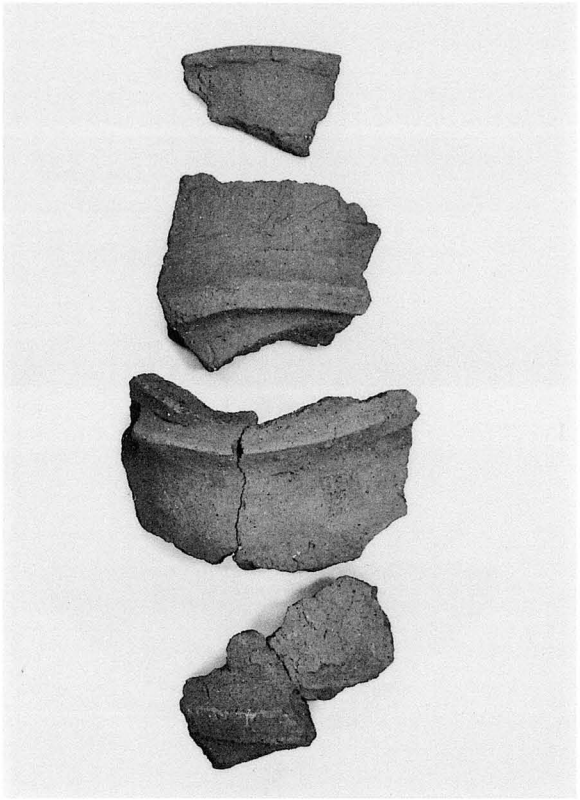
2号墳埴輪　50・52・53（外面）



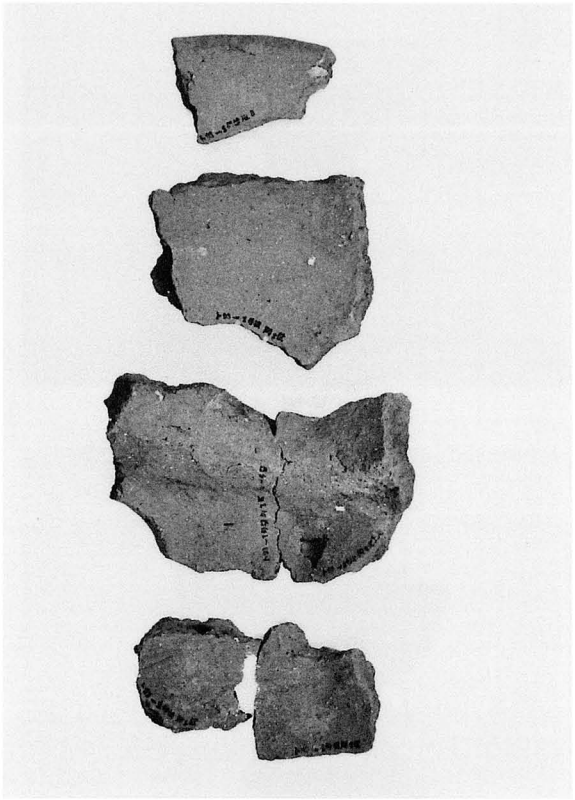
2号墳埴輪　50・52・53（内面）

2号墳埴輪　42（外面）

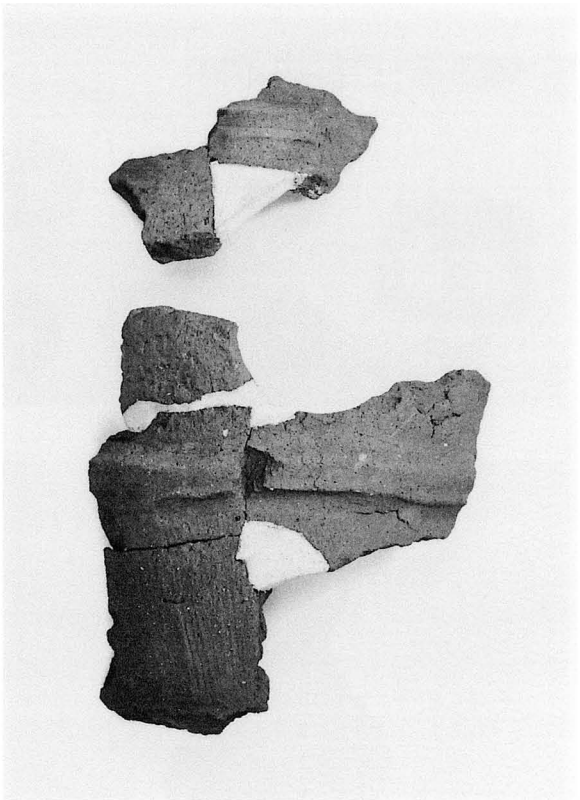
2号墳埴輪　42（内面）



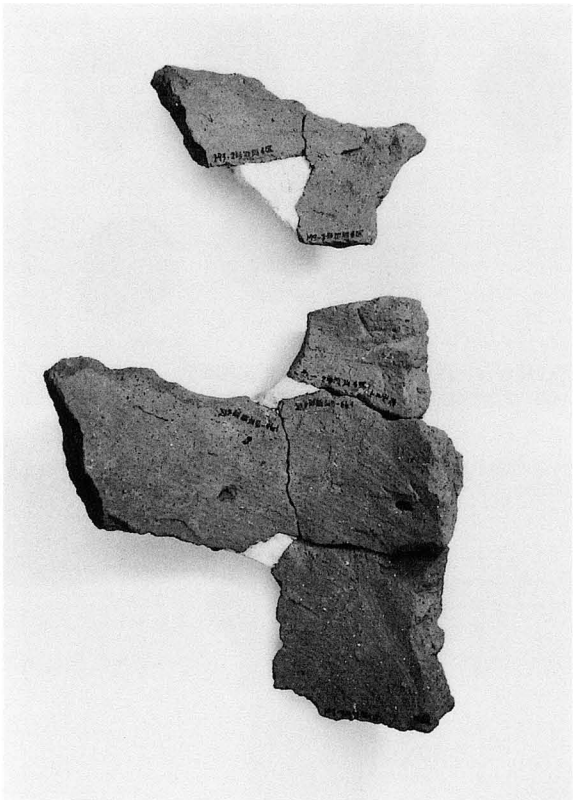
2号墳埴輪　51（外面）



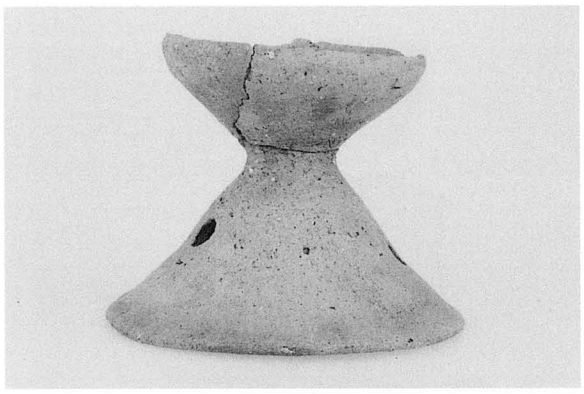
2号墳埴輪　51（内面）



2号墳埴輪　54（外面）

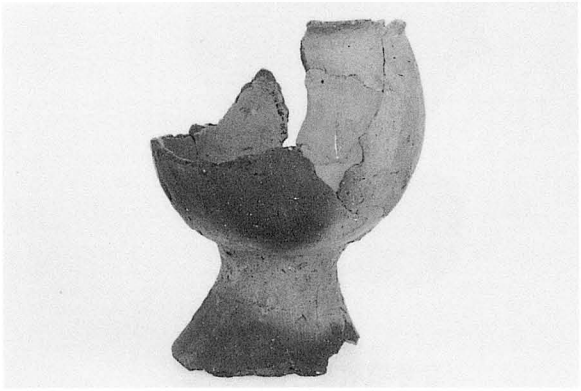


2号墳埴輪　54（内面）



3号墳-4

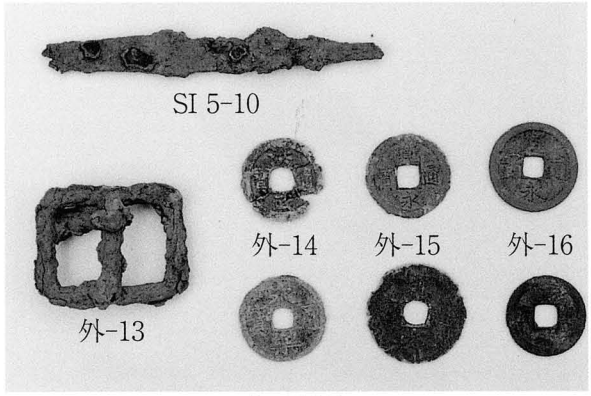
1号堀-1



外-6

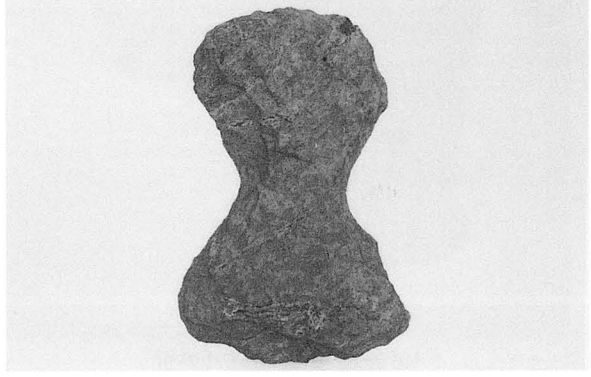
外-10

炭化種子（SI 3）



金属製品

外-11



表採石器

報告書抄録

ふりがな	ぎょうじゃいせき
書名	行者遺跡
副書名	県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	笠間市文化財調査報告書
シリーズ番号	
著者名	土生朗治、賀来孝代
編集機関	(有) 毛野考古学研究所
所在地	〒304-0062　茨城県下妻市下妻戊202-4
発行機関	笠間市教育委員会
所在地	茨城県笠間市石井717番地
発行年月日	2011 (平成23) 年３月15日

所収遺跡 (ふりがな)	所在地 (ふりがな)	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
行者遺跡 (ぎょうじゃいせき)	笠間市小原 (かさましおばら) 2299番地外	08-321-093	36° 23′ 49″	139° 52′ 44″	20091130 ～ 20100325	4,683㎡	県営畑地帯総合整備事業

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
行者遺跡	集落跡 古墳	弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代 時期不明 中・近世	竪穴住居跡１軒 竪穴住居跡５軒 古墳５基 竪穴住居跡３軒 竪穴住居跡２軒 堀１条 溝５条 井戸３基 ピット72基	弥生土器 (壺、高坏) 土師器 (坏、壺、甕、高坏) 埴輪 (円筒、人物、馬形) 須恵器 (坏、盤、高坏)	５世紀初め頃の竪穴住居跡の覆土中から短冊形鉄斧・ヤリガンナが出土している。６世紀前半の古墳からは、円筒埴輪や馬形埴輪、人物埴輪が出土している。

要約	行者遺跡は、弥生時代後期、古墳時代前期～中期初め頃、奈良･平安時代の各時期の集落跡と古墳時代前期、後期の古墳と中世の堀跡等からなる。前期の古墳は最大径約15mの浅い周溝のみ確認されている３基の古墳からなる。後期の古墳は墳丘直径約16～19mの円墳２基で円筒埴輪と形象埴輪が出土している。中世の時期の遺構は、台地を横断して延びる薬研掘りの堀跡と地下式坑からなる。

茨城県笠間市

行　者　遺　跡

印刷　平成23年３月10日
発行　平成23年３月15日

編集　有限会社　毛野考古学研究所
〒379-2146　群馬県前橋市公田町1002番地１
電話　027-265-1804　FAX　027-265-5352

発行　笠間市教育委員会
〒309-1698　茨城県笠間市石井717番地
電話　0296-77-1101
有限会社　毛野考古学研究所

印刷　株式会社　ライフ
〒286-0134　千葉県成田市東和田595
電話　0476-24-1564　FAX　0476-24-2226